田舎教師

田山花袋

青空文庫

が咲き、 兀 .里の道は長かった。その間に 青 縞 の市のたつ 羽 生 の町があった。 ぬおじま いち はにゅう 豪家の垣からは八重桜が散りこぼれた。 赤い蹴出しを出した田舎の姐さんが

いなか ねえ 田圃にはげんげたんぼ お l)

ンスの兵児帯、 羽生からは車に乗った。 車夫は色のあせた 毛 布を袴の上にかけて、 母親が徹夜して縫ってくれた木綿の 三 紋 の羽織に新調のメリー てっゃ 梶 棒 を上げた。 なんとなくかじぼう

胸がおどった。

おり通った。

があり希望があるように思われる。 を朝早く小倉服着て通ったことももう過去になった。 の窓からのぞいた人生と実際の人生とはどことなく違っているような気がだんだんしてき 芸 妓 なるもののげいしゃ 清三の前には、せいぞう り上げて調子はずれの唄をうたったのをも聞いた。 一 月 二 月 とたつうちに、 新しい生活がひろげられていた。どんな生活でも新しい生活には意味 五年間の中学校生活、 行田から熊谷 まで三里の路 学校

うちにもそれが見える。 第一に、父母からしてすでにそうである。それにまわりの人々の自分に対する言葉の つねに 往 来 している友人の群れの空気もそれぞれに変わ

った。 のことやら恋のことやらを話した。二人は一少女に対するある友人の関係についてまず語 ふと思い出した。 十日ほど前、

親友の加藤郁治と熊谷から歩いて帰ってくる途中で、文学のことやら将来がとういくじ

「そうしてみると、先生なかなかご 執善心 なんだねえ」

「ご執心以上さ!」と郁治は笑った。

らないと思って、それであきらめたのかと思ったら、 正 反 対 だッたんだね この間も、 「この間まではそんな様子が少しもなかったから、なんでもないと思っていたのさ、 『おおいに悟った』ッて言うから、ラヴのために一身上の希望を捨ててはつま 現に

「不思議だねえ」

「この間 手紙をよこして、『余も卿等の余のラヴのために力を貸せしを謝す。

て恋の物うきを知れり。しかして今はこのラヴの進み進まんを願へり、Physical なしに… 余は初め

…』なんて言ってきたよ」

この Physical なしにという言葉は、清三に一種の刺戟を与えた。 郁治も黙って歩いた。

郁治は突然、

「僕には君、 大秘密 があるんだがね」

その調子が軽かったので、

「僕にもあるさ!」

と清三が笑って合わせた。

調子抜けがして、二人はまた黙って歩いた。

しばらくして、

「君はあの『尾花』を知ってるね」

郁治はこうたずねた。

「知ってるさ」

「君は先生にラヴができるかね」

「いや」と清三は笑って、「ラヴはできるかどうかしらんが、単に 外 形 美 として見てる

ことは見てるさ」

「Aのほうは?」

「そんな考えはない」

郁治は 躊 躇 しながら、「じゃ Art は?」

今のところでは、まだそんなことを考えていないね」こう言いかけて急にはしゃいだ調子 清三の胸は少しくおどった。「そうさね、機会が来ればどうなるかわからんけれど……

ような考えで、君と Art に対するようになると思うね」 「もし君が Art に行けば、……そうさな、僕はちょうど小畑と Miss N とに対する関係の

で、

郁治は一歩を進めた。「じゃ僕はその方面に進むぞ」

き汝の手をもって願はくば幸多からしめよ、 とをも思い出した。そしてその夜日記帳に、 清三は今、 机の上に打っ伏したことを思い出した。 神よ、かの友の清きラヴ、美しき無邪気なるラヴに願はくば幸多からしめよ 車の上でその時のことを思い出した。 心 臓 の鼓動のしんぞう こどう 神よ、 「かれ、幸多かれ、 願ふ、親しき、友のために願ふ」 願はくば幸多か 尋 常 でなかったこじんじょう 涙多 オヽ

った。その日は女はいなかった。女は浦和に師範学校の入学試験を受けに行ってい それから十日ほどたって、二人はその女の家を出て、 士族屋敷のさびしい暗い夜道を通しぞくやしき

「どんなことでも人の力をつくせば、できないことはないとは思うけれど……僕は先天的

にそういう資格がないんだからねえ」

「そんなことはないさ」

「でもねえ……」

「弱いことを言うもんじゃないよ」

「僕がどうしたッていうんだ?」

「君のようだといいけれど……」

僕は君などと違ってラヴなどのできる柄じゃないからな」

清三は郁治をいろいろに慰めた。清三は友を憫みまた己を憫んだ。

なぐさ
あわれ おのれ

木やら、 庚 申 塚 やら、畠やら、百姓家やらが車の進むままに送り迎えた。馬車が一台、 いろいろな顔と事件とが眼にうつっては消えうつっては消えた。路には榛のまばらな並いろいろな顔と事件とが眼にうつっては消えうつっては消えた。路には榛のまばらな並

あとから来て、 砂 煙 を立てて追い越して行った。

郁治の父親は郡視学であった。郁治の妹が二人、雪子は十七、しげ子は十五であった。

清三が毎日のように遊びに行くと、雪子はつねににこにことして迎えた。 繁子はまだほん

の子供ではあるが、 「少年世界」などをよく読んでいた。

た。今度月給十一円でいよいよ 羽 生 在の弥勒の小学校に出ることになったのは、まったので、遊んでいてもしかたがないから、当分小学校にでも出たほうがいいという話になっ く郁治の父親の 尽一力 の結果である。 家が貧しく、とうてい東京に遊学などのできぬことが清三にもだんだん意識されてきた まった

三は車をおりて門にはいった。 路のかたわらに小さな門があったと思うと、 井泉村役場という札が眼にとまった、いずみむらやくば ふだ 清

「頼む」

と声をたてると、奥から小使らしい五十男が出て来た。

「助役さんは出ていらっしゃいますか」

「岸野さんかな」

と小使は眼をしょぼしょぼさせて 反 問 した。

「ああ、そうです」

小使は名刺と視学からの手紙とを受け取って引っ込んだが、やがて清三は応接室に導か

末な瀬戸火鉢がまんなかに置かれてあった。 れた。応接室といっても、卓や椅子があるわけではなく、がらんとした普通の六畳で、

長く黙って、一通の手紙を書いて、上に三田ヶ谷村村長石野栄造様という宛名を書いた。

みた やむら 書いてあげましょう」こう言って、汚ない硯箱をとり寄せて、何かしきりに考えながら、 「それじゃこれを弥勒の役場に持っていらっしゃい」 視学からの手紙を見て、 「そうです

_

弥勒まではそこからまだ十町ほどある。

行くと、人家が両側に並び出して、汚ない理髪店、だるまでもいそうな料理店、 てみると、なんだかこれでも村という共同の生活をしているのかと疑われた。けれど少し 三田ヶ谷村といっても、一ところに人家がかたまっているわけではなかった。 かしこに一軒、杉の森の陰に三四軒、野の畠の向こうに一軒というふうで、 そこに一 町から来 子供の集

0) ま に三田 った駄菓子屋などが眼にとまった。ふと見ると平家造りの小学校がその右にあって、 誦 読 読く ケ谷村弥勒高等 の声に交って、 尋じんじょう おりおり教師の 甲 走 小学校と書いた古びた札がかかっている。 った高 こい声が聞こえる。埃に汚れた硝子に声がらす 授業中で、

どが はしんとして、 窓には かすかにすかして見える。 日が当たって、 広場には白斑しろぶち ところどころ生徒の並 出ではい の犬がのそのそと餌をあさってい りの時に生徒でいっぱい んでいるさまや、 になる下駄箱 黒板やテーブル のあたりも今 や洋 :服姿な

オルガンの音がかすかに講堂とおぼしきあたりから聞こえて来る

家のまわ 道具などで散らかして、 をとどめて、 学校の門 前を車は通り抜けた。そこに傘屋があった。 もんぜん りには油を布いた傘のまだ乾かないのが幾本となく干しつらねてある。 役場 のあるところをこの中爺にたずね そのまんなかに五十ぐらいの中 爺 ちゅうおやじ 家 うちじゅう がせっせと傘を張っていた。 を油紙やしぶ皿や糸や 清三は

城_{ろあと} 址と の濠に沿って曲がって一町ほど行った所が役場だと清三は教えられた。 濠には 役場はその街道に沿った一かたまりの人家のうちにはなかった。人家がつきると、 汚 でもあったかと思われるような土手と濠とがあって、 な ・錆びた水が樫や椎の大木 の影をおびて、 さらに暗 土手には笹や草が一面 い寒い 色をし かれはここで車代 昔の

子にお料理そば切うどん小川屋と書いてあるのがふと眼にとまった。 を二十銭払って、 車を捨てた。 笹 藪 のかたわらに、 茅^{かやぶき} の家が一軒、 家のまわ 古びた大和障 わりは畑で、

麦の青い上には雲雀がいい声で低くさえずっていた。

眼に みた。 りに人がいなかっ するということをかねて聞 してくれるとも聞いた。 弥勒には小川屋という料理屋があって、 うい 庭には松が二三本、 たのをさいわい、 そこにはお種というきれいな評判な娘もいるという。 桜の葉になったのが一二本、 いていた。 通りがかりの足をとどめて、 当分はその料理屋で賄いもしてくれるし、 学校の教員が宴会をしたり飲み食いに行ったり 障子の黒いのがことにきわだって 低い 垣から庭をのぞいて 清三 夜具も は あた

垣の隅には椿と)珊瑚樹 との厚い緑の葉が日を受けていた。 椿には花がまだ二つ三つ葉

がくれに残って見える。

黄と赤とで美しくいろどられた。 の並木に通じて、 このへんの名物だという赤城おろしも、 その間から役場らしい藁葺屋根が 水 彩いさい 麦の畑を貫いた細い道は、 四月にはいるとまったくやんで、今は野も緑と 画のように見渡され 向こうに見えるひょろ長い榛はん

応接室は井泉村役場の応接室よりもきれいであった。 そこからは吏員の事務をとってい

が、

やら、 の生えた中年者と土地の勢力家らしい肥った百姓とがしきりに何か笑いながら話していた。 る室が硝子窓をとおしてはっきりと見えた。卓の上には 戸 籍 台 帳 やら、 収 一税 帳へや の二十四五の男と五十ぐらいの頭のはげた爺とが何かせっせと書いていた。 おりおり煙管をトントンとたたく。 願 届 けを一まとめにした書類やらが 秩 序 よく置かれて、ねがいとど 頭を分けたやせぎす 助役らしい鬚びげ

思議な思いにうたれた。なんだか狐につままれたような気がした。視学も岸野もあまり無 は視学からも助役からもそういう話は聞かなかったが……」と頭を傾けた時は、清三は不 プで、言葉には時々 武 州 訛 が交る。 村長は四十五ぐらいで、 痘痕面で、 井泉村の助役の手紙を読んで、巻き返して、 頭はなかば白かった。ここあたりによく見るタイ 私

ことがあるから」と言って しれない。今いる平田という教員が評判が悪いので、変えるっていう話はちょっと聞いた 村長はしばらく考えていたが、やがて、「それじゃもう内々転任の話もきまったのかも

責任に過ぎるとも思った。

「一つ学校に行って、校長に会って聞 横 柄 な口のききかたがまずわかいかれの 矜 持 を傷つけた。ホゥヘぃ いてみるほうがいい!」

めて 何もできもしない百姓の 分 際で、 の教員、 初め ての世間 らへの首途、 それがこうした冷淡な幕で開かれようとは 金があるからといって、 生意気な奴だと思った。 かれ 初

思い

もか

けなか

っ

ちょっと 挨 拶 したぎりで、 った。 の騒ぐ音が校内に満ち渡った。 広場に散った。今までの 静 謐 とは打って変わって、足音、 生徒はぞろぞろと整列してきて、 って乱れていた。 時 教員室には掛図や大きな 算 盤 や書籍や 植 物 標 本をみばん しょくぶっひょうほん 蕳 かれは学校に行って、校長に会った。 女 教 員 が一人隅のほうで何かせっせと調べ物をしていたが、じょきょういん 言葉もかけてくれなかった。やがてベルが鳴る、 「別れ」をやるとそのまま、 授業中なので、三十分ほど教員室で待 号ご うれい やいろいろなものが 蜘蛛の子を散らしたように の音、 散らばった生徒 長い ~散らば はじ 廊下を め

からなかった。 知らぬふりをしたのか、 せたほうの体格で、 校長 の背広には白いチョークがついていた。 師範校出の特色の一種の「気取り」がその態度にありありと見えた。しはん それともほんとうに知らぬのか、 顔の長い、背の高い、どっちかといえばや 清三にはその時の校長の心がわ

校長はこんなことを言った。

なんとか命令があるでしょう。 少し待っていていただきたいものですが……」

「ちっとも知りません……しかし加藤さんがそう言って、岸野さんもご存じなら、

いずれ

たりしていた。五十ぐらいの平田という 老「朽 と若い背広の関という准教員とが廊下の^^ラゥョゥゥゥ 自由でもあろうが役場に宿ってくれとのことであった。教員室には、教員が出たりは 時宜によればすぐにも使者をやって、よく聞きただしてみてもいいから、今夜一晩は不じぎ

てはいって来た。 柱の所に立って、久しく何事をか語っていた。二人は時々こっちを見た。 ルがまた鳴った。校長も教員もみな出て行った。 女教員は教員室を出ようとして、じろりと清三を見て行った。 生徒はぞろぞろと潮のように集まっ

唱歌の時間であるとみえて、 講堂に生徒が集まって、やがてゆるやかなオルガンの音が

静かな校内に聞こえ出した。

_

勝手口から井戸のそばに出て、平野をめぐる遠い山々のくらくなるのを眺めていると、身 村役場の一夜はさびしかった。小使の室にかれは寝ることになった。日のくれぐれに、^^

とは 産も タルな感情が激しく胸に迫ってきて、 思い出された。 も引き入れられるような 哀 愁 がそれとなく心をおそって来る。父母のことがひしひしと まれながらにしてすでに 薄 倖 ら覚えて んでしまって自分一人になった今は、 かな いっていられない。 いる。 り豊か 母親 であった。 幼いころは兄弟も多かった。 の泣 人のいい父親と弱々 いたのを不思議に思ったのをも覚えている。 七歳の時没落して 熊 谷 に来た時のことをかれはおぼろげなが の運命を得てきたのである。 涙がおのずと押すように出る。 家庭の関係についても、 そのころ父は 足 利 で呉服屋をしてい しく情愛の深い母親とを持ったこの身は、 こう思うと、 他の学友のような自由なこ 今は 例 のセンチメン 兄も弟も 生 死 財

毛ではいた 蛙の声がそこにもここにも聞こえ出した。ゥゥゎ゙゙゙゙゙゙ 近 森や道や畠は名残りなく暮れても、 たように夕焼けの空になびいて、 遠い山々の頂はまだ明るかった。 その末がぼかしたように広くひろがり渡った。 浅間の煙が刷

ところどころの農家に灯がとぼって、唄をうたって行く声がどこか遠くで聞こえる。ともしび、

かれはじっと立ちつくしていた。

足音がばたばたと聞こえる。 ふと前 の榛の並木のあたりに、人の来る気勢がしたと思うと、 小川屋に弁当と夜具を取りに行った小使が帰って来たのだと 華やかに笑う声がはな

思っていると、夕闇の中から大きな夜具を被いた黒い影が浮き出すように動いて来て、そ

のあとに女らしい影がちょこちょこついて来た。

昼間掃除しておいた三分心の洋燈に火をとぼした。 小使は室のうちにドサリと夜具を置いて、さも重かったというように呼吸をついたが、 あたりは急に明るくなった。

「ご苦労でした」

こう言って、清三が戸内にはいって来た。

このとき、清三はそこに立っている娘の色白の顔を見た。 娘は携えて来た弁当をそこにたずさ

置いて、急に明るくなった一室をまぶしそうに見渡した。 「お種坊、遊んでいくが好いや」

もないが、眉のところに人に好かれるように艶なところがあって、まゆ 小使はこんなことを言った。娘はにこにこと笑ってみせた。 評判な美しさというほどで 豊かな肉づきが頬にも

腕にもあらわに見えた。

「お母、 加 減 が悪いって聞いたが、どうだい。もういいかな」

あ あ

風邪だんべい」かぜ

風邪を引いちゃったんさ……」がぜ「寒い思いをしてはいけないいけないッて言っても、「寒い思いをしてはいけないいけないッて言っても、 仮 寝 なぞしているもんだから……

「お母、 11 い気だからなア」

ほんとうに困るよ」

「でも、 お種坊はかせぎものだから、 おっかあ 楽ができらアな」

娘は黙って笑った。

しばらくして、

お客様の弁当は、 明日も持って来るんだんべいか」

「そうよ」

「それじゃ、 お休み」

と娘は帰りかけると、

「まア、いいじゃねえか、遊んでいけやな

遊んでなんかいられねえ、これから跡仕舞いしねきゃなんねえ……それだらお休み」と

出て行ってしまう。

弁当には玉子焼きと漬け物とが入れられてあった。小使は出流れの温い茶をついでくれ

た。

来な やがて爺はわきに行って、 か も埋めらるるように感じた。 つ たので、 包みの中から洋紙を横綴 内職 かれ の藁を打ち始めた。 は想像にもつかれ、 にした手帳を出して、鉛筆で日記をつけ 夜はしんとしている。 さりとて読むべき雑 誌も 蛙の 持 声 た家 出 つ 7

頁から新たに書き始めた。 ならば、編が改まるところである。 シ消した。 兀 |月二十五日と前の日に続けて書いて、ふと思いついて鉛筆を倒にして、ゴムでゴシゴ 今日は少なくとも一生のうちで新しい生活にはいる記念の第一 で、 かれは頁の裏を半分白いままにしておいて、 日で ある。 次の 小説

四月二十五日、(弥勒にて)……

煙草が十銭、 ていた。 十九銭五 頁ほど簡単に書き終わって、 続いて今度ここに来るについての費用を計算してみた。 厘、 途中 持って来た一 の車代が三十銭、 円二十銭のうちから差引き七十銭五厘がまだ蝦蟇口がまぐち ついでに今日の費用を数えてみた。 清心丹が五銭、 学校で取った弁当が四銭 新郷で買った天狗しんごう 五 の中 厘、 に残 合計 つ 几

25.0………認介

べきをつくづく味気なく思った。	いて、父母の苦心したことを思い出した。わずか一円の金サ	これに前の七十銭五厘を加えて総計四円七十八銭也と書いて	4,07.5	14.5下駄	30.0・・・・・・・・・・・・・・・・・へご帯	1,75.0羽織	1,15.0帽子	14.0	8.5	3.5歯磨および楊子	
	金士	5									

22.0……名刺

むべ つい 夜着の襟は汚れていた。旅のゆるやかな悲哀がスウイトな涙を誘った。かれはいつかかょぎ、ネタウ ょご |すら容易にできない家庭の憐て、そしてこの金をつくるに

すかに鼾をたてていた。

翌日は学校の予算表の筆記を頼まれて、 役場で一日を暮らした。それがすんでから、 父

母に手紙を書いて出

夕暮れ に校長の家から使いが ある。

った。

校長の家は遠くはなか 茅^{かやぶき} 屋根の一軒立ちではあるが、 った。 麦の青い畑のところどころに黄いろい菜の花の 一 畦いの つくりはすべて百姓家の構えで、 が 交

広い入

ίij

泣き顔も、 六畳と八畳と続いた室の前に小さな庭があるばかりで、^や 茶の間 の長火鉢も畳の汚れて破れたのも、 表から来る人の眼にみなうつった。 細君のだらしのな い姿も、 子供の

校長の室には学校管理法や心理学や教育時論へや の赤い表紙などが見えた。

「君にはほんとうに気の毒でした。 実はまだ手筈だけで、 表 向 きにしなかったものだか

らねえ……」

だから、それでお頼みしようッていうことにしたのでした。ところが少し貴君のおいでが うと言っていたところに、 田というあの と言って、 細君の運んで来た茶を一杯ついで出して、 年 の老った教員、 ちょうど加藤さんからそういう話があるッて岸野君が言うもん あれがもう老朽でしかたがないから、 「君もご存じかもしれないが、 転校 か 免職かさせよ 平

煙草を一服吸ってトンとたたいて、

早かったものだから……」

言いかけて笑った。

「そうでしたか、少しも知りませんものでしたから……」

いんですけれど、あの人はああいうふうで、 「それはそうですとも、貴君は知るわけはない。岸野さんがいま少し注意してくれるとい 何事にも無頓着ですからな」

「それじゃその教員がいたんですね?」

「ええ」

「それじゃまだ知らずにおりましたのですか」

はすっかり村会で決めてしまうつもりですから、来週からは出ていただけると思いますが 「内々は知ってるでしょうけれど……表向きはまだ発表してないんです。二三日のうちに

……」こう言って、少しとぎれて、

んだんどうかなりますから……」 た方にも勤めいいです。貴下も一つ大いに奮発していただきたい。俸給もそのうちにはだ 「私のほうの学校はみんないい方ばかりで、万事すべて円くいっていますから、 始めて来

「貴下はまだ正教員の免状は持っていないんですね?」

「ええ」

しやればわけはありゃしないから……教授法はちっとは読みまし 「じゃ一つ、取っておくほうが、 万事都合がいいですな。 中学の証明があれば、 た か 実科を少

「少しは読んでみましたけれど、どうもおもしろくなくって困るんです」

「どうも教授法も実地に当たってみなくってはおもしろくないものです。 やってみると、

これでなかなか味が出てくるもんですがな」

弱々 細君は挨拶をしながら、顔の蒼白 く相対してすわった。 学校教授法 U い人だと思った。次の間では話をしている間、 の実験に 興味を持つ人間と、 点 心には大きい 塩煎餅が五六枚盆にのせて出された。 ちゃうけ **(**) 鼻の高い、 詩や歌にあくがれている青年とがこうして長 今年生まれた子がし 眉と眉との間 の遠 V 客の姿を見て、 つきりなしに泣 校長 の

いたが、 しかし主はそれをやかましいとも言わなかった。

襁褓が あたりに散らばって、 火鉢の 鉄 瓶 はカラカラ煮え立ってい た。

る。 清三は思わず興に乗って、 の話が 出 る。 師範校の話が出る。 理想めいたことやら、 教授上の経験談が出る。 家庭のための犠牲ということやらそ 同僚になる人々 · の噂が でかさ 出

ことまでほのめかした。 の他いろいろのことを打ち明けて語って、一生小学校の教員をする気はないというような 清三は昨日学校で会った時に似ず、 この校長の存外性質のよさそ

うなところのあるのを発見した。

- 機 が盛んで、若い男や女が出はいりするので、風俗もどうも悪い。^ムばメト ころで、その楫を取って行くのがなかなかむずかしいそうである。それに いほうではない、発戸、 上 村 君、 下 村 君 などいう利根川寄りの村落では、いほうではない、 ほっと かみむらぎみ しもむらぎみ 校長の語るところによると、この三田ヶ谷という地は村長や子弟の父兄の権力の強いと 七八歳の子供が卑猥 人気もあまりよ 青 縞 の賃 ^{あおじま}

でしたよ。今では、それでもだいぶよくなったがな」と校長は語った。 ひどかったものですよ。 「私がここに来てから、 もう三年になりますが、その時分は生徒の風儀はそれはずいぶん 初めは私もこんなところにはとてもつとまらないと思ったくらい

きわまる唄などを覚えて来てそれを平気で学校でうたっている。

帰る時に、

つかえはないでしょうか?」 明日は土曜日ですから、あした 日曜にかけて一度 行 田 に帰って来たいと思いますが、

かれはこうたずねた。

「ようござんすとも……それでは来週から勤めていただくように……」

その夜はやはり役場の小使室に寝た。

匹

朝起きると春雨がしとしとと降っていた。

ぬ れた麦の緑と菜の花の黄いろとはいつもよりはきわだって美しく野をいろどった。 村

の道を蛇の目傘が一つ通って行った。

清三は八時過ぎに、 番 傘 を借りて雨をついて出た。 それには三田ヶ谷村役場と黒々と

大きく書きつけてあった。

小川屋のかたわらの川 縁がればり 水には蠑螈が赤い腹を見せている。ふと街道の取つきの家から、 の繁みからは、 雨滴れがはらはらと傘の上に乱れ落ちた。

びた黒い 陰を急いで此方にやって来たが、二三歩前で、清三と顔見合わせて、カザ゙ ニムホト いう色白娘が、 白い手拭いで髪をおおったまま、傘もささずに、大きな雨滴。 ちょっと 会 釈して 小川屋 れ の落ちる木 のお種と

笑顔を見せて通り過ぎた。

くびをしていた。

傘の柄を頸のところで押さえて、 学校はまだ授業が始まらぬので、 明 方から降り出した雨なので、あけがた この 雨 の降 1 生徒らを来週からは自分が教えるのだと思って、 . づ 中 男生徒も女生徒も多くは包みを腰のところにしょって尻をからげて をぬれそぼちながら、 編みぼう 路はまだそうたいして悪くなかっ 門から下駄箱の見えるほとりには、 傘を車 と毛糸とを動かして歩いて来る十二三の娘 の輪のように地上に回して来 清三はその前を通っ 生徒の傘がぞろぞ Ż 河童もあり 歩い も れば、 7

ところはグシャグシャしているが、 た土 一には 雨がまだわずかにしみ込んだばかりであった。 拾えば泥濘にならぬところがいくらもある。 た。 車や馬 路 の通った の縁の

溝には、 おお 泉村 いかぶさった。 藻や藺 の役場に助役を訪ねてみたが、 らや 葦し 雨滴れがばらばら落ちた。 の新芽や 沢 瀉 がごたごたと生えて、淡竹の雨をおびた藪がその上に。 - ぉもだか - は またけ - やぶ まだ出勤していなかった。 路に沿った長い汚な

のほとりに軒の傾かたかた 0 **、** 鬚がずら 乱れた肥った嚊が柱によりかかって、 の四十男は、 むいた小さな百姓家があって、 雨に仕事のできぬのを退屈そうに、 今年生まれた赤児に乳を飲ませていると、 壁には鋤や犁や古い蓑などがずきくわり 手を伸ばして大きなあ か けて

には社 はもう新芽がきざし始めた。 .殿修繕の寄付金の姓名と額とが古く新しく並べて書いてある。 の八幡宮の茅 葺 の古い社殿は街道から見えるところにあった。 賽銭箱の前には、 額なたいがみ を手拭いで巻いた子傅がこもり 周しゅうい の 欅の か 大木に た わら

子守歌を調子よくうたっていた。

その低き軒をかすめた。 昨 Ė の売れ残りのふかし 甘薯がまずそうに並べてある店もあった。 雨は細く糸のように

の生えている畔、岩畑にはようやく芸 にはようやく芽を出しかけた桑、 遠くに杉や樫の森にかこまれた豪農の 白 壁しらかべ 眼もさめるように黄いろい菜の花、 も見える。 げんげや 重や すみれ

うと思わせることもある。 唄が若々し えず響いて来る。 青縞を織る音がところどころに聞こえる。 時にはあたりにそれらしい人家も見えないのに、どこで織ってるのだろ い調子で聞こえて来ることもある。 チャンカラチャンカラと忙しそうな調子がた

大_{おおがま} 玉を伸ば 発戸河岸のほうにわかれる路の角には、ここらで評判だという饂飩屋がほっとかし には湯がたぎって、 していた。 赤い襷をかけた若い女中が馴染らしい百姓と笑って話をしていたすき 主らしい男が、 大きなのべ板にうどん粉をなすって、せっせと あった。 朝 から

路 の曲がったところに、 古い石が立ててある。 維新前からある境界石で、 「これより羽は

とし てある。

萌^も が泥濘を飛ば V よろ長 出 した水草のかげを小魚がちょろちょろ泳いでいる。 い榛の片側並木が田圃の間に一しきり長く続く。 羽生から 大 越 に通う乗合馬 それに沿って細い川が流れ 7

して通っ

が、 が昼 来 一の日 Ż 今日は障子がびっ 嵵 には、 ののどかな光に干されて、 路 み ち ば た て行った。 のこけら葺の汚ないだるま屋の二階の屋根に、 やりと閉じられて、 下では蒼白 日当たりの悪いところには青ごけの生えたの い顔をした女がせっせと張り物をし 襟り 垢か のついた蒲団 7 (,) た

ネが なくなった。 だんだ あが った。 ん道が悪くなって来た。拾って歩いてもピシャピシャしないようなところはもう 足の踵を離さないようにして歩いても、 風が :出て雨も横しぶきになって袖もぬれてしまった。 すりへらした駒下駄からはたえずハ

が汚なく

眼に

. う

ر ر

が積み重ねられたなかで、 の店には番頭と小僧とがかたまって話をしているし、 生 としている。 の町はさびしかった。 郵便局 職人がせっせと足袋を縫っていた。 の前には為替を受け取りに来た若い女が立っているし、 時々番傘や蛇の目傘が通るばかり、庇っ 足袋屋の店には青縞と雲斎織 新式に硝子戸の店を造ったがらす 庇の長く出た広い通 呉服屋 りは

唐物 屋 の前には、 自転車が 個、 なかばは軒の雨滴れにぬれながら置かれ てあ

町 0) 四辻には 半鐘台が高 く立った。

びえている形のおもし の生えた溝があって、 そこから 行田道 はわかれて ろい 松、 吹井が清い水をふいている豪家の前を向こうに出ると、 いる。 煙草屋、 うどん屋、 羽生分署という札がかか 医師の大きな玄関、いしゃ 塀の上にそ 草

が一人、 剣をじゃらつかせて、 雨 の降 多くはこけら葺の古い貧しい家並みである。 りしきる中を出て来た。

白いペンキのはげた門に、

っている。

巡査

馬車屋

それからまた裏町の人家が続いた。

の前に、 立ちどまって聞 乗合馬車が一 V たが、 台あって、 あいにくいっぱいで乗せてもらう余地がなかった。 もう出るとみえて、客が二三人乗り込んでい 清三 は

な家の大 和 障 子 をあけてはいって行った。 清三の姿はなお しばらくその裏町の古い家並 中には中年のかみさんがい みの間に見えてい たが、ふと、 た。 とある小さ

「下駄を一つ貸していただきたいんですが……、 弥勒から雨に降られてへいこうしてしま

いました」

お安いご用ですとも」 かみさんは足駄を出してくれた。

足駄の歯はすれて曲がって、 歩きにくいこと一通りでなかった。 駒下駄よりはいいが、こまげた

ハネはやっぱり少しずつあがった。

かれはついに 新 郷 から十五銭で車に乗った。

 Ξ

を一 やりと閉って、あたりがしんとしていた。 ら晩までごたごたと人が出はいりするのが例であるが、 節になると、 のような細い雨がはすに降りかかった。隣には蚕の仲買いをする人が住んでいて、 湯屋があって、それと対して、 家は 行田町 軒仕切ったというような軒の低い家で、 狭い座敷から台所、 の大通りから、 昔の城、址のほうに行く横町にあった。 きれいな女中のいる料理屋の入り口が見える。 茶の間、 入り口まで、 風雨にさらされて黒くなった大和障子 今は建てつけの悪 白い繭でいっぱいになって、 角に柳の湯という い障子がびっし そ 長屋 に糸 朝 0) 嵵 が

年のころ四十ぐらいの品のいい 丸 髷 に結った母親が、 清三は大和障子をがらりとあけて中にはいった。 裁物板を前に、たちものいた あたりに鋏、

がそこにあらわれると、 糸巻き、針箱などを散らかして、せっせと賃仕事をしていたが、

障子があいて、

子息の顔

「まア、青三ツハー

「まア、清三かい」

と呼んで立って来た。

「まア、雨が降ってたいへんだったねえ!」

「あいにくだッたねえ、 ぬれそぼちた袖やら、 お 前。 はねのあがった袴などをすぐ見てとったが、言葉をついで、 昨日の工合いでは、こんな天気になろうとは思わなかった

のに……ずっと歩いて来たのかえ」

「歩いて来ようと思ったけれど、 新 郷 に安いかえり車があったから乗って来た」 見なれぬ足駄をはいているのを見て、

「どこから借りて来たえ、足駄を?」

「峰田で」

「そうかえ、峰田で借りて来たのかえ……。 ほんとうにたいへんだったねえ」こう言って、

雑巾を勝手から持って来ようとすると、

「雑巾ではだめだよ。母さん。バケツに水を汲んでくださいな」

「そんなに汚れているかえ」

と言いながら勝手からバケツに水を半分ほど汲んで来る。

乾いた手拭いをもそこに出した。

の綿入れと、自分の紬の衣服を縫い直した羽織とをそろえてそこに出して、 清三はきれいに足を洗って、手拭いで拭いて上にあがった。母親はその間に、 脱いだ羽織と 結城縞

袴とを手ばしこく 衣 紋 竹 にかける。^{はかま}

二人はやがて長火鉢の前にすわった。

「どうだったえ?」

母親は鉄瓶の下に火をあらけながら、 心にかかるその様子をきく。

かいつまんで清三が話すと、

「そうだってねえ、手紙が今朝着いたよ。どうしてそんな不都合なことになっていたんだ

ろうねえ」

「なあに、少し早く行き過ぎたのさ」

「それで、話はどうきまったえ?」

「来週から出ることになった」

「それはよかったねえ」

喜びの色が母親の顔にのぼった。

それからそれへと話は続いた。

弥勒という所はどんなところかの、 を持ち出して母親は聞いた。 清三はいちいちそれを話して聞かせた。 下宿するよいところがあったかのと、 いろいろなこと

校長さんはどういう人だの、やさしそうな人かどうかの、

「お父さんは?」

しばらくして、清三がこうきいた。

て来なくってはッてね……。 「ちょっと 下 忍 まで行ッて来るッて出かけて行ったよ。どうしても少しお銭をこしらえ 雨が降るから、明日にしたらいいだろうと言ったんだけれど

.

で、人にだまされやすい弱い鈍い性質を持っていながら、 贋 物 の書画を人にはめること 職業は人間のすべき正業ではないようにつねに考えられているのである。 を職業にしているということにはなはだしく不快を感じた。正直なかれの心には、 の働きのないことがはがゆいようにも思われるが、いっぽうにはまた、 清三は黙ってしまった。貧しい自分の家のことがいまさらに頭脳にくり返される。 好人物で、 父親の

た雨 思うと、 だまされさえしなければ、今でも 相 応 な呉服屋の店を持っていられたのである。 1の降 何も知らぬ母親に対する同情とともに、 る日に、 わず か五十銭か一 円の銭で、 里もあるところに出かけて行く老いた父 正業でない職業とは いいながら、こうし

火鉢 母親は古い 茶 箪 笥 から茶のはいった罐と 急 須 とを取った。 やがて鉄瓶がチンチン音を立て始めた。 の抽斗しの紙袋には 塩 煎 餅 が二枚しか残っていなかった。

茶はもう粉になっていた。

親を気の毒に思った。

明星に 友に手紙を書いたり、 清三は夕暮れ近くまで、 派の歌のことやら我ながら若々しいと思うようなことを罫紙に二枚も三枚も書い 新聞を読んだりしていた。 母親の裁縫するかたわらの暗い窓の下で、 友の手紙には恋のことやら詩のことやら 熊谷にいる同窓の くまがや

さい」という声を先にたてて、建てつけの悪い大 和 障 子 をあけようとする人がある。 四時ごろから雨ははれた。路はまだグシャグシャしている。父親が不成功で帰って来た 家庭の空気がなんとなく重々しく、親子三人黙って夕飯を食っていると、

た。

母親が立って行って、

「まア……さあ、どうぞ」

ものですから……いつもご無沙汰ばかりいたしておりましてねえ、まアほんとうに」 日は土曜日だから、清三さんがお帰りになったかどうか郁治がうかがって来いと申します 「いいえ、ちょっと、湯に参りましたのですが、帰りにねえ、 貴女、お宅へあがって、今

あなた

こっちにおはいりなさいましよ」 「まア、どうぞおかけくださいまし……、おや雪さんもごいっしょに、……さア、雪さん、

はめずらしいいい娘だが、湯上がりの薄く 化 粧 気にくっきりと浮き出すように見せて、ぬれ手拭いに石鹸箱を包んだのを持って立ってい と女同士はしきりにしゃべりたてる。 郁治の妹の雪子はやせぎすなすらりとした田舎に した白い顔を夕暮れの暗くなりかけた空

「さア、こんなところですけど……」

た。

「それでもまア、ちょっとおかけなさいましな」「いいえ、もうそうはいたしてはおりませんから」

合っている向こうに雪子の立っているのをちょっと見て、すぐ眼をそらした。 この会話にそれと知った清三は、箸を捨てて立ってそこに出て来た。 母親どもの挨拶し

郁治の母親は清三の顔を見て、

お帰りになりましたね、 郁治が待っておりますから……」

「今夜あがろうと思っていました」

おいでにならなくなると、あれも淋しくってしかたがないとみえましてね……それに、 「それじゃ、どうぞお遊びにおいでくださいまし、毎日行ったり来たりしていた方が急に ほ

郁治の母親はやがて帰って行く。 清三も母親もふたたび 茶 湯 台 に向かった。 親子はや

かに仲のいいお友だちもないものですから……」

はり黙って夕飯を食った。

湯を飲む時、母親は急に、

雪さん、たいへんきれいになんなすったな!」

った。父親の茶漬けをかき込む音がさらさらと聞こえた。清三は 沢 庵 をガリガリ食った。 とだれに向かって言うともなく言った。けれどだれもそれに調子を合わせるものもなか

日は暮れかかる。雨はまた降り出した。

六

少なからぬ追 憶 まもいで と追 胡 瓜や南 瓜が生ったりした。 少し行くと、 って来たこともあった。 加 藤 1 の家は 口 したこともあれば、 やがてい 五. 町と隔たっておらなかった。 っぽう麦畑 細 V 巷路の杉垣の奥の門と瓦屋根、こうじ 寒い冬の月夜を歌留多にふかして、 緑 りょくいん 陰ん いっぽう垣根になって、夏は紅と白の木槿がいっぽう垣根になって、夏は紅と白の木槿が の重なった夕闇に螢の飛ぶのを、 公園道のなかばから左に折れて、 それはかれにとってまことに からころと 跫 音 雪子や 咲 裏 V 町 しげ子 高く帰 の間 た り、

なかった。 よく話しかける父親 とりすました顔や、 今日は桜の葉をとおして洋燈の光がキラキラと雨にぬれて光っていた。 笑い 声 が () つも絶えぬ平和な友の家庭をうらやましく思ったことも一度や二度では 繁子のあどけなくにこにこと笑って迎えるさまや、 の様子などがまだ訪問せぬうちからはっきりと目に見えるような気がょうす 晩酌に 雪子の色の白 酔っ 7 機 嫌

が

. ある。

切で、 つきにくい質のものが多いが、 視学といえば、 そして口をきくほうにかけてもかなり重味があると人から思われていた。 田舎ではずいぶんこわ持てのするほうで、いなか 郁治 の父親は、 物のわ かりが早くって、 むずかしい、 優しくって、 理屈ぽ 鬚はなか

教育上の議論などをあかずにして聞かせることもあった。清三と郁治と話している室に来へや ば白く、 髪にもチラチラ交っているが、気はどちらかといえば若いほうで、 青年を相手に

ては、二人を相手にいろいろなことを語った。

立つと、洋燈を持って迎えに出たしげ子の笑顔が浮き出すように闇の中にいる清三の眼に 門をあけると、ベルがチリチリンと鳴った。 踏み石をつたって、入り口の格子戸の前に

「林さん?」

うつった。

と、のぞくようにして見て、

「兄さん、林さん」

と高い無邪気な声をたてる。

てすわっていた。雪子は勝手で跡仕舞いをしていたが、 掃除も行き届いて、 茶の間の洋燈も明るかった。 母親は長火鉢の前に、晴れやかな顔をし ちょうどそれが終わったので、 白

父親は今日熊谷に行って不在であった。子供がいないので、室がきれいに片づいている。

い前掛けで手を拭き拭き茶の間に来た。

挨拶をしていると、郁治は奥から出て来て、清三をそのまま自分の書斎につれて行った。

幅のかかっているのが洋燈の遠い光におぼろげに見える。洋燈の載った朴の大きな机ぶく 唐宋八家文 などと書いた白い紙がそこに張られてあった、三尺の 半 床 の 草 雲 のとうそうはっかぶん 書斎は四畳半であった。桐の古い本箱が積み重ねられて、 網鑑易知録こうかんいちろく 史記、 の蘭 五. の 0)

には、 明星、 文芸倶楽部、 万葉集、 葉全集などが乱雑に散らばって置か れ 7 ある。

年も会わなかったようにして、 二人は熱心に話した。 いろいろな話が絶え間なく二人

の口から出る。

「君はどう決まった?」

しばらくして清三がたずねた。

来年の春、高等師範を受けてみることにした。それまでは、 ただおってもしかたがない

からここの学校に教員に出ていて、そして勉強しようとおもう……」 熊谷の小畑からもそう言って来たよ。 くまがや おばた やっぱり高師を受けてみるッて」

「そう、 君のところにも言って来たかえ、 僕のところにも言って来たよ」

「小島や杉谷はもう東京に行ったッてねえ」

「そう書いてあったね」

「どこにはいるつもりだろう?」

「小島は第一を志願するらしい」

「杉谷は?」

「先生はどうするんだか……どうせ、 先生は学費になんか困らんのだから、どうでも好き

にできるだろう」

「この町からも東京に行くものはあるかね?」

「そう」と郁治は考えて「佐藤は行くようなことを言っていたよ」

「どういう方面に?」

「工業学校にはいるつもりらしい」

卒業してあとの境遇をあらかじめ想像せぬでもなかったが、その時はまたその時で、思わ たい方面に出て行く友だちがこのうえもなくうらやましかった。 同窓に関する話がつきずに出た。 清三の身にしては、将来の方針を定めて、てんでに出 中学校にいるうちから、

それは空想であった。家庭の餓は日に日にその身を実際生活に近づけて行った。 ぬ運が思わぬところから向いて来ないとも限らないと、しいて心を安んじていた。 けれど

かれはまた母親から優しい温かい血をうけついでいた。 幼い時から 小 波 のおじさんのかれはまた母親から優しい温かい血をうけついでいた。 幼い時から かきぎなみ

お 伽 噺 を読み、小説や歌や俳句に若い思いをわかしていた。体の発達するにつれて、

は自分の前におもしろい楽しい舞台をひろげていると思うこともあれば、汚ない醜い近づ 心は燃えたり冷えたりした。町の若い娘たちの眼色をも読み得るようにもなった。 うな世界といかになり行くかを知らぬ自己の将来とを考える時は、 くべからざる現象を示していると思うこともある。自己の満しがたい欲望と美し もいつか覚えた。あるデザイアに促されて、 人知れず汚ない業をすることもあった。 いつも暗いわびし い花のよ 恋の味 いた 世

熊谷にいる友人の恋の話から Art の君の話が出る。

えがたい心になった。

「どうかする方法がありそうなもんだねえ」「僕は苦しくってしかたがない」

二人はこんなことを言った。

「昨日公園で会ったんさ。 ちょっと浦和から帰って来たんだッて、 先生、 いたずらに肥え

てるッていう形だッた」

郁治はこう言って笑った。

「いたずらに肥えてるはいいねえ」

清三も笑った。

でも、

郁治の性格の一部はわかる。

君のシスタアが友だちだし、 先生のエルダアブラザアもいるんだし、どうにか方法があ

りそうなもんだねえ」

「まア、放っておいてくれ、考えると苦しくなる」

体格 らも言ったように、 胸にひそかに恋を包める青年の苦しさというような顔を郁治はして見せた。 の大きい、 肩の怒った、 郁治は好男子ではなかった。男らしいきっぱりとしたところはあるが、 眼の鋭い、 頬骨の出たところなど、女に好かれるような点は 前にみずか

なかった。

学費は出 はあるには違いないが、どんな境遇からでも出ようと思えば、出て来られる」と言ったの んなことはありゃしないよ、君、 若 センチメンタルのところはない。 家庭もよかった。 い者の苦しむような 煩 悶 はかれの胸にもあった。 ·田舎に埋れて出られなくなる第一歩であるかのように言ったのを、「だッて、_{いなか うずも} してやる気が父親にもある。 高等師範にはいれぬまでも、 人間は境遇に支配されるということは、それはいくらか 清三が今度の弥勒行きを、 それに体格がいいだけに、 東京に行って一二年は修業するほどの 清三にくらべては、 このうえもない絶望のよ 思想も健全で、 境遇もよか 清三のよ そ っ

その時、清三は、

「君はそういうけれど、それは境遇の束縛の恐ろしいことを君が知らないからだよ、

り君の家庭の幸福から出た言葉だよ」

「そんなことはないよ」

「いや、僕はそう思うねえ、 僕はこれっきり埋れてしまうような気がしてならないよ」

「僕はまた、 かりに一歩譲って、人間がそういう種類の動物であると仮定しても、 そうい

う消極的な考えには服従していられないねえ」

「じゃ、どんな境遇からでも、その人の考え一つで抜け出ることができるというんだねえ」

ーそうさ」

「つまりそうすると、 人間万能論だね、どんなことでもできないことはないという議論だ

ね

「君はじきそう極端に言うけれど、それはそこに取り除けもあるがね」

その時 いつもの単純な理想論が出る。 積極的な考えと消極的な考えとがごたごたと混合

して要領を得ずにおしまいになった。

かれらの群れは学校にいるころから、 文学上の議論や人生上の議論などをよくした。新 やは

り骨の字の号をつけた一人で―

―これは文学などはあまりわかるほうではなく、

同

かれの兄が行田町に一つしかない印

じなかまにおつき合いにつけてもらった組であるが、

骨だの、 そのほ うのは、 うな非常に熱心な文学好きで、雑誌という雑誌はたいてい取って、 ばらくの間は 派 などとよく書か う号をつけると、 とつねに手紙 ようになった。 う気になって、 \mathcal{O} 和歌や俳句や抒情文などを作って、互いに見せ合ったこともある。 んとうの号は機山といって、町でも屈指の 青 縞 商 ペート きざん 洒 骨 だの、露骨だの、 天 骨 だの、古骨だのというおもしろい号ができて、しゃこっ ろこっ てんこっ ここっ やは 自分の号の活字になるのを喜んでいたが、近ごろではもう投書でもあるま り郁治や清三と同じく三里の道を朝早く熊谷に通った 連 中れんちゅう 手紙をやるにも、 の往復をするので、地方文壇 消 息 には、 つねに色の白い顔に 銀 縁ぎんぶち それに、 れ 毎月の雑誌に出る小説や詩や歌の批評を縦横にそのなかまにして聞 てあった。時の文壇に名のある作家も二三人は知ってい みな骨という字を用いた号をつけようじゃないかという動議 投書家 交 際 をすることが好きで、 話をするにも、 の近眼鏡をかけていた。田舎の青年に多く見るよいなか みんなその骨の字の号を使った。 武州行田には石ぶしゅうぎょうだ の息子で、 地方文壇の小さな雑誌の主筆 初めは 一人が 仙 骨 平生は角帯なへいぜい かくおび中の一人だが、 いろいろな投書 1川機山 が 古骨とい 出 か いとい せる な

稿料 汚れた た顔 話し 返し 刷業 に ま 活字も少なか れた大き いが、 金持 い 動 は、 は出さなくったって書き手はたくさんあ どを頼ま をやってい て行っ 7 、ちの息子と見て、 筒袖を着て、 V この 0) 新し 7 Ū 、招牌が、 相 たが、 1 冱 った。 談が る 7 れ て、 月 計 0) て刷ることもあるが、 その 帰る が 画に の月の かか 文選も植字も印刷 見える。 その前を通ると、 。時、 連中 対する喜びに 手 って 初 その小遣いを見込んで、 刷 がめに、 り台 0 それじゃ毎月七八円ずつ損するつもりなら大丈夫だね 間に持ち上が 広告の引き札や名刺が主で、 1 の前 て、 機山がこの印 輝 旧式 に立って、 も主があるじ ζ, 硝子戸 それはきわめてまれ な手刷 7 ったのはこれからである。 1 た。 るし、 みな一人でやった。 の入り口に、 刷す れ りが 刷 それでそその 所に遊びに来て、 「行田文学」という小 た紙を翻して それに二三十部は売れ 一台、 時には であ 例 行田印刷 の大きな か つ U 1 た、 郡役所警察署 日 たとい る 曜 長 所と書 のを 1 日な 棚 ハネを巻き返し 間 雑誌を起こすこと に うわ うね どに そ 並 るアね」 いたイン 0) ベ は 主人兄弟と け に た 0) 簡 Ć 見 そ ケ え。 もあ 単 丰 0)] か け 弟 ス な 原 る が 0) 報 汚 V)

機山がその相談の席で、

は聞こえている名家で、 そ れ から、 羽^はにゅう の成願寺に山形古城 新体詩じゃ有名な人だから、 が いるアねえ。 まず第一にあの人に賛成員になって あの人はあれでなかな か 文壇に

もらうんだね。あの人から頼んでもらえば、 原杏花の原稿ももらえるよ」はらきょうか

「あの古城ッていう人はここの士族だッていうじゃない か

「そうだッて……。だから、賛成員にするのはわけはないさ」

ちょうど清三が弥勒に出るようになった時なので、 かれがまずその寺を訪問する責任を

仲間から負わせられた。

その夜、「行田文学」の話が出ると、郁治が、

「寄ってみたかね?」

「あいにく、雨に会っちゃッたものだから」

「そうだったね」

「今度行ったら一つ寄ってみよう」

「そういえば、今日 荻 生 君が羽生に行ったが会わなかったかねえ」

「荻生君が?」と清三は珍しがる。

さんである。 荻生君というのは、 今度羽生局に勤めることになって、今車で行くというところを郁治は町の角ゕど やはりその仲間で、 熊谷の郵便局に出ている同じ町の料理店の子息むする

で会った。

「これからずッと長く勤めているのかしら」

「むろんそうだろう。 羽生の局をやっているのは荻生君の親類だから」

「それはいいな」

「君の話相手ができて、いいと僕も思ったよ」

「おび言材ミグ」 こうしい 存き身、 グラ

「じき親しくなるよ、ああいうやさしい人だもの……」「でも、そんなに親しくはないけれど……」

を運んで、茶をさして来た。そのまま兄のそばにすわって、無邪気な口ぶりで二言三言話と していたが、今度は姉の雪子が丈の高い姿をそこにあらわして、「兄さん、石川さんが」 そこにしげ子が「昼間こしらえたのですから、まずくなりましたけれど……」とお萩餅

という。

やがて石川がはいって来た。

座に清三がいるのを見て、

「君のところに今寄って来たよ」

「そうか」

「こっちに来たッてマザアが言ったから」こう言って石川はすわって、 「先生がうまくつ

とまりましたかね?」

清三は笑っている。

郁治は、 「まだできるかできないか、やってみないんだとさ」

とそばから言う。

ど清三とこの家庭とは親しかった。 交るとすましてしまうのがつねである。それほど清三と郁治とは交情がよかった。ポピ 清三と話している間は、話に気がおけないので、よく長くそばにすわっているが、 雪子もしげ子も石川の顔を見ると、 挨 拶 してすぐ引っ込んで行ってしまった。 郁治と清三との話しぶりも石川が来るとまるで変わっ それ 他人が 郁治と ほ

「もうすっかり決まったかえ」 「いよいよ来月の十五日から一号を出そうと思うんだがね」

東京からも大家では麗水と天随とが書いてくれるはずだ……。 それに地方からもだ

いぶ原稿が来るからだいじょうぶだろうと思うよ」

する菊版二十四頁の「小文学」というのをとくに抜き出して、 こう言って、地方の小雑誌やら東京の文学雑誌やらを五六種出したが、岡山地方で発行

がいいだろうと言うんだけれど、どうも中の 体 裁 はあまり感心しないから、 「たいていこういうふうにしようと思うんだ。沢田 (印刷所) にも相談してみたが、 組み方なん それ

かは別にしようと思うんだがね」

「そうねえ、中はあまりきれいじゃないねえ」と二人は「小文学」を見ている。

「これはどうだろう」

と二段十八行二十四字詰めのを石川は見せた。

「そうねえ」

洋燈は額を集めた三人の青年とそこに乱雑に散らかった雑誌とをくっきり照らした。らんぷ ひたい 三人は数種の雑誌をひるがえしてみた。 郁治の持っている雑誌もそこに参考に出した。

やがてその中の一つにあらかた定まる。

初めは藤島武二や中沢弘光の木版画のあざやかなのを見ていたが、やがて、晶子の歌に熱 石川 の持って来た雑誌の中に、 「明星」の四月号があった。 清三はそれを手に取って、

心に見入った。 新しい 「明星派」の傾向が清三のかわいた胸にはさながら泉のように感じ

られた。

石川はそれを見て笑って、

「もう見てる。違ったもんだね、 崇拝者は!」

「だって実際いいんだもの」

句ばかり集めて、 「何がいいんだか、 つかもやった明星派是非論、それを三人はまたくり返して論じた。 それで歌になってるつもりなんだから、 国語は支離滅裂、 思想は新しいかもしれないが、わけのわからない文 明星派の人たちには閉口するよ」

E

夜はもう十二時を過ぎた。雨滴れの音はまだしている。時々ザッと降って行く気勢も聞

き取られる。 城 址 の沼のあたりで、むぐりの鳴く声が寂しく聞こえた。 室には三つ床が敷いてあった。 小さい 丸 髷 とはげた頭とが床を並べてそこに寝ていまるまげ

母親はつい先ほどまで眼を覚ましていて、 「明日眠いから早くおやすみよ」といく度

となく言った。

の母親も寝てしまって、父親の鼾に交って、かすかな呼吸がスウスウ聞こえる。さらぬだの母親も寝てしまって、父親の鼾に交って、かすかな呼吸がスウスウ聞こえる。さらぬだ 「ランプを 枕 一元 につけておいて、つい寝込んでしまうと危いから」とも忠告した。そまくらもと

に紙 って、 の笠が古い 光線が , J いのに、 やに赤く暗 先ほど心が出過ぎたのを知らずにい \ \ \ 清三は借りて来た 「明星」 たので、 をほとんどわれを忘れるほど熱 ホヤが半分ほど黒くな

心に読み耽っ 椿 ぞれ も梅もさなりき白かりきわが罪問はぬ色桃にいるも !見る

が知 みた。 れは歌を読むのをやめて、 る 夜役場に寝たわびしさも、 に一頁ごとに本を伏せて、 と五の句を分けたところに言うに言われぬ なところに新しい泉がこんこんとしてわ わが のをわ れ ふと石川と今夜議論をしたことを思い出した。 :罪問 ぬと思った。それに引きかえて、 不思議なようでもあるし、 れとみずから感謝 は め してみた。 色 桃に 見る、 なんだか悲しいようにもあれば、 弥勒から 羽 生 まで雨にそぼぬれて来た辛さもまったく忘れみろく はにゅう わいて来る思いを味わうべく余儀なくされた。 体裁から、 した。渋谷の淋ざび 桃に見る、 不自然のようにも考えられた。 あ 自分の感情のかくあざやかに新し いているようにも思われた。色桃に見るといているようにも思われた。い発も 組み方から、 匂い の赤 しい が 奥に住んでいる詩 (1 あるようにも思われ 桃に見ると歌った心がしみじみと胸 表紙の絵から、 あんな粗い感情で文学などをやる気 うらやましいように 人夫妻の佗び住居がまれ またこの不思議な すべて新しい匂いに た。 この い思潮に か れ)瞬間 は 触れ 几 不自 には 首ごと のこと に 0) 7 昨 旬 然

満たされたその雑誌にあこがれ渡った。

が騒がしく聞こえた。

時計が二時を打っても、 かれはまだ床の中に眼を大きくあいていた。鼠の天井を渡る音

かと思うと、びしょびしょと雨滴れの音が軒の樋をつたって落ちた。 雨は降ったりはれたりしていた。人の心を他界に誘うようにザッとさびしく降って通る

暗い洋燈を手にして、父母の寝ている夜着のすそのところを通って、厠に行った。らんぷ 天の葉に雨の降りかかるのが光って見えた。 おうとして雨戸を一枚あけると、縁側に置いた洋燈がくっきりと闇を照らして、 いつまであこがれていたッてしかたがない。 「もう寝よう」と思って、起き上がって、 ぬれた南

手を洗

障子を閉てる音に母親が眼を覚まして、

「清三かえ?」

「ああ」

「まだ寝ずにいるのかえ」

「今、寝るところなんだ」

「早くお寝よ……明日が眠いよ」と言って、寝返りをして、

「もう何時だえ」

「二時……もう夜が明けてしまうじゃな「二時が今鳴った」

いか、

お寝よ」

で、蒲団の中にはいって、洋燈をフッと吹き消した。ふとん「ああ」

八

行った。 げた、 近所 の境をかぎった川 アギャア鳴い の百 新んつむぎ 姓は 午後一時ごろ、 雨 あが · て、 腰をかけてしきりに饂飩を食っていた。 りの空はやや曇って、 の古ぼけた縞 には、 番傘と蛇の目傘とがその岸に並べて干されてあった。 葦や藺や白楊がもう青々と芽を出していめし い やなぎ 白ろじま 編ま の羽織を着た父親とは、 の袴を着けて、 時々思い 借りて来た足駄を下げた清三と、 出したように薄 行田 の町はずれをつれ立って V) たが、 日影がさした。 町に買 家鴨が五六 い物に来た 町 なかばは 羽ギ 歩 と村と 1 ャ

並

んで歩く親子の後ろ姿は、低い庇や地焼の瓦でふいた家根や、

襁褓を干しつらねた軒むっき

などの 小旗を無数にヒラヒラさしたあめ屋が太鼓をおもしろくたたきながらやって来る。 や石屋の工作場や、 両 側に連なった間を静かに動いて行った。 鍛冶屋や、娘の青縞を織っている家や、ゕぃゃ と、 向こうから頭に番台を載せて、 子供の集まっている駄菓子屋 Ŀ

今日行っていくらかにして来なければならないと思って、 父親は 近在の 新 郷 というところの豪家に二三日前書画しんごう 午後から弥勒に行く清三といっ の幅を五六品預けて置いふく て来た。

しょ

に出かけて来たのである。

で、 腰を低くして、 ま 家の書画道楽の主人で、 かりで、ねっかららちがあかんな」と言って声高くその中年の男は笑った。 ら」と父親はしきりに弁解した。清三は五六間先からふり返って見ると、 っった。 ここまで来る間に、 「どこへ行くけえ? そんなことはございません。出所がしっかりしていますから、 「この間のは、どうも悪いようだねえ、どうもあやしい」と向こうから言うと、 頭を下げている。 父親は町の懇意な人に二人会った。一人は気のおけないなかまの者 それが向こうから来ると、父親はていねいに挨拶 そうけえ、 そのはげた額を、 新郷へ行くけえ、あそこはどうもな、 薄い日影がテラテラ照らした。 折り紙つきですか 父親がしきりに 吝嗇な人間ば 一人は をして立ちど 町 ' の 豪

加須に行く街道と 館「林 に行く街道とが町のはずれで二つにわかれる。それから向こかぞ

の間に 白 堊 の土蔵などが見えている。まだ犁を入れぬ田には、げんげが赤い 毛 氈 を敷しらかべ うはひろびろした野になっている。野のところどころにはこんもりとした森があって、 らして来た。 いたようにきれいに咲いた。商家の若旦那らしい男が平坦な街道に滑らかに自転車をきし

ろどころにのどかに聞こえる。街道におろし菓子屋が荷を下していると、髪をぼうぼうさ と言って入用だけ置かせている。 せた村の駄菓子屋のかみさんが、 あれば、 青 苔 が汚なく生えた溝を前にした荒壁の崩れかけた家もあった。 路は野から村にはいったり村から野に出たりした。樫の高い 生 垣 で家を囲んだ豪家も路は野から村にはいったり村から野に出たりした。 樫の高い 生 垣 で家を囲んだ豪家も 帯もしめずに出て来て、豆菓子や鉄砲玉をあれのこれの 鶏の声がとこ

へのわかれ路が近くなったころ、 親子はこういう話をした。

「今度はいつ来るな、お前」

「この次の土曜日には帰る」

「それまでに少しはどうかならんか」

「少しでも手伝ってもらうと助かるがな」 「どうだかわからんけれど、月末だから少しはくれるだろうと思うがね」

清三は返事をしなかった。

やがて別れるところに来た。 新郷へはこれから 一田 圃 越せば行ける。

「それじゃ気をつけてな」

「ああ」

子に 白 縞 の袴をつけた清三の姿とは、 そこには 庚 申 塚 が立っていた。禿頭の父親が猫背になって歩いて行くのと、こうしんづか 長い間野の道に見えていた。 茶色の帽

Η

どめておくことにした。 まるべし。 心持ちを書こうと思ったが、とうてい十分に書き現わし得ようとも思えぬので、記憶にと つひに堪へんや、あゝわれつひに田舎の一教師に埋れんとするか。明日! その夜は役場にとまった。校長を訪ねたが不在であった。かれは日記帳に、 村会の夜の集合! 噫! 一語以て後日に寄す」と書いた。なおくわしくそのぁぁ 明日は万事定 「あゝわれ

翌日、朝九時に学校に行ってみた。けれどその平田というのがまだいたので、 一まず役

場に引き返した。一時間ばかりしてまた出かけた。

が、 が各教場からはっきりと聞こえて来る。 なくおどった。 今度はもうその教員はいなかった。 教員室にはいると、校長は卓に向かって、 授業はすでに始まっていた。 女教員のさえた声も聞こえた。 何か書類の 生徒を教える教員 調り 清三の胸 をしていた は な À لح

「さアはいりたまえ」と言って清三のはいって来るのを待って、そばにある椅子をすすめ

た。

れでやかましい学務委員が の相談でもいろいろの話が出ましてな」こう言って笑って、 「お気の毒でした。ようやくすっかり決まりました。なかなかめんどうでしてな……昨夜 いるから困りますよ」 「どうも村が小さくって、そ

校長は言葉をついで、

「それで家のほうはどうするつもりです? 当分は学校に泊まっていてもいいけれど……考えがありますか 毎日行 田から通うというわけにもいくまい。

「どうも田舎だから、格好なところがなくって……」 「どこか寄宿するよいところがございますまいか」とこれをきっかけに清三が問うた。

「ここでなくっても、少しは遠くってもいいんですけれど……」

れた。 顔にやさしい表情が出て、 ころがあった。 の方が林さん、 かっこうで、 にこにこと気がおけぬようなところがあった。大島という校長次席は四十五六ぐらいの年 「そうですな……一つ考えてみましょう。どこかあるかもしれません」 二時間すんだところで、清三は同僚になるべき人々に紹介された。関という準教員は、 師範校出はなんだかそッ気ないような挨拶をした、女教員は下を向いてにこにこし 頭はもうだいぶ白く、ちょっと見ると 窮 屈 そうな人であるが、 次に狩野という顔に疣のある訓導と杉田という肥った師範校出とが紹介さかのう 私は大島と申します。何分よろしく」と言った言葉の調子にも世なれたと 初等教育にはさもさも熟達しているように見えた。 「はあ、こ 笑うと、

って、新しい教員を生徒に紹介した。 次の時間の授業の始まる前に、校長は生徒を第一教室に集めた。かれは卓のところに立

できになる先生でございますから、皆さんもよく言うことを聞いて勉強するようにしなけ とになりました。 「今度、林先生とおっしゃる新しい先生がおいでになりまして、皆さんの授業をなさるこ 新しい先生は行田のお方で、中学のほうを勉強していらしって、よくお

ればなりません」

なく困ったような恥ずかしそうな様子に生徒には見えた。 校長のわきに立って、少しうつむきかげんに、顔を赤くしている新しい先生は、 生徒は黙って校長の言葉を聞 なん ح

た。 年生の十二三歳の児童がずらりと前に並んで、何かしきりにがやがや言っていたが、先 次の時間には、その新しい先生の姿は、第三教室の卓の前にあらわれた。そこには高等

生がはいって来ると、 いずれも眼をそのほうに向けて黙ってしまった。

て来たが、卓の上に顔をたれたまま、 新し い教師は卓の前に来て椅子に腰を掛けたが、 しばしの間は、 その顔は赤かった。 その教科書の頁をひるがえして見て 読本を一冊持つとくほん

いた。

後ろのほうでささやく声がおりおりした。

ろくさして、戸外では雀が「百」囀 をしている。通りを荷車のきしる音がガタガタ聞こえ 教室の硝子戸は埃にまみれて灰色に汚なくよごれているが、そこはちょうど日影が黄い

た。

隣の教室からは、 女教員の細くとがった声が聞こえ出した。

しばらくして思い切ったというように、 新しい教師は顔をあげた。 髪の延びた、 額の広

い眉のこいその顔には一種の努力が見えた。

「第何課からですか」

こう言った声は広い教室にひろがって聞こえた。

|第何課からですか」とくり返して言って、「どこまで教わりましたか」

こう言った時には、 もう赤かった顔の色がさめていた。

答えがあっちこっちから雑然として起こった。清三は生徒の示した読本の頁をひろげた。

言おうが、どう思おうが、そんなことに 頓 着 ぬ身である。どうせ自分のベストをつくすよりほかにしかたがないのである。 もうこの時は初めて教場に立った苦痛がよほど薄らいでいた。どうせ教えずにはすまされ していられる場合でない。こう思ったか 人がなんと

れの心は軽くなった。

「それでは始めますから」

新しい教師は第六課を読み始めた。

なるような活気のない声にくらべては、たいへんな違いである。 生徒は早いしかしなめらかな流るるような声を聞いた。前の 老 朽 しかしその声はとかく早 教師の低い蜂のう

過ぎて生徒の耳にとまらぬところが多かった。生徒は本よりも先生の顔ばかり見ていた。

「どうです、これでわかりますか」

「いま少しゆっくり読んでください」

いろいろな声があっちこっちから起こった。二度目には、つとめてゆっくりした調子で

読んだ。

「どうです、このくらいならわかりますか」

にこにこと笑顔を見せて、なれなれしげにかれは言った。

「先生、あとのはよくわかりました」

などと生徒は言った。「いま少し早くってもようございます」

「今までは先生にいく度読んでもらいました。二度ですか。三度ですか?」

「二度」

「二度です」

という声がそこにもここにも起こった。

「それじゃこれでいいですな」と清三は生徒の存外無邪気な調子に元気づいて、「でも、

初めのが早過ぎましたからいま一度読んであげましょう、よく聞いておいでなさい」

今度のはいっそうはっきりしていた。 早くもおそくもなかった。

やがて時間が来てベルが鳴った。 けてそのそばに片仮名でルビをふってみせた。卓の前に初めて立った時の苦痛はい 読めるのもあれば読めぬのもあった。 ぐうがごとく消えて、 を黒板に書いて、 読める人に手を上げさせて、前の列にいる色の白い可愛い子に読ませてみたり何かした。 順々に覚えさせていくようにした。ことにむずかしい字には 圏 点 をつげんに覚えさせていくようにした。ことにむずかしい字には 圏 点 をつ 自分ながらやりさえすればやれるものだという快感が胸にあふれた。 清三は文章の中からむずかしい文字を拾って、 つか ぬ

だ。ぶらんこに乗るものもあれば、 鬼 事 をするものもある。 から別に組をつくって、綾を取ったり、お手玉をもてあそんだりしている。 昼 飯 は小川屋から運んで来てくれた。正午の休みに生徒らはみんな運動場に出て遊んひるめし 白楊の緑葉がまばらに並んでいるが、その間からは広い青い野が見えた。やなぎ 女生徒は男生徒とは 運動場をふち おのず

来たのは、 清三は廊下の柱によりかかって、無心に戯れ遊ぶ生徒らにみとれていた。そこにやって、ホートロむ 関という教員であった。

やさしい眼色と、にこにこした円満な顔には、初めて会った時から、人のよさそうなと。

いう感を清三の胸に起こさせた。この人には隔てをおかずに話ができるという気もした。

「どうでした、一時間おすみになりましたか」

- 3/

「どうも初めてというものは、工合いの悪いものでしてな……私などもつい三月ほど前に

ここに来たのですが、始めは弱りましたよ」

「どうもなれないものですから」

この同情を清三もうれしく思った。

「私の前に勤めていた方はどういう方でした」

ずいぶん古くから教員はやっているんだそうですが……やはり若いものがずんずん出て来 あの方はもう年を取ったからやめさせるという噂が前からあったんです。今泉の人で、

るものだから……それに教員をやめても困るッていう人ではありませんから」

「家には財産があるんですか」

「財産ということもありますまいが、 子息が荒物屋の店をしておりますから」

「そうですか」

こんな普通な会話もこの若い二人を近づける動機とはなった。二人はベルの鳴るまでそ

こに立って話した。

午後には 理科と習字とを教えた。

囲爐裏に火が い た。 夜は 宿 そ の向こうは流し元で、 直室に泊まった。 かっ かっと起こって、 宿直室は六畳で、 手桶のそばに茶碗や箸が置いてあった。 自在鍵 につるした 鉄 瓶 はつねに煮えくりかえって その隣に小使室があった。 小使室には大きな 棚には桶と摺り鉢がはすばち

が伏せてあった。

島先生は 男の児がある。 にいて、 しく宇都宮に その夜は大島訓導の宿直で、 一合の それからここに赴任したという。 教 鞭 をとっていたが、 初めて会った時と打ち解けて話し合った時と感じはまるで違って 晩 酌に真赤になって、ばんしゃく いろいろ打ち解けて話をした。 一昨年埼玉県に来るようになって、 家は大越在で、 教育上の経験やら若い者のためになるような話 十五歳になる娘と九歳 かれは栃木県のもので、 ちよっ と浦 になる 久 大 和

やらを得意になってして聞かせた。 細い煙 筒 ^{えんとつ} から煙が青く黒くあがっているのを見たことがある。

湯屋が通りにあった。

こもった中に、 格子戸が男湯と女湯とにわかれて、 箱洋燈がボンヤリと暗くついていて、筧から落ちる上がり水の音が高くはこらんぷ はいるとそこに番台があった。 湯気の白くいっぱいに

聞こえた。

がら、自分の新しい生活を思い浮かべた。

湯殿は掃除が行き届かぬので、ゆどの

気味悪くヌラヌラと滑る。

清三は湯につかりな

+

皆さんの毎日お歌いになる君が代の唱歌にもさざれ石の巌となりて苔のむすまでと申していた。いわお 聞紙上でお父様やお母様からすでにお聞きなされたことと存じます。 皇室の 御 栄 えあら ございます通りであります。しかるに、一昨日その親王殿下のご命名式がございまして、 る二十九日、新たに親王殿下をやすやすとご 分 娩 あそばされました。これは皆さんも新 せらるることは、 迪 宮 殿 下 裕 仁 親 王と名告らせらるるということがご発表になりました」みちのみやでんか ひろひとしんのう な の 「今日は皆さんにおめでたいことを一つお知らせ致します。 皇太子妃殿下 節 子 姫 ある朝、授業を始める前に、 われわれ国民にとってまことに喜びにたえませんことで、 千 秋 万 歳いん かんしゅうばんざい 清三は卓の前に立って、まじめな調子で生徒に言った。 には去

六字を大きく書いてみせた。 こう言って、 かれは後ろ向きになって、 チョオクを取って、黒板に迪宮裕仁親王という それはおもしろいですな……それはおもしろいですな」

「どうぞ一つ名誉賛成員になっていただきたいと存じます……。 それに、 何か原稿を。

んなに短いものでも結構ですから」

ということもうわさにも聞いていた。 故があったからで、 を読んだこともある。一昨年ここの住職になるについても、 もかなり聞こえている。 ていたよりも風采のあがらぬ人だとかれは思った。 人だとは夢にも思いがけなかった。 清三はこう言って、 羽生町で屈指な名 刹とはいいながら、こうした田舎寺には惜しいはにゅうまち くっし めいさつ 前にすわっている 成 願 寺 の 方 丈 さんの顔を見た。 清三はかつてその詩集を愛読したこともある。 それが、こうした背の低い小づくりな弱々しそうな 新体詩、 やむを得ぬ 小説、 その名は東京の文壇に 雑誌にの 生んじゅう かねて聞い からの縁 つ た小 説

ちょうど成願寺の か れは土曜 日の家への帰りがけに、 山形古城を知っていると言うので、それでつれだって訪問した。 羽生の郵便局に 荻生秀之助 を訪ねたが、秀之助が

こうくり返して主僧は言った。 「行田文学」についての話が三人の間に語られた。

「むろん、ご尽力しましょうとも……何か、 まア、 初めには詩でもあげましょう。

東京の

主僧はこう言って軽く挨拶した。原にもそう言ってやりましょう……」

清三は頼んだ。

「どうぞなにぶん……」

一荻生君もお仲間ですか」

満足もなく世の中に出て行った。 違って、文学だの宗教だのということにはあまりたずさわらなかった。 なところはなかった。 いったようなふうで笑って頭をかいた。 いいえ、 私には……文学などわかりゃしませんから」と荻生さんはどこか町家の子息と 中学を出るとすぐ、 中学にいるころから、石川や加藤や清三などとは 前から手伝っていた郵便局に勤めて、 したがって空想的 不平も不

綴 された庭がひろげられてあって、それに接して、本堂に通ずる廊下が長く続っ 屋根と本堂の離れの六畳の障子の黒くなったのが見えた。 主僧の室は十畳の一間で、天井は高かった。 前には伽羅や松や躑躅や木犀などの点でした。 書 箱 には洋書がいっぱい入れ

られてある。

をそそった。 ことです」などと言った。 ても東京にいても勉強などはできない。 主僧はめずらしく調子づいて話した。 風采はあがらぬが、 今の文壇のふまじめと党閥の弊とを説いて、 田園生活などという声の聞こえるのももっともな 言葉に一種の熱があって、 若い人たちの胸 と

の話も出た。 要ですとも……」こう言って林の説に同意した。 まりやかましく言う必要はないです、 詩 の話から小説の話、 主僧もやはり晶子の歌を 賞 揚 戯曲の話、それが容易につきようとはしなかった。 新しい思想を盛るにはやはり新しい文字の排列も必 していた。「そうですとも、 言葉などをあ 明星派の詩歌

麻布の から緑葉の野に出たような気がした。今ではそれがこうした生活に 逆 戻 をつけてきた。主僧の早稲田に通って勉強した時代は 紅 葉 露伴の時代であった。 であるから、 ふと理想ということが話題にのぼったが、これが出ると主僧の顔はにわかに生々 「文学界」の感情派の人々とも往来した。 曹洞宗 よほど 鎮 静 はしているが、それでもどうかすると昔の熱情がほとばしった。 の大学林から早稲田の自由な文学社会にはいったかれには、 ハイネの詩を愛読する大学生とも親しか りしたくらい 冬枯れ , , した色 った。 わ 山 ゆ

人間

とし

ある

それ れば 理想 化する、 人間は理想がなくってはだめです。 は ならな ですからな、 仏 も如是一心と言って霊肉によぜしん 惑^わくでき ٧Ì 0) は するということは理想がな ……普通の人間のように愛情に盲従したくないというところに力が わか っていますが 0 致は説いていますが、どうせ自然の力には従 宗教のほうでもこの理想を非常に重く見て そこに理想があって物にあこがれるところが いからです。 美し い恋を望む心、 それ は , , や わ ある な あ は け l) 同

る。 のが 見回 ということを言い出すと、 けの話、 かつて書籍で読み詩で読んだ思想と 憧゠憬 、 とに清三はそのまま引き入れられるような気がした。その言葉は 持 , ち前 しても、 月給 の猫背をいよ そんなことを口にするものは一人もなかった。 て意味が の多いすくないという話、 いよ猫背にして、 まだ世間を知らぬ 蒼い顔にやや紅を潮した熱心な主僧がお 世間 乳臭児 の人は多くパンの話で生きている。 それはまだ空想であった。 のように一言のもとに言い消され 養 うさん ヒシヒシと胸にこたえた。 の話でなければ金もう 自己 の態度と言葉 のまわりを 理想など

準で価値をつけるが、 主僧 の言葉の 中に、 私はそういう標準よりも理想や趣味の標準で価値をつけるのがほん 「成功不成功は人格の上になんの価値もない。 人は多くそうした標

とうだと思う。乞食にも立派な人格があるかもしれぬ」という意味があった。 己の寂しい生活に対して非常に有力な 慰 藉 者 を得たように思われ 清三には自

主僧とは正反対に体格のがっしりした色の黒い細君が注いで行った茶は冷たくなったまま 主客の間には陶器の手爐りが二つ置かれて、 菓子器には金米糖が入れられてあった。 た。

黄いろくにごっていた。

から織ろうとする 青 縞 のはたをかけて、二十五六の櫛巻きの細君が、 まいた子守りが二三人遊んでいる。 時間 のそばに扉を閉め切った不動堂があって、 .ののちには、二人の友だちは本堂から山門に通ずる長い 舗 石 道 を歩いていた。 大きい 銀 杏 の木が五六本、その幹と幹との間にこれいちょう その高い縁では、 額たいがみ しきりにそれを綜~ を手拭いで

「おもしろい人だねえ」

清三は友をかえりみて言った。

あれでなかなかいい人ですよ」

聞いていたが、ほんとうにそうだねえ。 僕はこんな田舎にあんな人がいようとは思わなかった。田舎寺には惜しいッていう話は

「話対手がなくって困るッて言っていましたねえ」

「それはそうだろうねえ君、田舎には百姓や町人しかいやしないから」

て、歩くと蛙がいく疋となくくさむらから水の中に飛び込んだ。 二人は山門を過ぎて、榛の木の並んだ道を街道に出た。街道の片側には汚ない溝があっ。 水には黒い青い苔やら藻

やらが浮いていた。

大 和 障 子 をなかばあけて、色の白い娘が横顔を見せて、青縞をチャンカラチャンカラやまとしょうじ

織っていた。

その前を通る時、

゙あのお寺の本堂に室がないだろうか?」^^ゃ

こう清三はきいた。

「ありますよ。六畳が」

と友はふり返った。

「どうだろうねえ、君。 あそこでおいてくれないかしらん」

「おいてくれるでしょう……この間まで巡査が借りて自炊をしていましたよ」

「もうその巡査はいないのかねえ」

「この間岩瀬へ転任になって行ったッて聞きました」

「一つ、君は懇意だから、 頼んでみてくれませんか、 自炊でもなんでもして、 食事のほう

は世話をかけずに、室さえ貸してもらえばいいが……」^~

「それはいい考えですねえ」と荻生君も賛成した。 「ここからなら弥勒にも二里に近いし

……土曜日に行田へ帰るにもあまり遠くないし……」

「それにいろいろ教えてももらえるしねえ、君。 弥勒あたりのくだらんところに下宿する

よりいくらいいかしれない」

「ほんとうですねえ、私も話相手ができていい」

荻生さんが来週の月曜日までに聞いておいてやるということに決まって、二人の友だち

は分署の角で別れた。

+

昨日の午後、 月給が半月分渡った。清三の財布は銀貨や銅貨でガチャガチャしていた。

古いとじの切れたよごれた財布! 今までこの財布にこんなに多く金のはいったことはな

味が うことを語って、「どうも田舎はそれだから困るよ。 見ていたが、 か れしい」としんから言った。息子は残りの半分はいま四五日たつとおりるはずであるとい に紙幣と銀貨とを三円八十銭並べた。 った。 ある。 それに、 母親が勝手に立とうとするのを呼びとめて、懐から財布を出して、 「お前がこうして働いて取ってくれるようになったかと思うとほんとうにう とにかく自分で働いて初めて取ったのだと思うと、なんとなく違った意 母親はさもさも喜ばしさにたえぬように息子 なんでも三度四度ぐらいにおりるこ の顔を はそこ

ともあるんだッて……けちけちしてるから」

は躑躅と山吹とが小さい花瓶に生けて上げられてあった。 と、こうした貧しい生活をしている親の慈愛に対する子の 境 遇 吹きすさまれているかを考えて同情した。こればかりの金にすらこうして喜ぶのが親ぃ 母親はその金をさも尊そうに押しいただくまねをして、 丸 髷 にこのごろ白髪の多くなったのを見て、そのやさしい心のいまるまげ かれは中学からすぐ東京に出て行く友だちの噂を聞くたびにもやした 立って神棚に供えた。 清三は後ろ向きになった とを考えずにはいられ かに 生活 神棚に 母 の嵐 の 藽 の心 信 0)

その土曜日は愉快に過ぎた。母親は自分で出かけて清三の好きな田舎 饅 頭 まんじゅう を買って

きて茶を煎れてくれた。 母親の小皺の多いにこにこした顔と息子の青白い弱々し い淋しい

笑顔とは久しく長火鉢に相対してすわった。

家庭の話も出た。 した。 出して、 などと言った。 清三は来週から先方のつごうさえよければ羽生の 成 願 寺 に下宿したいという話を持ち 母親はそれまでには夜具や着物を洗濯してやりたい、それに袷を一枚こしらえたい 若い学問 父親 のある の商売の不景気なことも続いて語った。 方 丈 さんのことや、やさしい荻生君のことなどを話して聞ほうじょう 清三のおさないころの富裕な かか

易につきようともしなかった。同じことをくり返して語っても、 うはうまくいきますか」などと言った。 の父親がおりよく昨日帰ってきていたとて出てきて、 このうえもない愉快である。 ぬほど二人は親しかった。 夜は菓子を買って郁治の家に行った。雪子がにこにこと笑って迎えた。 相対して互いに顔を見合わせているということが二人にとって 「行田文学」の話も出れば山形古城の話も出る。 「林さん、どうです、 それが同じこととは思え 書斎での話は容 -----学校のほ そこに郁治

いにあれで話がわかっている男でしてな……村の受けもいいです」 わりあ

郡視学はこんなことを語って聞かせた。

ころにこんな手紙が来てよ」と二人に示した。美穂子はかの Art の君である。 雪子が茶をさしにきた時、袂から絵葉書を出して、 「浦和の美穂子さんから今、 私

兄の心の秘密を知らなかった。

行の 絵葉書は女学世界についていた「初夏」という題で、新緑の陰にハイカラの女が細 小 傘 をたずさえて立っていた。文句はべつに変わったこともなかった。パラソール い流

の生活-楽しく遊んだことなどをおりおり考えることが、ございますよ。ご無沙汰のおわびまでに ―雪子さんお変わりございませんか。ここに参ってからもう二月になりました。 ―それはほかからは想像ができないくらいでございます、この春、ごいっしょに 寄宿

……美穂子

清三はその葉書を畳の上において、

「今度は貴嬢も浦和にいらっしゃるんでしょう?」

「私などだめ」

と雪子は笑った。

その笑顔を清三は帰路の闇の中に思い出した。相対していたのはわずかの間であった。

畦に蛙 その横顔を洋燈が照らした。 あ る のを 子 の声が Ď 顔が 1 つも不愉快に思っていたが、 続 て、 1 7 町 眼前を通る。 の病院の二階の灯が窓からもれ つねに似ず美しいと思った。ツンとすましたようなところが 雪子の顔と美穂子の顔が 今宵はそれが た。 かえって品があ 重な って一 る つになる……。 かのように見えた。 田 0)

* **

窓障 どんなにうれ 年の春十五歳で死んだ。その病は長かった。 った。 ことがある。 と言って、 せてある。 ったあとがありありと残っていた。 町 曜 子が見えた。 の裏に小さな寺があった。 医師や 日の朝、 その は診断書に肺結核と書いたが、父母はそんな病気が家 その裏にある墓地には、 死んだ時の悲哀ーかなしみ しかったろうと思う。 医師 かれは樒と山吹とを持って出かけた。庫裡で手桶を借りて、水をくんで、 本堂の の診断書を信じなかった。 如によらい 様は黒く光って、 門をはいると、 ーそれよりも、 そのたびごとにかれは花をたずさえて墓参りをした。 その多い墓石の中に清三の弟の墓があった。 竹藪が隣の地面を仕切って、たけやぶ しだいにやせ衰えて顔は日に日に 庫裡の藁 葺 今生きていてくれたなら、 清三は時々その幼 木 魚 が赤 もくぎょ 屋根と風雨にさらされた黒 いメリンスの敷き物の の血 い弟のことを思い起こす 墓石にはなめく 続に 話相 ある **蒼**あおじろ 手になって、 わけがない 弟は 上 くな のは に 昨 0)

土 饅 頭 手ずから下げて裏 の上にさびしく立っている。 へ回った。 墓石はまだ建ててなく、 父母も久しくお参りをせぬとみえて、 風雨にさらされて黒くなった墓 花立ては 標が 割

ていた。水を入れてもかいがなかった。

清三の姿は久しくその前 の声が * 竹 藪 の中に聞こえた。 に立っていた。 もう五月の新緑があたりをあざやかにして、

のがいやでー 行くのがいやで、われしらず時間を過ごしてしまった。 少なくも朝の 午後からは 四 時 印 親しい友人と物語る楽しみを捨ててろくろく話す人もないところに帰って に家を出なければ授業時間に間に合わぬと知っては 刷所に行ったり石川を訪問したりした。今日、 弥勒に帰らぬと、 いるが、 どうも帰る 明日は

夕飯を食ってから、ゆうめし 湯に出かけたが、帰りにふたたび郁治を訪ねて、 あきらかな夕暮

れの野を散歩した。

建物 門のあったというあたりから、 場には牛が五六頭モーモーと声を立てて鳴いていて、それに接した青縞機業会社 城ら 払ろ むと からは、 はちょっと見てはそれと思えぬくらい昔のさまを失っていた。 機を織る音にまじって女工のうたう声がはっきり聞こえる。 年々田に埋め立てられて、 里さ とがわ のように細くなった沼に 牛乳屋の小さい牧 夕日は昔 0) 大手 細 長 0)

ると、 が 画 のようにあきらかに照りわたった。 っぱ 細 い いに満ちて、 田 圃 路 がうねうねと野に通じて、 あるところは暗くあるところは明るか 新たに芽を出した蘆荻や茅や蒲や、 車をひい て来る百姓の顔は **~**つた。 沼にか 夕日 それにさびた水 か つ た 赤くい 板 橋 を 渡

麦畑と桑畠、 その間を縫うようにして二人は歩いた。 話は話と続いて容易につきようと

どられて見えた。

しなかった。

路は

いつか士族屋敷のあたりに出た。

には、 昔ふうの黒いシタミや白い壁や大きい栗の木や柿の木や 井 字 形 どそこを通ると、 からは古 ら家へと続いたものであるが、今は晨の星のように畠と畠の間に もおりお 家はところどころにあった。 桔※のギイと鳴る音がして茘子の黄いろいのが垣から口を開いていはねつるべ が縁側にかけてあって、 り聞こえた。 い縁側に低い廂、ひさし 垣に目の覚めるようなあかい薔薇が咲いていることもあれば、 文人画を張った襖などもあきらかに見すかされた。 今日まで踏みとどまっている士族は少なかった。 風 鈴が涼しげに鳴っていることもある。 の井戸側やまばらな生垣 一軒二軒と残ってい る。 秋の霧 新 夏 昔は家か 0 深 0) 日 1 朝

この士族屋敷にはやはりもとの士族が世におくれて住んでいた。役場に出ているものも

0)

あ

も あ あ ħ ば、 ħ ば、 小学校の先生をしているものもある。 小 規模の養蚕などをやって暮らしているものもある。 財産が あって無為に月日を送ってい 金貸しなどをしているも るも

っきりと中は見えないが、 族屋 敷の中での金持ちの家が それでも白壁の土蔵と棟の高 一軒路 小屋のそばに鶏が餌をひろってい のほとりにあった。 1 家屋とは 珊瑚樹 わ か つ の垣は茂って、 た。 門から中 は

二人はその垣に添って歩 いた。 いた。 見ると、

りっぱな玄関があって、

水面にひたして漣をつくって 垣がつきると、 水の みちた幅のせま *()* る。 細 い川が気持ちよく流れている。 1 板橋 が \prod の折れ曲がったところにかか 岸には楊がる やなぎ つ 7 その葉を

美穂子 の家はそこから近かっ た。

清三はこう言って友を誘った。 行ってみようか。 北 Ш は今日は いるだろう」

だのが茂っていた。 っぱ その家は大きな田舎道をへだててひろい野に向かっていた。 り廂のひさし の低 V) 今年の一月から三月にかけて、 の家で、 土台がいくらか 曲が 若い人々はよくこの家に歌留多牌をと ってい る。 古びた黒い 庭には松だの、檜だの、 ・門があ

はいつも十一時を過ぎていた。さびしい士族屋敷の 竹 藪 読んでくれた。 を並べて、 りにきたものである。 さざめいて帰った。 る美穂子の母親が眼鏡をかけて、 川などの若い人々が八畳の間にいっぱいになって、 って美しい 夢中になって歌留多牌を取ると、そばには 半 白 の、 人がいた。 茶の時には蜜柑と 五 目 飯 の 生 薑 とが一 美穂子の姉の伊与子、 それらの 高くとおった声で若い人々のためにあきずに歌留多牌を 少女連と、 妹の貞子、 郁治や清三や石川や沢田や美穂子の 竹筒台の五分心の洋燈の光のたけづつだい それに国府という人の妹に友子と 座の眼をあざやかにした。 の陰の道を若い男と女とは笑い 品のい i, 桑名 船り 兄 帰 に 0) iあ 疕 頭

帰って参りますから……」母親はこう言って、にこにこして二人を迎えた。 顔に美穂子の笑顔を思い出した。 北川 は湯に行ってるすであった。 声もよく似ている。 「まア、よくいらっしゃいましたな……今、もうじき 郁治はその笑

二人は 庭に 面した北川の書斎に通された。 父親はどこに行ったか姿は見えなかった。

母親はしばし二人の相手をした。

よろこびでしたろうな

こんなことを言った。

浦和にいる美穂子のうわさも出た。

なか言うことを聞きませんでな……どうせ女のすることだから、ろくなことはできんのは 「女がそんなことをしたッてしかたがないッて父親は言いますけれどもな……当人がなか」

知れてるですけど……」

「でもお変わりはないでしょう」

清三がこうきくと、

「え、もう……お転婆ばかりしているそうでな」と母親は笑った。

すぐ言葉をついで、今度は郁治に、

「雪さんどうしてござるな」

「相変わらずぶらぶらしています」

「ちと、遊びにおつかわし。貞も退屈しておりますで……」

綿 衣 に絣の羽織を着ていた。話のさなかにけたたましく声やたいれ かすり それこれするうちに、北川は湯から帰って来た。背の高い 話のさなかにけたたましく声をたてて笑う癖が v 頬 骨 間 に は に れ に れ の出た男で、 ?ある。 手織りの 石川

や清三などとは違って、文学に対してはあまり興味をもっていない。学校にいたころは

数学と英語とで失敗した。 有名な運動家でベースボールなどにかけては級の中でかれに匹敵するものはなかった。 に出て、 人志願で、 しかるべき学校にはいって、十分な準備をすると言っている。 卒業するとすぐ熱心に勉強して、この四月の士官学校の試験に応じてみたが けれどあまり失望もしておらなかった。 九月の学期には 軍

と言っても心の底を互いに披瀝するようなことはなかった。 大いに異なっていた。 三人は 胸 襟 を開いて語り合った。けれどここで語る話と清三と郁治と話す話とは、きょうきん 同じ親しさでも単に学友としての親しさであった。 打ち解けて語る

数がばかにむずかしかった」 英語の書き取りなど一度しか読んでくれないんだから困るよ。 広すぎて、声が散ってよく聞きとれないんだから、ドマドマしてしまったよ。 た士官学校入学試験の話を二人にして聞かせた。 ここでは、 学校の話と将来の希望と受験の準備の話などが多く出た。 「どうも試験に余裕がなくって困った。 それに試験の場所が大きく 北川は東京で受け おまけに代

なるほど問題はむずかしかった。数学に長じた郁治にもできなかった。 の中やら文庫の中やらあっちこっちとさがし回って、ようやくさがし出して二人に見せる。 代数の二次方程式の問題をかれは手帳に書きつけてきた。それを机の抽斗しやら押入れの数の二次方程式の問題をかれは手帳に書きつけてきた。それを机の抽斗しやら押入れ

げに結って、 経うは は 町 北 つ の ĬΪ ね 素読を教えたものである。 の役場に出るようになったのでよしたが、 は漢学には長じていた。 にこの家 門 0 の前で近所の友だちと遊んだ。 垣からもれた。 父親は藩でも屈指の漢学者で、 午後三時ごろから日没前までの間 そのころ美穂子は赤いメリンスの帯をし 清三はその時分から美穂子 三年前までは、 町や屋敷の子弟に四書五しししょごきょ 漢詩などをよく作った。 蜂のうなるような声はち の眼 めて、 の美 髪をお \mathcal{O} 下

は苦 なか 時 がある。 を知 かり破れ 郁 郁治 治と清三が暇をつげたのは夜の九時過ぎであった。 つ ったろう」と清三は思った。けれど友の恋はまだ美穂子に通じてあるわけでは か た人の知ら 郁 うわ った。 てしまったというわけでもない……」などと思うこともある。 治がそれ の胸 二人はそこを出てしば け にも清三の ではない、 またそれだけかれはその問題につきつめてい ぬ前に恋 と打ち明けた時、 胸 ぶつか した人の心を自分はその人から打ち明けられ にもこの際浦和の学校にいる美穂子のことがうか しの間黙って歩い ってみて、 なぜ自分もラヴしているということを思いきっ どうなることかわからない。 た。 竹藪のガサガサする陰の道は 若い人々は話がな なかった。 友のために犠牲に 時には た。 いとい それだけ 6 希望 「まだ決 つ て言わ が 暗 7 な あ も か か 0) つ

も、 なるという気はむろんある。 いぶ距離もあり余裕もあった。 家庭 の事情からいっても、 友の恋の成らんことを望む念もある。 現在の恋の状態からいっても、 はげしく熱するにはまだだ かれの性質からいって

があった。低い駒下駄はズブズブはいった。 ろいろなことを語っていた。野に出ようとすると、 かしその夜は二人とも不思議に胸がおどっていた。 昨日の雨に路の悪くなっているところ 黙って歩いていても、その心はい

「悪い路だね」

打ち明けて話したならいくらかこの胸が静まるだろうとも思った。しかしなぜかそれを打 ち明けて語る気にはならなかった。 郁治にしては、女に対する 煩 悶 、それを残すところなくこの友に語りたいと思った。 二人は互いにこう言いあった。しかし心では二人とも美穂子のことを考えていた。

二人はやっぱり黙って歩いた。

夜風に動く。町の灯がそこにもここにも見える。 の森が黒く見える。沼がところどころ闇の夜の星に光った。蘆や蒲がガサガサとの森が黒く見える。沼がところどころ闇の夜の星に光った。 蘆や 蒲がガサガサと

公園から町にはいった。もうそのころは二人は黙っていなかった。郁治は低い声で、得

意 かれらはなんだかこのまま別れるのが物足らなかった。 の詩吟を始めた。心の 感 激の余波がそれにも残って聞かれる。 「僕の家に寄って茶でもの 別れの道の角にかど んで行 来ても、

てまた一 かんか」 二時が鳴って、 清三の母親は 裁 物 板 に向かってまだせっせっと賃仕事をしていた。 時間ぐらい話した。 清三がこう誘うと、 郁治が思いきって帰って行くのを清三はまた湯屋の角まで送る。 語っても語ってもつきないのは若い人々の思いであった。 郁治はついて来た。 茶を入れてもらっ 町 の大通

漬をかっ込んで出かけた。 十時をよほど過ぎた。学校の硝子窓には朝日がすでに長けて、 りはもうしんとしていた。 くあきらかにあたりに聞こえる。 翌日は母も清三も寝過ごしてしまった。 いくら急いでも四里の長 急いで行ってみると、受持ちの組では生徒がガヤガヤと 時計は七時を過ぎていた。 い長い路、 校長の修身を教える声が高 弥勒に着いたころはもうみろく 清三はあわてて茶

+

騒いでいた。

わ れ 熊ま う なくなって 谷がや 0) 町ま ح に 月に も ーことに か からは毎 れ <u>-</u> 0 一度は 同窓 小 \exists 畑 とは 清三はきっ の友は のように か れ かなりにある。 互. も と出 郁 1 治 に か 手 も人並 紙 た。 の往復をして、 小畑とい 一みすぐれて交情がなった。 うの 戯じょうだん 、よか 桜井というの を言っ つ た。 た 卒業 حَ I) 議 小島 T 論 会

け

た

I)

が の群 壁べ ては 屋 家 乗 の前 0) 行 0) かえ 威 機 はた 目わ ろく れをなが L 田 って 土 重 っ 勢よく 町 の広場 蔵などが した田の泥濘の中にうつむいた そうにひ 通 熟した た。 から l) つ 熊谷町 めた。 一田圃ごとに村が た。 乗 0) で麦を打 つ 荷 田には、 .続 て走らせて行くの よぼ 車、 \ \ ĺ١ その て行く た。 まで二 よぼ つ そのころ流行 頬かむりな 街道にはいろいろなものが ている百 秋 里半、 のもあれば、 の老いた車夫が (D 晴 あ れ i) をした田舎娘が、 そ 姓家や、 た日には、 もある。 った豪家の旦 の路はきれ , 饅頭 笠 まんじゅうがさ 黒鴨仕立 村ごとに 町に買い 南 と うなす 田植時分には、 田圃 いく 田圃が 那 な豊富な水で満たされた用水 のみごとに熟している畑や、 から村に稲を満 がいくつとなく並んで見える。 **※通る。** 鎌の手をとめて街道を通ってかま 物に行 のりっぱな車 の自 開 転 った田 車 熊谷行田間 けるというふうで、 雨が それに 体には さまざま に町 舎の婆さんを二人乗 :載し ょ ぼ の医 の乗合馬車のりあいばしゃ た車がきしっ よぼ 一者ら と降 豪農 の縁 夏 行く旅人 0) に沿 って、 0) 日 1 りに の人 青縞 () 0) 紳 つ

の上 でうたう田 一には 植 お l) 唄も聞こえる。 お I) 植 え残 つ た苗 植え終わ の東などが 5 た田 捨ててあった。 の緑は美しかった。 五月晴れには 田 0) 白 街道 い繭が 0) 両 村 側 0) 0)

家 0 軒 下 ゃ 屋 根 0 上などに干してある のをつね に見かけた。

倉の夏服な に娘 用 が も入れられ 水 0) 人あ をぬ 店に そば は土 に って東京 で、 てあった。 |地でできる甜瓜が手桶 軒涼しそうな休み茶屋が 瓜を食った時 の赤 仮に 暑 1 木陰 奉公に出 のうまか 0) な ていることも知って い路を歩いてきて、ここで汗になっ 0) 水 あった。 ったことを清三は覚えてい の中につけられてある。 楡れ の大きな木がまるでかぶさるように 1 る。 平 た そ V · 半ぱんぎり の店の婆さん た 詰 襟の小

利が光付る 印 象 春 熊谷に通 石の霞の薄くなかする 関 付 <u>の</u> 東 日 近 光 平野を環のようにめぐっ 0 町はやがてその瓦屋根や煙突 う中 つであっ 0) 連山 連 学生 被かつぎ Щ 「の複雑、 一の群 た。 羊 のようにかか の毛のように白く靡く浅間ヶ嶽 した襞には夕日が絵のように美しく 秋 れはこの間を笑ったり戯れたり走ったりして帰ってきた。 の末、 た山 る二三月のころまでの山々 木の葉がどこからともなく街道をころが 々 の なが め のけむり そのなが 光線をみなぎらした。 赤城は近く、 の美しさは特別であった。 めの美し 1 榛名は遠く、 のも、 つ て通るころから、 忘れ 行田 られ から ぬ

熊谷の

や白壁造りの家などを広い野の末にあらわ

音がガヤガヤと聞こえた。

った。 待ちうけて、 か れ 熊谷は行田とは比較にならぬほどにぎやかな町であった。 も多 夜は 汽 商 車 1 が停車場に着くごとに、 町 家に電気がつい 0) 広 人 口は 1 大通りに喇叭の音をけたたましくみなぎらせてガラガラと通りに喇叭の音をけたたましくみなぎらせてガラガラと通 万以 · ۲ 上もあり、 小間物屋、 行田地方と妻沼地方に行く乗合馬車のぬま 中学校、 洋物店、 農学校、 呉服屋の店も晴々 裁 家並みもそろって 判 所 税務管理 が 7 料理· 6 局 で な いるし、 店から って行 に客を ども置

は陽気な三味

線の音がにぎやかに聞こえた。

畳 ある。 は ん あたりに生まれてそこここと流れ渡ってきても故郷の言葉が失せないとい の奥に一 の も 町 あっ そ は 向こうに大きな二階造りの建物と 鞦 韆 や木馬のある運動場が見えた。 0) 清 そこには 家はその 小さい家に住んでいた。 三にとって第二の故郷である。 八歳から十七歳まで-郵 が落 魄 に らくはく 便局 を 踏^ふ の小使や走り使いに人に頼まれる日傭取りなどが住んでい ^{ひょうと} み鳴らす細 の身を落ちつけた。 小学校は い小路を通って、 小学校から中学の二年まで、 八歳 町の裏通りにあった。 その小路はかれにとっていろいろな の時に足利を出て、 駄菓子屋の角を左に、 通りの郵便局の前の小路 明^{みょうじん} かれは六畳、 の華表 それ う元気なお婆さ 生徒の騒 から少し行 5 追もいで た。 から右に Щ が 形

わって も と、 流行妓 ない あ くりなく出た。 宴会にもやって来て、 出すことがあ ようにすると、 あ 校長 躊ゅうちょ ;つ 真ぉ I) 失礼よ、 か 几 清 0) 「小滝は僕らの芸者だ。 な眸を町のひとみ 肥っ 眼に 似をした。 のうちに数えられてある。 その 人あ が の色を示さずに、 くる。 た顔、 中 子 見える。 つ 」は町はず、 た。 林さん」 小学校時分の 学 「い 0) 0) 一人は芸者屋の娘で、 やよ、 紫の そのとき、 7 校長次席 ずこにも見いだすことができなくなったが 1 年 卒業式に 矢がすり などとあざやかに笑って挨拶して通って行く。 **,** , に れ 声で歌をうたったり、 小畑さん、 1 0) る 町 同級生がだいぶそのま のむずかし ナア小滝」 . 晴衣を着飾ってくる それア誰だッてそうですわねえ、 時 か の衣服に海老茶の袴をはきものえびちゃはかま 「貴様、 ら来た。 通りで盛装 家 貴なた は同 は 今は小滝といって、 い顔、 長野 級 は昔から私を などと言って、 農学校の校長 生 のほうに移転して行ってしま 体操 0) 中 した 座敷 姿 にでっくわすことなどあるざしきすがた 三 絃をひい で、 女生 わ の先生のにこにこした顔などが りにたか 徒 誰 1 の娘だということを聞 1 が じめ 酔 てくる子が 0 一昨年一 群 つ たりした。 っていた。 番好きだ」 る た顔をその前 れ ……むろん林さん!」と の 0) ねえ、 それ 中 本に 中 に 中学卒 でも今も で も 小畑だ っった ŧ と、 とい 覚えてい なって、 か に れ う問 業 小 押 が 0) 番 0) い そ 0 時 たことが 眼 好 きな ば 祝 は てよ 町 々 題 つける 思 が に そ 残 で い $\tilde{\sigma}$ ゆ す 0) も 少

どと書いた端書を送ってよこした。 作って、 紙に書い 清三もまたおもしろ半分に、 や小島などに会うと、 言った。 たり手紙に署したりした。 小滝も酔っていた。 わざと小畑のところに書いてやったりした。 小滝の話がよく出る。 喝^{かっさ}い 小滝を の声が嵐のように起こった。 「しら滝」に改めて、 「歌妓しら滝の歌」という五七調四行五節かぎ 「小滝」という渾名をつけられてしまった しま いには 「小滝君どうした。 それを別号にして、 それからは、 健在 ので 小畑や桜井 日記 の新体詩を か ある。 ね 0) 上表 な

時にはまた節操も肉体もみずから守ることのできない芸者の薄命な生活を想像して同情の時にはまた節操も肉体もみずから守ることのできない芸者の薄命な生活を想像して同情の 涙を流すことなどもあった。清三には芸者などのことはまだわからなかった。 と小滝とを引きつけて考えてみる。 時 には清三もまじめに芸者というものを考えてみることもある。その時にはきっと自分 ロマンチックな一幕などを描いてみることもあった。

わずかに荷車二三台を頼む銭をちゃらちゃらと音させながら出て行くと、 の生活は、 と母親が言ったが、しかし昼間公然と移転して行かれぬわけがあった。 ら帰って来て、突然今夜引っ越しをするという。明日になすったらいいでは か れはまた熊谷から行田に移転した時のことをあきらかに記憶している。 すくなからざる借金をかれの家に残したばかりであった。父親は財 熊谷における八年 そのあとで母親 父親がよそか あ 布 りません か

口

ホ

口

と

か

れ

0)

頬

を

つたっ

て流

れ

た。

もう 縮しゅくず か 二台 れ かと思うと、 これ ... の 近所 十 二 車 Ò 一時に 影と に 清三はたまらなく悲 知 親子 近か れ ぬように二人きりで荷造りをした。 った。 四人の影とが 燈がり も な Ū 淋 い暗 か しく黒く地上に印いれ った。 い大和障子 その夜行 長 の前 田 た。 0) い行 に立 新 これ 田街道 居 つ に た時 たどり が には に 家 着 冬 0) 零 Ò 11 落 涙が 月 た が 0) 照

その 田 0) け 今の せま れ 家と 1 1 行 か 熊谷 田 ようにしても暮らして行 0) 家も、 の家と足利 住 みなれてはさしていぶせくも思わ の家とを思ってみることが か る る世の中で ある。 あ それ な か つ か た。 らもう四年 か れ は は お 経 I) お 過 り行

閉 薬種屋 わって客 たたきを下 じて眠っている。 7 熊 には 谷 見違えるようにりっぱになっ 0) 家は 0) に接して (隠居は! 駄でコト 黒 繻 子 ろじゅす 今もある。 () コト とメリンスの 相変わらず禿頭をふりたてて忰やせがれ る 郵便集配人がズックの į١ 種物屋 老 わ V せて た夫婦者が た。 腹 は ら あ わ の娘は 7 る。 通 そ せの帯をし 廂さしがみ りの荒物屋に 住まっている。 つ 行 嚢 うのう のそば にお などに結っ をか 8 た女が ついではいって来る。 なじみ はやはり 小僧を叱 よく行 ってツンとすま の白犬がず 為替 ・愛嬌者 っている。 った松の湯 0 下 だ げ わ た 頭を地 **は** 郵 し 0) を待 に 便 7 か 新 局 歩 みさん つけて眼を うく普請な ち \mathcal{O} 為かわ か て行く。 が ね す

酒 屋、 屋、 るし、 熊谷に行くと、きっとこの二人を訪問した。どちらの家でも家の人々とも懇意になって、 見える。 それがたいていは小学校からのなじみなので、 わがままも言えば気のおけない言葉もつかう。 は行田 いところがある。 夜遅くなれば友だちといっしょに一つ蒲団にくるまって寝た。 の藩士で明治の初年にこの地に地所を買って移って来た金持ちの子息、 桜井の家は蓮正寺の近所で、お詣りの鰐口の音が終い日が非の家は蓮正寺の近所で、お詣りの鰐口の音が終いしゅうじつ 米屋、 紙屋、 小畑の家は停車場の敷地に隣っていて、そこからは有名な熊谷堤の花が 裁判所の判事などの子息たちに同窓の友がいくらもあった。 小島は町で有名な大きな呉服屋の子息、むすこ 食事時分には黙っていても膳を出してくれ 行田の友だちの群れよりもいっそうしたし 聞こえる。 そのほ そして 清三は 桜井 か造ぎ

「どうした、いやにしょげてるじゃないか」

「どうかしたか」

「まだ老い込むには早いぜ!」

「少しは何か調べたか」

「なんだか顔色が悪いぜ!」

熊谷にくると、こうした活気ある言葉をあっちこっちから浴びせかけられる。

呑場などで話し合った符※や言葉がたえず出る。 した友だちの顔色には中学校時代の面影がまだ残っていて、 硝子窓 の下や運動場や湯ゆのみ

また次のような話もした。

「Lはどうした」

まだいる! そうかまだいるか」

仙 骨 は先生に熱中しているが、 実におかしくって話にならん」

「先生、このごろ、鬚など生やして、ステッキなどついて歩いているナ」

「杉はすっかり色男になったねえ、君」

かたわらで聞いてはちょっとわからぬような話のしかたで、それでぐんぐん話はわ か つ

ていく。

のをつねに感じた。 ここには 熊谷の町が行田、 活気 那になってしまうもののほかは、 は若い人々の上に満ちていた。 同窓の友で小学校の教師などになるものはまれであった。 熊谷から行田、 羽生にくらべてにぎやかでもあり、 行田から羽生、 多くはほかの高等学校の入学試験の準備に忙 これに引きくらべて、 羽生から弥勒とだんだん活気がなくな 商業も盛んであると同じように、 清三は自分の意気地 角帯をしめて、 老舗の のな \bar{U} か 0

って いくような気がして、 帰りはいつもさびし い思いに包まれながらその長い街道を歩

た。

は たりでは のさびしさとわび は熊谷で会う友だちと行田で語る人々と弥勒で顔を合わせる同僚とをくらべてみぬ したように思ってい V それに人の種類も顔色も語り合う話もみな違った。 かなかった。 田舎者の吝嗇くさいことを言っている。 かれ しさとを痛切に感じた。 . る。 は今の境遇を考えて、 また校長みずからも鼻を高くしてその地位に満足 理想が 小学校の校長さんといえば、 現実に触れてしだいに崩れ 同じ 金儲けの話にかねもう して しても、 7 , , よほ る。 1 ど立 弥勒 < わ けに 清三 身 種 あ

の教師 には かり、 町 つとして 追 懐 の伴わないものはなかった。 のはず あ 心小倉の る もいた。 という綽名を奉った小使がいた。 $\dot{\exists}$ どの教室もしんとしていた。 あ れ 曜 い 詰 襟り にあっ \exists の午前に、 二階の階段、 た。 の洋服を着た寄宿舎にいる生徒がところどころにちらほら歩いて 二階造りの大きな建物で、 かれは小畑と桜井とつれだって、 長 い廊下、 湯呑所には例のむずかしい顔をした、ゆのみじょ 舎 と たかん 教室の黒板、 かれらはその時分のことを語りながらあっち のネイ将軍もいた。 木馬と金棒と 鞦 韆 硝子窓から梢だけ見える 中学校に行ってみた。 当直番に当たった数学 とが あっ かれらが た。 を を お が お が り に り 中学校は 運 る 動

こっちと歩

た。 当直室で一時間ほど話した。 ほか 東京に出たものが十人、国に残っているものが十五人、小学校教師になったも の 五 人は不明であった。三人は講堂に行ってオルガンを鳴らしたり、 同級生のことを聞かれるままその知れる限りを三人は 運動場に 0) が 出

奥の一間はこざっぱりした小庭に向かって、楓の若葉は人の顔を青く見せた。ざるに生玉 別れる前に、三人は町の蕎麦屋にはいった。 銚 子を一本つけさせて、三人はさも楽しそうに飲食した。 いつもよく行く 青 柳 庵 という家である。

ールを投げてみたりした。

子、

ところかなんかで、にこにこしてやって来たッけ」 んだそうだ。 「この間、 小滝に会ったぜ!」小畑は清三の顔を見て、 土地の者では一番売れるんだろうよ。 湯屋の路地を通ると、今、 「先生、このごろなかなか流行る 座敷に出る

「林さんは? かたわらから桜井が笑いながら言った。 ッて聞かなかったか?」

清三も笑った。

「Yはどうしたねえ」

清三は続いて聞いた。

「相変わらずご熱心さ」

「もうエンゲージができたのか」

たんだろう。それがそういうふうになるとは実際運命というものはわからんねえ」 「おもしろいことになったものだねえ」と清三は考えて、「YはいったいVのラヴァだっ 「当人同士はできてるんだろうけれど、 家では両方ともむずかしいという話だ」

「午生、足利に行った」「Vはどうしたえ」と桜井が小畑に聞く。

「会社にでも出たのか」

「なんでも機業会社とかなんとかいうところに出るようになったんだそうだ」

三人はお代わりの天ぷら蕎麦を命じた。

、【ぶ・こう 「Art の君はどうした?」

「浦和にいるよ」

「それは知ってるさ。どうしたッて言うのはそういう意味じゃないんだ」

「うむ、そうか――」と清三はうなずいて、 「まだ、 もとの通りさ」

「加藤も臆病者だからなア」

と小畑も笑った。

一本の酒で、三人の顔は赤くなった。 勘 定 は 蟇 口 から銀貨や銅貨をじゃらつかせ

かれは希望に充されて通った熊谷街道と、さびしい心を抱いて帰って行く弥勒街道とをくかれは希望に充されて通った熊谷街道と、さびしい心を抱いて帰って行く弥勒街道とをく ながら小畑がした。可愛い娘の子が釣銭と蕎麦湯と楊枝とを持って来た。 らべてみた。若い元気のいい友だちがうらやましかった。 は日に輝いて、向こうの村の若葉は美しくあざやかに光った。 その日の午後四時過ぎには、清三は行田と羽生の間の田舎道を弥勒へと歩いていた。 けれど心は寂しく暗かった。

十· 四

打ち合わせをしてくれたので、話は容易にまとまった。無人で食事の世話まではしてあげ ることはできないが、家にあるもので入り用なものはなんでもおつかいなさい。こう言っ 六月一日、今日 成 願 寺 に移る。こう日記にかれは書いた。 荻 生 君が主僧といろいろ

主僧は机、 火鉢、 座蒲団、茶器などを貸してくれた。

りっぱな心地のよい書斎ができた。荻生君はちょうど郵便局が閑なので、 机を真中にすえて、持ってきた 書 箱 をわきに置いて、角火鉢に茶器を揃えると、それで かたがない。 たのを楽しむというふうに笑って話をしていた。 もうあたりはきれいになって、主僧と荻生君とは茶器をまんなかに、さも室の明るくなっ からはずしてきてはめてくれる。かみさんはバケツを廊下に持ち出して畳を拭いてくれる。 んでやってきて、庭に生えた草などをむしった。清三が学校から退けて帰って来た時には、 本堂の右と左に六畳の間があった。 で、 左の間を借りることにする。 和 尚 さんは障子の合うのをあっちこっち 右の室は日が当たって冬はいいが、夏は暑くってし^キ 同僚にあとを頼

「これはきれいになりましたな、まるで別の室のようになりましたな」 こう言って清三はにこにこした。

「荻生さんが草を取ってくれたんですよ」

主僧が笑いながら言うと

|荻生君が?|| それは気の毒でしたねえ」

「いや、草を取って、庭をきれいにするということは趣味があるものですよ」と荻生君は

る。

言った

三は、 しゃと食った。 ゟゟゟゟ そこに餅菓子が竹の皮にはいったまま出してあった。これも荻生君のお土産である。 「これはご馳走ですな」と言いながら、一つ、二つ、三つまでつまんで、 弁当腹で、長い路を歩いて来たので、少なからず飢を覚えていたのであべんとうばら むし ゃ

の話も出た。 団 欒 して食った。文学の話、 られてあった。 その日の 晩 餐 は寺で調理してくれた。 里芋と筍の煮付け、ばんさん 庭に近く柱によった主僧の顔が白く夕暮れの空気に見えた。 主僧は自分の分もここに持って来させて、ビールを二本奢って、三人して 人生問題の話、 近所の話、 小学校の話、 汁には、 たけたウドが入れ 主僧 のお得意の禅

長 い廊下に小僧が急ぎ足でこっちにやってくるのが見えたが、やがてはいって来て、

通の電報を主僧に渡した。

「大島孤月、 急い で封を切って読み終わった主僧の顔色は変わった。 が死んだ!」

「孤月さんが――_

二人もおどろきの目をみはった。

にこの人の世話になって、原稿を買ってもらったり、その家に置いてもらったりした。 かけて、一月ほど前に帰朝した。送別会と歓迎会、その記事はいつも新聞紙上をにぎわし としてよりも書肆の支配人としての勢力の大きな人であった。 大島孤月といえば、文学好きの人はたいてい知っていた。 雑誌にもいろいろなことが書いてあった。ここの主僧がまだ東京にいるころは、こと 某書肆の女婿 ぼうしょし じょせい 昨年の秋泰西漫遊に出たいせいまんゆう で、 創作家

「そう、馬車はありませんしな、 「もう今日は行かれませんな」

車じゃたいへんですし……それに汽車に乗っても、

あっ

ちへ着いてから困るでしょう」

主僧は考えて、

明日にしましょうかな」

「明日でいいなら 明日朝の馬車で久喜まで行って、 奥羽線の二番に乗るほうがいい

ですな」

「行田から 吹 上 のほうが便利じゃないでしょうか」 久喜のほうが便利です」

と荻生君は言った。

主僧はそれと心を定めたらしく、やがて、 「人間というものはいつ死ぬかわかりま

な」と慨嘆して、

0) 思わなか 「ちょっと病気で病院にはいってるということは聞きましたけれど、 懐 抱を実行していかれる身なんですから」こう言って、かいほう ったですよ。 主僧は黯然とした。 先生など幸福ではあるし、 得意でもあるし、 自分の田舎寺に隠れた心 これからますま 死ぬなどとは夢に す自 Ō 動 分 も

が 好 どれほど人間としてえらいかしれない。 どんなに 零 落 先に出よう出ようとのみあくせくしている。 たんですよ。 機を考えて、 りますからなア」 をあくせく暮らすには当たらない。 は人間で、それ 「世の中は蝸牛角上の争闘かぎゅうかくじょう いじゃない、 人の弱点を利用 .相応の安慰と幸福とはある。 悪いが悪 いじゃない、 したり、 それよりも、 私は東京にいるころには、つくづくそれがいや 朋 党を作って人をおとしいれたり、 ほうとう 幸福が幸福じゃない。どんな人でもやっぱ それ 実にあさましく感じたですよ。 人間としての理想のライフを送るほうが に価値もある。 して死んでもそのほうが意味があ 何も名誉をおって、 世 . の 歩で 中 り人 は も人 になっ 好 生 間 の V)

「ほんとうにそうですとも」

清三は主僧の言葉に引き込まれるような気がした。

「不幸福な人だった!」

けた。 て、 その背景が悲しかった。 「なんのか と主僧は思わず感激して独り言のように言った。得意なる地位を知ってるだけそれだけ、 心持ちは四十近い人のようであった。養子としての淋しい心の 煩 悶 をも思いやった。 まだ三十四五であったが、世の中の 辛 酸 をなめつくして、そのしんさん のと言って、 平生 戯 談 ばかり言う男で、へいぜい じょうだん 誰もみな死んでしまうんですな……それを考えると、ほんとうに 軽い皮肉をつねに人に浴びせか 圭 角 がなくなっけいかく

裡に引き上げたが、清三と荻生君との話も理に落ちてしまって、 こんなことでその夜は一室の空気がなんとなく低い悲哀につつまれた。やがて主僧は庫< いつものように快活に語

つまらない」主僧は深く動かされたような調子で言った。

二人は暗い洋燈に対して久しく黙した。ることができなかった。

翌日主僧は早く出かけた。

れはその度ごとにいろいろな思いにうたれた。その人の作には感心してはおらぬが、出版 清三は大島孤月の病死と葬儀とについての記事をそれから毎日々々新聞紙上で見た。

が運んで来た。 車継立所 のそばしゃつぎたてしょ も死 派 ざわざわ鳴って、 かけたトタンの樋からビショビショ きて死んでいく普通の多数 者としての勢力が の不遇などをそれにくらべて考えてみたりした。 んでこうして新聞 雨 0 降 行田 る の米ずしという小さな飲食店から赤い 文壇に及ぼす関係などを想像してみたり、 なんだか海近くにでも住んでいるように思わ 日には本堂 の家からもやがて夜具や机や書箱 に書 かれ 0) 人 0) 四面 々 れば光栄である」などと考えて、 0) 雨滴れ 上をも思いやった。 の新緑がことにあざやかに見えて、 の落ちるのを見た。 時には、 その などをとどけてよこした。 メリンスの帯をしめた十三 間に 自分の崇拝 「とにかく不幸福 風 れ 音も香もなく生 た。 雨 の吹く日 が降 弁当は 庫く つ には してい 裡り た 朝 の高 I) E 風 ま とい る 晩 裏 が 1 明 匹 れ 0) 屋 吹 . て 活 0) 林 根 1 つ 娘 馬ばが た

蚕んじょ 所の か らって行くことなどもあっ とへとい の角を裏通りにはいって、 かれ や は寺から町 つも出る。 怪しげな 軒 燈 Ŏ 大 おおどお 時には 大 越 に通う馬車がおりよくそこにいて、 の出ている料理屋の前などを通って、 りに 細い煙筒に白い 真直に出て、まっすぐ 薄い うどんひもかわと障子に書いた汚な 煙のあがる それ 碓氷社 分工場 から用水の 安くまけて乗せても 橋 のたも あようさ い飲食

五六日して主僧は東京から帰って来た。 葬儀の模様は新聞で見て知っていたが、くわ

主僧

の眉はあがっていた。

ちゃ 本堂が 大家 筵が敷きつめられて、 く聞 h 造花生花のさまざまの色彩がさながら絵のような う時に当たって何が来たかと思うと、 したよ。 むと形のごとき焼香があって、やがて棺は裏 のビショビショ落ちる庇のところにさしかけて立っていた。 ったって、 ことごとく雨をついてその葬式につい 名誉をおって、 でからいくら涙 は柱によって、 いて、 めちゃに 狭か 苦労をしぬいて、ようやく得意の境遇になって、 死が一 つ さらにあざやかにそのさまを眼の前に見るような気がした。文壇 して、 たので、 度来 都会の塵にまみれたって、 をそそがれたってしかたがない!」 あっちこっちと 周 旋しゅうせん 悲しそうな顔をしている。 れば、 中には そこを白無垢や羽織袴がしろむく 人々 いれなかった人々は、蛇の目傘や絹張りの から一滴の 死!」こう若い て行ったという。 しかたが して歩いてい 涙をそそがれるばかりじゃありませんか。 の墓地へと運ばれる。 :雨にぬれて往ったり来たりする。 生前最も親しか 対 コントラスト ありませんな……どんなに得意にな 和尚さんは話 雨がザンザン降 これから多少志もとげようとい る。 をなしたという。 読 ど きょ う つ 君、 経 た某 墓地へ は長かった。 実際、 した。 画家は こうもりがさ って、 の路には の大家 感に 羽織を ことに、 新 - を雨滴 それ 打 小 緑 小家は た 新 雨に 説 0) が 中 0) 死 ま 8 某 す Ò

かそ 0) れ は そ の希 若菜集」を出して読みふけ 眼 の夜は遅くまで、 の前に 望と野心 仰 11 で の上 1 に一つ る。 清三はいろいろなことを考えた。 若 0) 1 新し 心はただそれ ĺ, 解決を得たように思われ のみにあこがれている。 「名誉」 る。 「得意の境遇」 かれ けれ は綴の切り ど今宵はな そ ĥ た藤村 れ な をか À だ

本堂には 如 来 様 が 寂 然 としていた。「若菜集」を出して読みふけった。

$\frac{+}{\pi}$

るため の畑 それを小僧が一枚々々拭いていると、 11 って桑摘 寺では慰みに蚕を飼った。 裏の林の中に葦の生えた湿地があって、もと池であった水の名残りが黒く錆びて光って、の木の中にすり、は、しっち、いけいけいかったが、まし、は、しっち、 に桑を摘みに行く。 Ō 六月の末には、 寒暖計が柱にかけられてあった。 みの手伝いをしてやる。 剖 よ しきり 雨 の降る日には、 がどこからともなくそこへ来て鳴 庫裡の八畳の一 ぬれ た緑の葉は勝手の広い板の間に 和尚さんはそばで桑切り庖丁で丹念に細く刻む。 その晴れ間を待って 和 尚 か 間は棚や、筵でいっぱいになって、 みさんが白い手拭いをかぶって、 1 さん Щ のように積まれ もい 朝に 温度を計 よに 夕に な 裏

やがてその客は東京から来た知名の文学者で、一人は原杏花、

一人は相原健二とい

れから筵へと、その白い美しい繭をあけた。 りに来る人々が多く集まった。 らじゃらと音させて、 蚕の上簇りかけるころになると、町はにわかに活気を帯びてくる。平生は火の消えたよぁが 静 か な裏通りにも、 景気よく金を払ってやった。 繭買い入れ所などというヒラヒラした紙が張られて、まゆ 頬 り 鬚 げ の生えた角帯の仲買いの四十男が秤ではかって、 相場は日ごとに変わった。 料理店では三味線の音が昼から聞こえ 銅貨や銀貨をじゃ 近在 から売

た。

が庫 ら態度やらにあらわれて見えた。 アンストロウの夏帽子をかぶった肥った男と白がかった夏 外 套 をはおった背の高ぶと ないので、不思議に思って、清三が本堂の障子をあけてみると、 山 門の鋪石道にガラガラと車の音がした。さんもん しきいしみち できて持ってきたので、 ある日曜日であった。 「裡の入り口に車をつけて、今しもおりようとするところであった。やがて小僧がとり 和尚さんの姿がそこに出て来た。 昨夜から文学の話が盛んにでた。ところが、ちょうど十時過ぎ、 郁治が土曜日の晩から来て泊まっていた。 久 濶 の友に訪われた喜びが、声やら言葉やきゅうかつ ついぞ今まで車のはいって来たことなどは 白い羅紗の 「行田文学」の初号が の背広にイタリ い男と

う有名な 「太陽」 の記者だということがわかった。 いずれも主僧が東京にいたころの

ちてある、

ているさまがあきらかに見えた。 清三の室は中庭の庭 樹ていじゅ を隔てて、 緑の葉の間に白い羅紗の夏服がちらちらしたり、 庫裡の座敷に対していたので、 客と主僧との談話なり お V) お

い羨望の種であった。

I)

声 高 く快活に笑う声がしたりする。

その洋服や笑い声は若い

青年にとってこの上もな

原っていう人はあんな肥った人かねえ。 あれであんなやさしいことを書くとは思わなか

った」

郁治はこう言って笑った。

る。 んも時々出て来ていろいろ指揮をする。 勝手へ行ってみると、 通りの 酒屋は貧乏徳利を下げて来る。 かみさんと小僧とはご馳走の支度に忙しそうにしていた。 米ずしの若い衆は 小僧は竈の下と据風呂の釜とに火を燃しかまど
すえぶろ 岡 持に鯉のあらいを持って来 つける。 和尚

活気はめずらしくがらんとした台所に満ちわたった。

酒はやがて始まった。だんだん話し声が高くなってきた。 和尚さんもいつもに似ぬ元気

な声を出して愉快そうに笑った。

歌かとも思われるような の顔 正 |午近くになるとだいぶ酔ったらしく、笑う声がたえず聞こえた。 は火のように赤か った。 種 やがて和尚さんのまずい詩吟が の朗らかな吟声が聞こえた。 出たかと思うと、 縁側から厠へ行く客 今度は琵琶

酒 の襁褓やらがいっぱいに散らかされてあったが、 古 箪 笥 や行李などのあるそばで狭い猫の額のような庭に対して、ふるだんす こうり 若 の一二本は い人たちはつれだって町に出かけた。懐に金はないが、 いつも飲むことはできた。その場末の飲食店の奥の六畳には、 それをかみさんが急いで片づけてくれた。 月末勘定の米ずしに行けば、 なまりぶしの堅い 衣服やら小児 煮付

荻生 大通 君は りは りに、 小さな雑魚がスイスイ泳いでいた。 熊谷に行っていなかった。 歩けないというので、 荻生君を郵便局に訪ねてみるということになったが、 桑のしげった麦のなかば刈られた裏通 二人は引きかえして野を歩いた。 こんなに赤い顔で、 りの田圃な 小川には青い藻が浮 を行った。 町の

けでかれらは酒を飲んだり飯を食ったりした。

和尚さんはいつか僧衣を着せられている。 寺に帰ると、 和尚さん の手を引っ張って、どこへかつれて行こうとする。 座敷ではまだ酒を飲んでいた。騒ぐ声が嵐のように聞こえる。丈の高せい 「まア、いいよ、いいよ、 洋服の原があとか 君らがそんなに望む ら押す。

なら、 お経ぐらい読むさ、その代わり君らが木魚をたたかなくってはいかんぜ!」

和尚さんも少なからず酔っていた。

と雑誌記者は言った。

ろうとしたが、 かみさんと小僧とが顔を出して笑ってその 酔 態いたい 三人はよりつよられつして、足もと危く、 笑う声が盛んにした。 階段のところでつまずいて、 将棋倒り 長い廊下を本堂へとやって来る。 を見ている。三人は廊下から本堂 しにころころと折りかさなって倒れ 庫く裡り 定は からは

な 年したんだから」こう言って、 和尚さんも原という文学者もそれを見て、 雑誌記者は槌をとって木魚をたたいた。 と笑った。 雑誌記者は木魚をたたきながら、「それはそうとも、 トラヤアヤアヤアヤアとお経を読む真似をした。 「これはうまい、たたいたことがあるとみえる ポクポクポクポク、 なかなかその調子が これで寺の小僧を三 V)

「和尚――お経を読まなくっちゃいかんじゃないか」

こんなことを言ってなおしきりに木魚をたたいた。

主僧と原とは 如来 様 の前に立ったり、 古い位牌の前にたたずんだりして、いろいろないはい

話をした。歴代の寺僧の大きな位牌のまんなかに、むずかしい顔をした本寺 中 興 の敷き物の上に鐘がのせられてあって、 ことや、この人の弟子に越前の 永 平 寺 へ行った人があったことなどを話した。 のことについて語った。本堂を 再 建 したことや、その本堂が先代の時に焼けてしまった の木像がすえてあった。 それは恐ろしくむき出すような眼をしていた。 そのそばに、頭のはげた 賓頭顱尊者 があった。 和尚さんはその僧 メリンス の僧

とで、六畳にいる若い友だちは笑った。 しまった。 ドタドタとけたたましい音をさせて、やがて二人は廊下から庫裡へ行ってしまった。あ 酔った二人は木魚と鐘とをやけにたたいて笑った。

原は鐘をカンカンと鳴らしてみた。

「文学者なんていうものは存外のんきな無邪気なものだねえ」

清三はこういうと、

想像していたのとはまるで違うね」

らしい真似をしようとは思いもかけなかった。しかしこうしたことをする心持ちや生活は、 い人々には、 かねがねその名を聞いて想像していた文学者や雑誌記者がこうした子供

か れらには十分にはわからぬながらもうらやまし が つた。

将来 鼠が色み ると、 ら垣 門の壁のところには蜥蜴がとかげ ま 郁治を始めとして、 で書を読 て来て、 て立った。袴をぬらして清三が学校から帰って来て、 剖 葦 はし み 東京 の雲 の学 夜は ħ \wedge 緑葉が蘇えったように新しょみが の客は 物干竿をつらね 主 蕳 んだ。 蚊か のうちから見えることもある。 僧はさびしそうにぽ 机をその 遣や 汚なく 0) り火 きりに鳴い 準 備 自 夜泊ま への煙が 人に踏まれ 中に入れ に 分 三四人はあるし、 つ 0) () て、 つ まわりには 家々 た。 て、 て言って来な て、 汚な 日に光ってちょろちょろしてい 梅っ雨ゆ からなび 翌 日 7 つ ランプを台の上に 1 い襤褸をならべて干した。 い色彩をあたりに見せる。 ね る。 の中に の んとひとり机にすわ 正午、 V 小島は高等学校の入学試験をうけるのでこのごろは いものはない。 日ごとによせられる友だちの手 蚊はもう夕暮れ た。 美し も、 降 清三は い光線が 時 りしきる雨をついて乗合馬車で久喜にくき 々 晴れ のせて外に出して、 火種をもらおうと庫 た日が 高等師範に志し 円五十: には軒に音を立てるほど集ま みなぎるように裏 って書を見てい る。 芭蕉 栗の花は多く地 銭で、 あって、 前 の広葉は風 0 棟^{むねわり} 人寝 紙 そ 7 あざやかな碧のみどり V に 0) 0 るも は、 に落 長屋 林に 中 の綿 裡 にふ Ċ に 5 毎 蚊が さし は 0) では るえて、 は 帳や つとし 夜遅くま V ゎ 向 親 を買 つ 空が 友 7 た 泥 垣 か る T 来 か 山 つ つ

どもその中に交っていた。 学や哲学史などを借りたりした。 忙しく暮らしていると言って来るし、北川は士官学校にはいる準備のために九月には東京 ろいろな書を読んだ。 早稲田に通うころ読んだというシェークスピアのロメオやテニソンのエノックアーデンな に出ると言っているし、 学校教授法や通俗心理学や新地理学や、 主僧に頼んで、 誰とて遊んでいるものはなかった。 机のまわりには、文芸倶楽部や明星や太陽がある 英語を教えてもらったり、 代数幾何の書などが置かれてある。 清三もこれに励 その書 庫 の中 まされて、 ゕ 主僧が か 5 . と 思 論 理

紙を見ると、しかるべき官立学校に入学の計画がしてみたくなる。時には、主僧にプラト 詩人の境遇を思い、文芸倶楽部をよむと、長い小説を巻頭に載せる大家を思い、友人の手 すかしてチラチラする机の上で書いた。 ンの「アイデア」を質問してプラトニックラヴなどということを考えてみることもあった。 「行田文学」にやる新体詩も、その狭い暑苦しい蚊帳の中で、外のランプの光が蒼い影を 若いあこがれ心は果てしがなかった。瞬間ごとによく変わった。明星をよむと、 渋谷の

だ上げてあげることができる。どうです、林さん、わけがないから、やっておきなさい!」 学校の校長は、 検定試験を受けることをつねにすすめた。 「資格さえあれば、 月給もま

と言った。

思うが、懐が冷やかであったり、 のせて、 同僚にあとを頼んで、 ようにやって来た。 て行った。 少しでも勉強しようと思ったりして、つねに寺の本堂の しこれといって、 このごろでは二週間ぐらい行田に帰らずにいることがある。 ر ر () 郁治が三日ぐらい続けて泊まって行くこともあった。 心地をして昼寝をしていることもある。 勉強らしい勉強をもしなか 学校から帰ってみると、 なんぞといっては、よく寺に遊びに来た。 二里半を歩いて行くのがたいぎであったり、 あっちこっちを明けっ放して顔の上に った。 土曜 かれは郵便局 一間に土曜日曜を過ごした。 日には小畑が熊谷からきて泊ま 母が待っているだろうとは それに、 の閑な時をねらって、 荻生君は それよりも に 団扇 を 毎日 しか 0)

子屋 ださい」などと言って清三が借りる。 尚さんは が好物で、 を呼びに来る。 若 で餅菓子を買って来る。 い二人はよく菓子を買って来て、 なはだすみませんが、二三日のうちにおかえししますから、 月給のおりた時には、 清三の財布に金のない時には荻生君が 三度に一度は、「和尚さん、 清三はきっと郵便局に寄って、 茶をいれて飲んだ。くず餅、 不在に主僧がその室に行ってみると、 、出す。 菓子はい 荻生君にもない時には、 荻生君を誘って、 あんころ、すあまなど 五十銭ほど貸し かが」と庫裡 竹の皮に食い 角 ど 薬 に主 こてく 和 禬

ところもとれ、

塚_かが みれいろ 馬 い時 小学校に勤める人だということがわかった。 るのだろうという評判をしたが、 糸のような 「どうしてああい 車 雨 _ 四 よっつじ 辻じ つか に乗って発戸河岸の角まで行った。 蕳 雨ゆ もなるのでだいぶ教師なれがして、 の餅菓子が二つ三つ残って、 0) 立ってい の間は 盛 を計 の袴をはい 辻 りし んに降る時には、 雨が でよく出会った女で、 って行って、 二里の泥濘の路が辛 なくっちゃい た。 下から上に降 年長の生徒にばかにされるようなこともなくなった。 · う 素 振 て海老茶のメリンスの風呂敷包みをかかえていた。 この間郁治といっしょに弥勒 りをするのか僕にはわからんねえ」と清三が笑い 十銭に負けてもらって乗合馬車に乗っ かんよ、 学校の宿直室に泊まることもあった。 つ て、 馬車にいっ やはり小学校に勤める女教員らしかった。 ゕ それにいっぱいに蟻がたかっていることなどもあった。 つ 君 新 た。 調 その女というのは、 郡視学に参観されても赤 と郁治は声をあげて笑った。 0) 夏羽 風 しょに乗り合わせて、 のあ 色の白い鼻のたかい十九ぐらいの女であった。 の織も袴もない。 に行く時にも例のごとくその女に会った。 る日に は吹きさらしの しどろにぬ た。 月ほど前 学校に出 い顔をするような 発戸にある れ あ 行田や熊谷の小学校 る日、 その時、 た。 その四辻には 庚申 平かががん から、 てから、 ながら言うと、 0) そ 5 廂 ひさしがみ どこに勤) 井 泉 村 町 には のな 0) 女 6初心な も 5 もう三 た 同 め

校長 には、 大島 良な 校に にい うな は な 出金が ば 君子で、 もどっちかといえば、 勤 か さんは話 つ 8 る 校長と教員 T 0) の学校には、 が癪に 1 る人間とは種 わる気というようなところは少しもなかった。 し 好きの合い口―― さわるが、 くとの間にずいぶんはげ そうしたむずかしいこともなかった。 気が 類が違うのだと思うと、べつにヤキモキする必 自分は彼奴等のように校長になるのきゃっら 小さく神経過敏に過ぎるのがいやだが、 清三にとってこの小学校はあまりいごこちの悪 い暗闘があるとか 師範 ねて聞 関さんは例 を唯い 出 いてい 0) 杉田 . の 通 L 0) 要も とい たが、 か 目 ij 的 L が う 0) な に 0 弥 1 好 V か ほうで 生 が 勒 人 つ 7 のよ 11 温

えたが、 る夕暮れ せてみたりなんかする。 くは 清三の教える室の窓からは、 清 なか 三は それ 0) ったが、 一人でよくオルガンをひ か 田 から若菜集 [舎道、 耳を傾い みずから好奇に歌などを作って、 小さなしんとした学校の窓から、 の中 けて行く旅客もなかった。 藤村詩集に の好きな句を選んで譜をつけてひいてもみた。 羽生から いた。 ある 大 越 に通う街道が見えた。 型の小さい安いオルガンで、音もそうたい 「海辺の曲」 そうしたさまざまの歌が 覚^{おぼつか} という譜のつい ない音楽 た歌 0 知識で、 梅っ なよ 雨ゆ たえず聞こ の 降 調 譜を合わ 1) 子 してよ に 布の 乗

雨にぬれて汚ない

を頭 を出 を四面に垂れた乗合馬車がおりおり喇叭を鳴らしてガラガラと通る。 た近所の豪家の娘なども通った。 て歩い の上にのせて太鼓をたたいて行くあめ屋、 て行くホウカイ節、 メ リンス の帯 の後ろ姿を見せて番傘をさして通って行く。 七色の護謨風船を飛ばして売って歩く爺、 県庁の役人が車を五六台並べて通って行っ 夫婦づれで編笠をかぶって脚絆 晴れ 時には美しく着飾 田舎娘が赤い蹴出 た日には た時 には、 をつけ 番台 先 つ

生も生徒もみんな授業をよそにして、

その威勢のい

Ż

のにみとれてい

衣に古びた透綾の夏羽織を着て、とえ 近所に用 に見られ そりはい 清 三の父親は、 にくるまって宿直室に寝ることなどもあった。 事が残っているというので、 るのを恥ずかしく思ったが、 ってきて、 どうかすると、 「清三はいましたか」と聞 なかばはげた頭には帽子もかむらず、 商売のつごうで、 清三は寺に帰るのをやめて、 のちにはなれて、 いた。 この近所まで来ることがある。 初めはさすがにこうした父親を同 それほどいやとも思わなくなった。 親子いっしよに煎餅 小使部屋からこっ 縞^{しま}の 単ひ 僚

なども出た。 しらえて持って来る。 その時はきっと二人して手拭いを下げて前の洗湯に行く。 ありもせぬ財布から五十銭借りられて行くことなどもある。 食事がすむと、 親子は友だちのように睦まじく話した。 小川屋から例の娘が弁当をこ 家の困る話

じた。 哀は に対 ある 門 び の心 時き 子をわざと送り届けてよこした。っぃ から碧の空が の子もと罪のきづなのわなは知らず迷うて来しを捕はれの鳩」 ちこっちから葉書や手紙が ٧١ から本堂にやって来 もかれをして心を静かならしめることができなか 七月には 美し する もそ 時 相変わらずの 蕎そ は 英語が 麦ば屋や きか 同 れ 絶望にもだえ、 熊谷 情 に 1 むずか つ で 見え っても雨は続 0) の文句が 小 れ 酒を飲んで席上で書いた熊谷の友だちの連名の手紙なども)明星· 島は 君が て動 る。 U 思ひに泣 お 攻撃、 る。 が 畑に 揺せざるを得なか 高 のずから誇大的にならざるを得なかった。 ある時は自己の心の影を追って、 ったことなどをも知らせて来た。 \equiv は 若い心にはどのようなことでもおもしろい 0) いて降 里芋 四通は必ず届いた。喝かっ 入学試験を受けに東京に 文壇照魔鏡 かぬ の葉が った。 中にも郁治か ことはあらじ った。 大きくなり、 晴れ間には日がかっと照って、 自己の失恋の苦痛を包むためには、 ら来たのが とい う渋谷の詩人夫妻の私行をあば ! つ 玉蜀黍 た。 出かけたが、 わざと和文調 ―と一字書 こうも思 郵便脚 夫: 郁治は 番多か という歌を書きなどした。 の広葉がガサガ ある に書 時 1 つ V た端書ざ 種 は ああ た。 々 時は 、鼠色の雲の 、絵葉書 に 毎 独 ある。 な V) も思った。 恋 H 希望に もだゆ 0) が る 雨 末に 悩 で状 ゚゙サと あ 0) に みは あ る ぬ 輝き、 石 い た 冊^さ 況 風 絶 友 |||れ る か 清三 けかたと から 0 え 0) と あ 7 を 恵 悲 恋 山 報 な 間 つ

物に驚いたような 頓(狂 な顔をしていた。それに引きかえて、 浦 だ」と思う。 れた時など、 のごろでは雪子のことを考えることも多くなった。その時はきっと「なぜああしらじらし をはっきりと見せて、 っているんですもの」と言って容易にそれをくれると言わなかった。雪子は被皮を着て、 を雪子のアルバムからもらおうとした時、 子という学校友だちと三人して撮した手札形で、美穂子は腰かけて花を持っていた。 和の学校にいる美穂子の写真が机の抽斗しの奥にしまってあった。雪子といま一人きよ とりすましたふうをしているんだろう。 おりおりそれを出して見る。 郁治の手紙は小さい文箱にしまっておいた。 愛がきょう のある 微 笑を 口 元 にたたえていた。 雪子は、 雪子と美穂子とをくらべてみることもある。 いま少し打ち解けてみせてもよさそうなもの 「それはいけませんよ。 美穂子は明る 清三は読書につか 変なふうに写 い眼と眉と それ

前 い窓の下で暮らした。 の土曜日には、久しぶりで行田に帰った。 運わ るく日曜が激しい吹き降りなので、 小畑が熊谷からやって来るという便があったより 郁治と二人樋から雨滴れが滝のように落ち とい あまだ

して出かけることになる。 次の土曜日には、 羽生の小学校に朝から講習会があった。校長と大島と関と清三と四人 大きな講堂には、近在の小学校の校長やら訓導やらが大勢集ま

ラキ 今度 授は り、 白 白 んちょう ら、 肩を没するほ い髯を 地 に ラ 教 は 顔 を校 蒷 郁 12 浦 微笑 な 0) 治 和 ん 色 ろ 庭に で 年 心 0) 0) 11 る。 どに なが 得 父 をたたえ 生 師 親 照 に 0) 範 0) 高く 袴 ら、 志し 多た I) つ や 実 か が 水 地 6 つ 11 谷と て、 切口 上きりこうじょう 見 と な け 教 来 眼 7 た。 つ 12 の 授 た て、 たっ 1,1 演説やらをし を 肥 1 、う所 うむず 扇 々 つ て、 の音 7 7 た 剖し で、 0 み 赤 1 葦り 額 か 校 せた が ね 1 が ど パ 長 ネ U 義 11 た。 は タパ l) ク 時 V) に 務とで は を 汗 0) そ 県 タ 得な が 0 た。 タとそこにも、 梅っ で 0) イ 見え も思 顔お 評 質 教 Ò 雨ゆ 蕳 育 教員 に は 判 教 た。 授が $\frac{-}{=}$ 界で か な に つ てい 郡視学 答える。 た も有 ま 成 日 ち 前 児童 願 るような質 は が 名な 寺 ここに 数 か 鳴く。 5 0) + 列 心 森 あ 教 老 理学 に . も聞 授 教 が 時 並 0) 近く、 間 中 つ 法 員 0) ん て、 だがが に を で 初 0) 透透なき え Ū つ 鳴 歩 た。 る 暑 そ \mathcal{O} 1 l) ば れ 7 銀 講 を 11 日かがげ の意 もう人 女 が 肥 静 演 0) 教 す ょ め を つ は う 員 見 た 7 0) 0) 丰 教

黄っ 楊げ 寄 0) 付 羽 講 織 習 た を着たさまざま 会 標本 0) かのき 終 石ざく紹 用 わ 花 0) つ には 樹 0) た 花 木 0) ゃ 石 が 0) はもう十 草 竹 火 教 0) 花 員 朝 燃 が 連 が 顔 そ えるように 時 0) 遊蝶花、 に 名と寄 校 庭 近 か か . 赤 付 5 つ えく咲い 者 菛 た。 萩ぎ 0) 0) 名とを記 方へぞろぞろ出 詰っ 女郎花 襟り る 0) 0 服 Ũ などが が た札 を着 誰 けた、 0) を て行く。 あ 眼 つ っ けら に た。 も 白る つ れ 校 縞じま 寺 庭 11 7 疎ばら 0 に 0) 袴 林 は には に 木 有 透さき 植 志 蝉 は え 0)

が鳴いた。

「湯屋で、 一日遊ぶようなところができたって言うじゃありませんか、林さん、 行ってみ

ましたか」校門を出る時、校長はこう言った。

「そうですねえ、広告があっちこっちに張ってありましたねえ、何か 浪 花 節 があるって

大島さんも言った。

言うじゃありませんか」

節も昼一度夜一度あるという。この二三日梅雨があがって暑くなったので非常に客があるの。 も菓子も麦酒も饂飩も売る。ちょっとした昼飯ぐらいは食わせる準備もできている。 けっ放して、 と聞いた。 上 か み ま ち の鶴の湯にそういう催しがあるのを清三も聞いて知っていた。夏の間、 主僧は昨日出かけて半日遊んで来て、 一日湯にはいったり昼寝でもしたりして遊んで行かれるようにしてある。 二階を明 浪花 氷

はいい。 貞 公 、うまい 金 儲 けを考えたもんだ」と前の地主に話していた。 「どうせ、田舎のことだから、ろくなことはできはしないけれど、ちょっと遊びに行くに

空いている……」 「どうです、 林さんに一つ案内してもらおうじゃありませんか。 ちょうど昼時分で、腹も

校長はこう言って同僚を誘った。 みんな賛成

たりした。 をかけて、 な字がそこにもここにも見えた。 上_{かみま}ち の鶴の湯はにぎやかであ 汗をだらだら流して、 あっちこっちから贈ったビラが った。 氷 見 世 赤 には客が , , 1 、っぱい メリンスの帯をしめた田舎娘が出たりは 七八人も に下げてあって、 いて、 この家のかみさんが襷たすき 貞さんへとい う大き 1 つ

せっせと氷をかい

っ て い

には で、 いた。 温泉にでも来たつもりで、 先生たちは二階に通った。 四人はそこに陣 室は まん 風 な 通 かに浪花節を語る高座ができていて、そこにも紙や布のビラがヒラヒラなびかに浪花節を語る高座ができていて、そこにも紙や布のビラがヒラヒラなび しがよか 取 らった。 った。 ゆもじ 幸いにして客はまだ多くなかった。 奥の こうざ つになって、 四畳半の畳は汚ないが、 別の室にごろごろしていた。 青田が見通しになっているの 近在の婆さんづれが一組 八畳 一の広 間

かけた家の は洋 にささげ 朖 風呂 さも心地のよさそうな様子であぐらをかいていたが、 0) の娘が 上衣 の汁とであった。 に いって、 もチョッキもネクタイもすっか 茶湯台を運んで来た。肴はナマリブシの固い煮付けと胡瓜 5ゃらん 汗を流して来るころには、 しか し人々にとっては、これでも結構なご馳走であ り取って汚れ目の見える 肌 襦 袢 午ablo の支度がもうできていた。 も つ た。 赤 みと鶏卵 つになっ がい。 とすき 校長

たがない」こう言って笑って、 「みんな平らに、あぐらをかきたまえ。 「私が一つビールを奢りましょう。 関君、どうです、服で 窮 屈 にしていてはしか たまには愉快に話すの

もようござんすから」

ゃがてビールが命ぜられる。

「姐さん、氷をブッカキにして持って来てくださいな」^{ねぇ}

娘はかしこまって下りて行く。校長が関さんのコップにつごうとすると、 かれは手でコ

ップの蓋をした。

「一杯飲みたまえ、一杯ぐらい飲んだってどうもなりやしないから」

いいえ。もうほんとうにたくさんです。酒を飲むと、あとが苦しくって……」

とコップをわきにやる。

「関君はほんとうにだめですよ」

言って、大島さんはなみなみとついだ自分の麦酒を一呼吸に飲む。

「弱 卒 は困りますな」

て口をつけて吸った。娘がそこにブッカキを丼に入れて持って来た。みんなが一つずつ手で口をつけて吸った。娘がそこにブッカキを丼に入れて持って来た。みんなが一つずつ手 こう言って校長は自分のになみなみと注いだ。泡が山をなして溢れかけるので、

ばる。 でつまんで麦酒の中に入れる。 やが て校長 の顔も大島さんの顔もみごとに赤くなる。 酒を飲まぬ関さんも大きいのを一つ取って、 口の中にほお

講習会なんてだめなものですな

学の 校長の気焔がそろそろ出始めた。 大島さんがこれに相槌 融通のきかない失策談が一座を笑わせた。 をうった。 各小学校の評判や年功加俸 けれど清三にとっては、 の話などが出る。 これらの 物語

郡視

は

人々の気が知れなかった。 耳にも心にも遠かった。 人たちとの間 に横たわっている大きな溝を考えてみた。 年齢が違うからとはいえ、こうした境遇にこうして安んじてい かれは将来の希望にのみ生きている快活な友だちと、 これらの る

「まごまごしてい れば、 自分もこうなってしまうんだ!」

なる。 屋もある。 若い燃ゆる心を犠牲にするには忍びないと思う。この間も郁治と論じた。 らくなるが この考えはすでにいく度となくかれの頭を悩ました。これを考えると、 いてもたってもいられないような気がする。 えらくならんから生きていられないということはない。 いいい 世 の中には百 姓もあれば、 郵便脚夫もある。 小さい家庭の 係 累 などのため 巡査もあれ 人生はわれわれ ば下 いつも胸 「えらい 駄 0 が痛く にこの 歯は の考え 人はえ

いた。 けれどその言葉の陰にはまるでこれと正反対の心がかくれていた。それだけかれは激し そと思うなら、 ているようなせっぱつまったものではない。 かれは泣きたかった。 世の中を見たまえ。 世の中を……」こう言って清三は友の巧名心を駁した。 もっと楽に平和に渡って行かれるものだ。

て行くようになるのか」と思って、 それを今思い出した。 「自分も世の中の多くの人のように、暢気なことを言って暮らし 校長の平凡な赤い顔を見た。

つい麦酒を五六杯あおった。

川が流れ、 を畳につけていた。独り関さんは退屈そうに、次の広間に行ってビラなどを見た。 いているし、 青い田の中を 時間たつと、三人はみんな倒れてしまった。校長は 肱 枕いまくら 川 楊 がこんもり茂っている。 大島さんは仰向けに胸を露わに足をのばしているし、 「蝙蝠傘をさした人が通る、こうもりがさ 森には蝉の鳴き声が喧しく聞こえた。

せみ
かまびす それは町の裏通りで、そこには路にそって里 をして足を縮めて鼾をかいびき 清三は赤い顔をして頭

三時過ぎに、 清三が寺に帰って来ると、荻生君は 風 通 がぜとお しのよい本堂の板敷きに心地よ

さそうに昼寝をしている。

午後の日影に 剖 葦 がしきりに鳴いた。

十六

に食った。 た。今日月給が全部おりて、懐の財布が重かった。いま少し前、ふところ に借りた五十銭を返し、途中で買って来たくず餅を出して、二人で茶を飲み飲み楽しそう 暑いある日の午後、 「どうも、これも長々ありがとう」と言って、二月ほど前から借りていた鳥打 白 絣 に袴という清三の学校帰りの姿が羽生の庇の長い町に見えしろがすり はかま 郵便局に寄って、 荻生君

「まだいいよ、君」

ち帽を取って返した。

「でも、今日夏帽子を買うから」

「買うまでかぶっていたまえ、おかしいよ」

「なアに、すぐそこで買うから」

「足元を見られて高く売りつけられるよ」

「なアに大丈夫だ」

で、日のカンカン照りつける町の通りを清三は帽子もかぶらずに歩いた。通りに硝子戸がらす

をあけ放した西洋雑貨商があって、毛糸や 麦 稈 帽子が並べてある。

に合った。 清三は麦稈帽子をいくつか出させて見せてもらった。十六というのがちょうどかれ 一円九十銭というのを六十銭に負けさせて買った。 町の通りに新しい麦稈帽子 · の 頭

十七

がきわだって日にかがやいた。

美穂子は暑中休暇で帰って来た。

その家 へ行く路には夏草が深く茂っていた。 里川の水は碧くみなぎって流れている。 蘆

の緑葉に日影がさした。

家の入り口には、 肌襦袢や腰巻や浴衣が物干竿に干しつらねてある。はだじゅばん ゆかた ものほしざお 郁治は清三と

つれだって行った。

美穂子は ら白絣・ を着ていた。帯は白茶と 鶯 茶 の腹合わせをしていた。顔は 少し肥

頬のあたりがふっくりと肉づいた。髪は例の 庇 髪 に結って、白いリボンがよく

似合った。

奥で父親の謡がいつも聞こえた。 らは、その色白の顔がいつもはっきりと薄暮の空気に見えるようになった。そのころには
はくぼ 夕べごとにそこに出て、 あった。 面にしげって、 ビールの 井戸側には大きな葉の草がゴチャゴチャ生えている。 ・空 罎 に入れられた麦湯が古い 井字 形あきびん 釣瓶の水をこぼすたびにしぶきがそれにかかる。 米かし桶の白い水を流すのがつねであったが、 の井戸に細い綱でつるして冷やされて 流しには 二三日前までは老母 菖蒲、萱などが 娘が帰って来てか が

盆にのせて、 いて、それを勝手へ持って来て、土瓶に移して、 美穂子は細い綱をスルスルとたぐった。ビールの罎がやがて手に来る。 兄の話している座敷 へ持って行く。 コップ三つと、 砂糖を入れた硝子器とを 結わえた綱を解

「なんにも、 ご馳走はございませんけど、……これは一日井戸につけておいたんですから、

お砂糖でも入れて召し上がって……」

のそばにすわって、遠慮なしにいろいろな話をした。 麦湯は氷のように冷えていた。 郁治も清三も二三杯お代わりをして飲んだ。 美穂子は兄

清三はこうきくと、「寄宿生活はずいぶんたいへんでしょう」

「えゝえゝ、ずいぶんにぎやかですよ。 ほかの女学校などと違って、 監督がむずかし いの

ですけど、それでもやっぱり……」

よ」と北川は笑って、 「女学校の寄宿舎なんて、それはたいへんなものさ。話で聞いてもずいぶん愛想がつきる 「やっぱり、 男の寄宿とそうたいして違いはないんだね

「まさか兄さん」

と美穂子は笑った。

子児が長いもち竿を持って、 の胸にも清三の胸にも山ほどある。しかし二人ともそれに触れようとしなかった。 城 址の胸にも清三の胸にも山ほどある。しかし二人ともそれに触れようとしなかった。 はろあと その室には西日がさした。松の影が庭から縁側に移った。垣の外を荷車の通る音がする。^^ この春と同じように、二人の友だちは家への帰途を黙って歩いた。言いたいことは郁治 田の中に腰までつかって、おつるみの蜻蛉をさしていた。

石橋近くに来た時

「今年は夏休みをどうする……どこかへ行くかね?」

郁治は突然こうたずねた。

「まだ、考えていないけれど、ことによると、日光か妙義に行こうと思うんだ。 君は?」

僕は 美穂 いそん 子がこの夏休暇をここに過ごすということがなんの理由もな な余裕はない。 この夏は英語をいま少し勉強. しなくっちゃならん しに清 三の胸 浮 か

に

妬^ねたま しいような辛 い心地が

路の角で郁治と別れ 復^{ふっきゅ}う 立つように母親を驚か 今夜は 父母 の快感と、 の家 に寝 ると、 束縛せられている力か して帰途についた。 て、 急に、ここにいるのが 翌朝早く帰ろうと思った。 らまぬ 明 朝郁治がやって来て驚くであろうという一 が たまらなくいやになって、 れ得たという念と、 現に、 郁治にもそう言った。 たとえがたいさび 足元か ら鳥 け ħ 種 ど 0)

盃をさして、 火鉢 寺 の話が 心細 に帰 0) あるところで酒を飲 つ 1 出 感とを抱い た時は日が暮れ 冷やっこをべつに皿に分けて取ってくれた。 る。 九歳 の時、 て、 かれ んでいたが、 てからもう一時間ぐらいたった。 この寺の小僧によこされて、 はその長 (1 つねに似ず元気で、 · 夕 暮 れ の街道をたどった。 今まで聞か それから七八年 和尚さんは庫裡 「まアー 杯おやん な か Ò つ 辛 た 主 なさ の六畳の 僧 そ 0) Ō 幼 と 艱かい

と残っている。

主僧は酔って「

「衆寮」

の壁」というついこのごろ作った新体詩を歌って

もな

い希望のように思っていた。

今でも成願寺住職

|X | じっえん

と書 1

た落書きがよく見る

なることをこの

は 一

通りでなかった。

玄関

のそば

の二畳にいて、この成願寺の住職に

聞かせた。

「どうです、君も何か一つ書いてみませんか」

こう言って和尚さんは勧めた。

人としてよりほかに光明を認め得るものはないと思った。 する境遇にもいない。人なみにしていては、とてもだめである。 分には才能という才能もない。学問という学問もない。 清三の胸はこうした言葉にも動かされるほど今宵は感激していた。何か一つ書いてみよ かれはエルテルを書いてその実際の苦痛を忘れたゲエテのことなどを思い出した。 友だちのように順序正しく修業を かれは感情を披瀝する詩 自

つ運だめしをやろう。この暑中休暇に全力をあげてみよう。 自分の才能を試みてみよ

う

という本もそのうちにあった。かれは「むさし野」に読みふけった。 かれは和尚さんから、種々の詩集や小説を借りることにした。 和尚さんは東京の文壇に顔を出しているころ集めた本をなにかと持って来て貸してく 国民小説という赤い表紙の四六版の本の中には、 という三編がある。それがおもしろいから読めと和尚さんは言った。「むさし野」 「地震」と「うき世の波」と「悪 翌日学校から帰って来る

七

戸は

しだい

に終わ

りに近づいた。

暑さは日に日に加わ

った。

く会わ

な

か

つ

ん 発 戸 と

脳を流っ ので、 下に 涼し 出 わ の て昼寝をしたりした。 員どもは るも 小学校 7 か らな 寝て暮らそうという人もあ そうな装をして、 武 7 いるものもある。 れ 教 清 Ō 蔵 日 て来 野 新な 陰 も か 員 の女教員 のできるころまで、 時 あ つ 0) 郊外 趣味 間二 た。 それ る、 る 感 なに渇かっ 一時間 に例 をザッと降 興にふけらざるを得なか らはすべて自 月の 学校では暑中休暇 微笑を傾けて通って行った。 した人 を教室に残った。 旅に 清三は 0) 初めから正午ぎりになってい シ夷申塚の 出ようとし って通る林 のように熱心に読んだ。 日 課点 る。 オル 分の感じ の角でまた二三度 を誰 0) ガンを鳴らし 浦 調 7 和 それ . (5) もみ によく似てい べにあきて、 いるものもある。 に 時でれ った。 あ に À る講習会 用 な待ちわ こたり、 0) 水 ず ぐる ま 、たが、 〜 邂逅 な その た。 風呂敷包み 7 「忘れ 雑談 出 も た 微笑の意 東京に用足り 前期 0) の か つ か 月に 得ぬ にふけ 7 も、 けて、 た。 れ はおり 0) , , 午る か 白課. る。 光る Ò 味が 白地 人 中 検定 々 つ 7ら帰 清三 の単衣 橋 から たり、 おり本を伏せて、 暑 点を調べる U に に行こうと企てて V 0) の資格を得ようと 夏を 一には ほ 書 ると途 「むさ とり 宿 にの 1 る 葡萄棚 た作 直 白 どうし 室 中 0) \mathcal{O} 下宿 野 で、 が 者 IJ \wedge 行 暑 T ボ 0) 頭ぁ 感 を 教 も つ 0)

三十日の学課は 時間で終わった。 生徒を集めた卓の前で、

下駄箱 学校に来たくッても来られないようになります。 散した。 番先生の言うことをよく守ったか、 ますと、お腹をこわすばかりではありません。 習をなさい。 女教員は菫色の袴をはっきりと廊下に見せて、一二、 は生徒に もそう書いてありましょう。 たくさん食べてはいけません。 これまで教わ 「皆さんは暑中休暇を有益に使わなければなりません。 このほう 別れ 校庭には九 連 草 の赤いのが日に照らされて咲いていた。紫陽花の花もあった。 に先を争って出て行った、 の礼をさせた。お下げに結った女生徒と鼻を垂らした男生徒とがぞろぞろと それから父さん母さんに世話をやかしてはいけません。 ったことをみんな忘れてしまいますから、 九月の初めに、ここで先生といっしょになる時には、 暑いところを遊んで来て、そういうものをたくさん それを先生は今から見ております」こう言って、 いずれの教室にも同じような言葉がくり返される。 恐ろしい病気にかかって、 よく遊び、よく学び、 一二をやりながら、 毎日 あまりに遊び過ごすと、せっかく 一度ずつは、 桃や梨や西瓜などをすいか よく勉めよ。 夏休みがすんで、 本を出し そこまで来て解 誰 に食べ 7 清三 が 本に 復さ

十八

義に遊んだ。

い は燃えても筆はこれに伴わなかった。 暑中休暇はいたずらに過ぎた。自己の才能に対する新しい試みもみごとに失敗した。 五日ののちにはかれは断念して筆を捨て 思

穂子が帰っているだけそれだけ、そこにいるのが苦痛であった。 寺にいてもおもしろくない。 行田に帰っても、 狭い家は暑く不愉快である。 かれは一人で赤城 それ から 妼 美

っていた。 旅から帰って来たのは八月の末であった。その時、 行田から羽生、 羽生から弥勒という平凡な生活はまた始まった。 美穂子は、 すでに浦和の寄宿舎に帰

十九

供らのそれをさがす に置いて、 く晴れて、 大島さんも来なかった。その夜は宿直室にさびしく寝た。 学校には新しいオルガンが一台購ってあった。初めての日はちょうど日曜日で、 天の川があきらかに空に横たわっている。 人の話声がどこからともなく聞こえた。 提ががそこにもここにも見える。 垣にはスイッチョが 盂蘭盆を過ぎたあとの夜は美 日中は暑いが、 鳴いて、 夜は露が草の葉 校長も 村 0)

は冷やかに感じられた。 時 初めの十日間は授業は八時から十時、 の退校となる。 もうそのころは秋の気はあたりに満ちて、 物思うかれの身に月日は早くたった。 次の十日間は十二時まで、それから間もな 雨の降る日など単衣一枚でひとえ 6く午後

六公園の写真はかれ れは机に いう噂を聞い 高等学校の入学試験を受けに行った小島は第四に合格して、 打っ伏して自己の不運に泣かざるを得なかった。 たが、得意の文句を並べた絵葉書はやがてそこから届い の好奇心をひくに十分であった。 友の成功を祝した手紙を書く時、 月の初めに金沢へ行ったと た。 その地にある兼けん

故郷を去るの歌をつねに好んで 吟゛誦 した。その調子には言うに言われぬ悲哀がこもっ だというエノックアーデンの薄い本がのせられてあった。かれは、 本堂の机の上には乱れ髪、 夜ごとの月はしだいにあきらかになった。墓地と畠とを縁取った榛の並木が黒く空に見 庫裡の玄関の前に、春は 芍 薬 の咲く小さい花壇があったが、そこにそのころ秋(り) の絵のようにかすかに紅を見せている。 落梅集、むさし野、らくばいしゅう 中庭の萩は今を盛りに咲き乱れた。 和 尚 さんが早稲田に通うころよんぉしょう 「響りんりん」という

夕飯のあとに、 清三は墓地を歩いてみることなどもあった。 新 墓 の垣に紅白の木槿がもこは墓地を歩いてみることなどもあった。 ホヒレワーカ

えて、大きな芋の葉にはキラキラと露が光った。

や 咲 製糸工場 倒 金文字で、 ん らここに来て、 λ が てあ でみることが れや乞食 1 女郎花などがおみなえし て、 例 っ 0) 旅りょじゅん Õ 禿^ちびふで 最 の か 高 死 į, 線 初 11 ・墓石に で戦死 あ λ 小さい蜻蛉がたくさん集 香 をとったの 0) 病院を建てて、 だの 経営 供えられ る。 のともっ . 刻 り 者 を埋葬したところもあっ し 仙台で生まれ の墓は、 た たあ が てあ つけられ 等 卒 あ 土 る。 ちこちに立 との白 -の墓も 地 花 崗 石 いげいし てあっ 7 の者に慈父のように思わ 古 įί 1 墓 灰が あった。 維 まって飛 た。 の 立 新 も つ あ 7 無縁の墓 0) 時には た。 そ 派 ij 1 á る。 れ な 6 で ŧ 清三 りと残って見え か いる。 ので、 もか ら日清 玉 土 事に は時には 饅 な 頭 卒塔とば · 奔んそう 寄付金をし れ の役にこの り多かった。 0) たとい 上 好_の に茶 して、 た。 の新 奇ぎ う人 碗 花立 近 た有 に が Ũ 在 0) 碑 明 一かた **隅**み 水 V 志 石 石せきひ 碑ひ 治 の文な てに を 0) 0) に 満 村 0) な は か 姓 も た あっ は 名は どを読 み ら 和 出 7 そ 尚 行 7 か き 征

代 のような墓石は泣くように見られた。 . の 寺 7 この 0) 墓地 た。 0 か 住 れ 晴 職 とはまったく れ 0) 墓 た日には、 一であ 雨 0) る。 日には、 離 れて、 夕方の光線が斜なな 杉 この古樹 梢ずかれ 裏 5 の林 の陰に笹やら楢やらが茂 ・雨滴だ ここの和尚さんもやがてはこの中には の奥に、 れがボ めに林にさし透って、 タボ 丸 ĺ١ タ落ちて、 墓石が数多く って、 苔ご蘚け 向こうに 並 土 んで は 0 生 つ え 広 V ね る。 1 た に 1 る 坊 じ 野 これ 主 のだなど 0) め 空がそ 0) 8 は 歴

のあ と清三は考えた。 うな気がする。ふと、 る 和 尚さんとが、 肥った背の高いかみさんと田舎の寺に埋めておくのは惜しいような学問 二三日前のことを思い出して、 こうした淋しい平凡な生活を送っているのも、 かれは微笑した。 考えると不思議なよ かれは 日記

調子で、

丸い 突然のことに気の毒にもまた 面 喰 はされつ」と書いたのを思い出した。 思って、 の状態と夫妻の間 などのたくさん本堂にあったのを利用して大工を雇って来て、そこに格好 「夕方知らずして、主の坊が Wife とともに湯の小さきに親しみて(?)入れるを見て、 若い時の希望も何もかも捨ててしまって、 清三にはこの滑稽な事実が、 何気なしに行ってのぞいてみると、 風呂を据えて湯を立てた。煙が勝手から庫裡までなびいた。 からはいられるようになっていた。 いってい 茶の間へ行ってみると、そこには誰もいないで、笑い声が湯殿のほうから聞こえ .柄とがいっそうあきらかに見えたような気がした。こうして無意 主僧は平気で笑って、 単に滑稽な事実ではなくって、それを通して主僧 和尚さんは二月ばかり前に、 夫妻は小さい据風呂に目白の推 「これはえらいところを見られましたな」と言っ ただ目の前の運命に服従して、さて年を過ご その日は火をもらおうと 葬儀 し合いのようにし に用 湯殿は庫裡の入 の湯殿を作って、 1 る棒や板 味に の生活

歴代 の住 職 0) 墓 0) 中に! 清三は 自 分の運命に引きくらべてみた。

野のの雲は 平野を縁取っ 北_{たかんら} で煙が正 楽 付と には 雲のさまとが 員さん な形をし たたずん 時 信なの 時 の仕 には 赤 正 刻 が 城から日 暗んしょく 色 とそ で 手 事 た 0) 一葉 舟 面 0) 何 帳 を終 連 に 高 肩 つ だんん を持 0) か た 原に のところに Щ 見えて、 が 1光連山 時 わ 山 多か 秩父 だんくわ きりに手帳に書きつけて 々 ちながらぶらぶら歩 つ Þ 見るような複雑した雲の変化を見ることはできなかっ 0) 詩 に て帰る か が 起こったさまざま 6 その左に つ ら起こる雲 人を学 夕 ス環をない 連 た、 日は 百 山 しく記され 姓 んで、 か が , 波涛 して続 落ち 妙義 は、 れ は 0) 青田 て、 が 色彩にはすぐれたものが多か 1 のように連な 雲 ĺ١ ち つも白地 1 Ō て行くのに邂逅して挨拶をしてっくわ た。 ょ を越えて、 \ \ 雲 **,** , つ つもそこからい の研究をしてみようなどと思いたつことも る の状態と色彩と、 秩父の雲の明 と頭を出 の単衣を着っ のを見たこともあった。 i) 向こうの棒はん わ たった。 していて、 色の 一て頭 ろいろな雲が 両神山 多 時につれて変化して行く 0) 0 髪を長く 並 それから つ 1 た。 木 0) た。 に 0 清 の たが、 あ わ 裏 引きかえて、 だめらふね きあ 古城址 三 時 たりまで行っ に 0) に た 出 手帳 成 が V は る ろい 願 つ \mathcal{O} と 田 寺 連 に 0) 0) 畔ぜ は Ò ょ 関 日 Ш 浅 た。 教 う 訚 日 光 右 東

「平原の雲の研究」という文をかれは書き始めた。

う 町 墓に詣ずる人々は、 は は二三日前から日傭取りを入れて掃除をしておいたので、 に送る。 の袈裟をかけて 読 経 をした。 庭の 金 木 犀 は風につれてなつか. ゖ さ どきょう 様にはめずらしく つものように樒の枯葉や犬の糞などが散らかっていなかった。 火鉢で線香に火をつけ、 彼岸の か の豪家の美しい 結 け り り がん つつの中にも鐘の音、 みさんからもらった萩の餅に腹をふくらし、 の 日 参詣者は朝からやってきて、 中 ちゅうにち から雨がしとしとと降った。 には、 少女もいれば、 蝋燭がともされて、 まず本堂に上がって如来様を拝み、 駒下駄の音、人の語り合う声などがたえず聞こえた。 草の茂った井戸から水を汲んで、 その原稿がもうたいていできかかっていた。 島田に結った白粉のなかばはげた田舎娘もあった。 駒下駄の音がカラコロ 和尚さんが朝のうち一時間ほど、 さびしい今年の秋が来た。 涼しい風に吹かれながら午睡をした。 夢ゅ 庫裡に回って、 墓地はきれいになっていて、 手桶を下げて墓へ行った。 と長い 鋪 石 参詣するもののうちには、 U い匂いを古びた寺の室へや その日は本堂の如来 そこに出してある 道に聞こえた。 紫の衣に ・ 錦 欄 寺で

十月一日。

かれ

のこのごろの日記には、こんなことが書いてある。

去 月 二十八日より 不 着 の新聞今日一度に来る。夜、きょげつ 善綱 氏 (小僧) に算術教ふ。

学校を出で、五時半に羽生に着けば日まったく暮る。夜、 エノックアーデン二十頁のところまで進む。このごろ日脚西に入り易く、 九時、 湯に行く。 四時過ぎに 秋の夜の

御堂に友の涙冷やかなり。

二日。 晴。

馴れし木犀の香やうやく衰へ、 裏の栗林に百舌鳥なきしきる。今日より九時始業

米ずしより夜油を買ふ。

三日。

へて。

モロコシ畑の夕日に群れて飛ぶあきつ赤し、 熊谷の小畑に手紙出す、 夕波の絵かきそ

四日。 晴。

久しく晴れたる空は夜に入りて雨となりぬ。 裏の林に、 秋雨の木の葉うつ音しづか。

故郷の夢見る。

五日。 土曜日。

雨をつきて行田に帰る。

六日。

云々。

夜、

星清くすんで南に低く飛ぶもの二つ、小畑に返事を書く。

曰く、

日を楽しき家庭に暮らす。 小畑と小島に手紙出す。 夜、 細雨静かなり。

七日

朝早く行く。 稲、 黄いろく色づき、 野の朝の雨斜なり。 夜は学校にとまる。

八日。

雨はげ 井戸端の柳の糸乱る。 今宵も学校にとまる。

九日。

屋の衰へたる香かすかに匂ふ。 早く帰る。 の実落つること繁し。 秋雨やうやく晴れて、 栗の林に野分たちて、 夜、 タ方の雲風に動くこと早く夕日 金 色 の色弱 新聞を見、 庫裡の奥庭に一葉ちるもさびしく、 行田への荷物包む。 星かくれて、 銀い木も

十日。

風の音にコホロギの声寒し。

たり。 朝、行田に蚊帳を送り、かゃ 年の春!』 曰 く といふ君が言葉にも千万無量の感湧き出でて、心は遠く成願寺の 「この秋の君の心! 夕方着物を受け取る。 思へばありしことども思ひ偲ばる。 小畑より久しぶりにて同情の手紙を得 『去年冬の、 あたり」 「愚痴は

もうやめた。言ふまい、

語るまい、一人にて泣き、一人にてもだえん。」

卒業 泣くように落ちた。 かった。 を考えざるを得なかった。 しく立った。 いはでやかな希望も前途に輝いていた。 清三はこのごろの日記の去年の冬、今年の春にくらべて、 い秋は来た。 の喜び、 親し 長い廊下 い友だちの胸に利己のさびしい影を認めるほど眼も心もさめておらなかった。 初めて世に出ずる希望 裏の の縁は足の裏に冷やかに、 林に熟み割れた栗のいがが見えて、 に輝いていた。歌留多を取っても、ボールを投げてもお去年の冬はまだ世の中はこうしたものだとは知らなかっ ――その花やかな影はたちまち消えて、 本堂のそばの高 晴れた夜は野分がそこからさび いかにその調子が V · 梧ぉぉぎり からは 秋は 変わ で雨滴だ 来た、 もし ったか れが F 美

<u>-</u> -

時は 勝手な真似をして歩いた。何かべちゃべちゃしゃべっている女生徒もあれば、後ろをふりょぉ 男生徒女生徒打ち混ぜて三十名ばかり、 亀よ亀さんよ」をいっせいにうたってきたが、 田の間の細 い路をぞろぞろと通る。 それにもあきて、今ではてんでに 学校を出る

、叢の中で阜斯を追ったり、汀へ行って浅瀬でぼちゃぼちゃしたりしている間を、<<さむら ばった

先生

るも 返って の物 級、 くそのあ 崽 0) 九 (V 歳 も あれ とを追った。 の慰藉として か 5 ば、 十歳までの をしてみせている男生徒もある。 蜻とんぼ を追 つねにか 1 たずら盛 1 か けて わ いが り、 畑 ったので、 の中には 総じて無邪気に甘えるような挙動を、 (1 赤いマンマという花をつまんで列に つ 「先生 て行くもの 林先生」 もあ る。 と生徒は顔を見てよ 尋常二 清三 年 級 おくれ ど三年 は自己

えた。 て歩 の土手にはせのぼ もまだ暑かった。 って行って手をあげているさまが、 学校 弥勒の先生たちはよく生徒を運動にここへつれて来た。 その松原からは利根川 た。 か 帽子をかぶって先に立つと、 1 若 ら村を抜けて、 女教師 1 先生をわざわざ窓から首を出して見る らった。 発戸 もその後ろからハンケチで汗を拭き拭きついてきた。 の村はずれの八幡宮に来ると、 発戸に出る。 先に登ったものは、 の広 1 流れが絵をひろげたように美しく見渡され 関さんは例 秋の晴れ 青ぉ 縞 を織る機の音がそこにもここにも聞こえる。 た日の空気をとおしてまばらな松 手をあげて高く叫 の詰襟の汚れた白い夏服を着て生徒) 機 織 女 はたおりおんな 生徒はばらばらとかけ出 生徒が砂地 んだ。 もある。 ぞろぞろとつ の上で相撲をとった 秋はな 清三は袴を着けて iの間 して かば その から見 過ぎて に交っ 7 裏 登

そのすぐ前を通

って行

っ

海辺 たち 松 原 原 0) ú が 中 にでも見るようなきれ あ に寝ころんだり 涼 た絵 つ ٧Ì て景色が 松 のような松 原 0) 陰 眼覚め した。 で、 の影が るば , , 気 な砂で、 平 0) あ か 凡 おけな り美 つ な た。 る利 Ū ところどころ小高 い話をしたり、 か 夏はそこに色のこいなでしこが咲 根 つ ΪÏ た。 0) 長 S 11 ょ 土 新刊 ろ松 手、 いく らもあれ 丘 その中でここ十町 の雑誌を読 と丘 ば との 小松 間 んだり、 に も は、 ĺ١ あ た。 ば 仰あおむ 青 か 白 松 l) 11 草 11 \mathcal{O} 0) け を 下し É 帆 下 間 は が

ぶの 遊び 徒に か ょ 清 が にな な 回 つかまえられて、 三はここへ来ると、 る 子 ね 自己 って唱歌をうたうことなどもあった。こうしてい 供 で か ある。 れ を見ても心が 0) 不運を嘆くという心も起こらなかった。 は 松 L 0) 前掛 陰に が し今日はどうしてかそうし 1 沈 腰をかけてようようとして流れ去る大河に眺 け つも生徒を相手に で眼かっ んだ。こうして幼い くしをさせられることもある。 して遊んだ。 生徒にはかなき慰藉 た快活な心になれ 無邪気な子供 る間は 鬼_{にごと} 事ごと の群 か れ ま を求 と同 には な た生徒を集 れに交って、 8 か じ心 8 つ 不 た。 7 苸 にな V ŧ る め 無 不安も 自 っ 女 邪 7 分が 気 7 0 生 遊

は薄の白い穂が

すすすき 一あるひ 学校 0) 風になびいた。 帰 I) を 一人さび ふと、 しく歩いた。 路の角に来ると、 空は 晴れて、 大きな包みを背負 夕暮れ の空気 への影濃かいである。 って、 古びた紺 野

0) っくり向こうの路から出て来て、 脚 絆に、埃で白くなった草鞋をはいて、さもつかれはてたというふうの旅人が、きゃはん ほこり 「羽生の町へはまだよほどありますか」と問うた。 ひよ

「もう、じきです、向こうに見える森がそうです」

らしい。そのことばには東北地方の訛があった。 八王子のほうへ行くのだという。 「この近所に森という 在 郷 がありますか」 旅人はかれと並んで歩きながら、 なんでも遠いところから商売をしながらやって来たもの なおいろいろなことをきいた。これから川越を通って

「知りませんな」

「聞いたようですけど……」 「では高木というところは」

われも同じく他郷の人! こう思うと、涙がホロホロと頬をつたって落ちた。 清三は町にはいるところで、旅店へ行く路を教えてやって、 ていると、旅人はさながら疲れた鳥がねぐらを求めるように、てくてくと歩いて町へはい って行った。 やはりよくは知らなかった。旅人は今夜は羽生の町の梅沢という 旅 店 にとまるという。 何 故 ともなく 他 郷 という感が激しく胸をついて起こった。かれも旅人、なにゆえ 田圃の横路を右に別れたんぼ た。 見

-

にわ 桶が の群 が白く闇に見えて、 も来て泊まった。 と思うと、バ 秋は日に日に深くなった。 れ か いくつとなく本堂の前 に P 砲車 あたりは騒々 の通る音がガラガラといつも高く聞こえる。 た稲には、 リバ の列や騎馬の列がぞろぞろと通った。 リと小銃の音が凄まじく聞こえる。 裏の林には馬が二三十頭もつながれて、それに飲ませる水を入れ 士官や曹長が剣を鳴らして出たりはいったりした。 夕日が しくなった。 の庭に並べられる。 一しきり明るくさした。 寺の境にひょろ長い榛の林があって、 夜は 町 の豪家の門に サアベルの音、 林の角に歩兵が散兵線 鴻の巣に通う県道には、 寺でも、 そのころ機動演習にやって 何中隊本部と書 靴の音、 庫裡と本堂に兵士が その向こうの野 いた寒冷紗の布がんれいしゃぬの 馬 のいななく声、 を を 布し 薄は 暮ぼ 来 に V 近く、 の黄 た 七八 た歩兵 て 几 V) 人 斗

はねど、

父君のさてはなんとか働きたまはば、

わが一家は平和ならましを。

この思ひ、

一三日前

0)

土

曜日に例

のごとく行田に行ったが、

帰って来て、

日記に、

母は

つとめて言

清三は

それ

が

一日二日で通過してしまうと、

町は、

しんとしてもとの 静 謐 にかえった。

苦労をかける父親がかれにははがゆくってしかたがなかった。 引き出してつかっ りの深い母親に同情 つも帰行の時に思ひ浮かばざることなし」と書いた。怠けがちに日を送って、 で、 り言を聞くと、 財布 の底をはたいて小遣いを置いて来ることなどもある。 ١, した。 かなる犠牲も堪えなければならぬといつも思う。 顳 顬に 即効 紙をはって、夜更けまで賃仕事にいそしこめかみ そっこうし かれは病身でそして思 それを父親は母親から 時には、 母親 父親に 気にのみ む 母 . 内な

という話を母親から聞いた。 ||三日前に帰った時 にも、 あっちこっちに一円二円と細かい不義理ができて困っている

う。 よに羽生へ帰って来た。荻生さんは心配のなさそうな顔をしておもしろい話をしながら歩 うと言ってみたがだめだった。 いま少し熱心に会員を募ったり寄付をしてもらったりしたならば、 めてしまうほうが結局いいしかただと賛成する。清三はせっかく四号までだしたのだから、 二年は続けたいが、どうも費用がかさんで、 「行田文学」は四号で 廃 刊 するという話があった、石川はせっかく始めたことゆえ、一 郁治はどうせそんな 片 々 たるものを出したって、^^ペ^ 日曜日には荻生君が熊谷から来るのを待ち受けて、 印刷所に借金ができるようでも困るからとい 要するに道楽に過ぎん 続刊の計 画がたつだろ のだからや

いた。 笑った。 途中で、テバナをか 清三は荻生さんの無邪気でのんきなのがうらやましかった。 んで見せた。 それがいかにも巧みなので、 清三は体をくずして

が裏 侶ち には眼が とが よに、 ろ 口 るような気もする。 のように思わ 調 月 朝 のように思われる。 :不思議にさえ思われた。 \hat{O} 銀 0) 霧 の林に見えて、 しと、 初 杏 の深 4 風 めに、 の葉は散 0) /4でよく調子に合った。 琴の六段や長唄の 賤 機 吹 日 1 れ 記に ĺ١ 朝もあ る。 俸給の一部をさいて、 た朝を待ちつけて、 それ 書 って積もる。 前の 月日がい そこに現に子供 つ いた日もあった。 に、 た。 一人で帰って来ても、 記 銀 ち よ う 時を刻むセコンドの音がたえず聞こえて、 野は秋ようやく逝かんとしてまた暑きこと一二日、 このごろは学校でオルガンに新曲を合わせてみることに興味 つの間 清三は幼いころ故郷の寺で、 の実は葉とともにしきりに落ちた。 の群れ 遅くまでかかって熱心に唱歌の楽譜を などをやってみることがある。 銀杏の実を拾ったことを思い にかたって、こうして昔のことを考える身となったこ 秋 雨 はしだいに冷やかに、漆のあかく色づいあきさめ 枕時計を買ったので、このごろは朝はきまって七時 の中に自分もいっしょになって銀杏を拾っ 時計が待っている。 遊び仲間 夜更けに目がさめても 出した。 掃いても掃いても黄 鉄^{てっ}かん なんだかそれ の子供たちとい それ の「残照」 浄 じょうしゃ がまだ昨 柿赤く、 した。 が は変 7 た 0) 蜜み

路傍の尾花に夕日が力弱くさして、 れは チクタクやっている。 ころ裏の林は夕日 い縁側には子傅の老婆がいつも三四人集って、 の「むさし野」 小 この 畑にやる端書に枕時計の絵をかばがき がを寺籠 の印象をさらに新しく胸に感ぜざるを得なかった。 にかがやいて、 物を思う心のリズムにも調子を合わせてくれるような気がする。 りするさびしの友を思へ」と言ってやった。 その最後の余照は山門の裏の白壁 蓼の花の白い いて、 「この時計をわが友ともわが妻とも思ひな 手拍子をとって子守唄を歌ってい 小川に色ある雲がうつった。 学校からの帰途 寺の前 の塀にあきらかに め 7 不動堂 か る。 れは には 2独歩 の高 そ Ō か

ているのを心配した。 それは僕だってのんきにばかりしているわけではありませんさ。 荻生さんはいつもやって来た。 かたがないですもの、 みがちなのを見て、 こんなことを言った。荻生さんは清三のつねに悲しそうな顔をし 成るようにしきゃならないんですもの」 いっしょに町に出て、 しるこを食うことなどもあった。 けれどいくら考えたっ 荻生さんは清三のつね

照った。

さんと酒を飲んだ。夜はもう寒かった。 の月は 明るかった。 裏の林に野分の渡るのを聞きながら、 響った 虫 の声もかれがれに、 庫裡の八畳 寒そうにコオロギが の縁側に、 和尚

鳴いていた

秋は 日 に日に寒くなった。 行田からは袷と足袋とを届けて来る。

一 十· 二

小畑から来た手紙の一。

先日、 今日、 はぬ仕事かな。 これは兄が知らぬからとて、 あるとのことに候ふが、それはほんたうか如何、 ある人(しひて名を除く)から聞けば、 加藤に会ひし時、それとなく聞きしに、そんなことは知らぬと申し候。 ある事はありてよし、 事実無根とは断言出来難しなど笑ひ申し候。 なきことはなくてよし。 君と加藤の妹との間には多少の意義が お知らせくだされたく候。 一臂の力を借さぬでも 君に も似合 けれど

ないのに、なんとか返事ありたく候。

加藤 てくれろといふ始末、 の浮かれ 加減はお話にもならず、かげん 存外熱くなりておれることと存じ候。 手紙が浦和から来たとて、 その一節を写してみ

秋寒し、近況如何。

手紙の二。 お返事

あの背の高い後ろ姿のいいところが気に入る人もあるよ。 くわかった。けれど、 そんなことをしていられるかどうか考えてみよとのご反問の手厳しさ。 君の心はよ サ難 有う。 「あんなおしゃらくは嫌ひだ」は少しひどすぎたりと思ふ。 またあの背の高いお嫌ひ

な人が君でなくってはならなかったらどうする。

たの故だめに候。 もしれねど、簡単に誤解呼はりをする以上の事実があるのを僕は確かな人から聞い たほどに思ふやうな僕にては「無」之「候」。 かう申せばまた 誤 解 呼 はりをするかこれなくそうろう 嫌ひだ」と言うたからとて、さうかほんたうに嫌ひだったのかと新事実を発見し

屋でビールでも飲んで語らうぢゃないか。小島からこの間便りがあった。このごろ この次の日曜には、行田からいま一息車を飛ばしてやって来たまへ。この間、いきるま の君に会ったら、 「林さん、 お変りなくって?」と聞いていた。 また例の蕎麦

に杉山がまた東京の早稲田に出て行くさうだ。歌を難有う。思はんやさはいへそぞ

郷ぢゃない ろむさし野に七里を北へ 下 野の山、 か。 **,** , つか聞いた君のフアストラヴの追 憶 七里を北といへば ではな 足利ではないか。 か。 君の故

手紙の三。

たのが悪いと言はれてもこれもしかたがなしと存じ候。 君の胸には何かがあるやうだ。少なくともこの間の返事で僕はさう解釈した。 解釈

ことなど思ひ出して微笑み申し候。また君の相変らぬ小さき矜持をも思ひ出し候。 ふまでもなきことに候。 りを驚かさず候ふや。未央と申せば、すでにご存じならん。 加藤このごろ別号をつくりたりと申し居り候。 しげ子を。 温順にして情に富めるしげ子を」をさなき教へ子を恋人にする小学教師 「予にして加藤の二妹のいづれを取らんやといへば、 未央生の号を書きていまだ君のあたみおうせい 未央は美穂に通ずるは むしろ \dot{O}

手紙の四。

久しぶりで快談一日、 昨年の冬ごろのことを思ひ出し候。

あの日は遅くなりしことと存じ候。君の心のなかばをばわれ解したりと言ひてもよか

痛切に孤独を感じた。誰も知ってくれるもののない心の寂しさをひしと覚えた。凩が裏のことく

衷察するにあまりあり。 るべしと存じ候。恋――それのみがライフにあらず。真に然り、真に然り、 く暮らすを思へば、 われらは不平など言ひてはをられぬはずに候。 君のごとき志を抱いて、世に出でし最初の秋をかくさびし 君 の 苦 ^{くちゅ}

手紙の五。(はがき)

運命一たび君を屈せしむ。なんぞ君の永久に屈することあらん。君の必ずふるって立

つの時あるを信じて疑はず。

穂子のことからひいて雪子しげ子のことを頭に浮かべた。表面にあらわれたことだけで世 事と、その返事の友の心にひき起こしたこととを細かに引きくらべて考えてみた。 しく語っても、他人はその真相を容易に解さない。親しい友だちでもそうである。かれは の中は簡単に解釈されていく。打ち明けて心の底を語らなければ、 自己のまことの心とその手紙の上にあらわれた状態とのいかに離れているかを思った。美 これらの手紙をそろえて机の上においた。そして清三は考えた。自分の書いてやった返 意気の子の一人さびしの夜の秋 木 犀 の香りしめりがちなる いや心の底をくわ さらに

林をドッと鳴らした。

_ + =:

と、 が代」と「今日のよき日」をうたう声が講堂の破れ と煎餅とが菊の花瓶の間に並べられる。 ら持って来た白の晒布をその上に敷いて、 った。 がぞろぞろ来た。 て見るものもある。 いたのもちらほら見えた。 てそのそばに置い 天長節には学校で式があった。 先生たちが出口に立って紙に包んだ菓子を生徒に一人一人わけてやる。 あとで教員連は村長や学務委員といっしょに広い講堂にテーブルを集めれる。 お時儀をしてそれを受け取った。ていねいに懐にしまうものもあれば、 た。 勅語 中には門のところでもうむしゃむしゃ食っている行儀 女生徒の中にはメリンスの新しい の箱を卓の上に飾って、 紋付きを着た男の生徒もあった。 学務委員やら村長やら土地の有志者やら生徒の父兄やら 小使は大きな薬罐に茶を入れて持って来て、 人数だけの椅子をそのまわ 菊の花の白い た硝子をもれて聞こえた。 晴れ衣を着て、 のと黄いろいのとを瓶にさし オルガンの音につれて、 りに寄せた。 海老茶色の袴をはえびちゃ はかま 0) 生徒は わ それがすむ る 1 紙をあけ 餅菓子 役場 子も にこに めい あ 君 か

め いに配 君 0) め った茶碗 で たい 誕生 についで回った。 日は、 茶話会では収まらなかった。

ル

でも飲

た。 有志 美し った。 ろどころにあがった。 田ももうたいてい きにやった。 をした。 そうに今年の豊作などを話していると、 かける。 もうという話は から い顔をして、 西日が暖かに縁側にさして、 大島さんがコップにビールをつごうとすると、 の寄付が 番あとから校長が行った。 「一杯ぐらい、 誰からともなく出た。 収穫がすんで、 五六円あった。 有り合わせの玉子焼きか そばの街道を喇叭の音がして、例の 大 越 がよいの乗合馬車が 女だって飲めなくては不自由ですな」と大島さんは元気に 向こうのまばらな森の陰からは それでビールは景気よく抜かれ 狭い庭には大輪の菊が白く黄いろく咲いていた。 小川 やが 若い . 何か 屋の娘はきれいに髪を結って、 て教員たちはぞろぞろと田圃 連中は若い でお膳を運んだ。 女教員は手で蓋をしてコップをわ 連中で検定試験や講習会の話など 小川屋に行って、ビー 枯草を燃やす煙がかれぐさもけむり る。 一人前五 村長と校長とは愉快 の中 十銭の会費に、 見違えるように 0 料 理 屋に 畑も 出

その夜は学校にとまった。 から雨滴れがぽたぽた落ちる。 翌日は午後から雨になった。 寺に帰ってみると、 障子がすっかりはりかえられて、 黄いろく色づき始めた野 $\tilde{\sigma}$

女だと、 った。 行 うだね」 くれる、 ·う たから……」 たという。 明るくなって それ と清 ご馳走は買ってお は 三は笑っ と荻生さんはべつになんとも思ってい 11 その友情に感激 νÌ 7 る。 細 た。 君になるんだッたが惜しいことをしました」こういってやっぱり笑 荻生さんが天長節 和尚さんも、 いてくれる、 じて、 その後会っ 障子ははりかえてくれる。 荻 の午後から来て、 生君はほんとうにこまめで親切でやさし た時 な に礼を言うと、 \ \ \ 半日かか 君は僕の留守に まる ってせっせとは で僕 あま 0 り黒く 掃 細 除 君 み は たよ って

十月 麦も取ってしまいたい、まいく台となくやって来る。 晴れ の末 朝ごとの た日には、 から十 演ねは 月の初り 農家の広場に唐箕が忙わしく回った。 たい、麦も蒔 の屋根を白くした。 めにかけては、 寒くならないうちに晩稲の いて しま いたい。 もう関東平野に特色の木 枯 百姓はこう思ってみな一 収しゅうかく 'からは刈り稲を 満 載 まんさい をすま がそろそろたち始め して 生懸命 しま V に た 働 た 車 1

夕暮れ をつけ 寺 iの庫< の忙わしい時分を選んで馬に積んだり車に載せたりして運んで来た。せ 7 は 裡り か \mathcal{O} 入り I) を負けてもらう算段に腐心する П の広場にも 小作米がだんだん持ち込まれる。 のが 小作人の習い であった。 豊年でもなんとか そ 和尚さんは入 れ に , , 理 も 屈

がとか たも V) み うやらこうやら押しつけて帰って行く。 á。 \Box に出出 で Ō 勘がんべん は蕎麦粉を納めに来る。 どうもこんな米ではしかたがな いろいろな苦情を持ち出 て挨拶して、 していただきたい。 まずさしで、 「すと、 「来年は一つりっぱにつくってみますから、 _ しかたがないものですな」と 和 尚いよう 誰もみんなそんなことを言った。 俵から米を抜いて、 (V 小作人は小作人で、 とか、 豆を作ったものは豆を持 あそこはこんな悪 それを明る それ相応な申 い米が って来る。 い 戸 外 に 出 しわ できるはず けを どうか今年は 蕎そ 同麦をつくっ して調 が な ベ ど 7

学校 更けまで聞こえ、 収穫が、 の宿 る 0) もあれば、鶏を一 直室に先生のとまっている すむと、 市日には呉服 町も村もなんとなくにぎやかに豊かになった。 羽料理して持って来てくれるものもある。 屋唐物屋の店に赤 のを知って、 が蹴出だ あんころ餅を重箱にい しの娘をつれ 料理 た百 寺では 屋に三味線 っぱ 姓なども見えた。 夷満 い持って来て の音が 夜

「どうも小作人などというものは

尚

さんは清三に言った。

の末には手水鉢に薄氷が張った。 木枯 の葉はすっかり落ちつくして、 の吹き荒れ た夜の朝は、 楢ら や 栗 の葉が本堂の前のそこここに吹きためられ 鐘 しょうろう 楼 の影がなんとなくさびしく見える。 てい 十一月

麦

をか

みさんが

手ずから打って、

酒を一本つけてくれた。

と沢田とに誘われて、このごろ興行している東京の役者の出る芝居に行ったが、友の調子 から、文学にだんだん遠ざかって、訪問しても病気で会われないこともある。噂では近ごから、文学にだんだん遠ざかって、訪問しても病気で会われないこともある。噂ださ で言うようになった。 もいちじるしくさばけて、春あたりはあえて言わなかった 戯 談 などをも人の前で平気 ろは料理屋に行って、女を相手に酒を飲むという。この前の土曜日に、清三は郁治と石川 行田の友だちも少なからず変わったのを清三はこのごろ発見した。石川は雑誌をやめて 郁治の調子もなんとなくくだけて見えた。 清三ははしゃぐ友だちの

二幕目が終わると、

群れの中で、さびしい心で黙って舞台を見守った。

「僕は帰るよ」

こう言ってかれは立ち上った。

「帰る?」

みんなは驚いて清三の顔を見た。 戯 談 かと思ったが、その顔には笑いの影は認めらじょうだん

れなかった。

「どうかしたのか」

郁治はこうたずねた。

「うむ、少し気分が悪いから」

友だちはそこそこに帰って行く清三の後ろ姿を怪訝そうに見送った。 後ろで石川の笑う

声がした。清三は不愉快な気がした。戸外に出るとほっとした。

それでも郁治とは往来したが、もう以前のようではなかった。

一夜、清三は石川に手紙を書いた。初めはまじめに書いてみたが、ホッペ゚゚ あまり余裕がないの

を自分で感じて、わざと律語に書き直してみた。

意気を血を、叫ぶ声先づ消えて、

卿等の声はまた立たず。さてはまた、野に霜結んで枯るるごと、

ない。これでは、気がある。

俗の香巷に狂ふ。何んぞや一婦の痴に酔ひて、

終に止みなんか、卿等の痴態!
っい
おゝ止みなんか、また前日の意気なきや。

るのになんだかはなはだふまじめになるような気がする。いろいろ考えたすえ、「こんな さて最後に咄! という字を、一字書いて、封筒に入れてみたが、これでは友に警告す

ことは つまら ぬ 言ってやったってしか たが な い」と思って破 って捨 ってた。

校の硝子は たあ 起伏した皺の多い て そこに来ると足をたたずめて立ちつくした。 日 を盟主にした野い 初 1 0) る との 西 冬 風 Ò 0) をよく見かける。 氷が にこの 暖 に そ が 午後 の葉ががらがらと散って、 11 蕳 日は、 山の麓にあった。一日、ふもとあるひ まで残っていることもある。 まで蝿がぶんぶん飛んでい 州う しだい の連 に少なくなって、 山がことにはっきりと手にとるように見えるが、 大越街道を羽生 里の子供が の かれはその故郷 たが、 野には かれ 町 黄いろく紅く色づいた楢や榛や ゅか なら はん \wedge は の故郷なる足利町 寒い 野の中で、それを集めて焚火 それももう見えなくなっ いろうとするあたり 寒 1 の山にすでに雪の白く 西 風 が は、 吹き立った。 からは、 そ の波濤 た。 かれ 栗 来た 日ななた などを は 0 0) 日 田 光 林 ように 1 0) 0) 0) も 队 の学 も 山 連 つ

は思えぬほどその一間は明るかった。 煮えたって、 からと小僧を迎えによこすこともある。 和尚さんも長い夜を退屈がって、 は 心小さい 明る 1 机をそのそばに持って来て、 竹筒台の五分心たけづつだい よく本堂にやって来て話した。 茶^{ちゃうけ} の洋燈のもとに、 庫く裡り は塩煎餅、 の奥の六畳、 新刊の雑誌などを見ている。 か法事でもらったアンビ餅で、文 かみさんが裁縫をひろげ その間には、 夜など茶をいれまし 長火鉢 さび に 鉄っぴん ていると、

見た。

話し 壇のことやそのころの作者気質や雑誌記者の話などがいつもきまって出たが、 Щŧ 瀬の話などが清三のあくがれやすい心をひいた。 校に英語 せるに十分であった。 けとめた話などをして聞かせた。 の下で橋の上から 参 詣 人の投げる銭を網で受ける話や、あいの山で昔女がへらで銭を受が下で橋の上から きんけい ぜに と話が旅行のことに移って行った。 の桜は盛りであった。 逝 玉 語の教師として雇われて二年ほどいた。 主僧は早稲田を出てから 半 歳 ばかりして、 和尚さんの行った時は、 朝熊山 和尚さんはかつて行っていた伊勢の話を得意に の眺望、ことに全渓みな梅で白いという月ケザルは うめ ちょうど四月の休暇のころで、祇園 嵐 それから京都奈良の話もその心をひき寄 伊勢の大廟 たいびょう 伊勢の一身田 から二見の浦、 の専修寺の中学 ある夜、ふ 宇治橋 なって

仏 買って、 橋 俗にあくがれざるを得なかった。 「行違ふ舞子の顔やおぼろ月」という 紅 葉 山 人の句を引いて、 の上の 若草 清三の孤独なさびしい心はこれを聞いて、 Щ 夜のにぎわいをおもしろく語った。 チャラチャラ音をさせて、 世界にめずらしいブロンズの仏像、 「一生のうち一度は行ってみたい」こう思ってかれは自 明るいにぎやかな春の町を歩いたという。 その時は和尚さんもうかれ心になって雪駄をせった。 まだ見ぬところまだ見ぬ山水まだ見ぬ 二千年昔の寺院などいうのをくまなく見 新京極 奈良では大 から三条の 風

己のおぼつかない前途を見た。

暮れて、さびしい 冬はこれで間に合わせるつもりで、足のほうに着物や羽織や袴をかけたが、日ごとにつの 士が 淡 墨 色 にはっきりと出ていて、 る夜寒をしのぐことができなかった。やむなくかれは米ずしから四布蒲団を一枚借りるこょきむ した。 しく吹きすさんだ。 とにした。その日の日記に、 たところでだめなのは知れているし、 行田から羽生に通う路は、 赤城山なア、あかぎさん が多 の暮れはしだいに近寄って来た。 蒲団が ĺ١ から、どうか今から心がけて、 薄いので、蝦のようにかがめて寝る足は 終 夜 暖まらない。宅に言ってやっずいので、タネび 大田圃道 山火事だんべい」 日曜! \exists を一人てくてくと歩いて来ると、ふとすれ違った人が、 の日の暮れぐれに行田から帰って来ると、 吹きさらしの平野のならい、 かれは「今夜よりやうやく暖かに寝ることを得」と書 でき合いを買う余裕もないので、どうかして今年の 行田 夕日が寒く平野に照っていた。 金をむやみに使ってくれぬようにと言ってよこ の母からは、 今年の暮れはあっちこっちの 顔も向けられないほど西 秩父の連山 途中で日がまったく 0) 上 風 \overline{V} 亡に富 が 激

と言って通った。

ふり返ると、 暗い闇を通して、そこあたりと覚しきところにはたして火光があざやかに

照って見えた。 山火事! 赤城の山火事! 関東平野に寒い寒い冬が来たという徴であっ

た。

今年の冬 籠 りのさびしさを思いながら清三は歩いた。

二 十 四

「林さん、……貴郎は家の兄と美穂子さんのこと知ってて?」

「少しは知っています」

雪子は笑いながらこうきいた。

清三はやや顔を赤くして、雪子の顔を見た。

「このごろのこともご存じ?」

「このごろッて……この冬休みになってからですか」

「ええ」

雪子は笑ってみせた。

「知りません」

「そう……」

とまた笑って口をつぐんでしまった。

美穂子が三四日前に、浦和から帰って来ているということをも聞いた。 昨日、冬期休暇になったので、清三は新しい年を迎えるべく羽生から行田の家に来た。 今朝加藤の家を訪

郁治は出ていなかった。すぐ帰りかけたのを母親と雪子が、

「もう帰るでしょ

うから」とてたってとめた。

問したが、

清三は、くわしく聞きたかったが、しかしその勇気はなかった。 胸がただおどった。

雪子が笑っているので、

「いったいどうしたんです?」

「どうしたっていうこともないんですけど……」

やっぱり笑っていた。やがて、

いらっしゃることはなくって?」

「いいえ」

「じや、貴郎、 二人の中にはいってどうかしたッていうようなことはなくって」

「知りません」

「そう」

雪子はまた黙ってしまった。

しばらくしてから、

「私、小畑さんから変なこと言われたから、……」

「なんでもありませんけどもね」 「変なことッて? どんなことです」

話が謎のようでいっさい 要領を得なかった。ょうりょう

午後、とにかく北川に行ってみようと思って沼の縁を通っていると、 向こうから郁治が

やって来た。

「やあ!」

「どこに行った?」

「北川へちょっと」

「僕も今行こうと思っていた」と清三はわざと快活に、 「Art 先生帰っているッていうじ

やないか」

ーうもし

二人はしばし黙って歩いた。

しばらくして清三がきいた。「いったいどうしたんだ?」

「何を?」

「しらばっくれてるねえ、

「何が?」

「大いに発展したッていうじゃないか」

「誰が話した?」

「ちゃんと知ってるさ!」

「誰も知ってるものはないはずだがな」と言って考えて、 「ほんとうに誰が話した?」

「誰だろうな!」

「ちゃんと材料は上がってるさ」

「あててみたまえ」

少し考えて、

君は? 僕はちゃんと聞いて知ってるよ」

「わからん」

「小畑が君、君のシスタアに何か言ったことがあるかえ? 僕のことで」

「ああ、妹がしゃベッたんだな、 彼奴、ばかな奴だな!」

「まア、そんなことはいいから、 僕のいうことを返事しまたえ」

「何を」

「小畑が君のシスタアに何か言ったかッていうことだよ」

「知らんよ」

「知らんことはないよ、僕が君と Art の関係について、中にはいってるとかどうしたとか

言ったことがあるそうだね」

「うむ、そういえばある」と郁治は思い出したというふうで、 「君が北川によく行くのは

どうかしたんじゃないかなんて言ったことがある」

「君のシスタアについても何か先生言いやしなかったか」

戯 談 は言ったかもしらんが、くわしくはよく知らん」

二人は黙って歩いた。

二十五

の暗 業中であるから、 清三に示した。その手紙には甘い恋の言葉がところどころにあった。 知らずに、平気におのろけを言う郁治の態度が、 でできた花環のようにちらついて見えた。 はその長い手紙を細かく読むほどの余裕はなかった。 て郁治にあてて長い返事が来た。 ら美穂子にやる手紙の中に郁治が長い手紙を入れてやったのは一 ころどころの甘い蜜のような言葉はかれの淋しい ことも書いてある。これで見ると、 郁治と美穂子との い洋燈の光のもとでくり返しくり返し読んだことなどが書いてある。 清三はただフンフンと言って聞 おっしゃるとおり、社会に成功するまで、 「新しき発展」について、清三はいろいろとくわしく聞いた。 その返事をかれはその夜とある料理屋で酒を飲みながら 郁治もそんなことを言ってやったものとみえる。 いた。 酒に酔って得意になって、友のさびし 憎くもあり腹立しくもあり気の毒にもな 孤独の眼の前にさながらさまざまの色彩 かれは飛び飛びにそれを見たが、 かたい交際を続けたいという 月ほど前であった。 郁治 お 互 の手紙を寄宿舎 いにまだ修 ٧١ 雪子か 心をも 清三 やが と

「その代わり僕は僕のできる限りにおいて、

君のために 尽 力 するさ!」

こんなことを郁治はいく度も言った。

小畑もそんなことを言っていたよ。僕だッて、 君の 心 地 ぐらいは知っているさ」

こんなことをも言った。

郁治はまた石川のこのごろ溺れている加須の芸者の話をした。 ****

らねえ」 れわれとは違うねえ君。 いう女で、 をするんだとかなんとか言って、 先生、このごろは非常に熱心だよ。 写真を大事にして持っていたよ。 勉強なんぞしないでも、 毎日のように出かけて行くよ。 君も知ってるだろうが、 金持ちの息子なんていうものの心はまるでわ りっぱに一人前になっていかれるんだか 自転車を買ってね、 東京から来た小蝶とか 遠_{まの} り

影をその心に印しているのを予想外に思った。こういう道行きになるのはかれ 想像していた時と事実となった時との感ははなはだしく違った。 く知っていたことである。 た雪子の姿が眼の前を通ってそして消えた。 かに知っていた。 できるだけの力をつくすと言った言葉、その言葉の陰に雪子がいることを清三はあきら けれどそれが清三にはあまりうれしくは思われなかった。つんとすまし ある時はそうなるのを友のために祈ったことすらある。 かれはいまさらに美穂子の姿のいっそう強 もかねてよ けれど

た。

の反動 けられてしまったような気がした。 業という上からも、 清三の で激しく発して来て、 心はさびし ますます消極的 かった。 帰るころには、 自己の境遇が実際生活の上か 初めはどうしても酔わ に傾いてきて、 歌をうたったり詩を吟じたり たとえば柱と柱との間 ~らも、 な か つ 恋愛 た酒 が、 の上 一から あとにな に小さく て郁治を驚か 学問 抻 るとそ 修

た田 が て来 ちも 恋に 飾りがただ目に立った。 正 旅行をする気がな 山 月をする か 自由 [舎娘 少し れ か のように は懐に金を七円持ふところ [を奪わ も見えなか 凸 く離れ 一段落を告げたというような気がないでもなかった。 0) 風 がこの 積まれ、 が て、 れ 毎 V なか \exists 近在の つた。 のように関東平野の小さな町に吹きあれた。 でもない か 看さかなや 屋や えって自己をあきらかに眼 ったのはうれ って 習慣な 郡役所と警察署と小学校とそれにおもだった 富 豪かねもち ・ので、 には鮭が 1 た。 ので、 その中の わざとそれをしまってお しいような気もする。 7 板 台 町は 1 **,** , の上にいくつとなく並べられた。 く分を父母の補助に出すつもりであっ つもに変わらずしんとして、 の前に見るように思っ 今までの友だちに対 いた。 恋を失ったのは 乾 物 屋 がんぶつや 年の暮 た。 の店 れももう近寄 赤 などの注 い腰 には数の しての心持 つら 旧 きゅうれき 巻を 1 たが、 が、 連め 子

父と母と清三とは炬燵を取りまいて戸外に荒るるすさまじい冬の音を聞いていたが、こう 読んだり、時には心理学をひもといてみることなどもあった。そばでは母親が 賃 仕事 あい間を見て清三の綿 衣 を縫っていた。午後にはどうかすると町へ行って餅菓子を買っあい間を見て清三の綿 衣 を縫っていた。午後にはどうかすると町へ行って餅菓子を買っ て来て茶をいれてくれることなどもある。 いく度となくくり返された。 した時に起こりかけた一家の財政の話が愚痴っぽい母親の口から出て、 六畳には炬燵がしてあった。清三は多くそこに日を暮らした。 一夜凩が吹き荒れて、雨に交って霙が降った。 雑誌を読んだり、小説を 借金の多いことが 0)

「いま少し商売がうまくに清三は長大息を吐いた。「どうも困るなア」

「いま少し商売がうまく行くといいんだが、どうも不景気でなア。何をやったッてうまい

ことはありやしない」

父親はこう言った。

「ほんとうにお前には気の毒だけれど毎月いま少し手伝ってもらわなくっては-

は息子の顔を見た。

「それは私は倹約をしているんですよ、これで……」と清三は言って、 「煙草もろくろく

吸 わ ないぐらいにしているんですけれど……」

父さん 前 に にも はほ いま少しかせ んとうに気 の毒だけれど……」 いでもらわなくっちゃ

父は黙 つ 7 1 清三は

父に

向

か

つ

て言った。

なか け ればならぬことを言った。 財政 つ た。 0) 内容を持ち出 か れ は 熱心に借金の して、 母親がくどくどとなお語った。 最後にかれ 不 得 策 は なのを説いて、 しまっておい 貧し た金を三円出 清三は母親に同情せざるを得 ければ貧 U して渡した。 , , ように生活

に七歳 か 女め 聞く が、 もな 髪の長い眉の美しい児がその中にあった。 友だちを訪問し か のが清三にはこの上なくつらか こっちからはめったに出かけて行かな つ 八歳ぐらい いような気がしてよした。 か 'n こても、 の娘の児を相手に、 は退屈すると一軒 もう以前 のようにおもしろくなかった。 った。 お 散歩もこのごろは野が寒く、 キシャゴ弾きなどをして遊んだ。 1, て隣の家に出かけて行って、 () 北川にも行ってみようとは時 会うとかならず美穂子の話が出 それ 郁治はたえずやって来る に 日当たりの あ 々思うが、 たりに る。 見 V な そ る ŧ À れ 縁 側 だ を

警察に転任して来た警部とかの娘で、

まだ小

をひやかして通った。

な心 学校へもあがらぬ 減して試みてみたが、 の調 幸 恋歌などを無意味な あ 子で、 れよ。 この娘の児のやがて生いたたん行く末を想像してみぬ のに、 やさしき恋を得よ」こう思ったかれの胸には限りなき哀愁が たい いろはも数学もよく覚えていた。 かわ 7 いはまちがいなくすらすらと答えた。 , , い声で歌って聞かせた。 百人一首もとびとびに 清三は かれは から十六ま わけ には セン みなぎりわ チ で 1 'の数を. メ か な タル か 加 つ

旧友は そう快活 小畑はことに熱心にかれを迎えた。 熊谷に出かけた日は三十日で、 みな清三の蒼い になった友だちに対してなんだか肩身が狭いような気がした。 顔に沈んだ調子と消極的な言葉とをあやしみ見た。 西風が強く吹いた。 けれどかれ の心は昔のように快活にはなれ 小島も桜井も東京から帰っていた。 清三 なか はまたいっ つた。

角には年のかど 熊谷 毛糸、 (i) どの店でも弓張り -の暮れ 町はにぎやかであった。ここでは注連飾りが町家の軒ごとに立てられて、 シャツ、ズボン下などが山のように並べられてある。 の市が立った。橙、注連、だいだいしめ 提り をつけて、 昆んぶ、 看さかなや 屋や には鮭、 ごまめ、 夜は人がぞろぞろと通り 数の子、 唐物屋 通

だちの間 のかとよそごとに思ってすてた。 という言葉をかれはこのごろある本で読んだことがある。 あった。 てくと行 大晦 日 柄がこういうふうに離れ離れになろうとは知らなかっ 昨年の今ごろ、こうしたことがあろうとは夢にも思っておらなか 畄 に の 朝、 帰 った。 清三はさびしい心を抱いて、 いまさらに感ぜられるのは、 けれどそれは事実であっ 西風に吹かれながら、 境遇につれて変わ た。 その 、時は、 た。 人は境遇 例の長 そんなことが り行く人 つ た。 の い街道 動物 々 0) 親 感情 あるも で あ 1 る 友 で

それ それ 来た。 の年 こしておいた。 いて、 よぼ 夜になってから、 家 に明 越 に応対し に帰ってみると、 そ しをするために町に買 予算の半分ほどもない財布を母に渡した。 よぼ の間に父親は燈明を Ħ の煮染にする里芋を五合ほど風呂敷に包んで、 としおたれた姿で帰って来る。 ているさまは見るにしのびな やがて年越しの膳はできる。 母親は 借金取りはあっちこっちから来ていた。 巾 きんちゃく 着)神 棚 棚 い物に行った。 と台所と便所とにつけて、 の残りの銭をじゃらじゃら音をさせながら、 V) 0) 「あゝあゝ、 し餅を三枚、 父親は勘定が取 清三は見か 重い重いと言ってやがて U ゴマメを一袋、 ねて、 いかたが 火鉢には火をかっかっと起 れ 母親がいちい ぬ の ねえ!」と長大息をつ 金をまた二円出 で、 日 鮭を五 ち頭を下げて、 の暮れるころ、 形ばかり 切 帰って

明星、

新声来る。

腐汁に鮭、ゴマメは生で二疋ずつお膳につけた。 まあ、こうして親子三人年越しのお膳に向かうのはめでたい」と言って、箸を取った。豆 父親ははげた頭を下げて、しきりに神棚を拝んでいたが、やがて膳に向かって、 一室は明るかった。 「でも、

かしていた。清三はそのそばで年賀状を十五枚ほど書いたが、 母親は今夜中に仕立ててしまわねばならぬ裁縫物があるので、 最後に毎日つける日記帳を 遅くまでせっせと針を動

三十一日。

出して、ペンで書き出した。

今歳もまた暮れ行く。

思ふまじとすれど思はるるは、この年の暮れなり。思ひに思ひ乱れてこの三十四年も暮れ行かんとす。

。。。。。。。。かくて最後の決心はなりぬ。

無言、沈黙、実行。

われは運命に順ふの人ならざるべからず。とても、とても、かくてかかる世なれば、

われはた多くは言はじ。

ああ終に終に三十四年は過ぎ去りぬ。 わが一生において多く忘るべからざる年なり

しかな。

言はじ、 言はじ、 ただ思ひいたりし一つはこれよ、 曰 く、 かかる世なり、 一人言は

で、一人思はむ。ああ。

かれは日記帳を閉じてそばにやって新着の明星を読み出した。

_ 구

一月一日。(三十五年)

これは三年の前、 小畑と優なる歌記さんと企てて綴りたるが、 その白きままにて今

日まで捨てられたるを取り出でて、今年の日記書きて行く。

が世の運命、それに逆はん勇なきにはさらさらあらねど、二十余年めぐみ深き母のが世の運命、それに逆はん勇なきにはさらさらあらねど、二十余年めぐみ深き母の に如かじ。 れて口やかましく情とくすべも知らず。草深き里に一人住み、一人自から高うせんれて口やかましく情とくすべも知らず。草深き里に一人住み、一人身ずるさけん □去年、それもまだ昨日、終に世のかくてかかるよと思ひ定めては、またも胸の乱 かくては意気なしと友の笑はんも知らねど、とてもかからねばならぬ わ

にただ無言なれよ。	行かんとする今年の日記よ、言はじ、ただ世にかしこかれよ、ただ平和なれよ。終っい	歎きに、ままよ二年三年はかくてありともくやしからじと思へばこそよ。さてかく
	終い	<

さらばとてかれもまたかかる人とは思ひ捨てんこそ世にかしこかるべし。 れの心事、懐に剣をかくすを知らぬにあらねど、争はんはさすがにうしろめたく、 □恋は遂に苦しきもの、 われ今またこれを捨つるもくやしからじ。 加藤のそれ、か

□今日始めて熊谷の小畑に手紙出す。

二日。

昨夜鈴木にて一夜幼き昔を語りあかす。

|ああわれをして少年少女を愛せしめよ。またもかくての世に神は幸を幼きものに

のみ下したまへり、 ああわれをして幼きものを愛せしめよ。

時にいふがごとき冷静も乱れんも知れじを、 Art ! それやなんなるぞ、とてもあさましき恋に争はんとにはあらじと思へば、 ああなどて好ましからぬ思ひの添ふぞ、

は]夕方西に紅の細き雲棚引き、上るほど、うす紫より終に 淡 墨 に、下に秩父の山くれないほそ たなび のぼ かなきことなるかな。ああ終に終にかくてかかるなり。

例へんに恋にやぶれ、 黒々とうつくしけれど、そは光あり力あるそれにはあらで、冬の雲は寒く寂しき、 世に捨てられて終に冷えたるある者の心のごときか

三日。

な。 神に「救へ」と呼ばんの願ひなきにあらず。 昼より風出でて梢鳴ることしきりなり、冬の野は寒きかな、 人の世を寒しと見て野に立てば、さてはいづれに行かん。夕べの迷ひにまたも 荒む嵐のすさまじきかすさぁらし

四日。

言はたして、 夕方、 にてわが力にてでき得べき限りにおいて言へ」を言ふ。 情も知らぬもの、 沢田来る。 かれの心よりの言葉か。 友を売りてわが利を得んとするものか。 加藤われらを勧めて北川にかるた取りに行く。 われ日く「なし」と。この また例の かれやなんらの友 「君の望むこと

五日。

なれば心少しくためらひなきにあらざりしが、思ひしより冷静をもってをはりたり。 を守るべきこと」につきて述ぶ。かくのごとき会合において演壇に立ちしは たま~~学友会の大会に招かれて行く。すなはち立ちて、 「集会において時間 初め の約

余興として 小 燕 林 の講談あり。

六日。

加藤と雪子と鈴木君の妹の君とかるた取る。

思ふ所あり、なんぞ妄りに汝の 渦 中 に落ち入らんや。 さもあらばあれ、冷酷なる運命の道にすさむ嵐をしてそのままに荒しめよ。 ら容易ならざるに、なほも一人の母と一人の父とのために走らざるべからざるか、]夜、戸の外に西風寒く吹く。ああわれはこの力弱き腕を自己を、 高きに進ますす われに

松は男の立ち姿

意地にゃまけまい、ふけふけ嵐、

□このごろの凩に、さては南の森陰に、弟の弱きむくろはいかにあるらん。□このごろの凩に、さては南の森陰に、弟の弱きむくろはいかにあるらん。 枝は折れよと根は折れぬ (正直正太夫)

にて今日も訪はず。 かくて明日は東に行く身なり。

心のみ

七日。

羽生の寺に帰る。

心にはかくと思ひ定めたれど、さすがに冬枯れの野は淋しきかな。

身を煩はすべきぞ。 ああさはれとてもかかる世ならばわれはただ一人恋うて一人泣くべきに、 □○子よ、御身は今はたいかにおはすや。笑止やわれはなほ御身を恋へり。 何とて御 さは

主の僧ととろろ食うて親しく語る。夜、寒し。

九日。

今朝、この冬、この年の初雪を見る。

夜、

荻生君来たり、

の温かさよ。 願はくばわれをして友に誠ならしめよ。 (夜十時半記

わがために炭と菓子とをもたらす。

冷やかなる人の世に友の心

□十日より二十日まで

またものうく、かくて絵もかけず詩も出でず、この十日は一人過ぎぬ。 ものうくて、日ごろ親しき友に文書かんも厭や、行田へ行かんも厭ふにはあらねど、 はては神にすがらん力もなくて、人とも多くは言はじな、語らじなと思へば、いと ど、さすが 人 並 賢く悟りたるものを、さらでも尚とやせんかくやすらんのまどひ、 この間十日余り一日、 思ひは乱れて寺へも帰らず。かくて老いんの願ひにはあらね

□土曜日に荻生君来たり一夜を語る。情深く心小さき友!

「好んで詩人となるなかれ、好んで俗物となり得ず。はては惑ひのとやかくと、熱き情も詩人となり得ず、さらばとて俗物となり得ず。はては惑ひのとやかくと、熱き情のふと消え行くらんやう覚えて、失意より沈黙へ、沈黙より冷静に、かくて苦笑に止まらん願ひ、とはにと言はじ、かくてしばしよと思へば悲しくもあらじ。さはれた。 また静かにわが身の運命を思へば、ああしばしはかくてありなん。 また静かにわが身の運命を思へば、ああしばしはかくてありなん。 また静かにわが身の運命を思へば、ああしばしはかくてありなん。 おるる心を静むるのは幼き者と絵と詩と音楽と。 こういうふうにかれの日記は続いた。昨年の春ごろにくらべて、心の調子、筆の調子がいちじるしく消極的になったのをかれも気がつかずにはいられなかった。時には昨年の日にあるしく消極的になったのをかれも気がつかずにはいられなかった。時には昨年の日にあるしく消極的になったのをかれも気がつかずにはいられなかった。時には昨年の日にあるしく消極的になったのをかれも気がつかずにはいられなかった。時には昨年の日になるしく消極的になったのをかれも気がつかずにはいられなかった。時には昨年の日になるしく消極的になったのをかれも気がつかずにはいられなかった。時には昨年の日になるしく消極的になったのは、対しなれている。
--

□加藤は恋に酔ひ、

小畑はみずから好んで俗に入る。この間、

かれの手紙に曰く

笑い

・の影が

いたるところに認められる。今とくらべて、

世の中の実際を知らぬだけそれだ

けのんきであった。

ぞろぞろやってくる時分までゆっくりと寝ていられるものだから」などと言った。 ざ弥勒まで出かけて行くと、清三はべつに変わったようなところもなく、 宿直室に寝たり、 積もったまま、 どもある。 のういので、 に二里足らずの路を朝に夕べに通うのはめんどうくさい。 もあるんですかねえ」と言った。荻生さんが心配して忙しい郵便事務の閑をみて、サヤタ と思うほどその心は傷 く起きて通うのが辛い している髪もきれ 「林君、どうしたんですか、 消 極 的 にすべてから 本堂の一間に荻生さんが行ってみると、主はたいてい留守で、机の上には塵が

ちり 弁当をそこここで取って食った。 古い新声と明星とがあたりに散らばったままになっている。 いに刈り込んで、にこにこして出て来た。「どうもこの寒いのに、 村の酒屋に行って泊まったり、時には寺に帰って寝たりした。 ものだからねえ、君、ここで小使といっしょに寝ていれ ついていた。 恋から、 あまり久しく帰って来ませんが……学校に何か忙しいことで 寺の本堂の一間はかれにはあまりに寂しか 世から、 友情から、 駄菓子などで 午 餐 をすましておくことな 家庭からまったく離れ かれは 放 減 減 減 する人々 いつも 和_{しょ} 尚っ ば、 つ てしまおう 無 に と と と う 自炊がも のように、 八畳の 小供が さんは、 それ 朝

かれ 終わ ねえ」と感心した。 L の写生が一枚あった。 で夕日のさし残ったところと、 間で、 か けた は茶を飲みながら二三枚写生したまずい水彩画を出して友に示した。 って校長や同僚が帰ってから、 長押の釘にはなげし のと、 か れがこのごろ始めた水彩画の写生しかけたのとが置い 清三はこのごろ集めた譜のついた新しい歌曲をオルガンに合わせてひ 荻生さんは手に取って、ジッと見入って、 古袴が 暮靄の中に富士の薄く出ているところと、ぽあい だの三尺帯だのがかけてある。 清三は自分で出かけて菓子を買って来て二人で食った。 机には生徒の作文の朱で直 「君もなかな てあ それ 学校の門と、 う か器 に生徒の顔 用です 教授が 垣

は雀 駄もどうかすると埋まって取られてしまうことなどもある。 た生徒は ねを上げて通った。 冬はいよいよ寒くなった。昼の雨は夜の霙となって、 |がやかましく 雪 達 磨 をこしらえたり 雪 合 戦 をしたりしてさわいでいる。ゆきだるま ・ 百 轉り をしている。 雪の来たあとの道路は泥濘が連日乾かず、でいねい あくれば校庭は一面の雪、 乗合馬車は屋根の被いまでは 美しく晴れ 早く来 た軒 高

いてみせた。

かならんという状態から、やがて「自己のつくすだけをつくしていさぎよく運命に従おう」 机 が前 0 障 子にさし残る冬の日影は少なくとも清三の心を沈静させた。なるようにし

霙の降る立みぞれ という心の状態になった。 かくてこのままこの係蹄に終われ。 すがに苦しからじ」と日記に書いてみずから独り慰めたりした。 にも行 をかくすべき縁持 またある日 となくて暮らさばや、 しもとを免がれ得 って家の 田 をとれて、 の家にも行かず、 の日記 母の情を思ったり、 能には、 ぬ不運児か。 つ人間なればぞ、 「夜は寒みあられたばしる音しきりさゆる寝覚めをねず わが世の昨日は幸なきにもあらず、幸ありしにもあらず」と書いた。 「昨夜、 嘆 息と涙とのあとに、 「今日は ひそかに救け得させべくば救けも得さすべきを、 「さむきさびしき夜半の床も、 個 日曜日、 哀れなるものよ」と書いてあった。 哀れなるものよ、むしろ汝は夜ごとの餌に迷ふよりは、 回の老鼠、こ またしても一日をかくてここに過ごさんと一 係蹄にかかる。 静かなさびしいしかし甘い安静 哀れなる者よ。汝も運命 さは またある れ (母 日曜 心 時 静 1 $\dot{\exists}$ は か か を羽 な なら わ れ ħ 思うこ 生の寺 が来た。 も z 汝

無邪気なしげ子をなつかしく思うようになった。 郁治も 孝明天 いな 桜井も小 か 「皇祭の日を久しぶりで行田に帰ってみると、 **^**つた。 畑も高等師範 雪子は例 のしらじらしい態度でかれを迎えた。 の入学試験を受けるために浦和に行ったという知らせが 帰る時、 話相手になるような友だちは 母親は昨日からたんせいして煮 かれ は むしろ快活な

人朝は遅くまでい

ねたり」

と書いて宿直室に過ごした。

てあった鮒のかんろ煮を折りに入れて持たせてよこした。

字は 第五 には、 れほどかれは世事にうとく暮らした。 なかった。愛読していた 涙 香 の 「 巌 窟 王 」 も中途でよしてしまった。 ことはどうでもよかった。 このごろはまったく世に離れて一人暮らした。新聞もめったには手にしたことはない。 師団 いろいろと話の種にしたり日記をつけておいたりするのであるが、このごろはそんな ある夜、 一面と二面とに毎日見える。 今日は 竹藪が五十坪ほどあって、たけやぶ .の分補問題、 ぶんどりもんだい 節分かしらん」と思って、 その向こうの百姓家から「福は内、 青森第三連隊の雪中行軍凍死問題、鉱毒事件、 人が話して聞かせても、 平生ならば、 夕日がいつもその葉をこして宿直室にさしこんで来る 清三は新聞の正月の絵付録日記を出してみた。そ 鬼は外」と叫ぶ爺の声がもれて聞こえた。 新聞を忠実に注意して見るかれのことと 「そうですか」と言って相手にもなら 学校の庭 の後ろ 二号活

毎 目 匹 時過ぎになると、 前の銭湯の板木の音が、 静かな寒い茅葺屋根の多い田舎の街

道に響いた。

「どうです、 羽生 和 尚 さんと酒を飲んで、 一つ社会を風靡するようなことをやろうじゃありませんか。

なんでもいいで

すから」

と考えることもある。 員になろうか。 想界の救済でも、 わざとこの孤独な生活に生きようというような反抗的な考えも起こった。 とは思うが、また一方では小学教員を尊い神聖なものにして、 て受けたいと自分は思う。 物質は得なければならない。 して一生を送るほうが理想的な生活だとも思った。 こんなことを言うかと思うと、 それとも自分はこの高き美しき小学教員の生涯を以て満足 それは何をするにしても、 一方には多くの友だちのようにはなばなしく世の中に出て行きたい それには自分は小学校の教員からだんだん進んで中学程 そしてそれはなるべく自分が社会につくした仕 「自分はどんな事業をするにしても、 人間として生きている上は生きられ 友に離れ、 少年少女の無邪気な伴侶と 恋に離れ、 社会の改良でも思 社会に離れ しようか」など 事 0 報 る だけ 度 酬とし の教 Ó

私 から荷物を持って来て、ここに自炊なりなんなりしているようにしたら……。 いどうなさるんです、こうあけていらしっては間代を頂戴するのもお気の毒だし……それ のほうでもわざわざ宿直を置かないでいいし、 ある日校長が言うた。 二里の道を通うという労力がはぶける」 「どうです。そうして毎日宿直室に泊まっているくらいなら、 羽生の和尚さんもこの間行った時、 君にも間代が出なくって経済になる。 そうすれば、 「いった 第

寺から運んで来た。 行田にもそうたびたびは行きたくなくなった。かれは月の中ごろに蒲団と本箱とを羽生の まった友の群れも離散した。かれ自身にしても、文学書類を読むよりも、 らべると、希望も目的も感情もまったく違ってきた。「行田文学」も廃刊した。文学に集 と今の心地といちじるしく違ってきたことを考えずにはいられなかった。そのころからく に、冬は通うのにずいぶん大変ですからなア」と言った。清三は寺に寄宿するころの心地 音楽の譜の本を集めてオルガンを鳴らしてみたりすることが多くなった。それに、 絵画の写生をし

_ 十 十

「喜平さんな、とんでもねえこんだッてなア」

に日振りに行くけえ、ご苦労なこっちゃなアッて挨拶しただアよ。わからねえもんただよ 「ほんにさア、今朝行く時、己アでっくわしただアよ、網イ持って行くから、この寒いの

「どうしてまアそんなことになったんだんべい?」

「ほ んにさ、あすこは 5 掘 切で、 なんでもねえところだがなア」

「いったいどこだな」

分 突っささったまま、首イこうたれてつめたくなったんだッてよ」 「そら、 あの西の勘三さんの田ン中の掘切で死ねていたんだッてよ。 泥深い中に体が半

、、 「今日ははア、 御 賽 日 ぢ 「あっけねえこんだなア」

御賽日だツてに。 これもはア、そういう縁を持って生まれて来たんだん

✓ \ _

その日 れの小屋に住んでいる、 「わしらもはア、この春ア、 はる 湯気の籠った狭い銭湯の中で、ゆげこもせま |||やら の口をぬらしていた。 掘 切 やらに出かけて行った。途中で学校の先生や村役場の人などにでっくわほっきり 五十ばかりの爺で、雑魚や鰌を捕えては、それを売って、 毎日のように汚ないふうをして、古いつくろった網をかつい 日振りなんぞはよすべいよ」 村の人々はこうした噂をした。 喜平というのは、 その日 村はず

れて生きて死んで行く人をこうして噂し合っている村の人々のことを考えずにはいられな

清三は湯につかりながら、

いつもてい

ねいに辞儀をした。それが今日掘切の中でこごえて死んでいたという。

村の人々のさまざまに噂し合うのを聞いていた。こうして生ま

かった。 古 網を張ったまま、 した。茫とした湯気の中に 水 槽 に落ちる水の音が聞こえた。 泥の中にこごえた体を立てて死んでいた爺のさまをも想像

一 十 八

授業もすみ、同僚もおおかた帰って、校長と二人で宿直室で話していると、そこに、 雑ざ

魚売りがやって来た。

「旦那、鮒をやすく買わんけい」

障 子をあけると、にこにこした爺が、 びく をそこに置いて立っていた。

「鮒はいらんなア」

「やすく負けておくで、買ってくんなせい」

校長さんは清三を顧みて、「君はいりませんか、やすけりゃ少し買って甘露煮にしておか長さんは清三を顧みて、「君はいりませんか、やすけりゃ少し買って甘露煮にしてお

くといいがね」と言った。で、二人は縁側に出てみた。

には、五寸ぐらいから三寸ぐらいの鮒が金色の腹を光らせてゴチャゴチャ

している。

「少し小さいな」

と校長さんは言った。

「小さいどころか、甘露煮にするにはこのくらいがごくだアな。それに、

板倉で取れいたくら

たんだで、骨は柔らけい」

種類としては質のいい鮒なのを校長はすぐ見てとった。利根川を渡って一里、そこに板種類としては質のいい鮒なのを校長はすぐ見てとった。 きねがわ

河 床よりも低い卑湿地で、小さい沼が一面にあった。 上 州 から来る鮒や雑魚のうまかわぞこ ひしっち 倉沼というのがある。 沼のほとりに 雷 電 を祭った神社がある。 そこらあたりは利 根川 0

いのは、ここらでも評判だ。

幾がけだね?」

「七なら高くはねえと思うんだが」

七は高い!」

目方をよくしておくだで七で買ってくんなせい」

「五ぐらいならいいが」

「五なんてそんな値はねえだ。じゃいま半分引くべい」

清三は校長さんの物を買うのに上手なのを笑って見ていた。 六がけで話が決まって、小

使がそこに桶と摺り鉢とを運んで来た。ピンとするほどはかりをまけた鮒はヒクヒクと鰓しがそこに桶と摺り鉢とを運んで来た。ピンとするほどはかりをまけた鮒はヒクヒクと鰓と を動かしている。爺はやがて銭を受け取って軽くなったびく をかついで帰って行く。

「やすい、やすい。これを煮ておきゃ、君、 十日もありますよ」

に分けて、 い、コケがまるでこっちで取れたのとは違うんですからな」と言って清三に示した。 こう言って校長さんは、 小桶に入れて、 小使が校長さんの家に持って行った。 鮒の中でも大きいのを一尾つかんで、 「どうも、 上州の鮒は 半分

裏に火を起こして焼いた。 ったく占められるような大きなのも二つ三つはあった。薄くこげるくらいに焼いて、 その日は鮒の料理に暮れた。 爼 板 の上でコケを取って、 金 串 にそれをさして、ふな ふなぐし 小使はそのそばでせっせと草鞋を造っている。 一疋で金串がま それ 囲い爐る

を藁にさした。 「ずいぶんあるもんだね」と数えてみて、「十九串ある」

「やすかっただ、校長さん負けさせる名人だ。これくらいの鮒で六っていう値があるもん

かな」

試みに煮てみようと言うので、五串ばかり小鍋に入れて、焜爐にかけた。寝る時味わっまみに煮てみようと言うので、五串ばかり小鍋に入れて、足ぬろしまります。あじまし 小使はそばから言った。

てみたが骨はまだ固かった。

頼で、 いう餡餅な げと乾鮭とで日を送った。 生徒は時々萩の餅やアンビ餅などを持って来てくれる。 もろこしと 糯 米 の粉で製したと って教わりに来るものが多くなって、 負けぬように学問したいと思って、 東京に出て勉強するのも心持ち一つで同じことだ。学費を親から出してもらう友だちにも い過ぎたので、分けてやった小使は 自炊生活は清三にとって、 高等の生徒に英語を教えてやったのが始まりで、だんだんナショナルの などをも持って来てくれる。どうかして勉強したい。田舎にいて勉強するのも 鮒の甘露煮は二度目に煮た時から成功した。 けっきょく気楽でもあり経済でもあった。 心理学や倫理学などをせっせと読んだが、 「林さんの甘露煮は菓子を食うようだア」と言った。 のちには、こう閑をつぶされてはならないと思いな 多くは 砂糖をあまり使 余儀 豆腐 一や二を持 なき依 と油

二月の末には梅が咲き初めた。 障子をあけると、 竹^たけやぶ の中に花が見えて、 風につれて

がら、

夜はたいてい宿直室に生徒が集まるようになった。

鄙はさびしきこの里に ^{ひな} 一日、かれは机に向かって、

匂

いがする。

。さきて出でにし白梅や、

枝いだきてただ一人

低くしらぶる春の歌

中学世界に梅の絵に 鄙 少 女 を描いた絵葉書のあるのを発見した。かれはそれを手に取っ 子というのがあって、音楽が好きで、その身も二三度手紙をやり取りしたことがあるのを ろうと思った。けれど監督の厳重な寄宿舎のことを思ってよした。ふと美穂子の姉にいく てその歌を書いて、 と歌って、それを手帳に書いた。 「都を知らぬ鄙少女」と署して、さてそれを浦和の美穂子のもとに送 淋しい思いが脈々として胸に上った。ふとそばに古い

春の歌」と歌うと、つくづく自分のさびしいはかない境遇が眼の前に浮かび出すような気 かれは夕暮れなど校庭を歩きながら、この自作の歌を低い声で歌った、 「低くしらぶる

がして涙が流れた。

思い出して、

譜をつけてそこにやることにした。

治から来る手紙には美穂子のことがきっと書いてあるので、返事を書く気にもならなかっ 処世上の意見が合わないので、 このごろ、友だちから手紙の来るのも少なくなった。熊谷の小畑にも、この間行った時、 議論をしたが、それからだいぶうとうとしく暮らした。郁

がし

っくり自分に合って来た。

な意地 た。 行っても、 それに引きかえて、 0) 悪い 先生先生と立てられぬところはない。 教員が加須に行ってしまったので、かぞ 弥勒の人々にはだいぶ懇意になった。このころでは、どこの家にからく それ 気のおける人がなくなって、 に、 同僚の中でも、 師範校出 学校の空気 のきざ

に 口ぐ ち 詣に行った生徒が二組三組寄って行った。 行くので、その日は毎年学校が休みになる。 地もないほど人々が参詣した。 高 取 というところに天満宮があって、三月初旬の大祭には、ヒホッヒリ 物のび の音がたえず聞こえた。ことに、手習いが上手になるようにと親がよく子供をつれ の休みにも、 日曜日にも、 清三も昔一度行ってみたことがある。 たいてい宿直室でくらした。 午後清三が宿直室で手紙を書いていると、 近在から境内 利根川を越えて 見世物、 露って 店-ん 立りつすい 参 7

二十九

八軒はある。 発戸には機屋がたくさんあった。市ごとに百反以上町に持って出る家がすくなくとも七ほっと はたや もちろん機屋といっても軒をつらねて部落をなしているわけではない。

巻いていて、 っと見ると、 夏は茄子や 胡 瓜 がそこら一面にできる。 普通の農家とはあまり違っていない。 **蠶**一豆、 玉蜀黍の広葉もガサガサと風とうもろこし ひろば の畑がまわりを取

なびく。

のそばで雇い人がしきりにそれを選り分けている。 とそこに干しつらねられる。 糸を繰る座繰りの音が 驟 雨しゅうう って、そこに染工職人がせっせと糸を染めている。 前 けれど家の中にはいると、様子がだいぶ違う、 の広庭には高 い物干し竿が幾一列びにも順序よく並んでいて、 藍 瓶 が幾つとなく入り口の向こうにああいがめ 白い糸が山のように積んであると、 反物を入れる大きな戸棚もたんもの のようにあっちこっちからにぎ 朝から 紺 糸 がずらり 見える。

機屋のまわりには、 賃 機 を織る音が盛んにした。

やかに聞こえる。

あたりの村落のしんとしているのに引きかえて、ここには活気が充ちていた。 金持ちも

あれば、 とが毎月一つや二つは出る。 多かった。 発戸は風儀の 利根川に臨んだ崖から、 他郷からはいって来た若い男女もずいぶんあった。 の悪 い村と近所から言われている。 機屋の亭主が女工を 片 端 から姦して牢屋に入れられた話もはたや 越後の女と 上一州 の男とが 情一死 をしたことなどもぇちご じょうしゅう 埼玉新報の三面種にもきっとこの村のこだね

ある。 月が 街道に接して、 来ると、 、だるま屋も二三軒はあった。 な 盆におど りが毎晩そこで開か

していると、

そ

夜で、 にやみそうな気勢もな かりであっ ようとも思わなかった。 ちぎられてしまいますからな」と訓導の杉田が笑いながら言った。 ませんな……けれど、 る音が手にとるように講堂の硝子にひびいてはっきりと聞こえる。 まだ行ってみたことがないんですか。 垣には は虫の声 盛ん がが 林さんのような色男はよほど注意しないといけませんぜ、袖ぐら \ <u>`</u> 雨のように聞こえていた。 ただそのおもしろそうな音が夜ふけまで聞こえるのを耳に 昨年 の九月、 清三が宿直に当たった時は、 それじゃぜひ一度出 「発戸の盆踊りはそれは盛ん れた。 学校に宿直 かけてみなくっては しか + ちょうど月のさえた 時を過ぎても容易 し清三は行ってみ ですが、 したば , , 0) け 林 蛹

は他とは違っていた。 かと庭からはい ではここに男ぶり そのほ を見ても、 かに 発戸 って来て、 Ó 発戸のことについて、 , の V 野卑な歌を口ぐせに教場で歌って水を満たした茶碗を持って立たせゃぃ 風儀 V 教員などが宿直をしていると、 ずうずうしく話をしていくことなどもあったという。 の悪いのはわ 清三の聞いたことはいくらもあった。 かった。 同じ行儀の悪い 発戸の女は群れをなして、 のでもそこから来 一二年 それ ず る 生 か か 前 徒 ま

られる子などもあった。

早く役場の向こうの道を歩いているのに出会うこともあった。 生が野川 いることもあれば、畠にいる人々と 挨 拶 していることもある。 かぶった背のすらりとしたやせぎすな姿はそこにもここにも見えた。 ||三人つれて、林の中で花を摘ませて花束を作らせたりなんかしていることなどもある。 弥勒野の林の角で、夕暮れの空を写生していると、ゃろくの 春になって、野に菫が咲くころになると、清三は散歩を始めた。 の橋の上に立って、ぼんやりと夕焼けの雲を見ているのを見たこともある 役場の小使と立ち話をして 時には、 古ぼけた茶色の帽子を 百姓は学校の若 学校の女生徒を、 い先 朝

「やア、先生だ、先生だ!」

「やア画を描いてるんだ!」「先生が何か書いてらア」

あの雲を描いてるんだぜ」

などと近所の生徒がぞろぞろとそのまわりに集まって来る。

「うまいなア、先生は」

「それは当たり前よ、先生じゃねえか」

「その下のがあの家だ」「あああれがあの雲だ」

榛^はの 通り も知 に な れを根ごし か きになってせっせと何か物を洗っていた。 番できる女生徒の に行くと、 く書け って 田圃の中に通じて、たんぼ 吹ぶいちょう 清三はだんだん近所のことにくわしくなっ う 並木があったりした。 抜けようとすると、 た。 V る て筆を運ば た。 0) 豪農 そ か の生徒たちはめずらしいことを見て知っているというふうにそれを他 と疑うかのように、 して取 ちょうどその時その娘はそこに出てい の家の樫の垣の向こうに楊のかしかし いせてい 家があることをも知った。 「先生、 っ て 来 白い ると、 パて鉢に植る ある時層のなら お 昨日書いてた絵を見せてください!」などと言っ 塵りほこり つかさん、 勝手なことを言ってしゃべっている。 じっと先生の顔をのぞきこむ子などもあった。 がかすかな風にあがるのが見えた。 え 0) 7 林 先生が . О 机 中に 加か 須ぞ 0) 上 た。 その家には草の茂っ 生えた小 一に置 色のこい菫がずみれ に通う街道には畠 通るよ!」と言った。 林の奥に思い た。 \overline{V} た。 $|\tilde{|}|$ が 「お 村をはずれると、 あって、そこに高等二年生 咲い 前の家はここだね」 もか てい た井 があ け どうしてあ 母親 b た つ 戸があって桔※がはねつるべ 機 た 国わ たり のを発見し 軒家が は 街道は た。 森 小 りの が \prod あ と言っ あ À 翌. で後ろ向 車やつ う ること 日学 0) なうま たり 生 7 か 徒 校

かれた旅客などがおりおり通った。

くな 村 その隅にできていた。 している人もいくらもある。 る人々にくらべて考えてみた。 ただただ功名に熱し学問に熱していた熊谷や行田の友人たちをこうしたハ 屋を建てるために えながら歩い 分焼けた流しもとでは、襷をした女がしきりに 膳 椀ぱんかん この家だなとか と気がつくと、 ことなどをも思い 0 あ って 人が る いてみた。 夜 出たりはいったりしている。 l, る。 学校の れ 豪い人にはそれはなりたい、 清三はその焼けた家屋の前に立っているのを発見した。 やがてその火事は手古林であったことがわ やらぬわけにはいかなかった。 前 もある個 は思った。 夜の不意のできごとのために、 0) 半鐘 焼けあとには灰や焼け残りの柱などが散らばっていて、 が激 人 それは村道に接した一軒家で、 の一生を激し 続いて日ごとに新聞紙上にあらわれる豪い 家の幸福 しく鳴った。 か れは平和な田舎に忽然として起こった事 い労働についやさねばならぬのであ 弱 りっぱな生活を送りたい。 竹藪の向こうに出て見ると、 い母の幸福を犠牲にしてまでも、 金銭のとうとい 家の運命に大きな頓座を来たすべ を洗っている。 藁でかこっ か つ 田舎では新たに一 た。 小 翌 た小 L この間 々 屋掛け 空がぼ か] 人々のライフを 日 ·屋 掛カ ドライフを送 0) 平凡 る。 の中 焼 散 井 け 歩に、 功名にお 戸 け んやり赤 に生活 か 軒 件 が た か 側 もう を 5 0) れ 0 0) き 考 ú 半 ú ふ は 家

も む か なくってはならぬこともない。 むしろ自分は平凡なる生活に甘んずる。

がら か れ は 步 V

耳には たせが、 張り込まれて に咲 情 しんじゅう 発見した。 はいって、 そこには葦と萱とが新芽を出して、蛙が音を立てて水に飛び込んだ。 寒 て自然のおだやかな懐に 1 あっ 7 日に体を泥の , , した話など、 いたりした。 たり、 地主と小作人との関係、 主人と細君とをしばり上げて金を奪って行っ 強 姦された村の子守りの話、 家事を苦にして用水に身を投げた女の話、 林の角からは富士がよく見えたり、 中につきさしてこごえ死んだ爺の それにこうして住んでみると、 聞けば聞くほど平和だと思った村にも辛い悲し 抱かれ ていると思った田舎もやっぱり争闘 富者と貧者のはなはだしい 三人組の強盗が抜刀で上村 聞くともなしに村 田に 掘 切にも行ってみたことがほっきり た話、 旅 人 にだまされて 蓮華草 繭の仲買いまゆなかが 懸隔、 が 敷 森 いライフが の巷利欲の 清 の中 1 0 1 の 11 1 たようにみごと 、理想的 男と の豪農 林 ろいろな に は荒 0) 中 あ 0) 世 の家 に あ 0) る れ 生 引ひ で 0) 活 を と が

それに、 にもそんなことが多い。 田 舎は 存外 · 猥いせつ やれ、 で淫靡で不潔であるということもわかってきた。 どこの娘はどうしたとか、どこのかみさんはどこの誰 の

るということがだんだんわか

ってきた。

が絶えないとか、そういうことがたえず耳を打つ。それに、そうした噂がまんざら虚偽でが絶えないとか、そういうことがたえず耳を打つ。それに、そうした噂がまんざら虚偽で と不義をしているとか、誰はどこにこっそり妾をかこっておくとか、女のことで夫婦喧

ないという 証 拠 も時には眼にもうつった。

かれは一日、また利根川のほとりに生徒をつれて行ったが、その夜、 次のような新体詩

を作って日記に書いた。 松原遠く日は暮れて

利根のながれのゆるやかに

ながめ淋しき村里の ここに一年かりの庵いお

はかなき恋も世も捨てて 願ひもなくてただ一人

さびしく歌ふわがうたを

あはれと聞かんすべもがな

かれは時々こうしたセンチメンタルな心になったが、しかしこれはその心の状態のすべ

と 洒 脱 に がっだつ 出か もな ある。 ける にうつって、 車の便が の二県は 女郎買い てではな か には 遊 けたものですなア。 なかにぎやかなものでしたが、 廓 店が ある。 が か な口ぶりで、 に行く話などをもおもしろがって聞いた。 か 茨城県の古河か中田 な つて った。 あれ \ \ \ それはおもしろかったのですよ」と老訓導は笑って語った。 大越から土手の上を二里ほど行って、 廃娼論 論 村の でも五六軒はありますかなア。 足利の福井は遠い そこから近いその 若 利根 い者が夜遅くなってから、 の盛 Ш かに行くよりほ の渡しをいつも夕方に渡って行くんだが、 んであっ 今ではだめですよ。 遊 か な か く 佐野 た土地なので、 のあら町は不便だし、 か の話をして聞かせることが 昔、 しか 栗橋の 大_{おおごえ} たがな 奥州街道が栄えた時 利根の渡しをわ その管内にはだるまば 私など、 川向こうの四里もあ から通う老訓導は、 \ \ \ 中田 ここらから若者 若い たれ には · 時 夕焼け 分に ある。 ば にはそれ 大越まで乗合 中田は は、 か 酒 る 中 V) 群 で の雲が はよく が 由 すぐで 発 も あ 馬 達 ま 出 埼 0) 水 で 馬 か 玉

時には

は くってする気になれんの 「今の若い のっぴきならんことが起こって、 者はどうもかた過ぎる。 か しれ んが、 身の破滅になることもある。 学問をするから、どうしてもそんなことはばかば 海老茶とか 庇 髪えびちゃ ひさしがみ とかに関係をつけると、 それに、 一人で書ばかり

ってやがて若葉が新しい色彩を村にみなぎらした。路の角で機を織っている女の前に立ってやがて若葉が新しい色彩を村にみなぎらした。路の角で機を織っている女の前に立

つ

者は する りこしらえちゃ、 読んでいるのは、 浩う 0) は 然 の気を養うぐらいの元気がなくっちゃぜん そのためだと言うじゃありません 学問ができて思想が高尚になったって、 若い者には好し悪しですよ、 か。 青瓢箪 神経衰弱になったり、 いけませんなア」 なんの役にもたたん、 のような顔をし 華厳に飛び込んだり 7 いる 青年ば ちと若

か

などという。

晩張 にな 出た当座 そう道徳倫理で東縛 友だちのサアクルや世離れた寺の本堂などで知ることのできないことをだんだん知った。 まり勉強すると、 発戸のほうに散歩をしだしたのは、 清三が書籍ばかり見て、蒼い顔をして、一人さびしそうにして宿直室にいると、 清三は って転校した話や、 りに行った話などをして聞かせたのもやはり、 まだ今の細君ができない時分、 ろいろな実際を見せられたり聞かせられたりした。 肺病が出ますぜ、 されては生命がつづかん」こう言って笑った。 ついこの間までいた師範出 少し遊ぶほうがいい。 田植え唄が野に聞こえるころからであった。 川越でひどい酌婦にかかって、 この老訓導であった。 の教員が 学校の先生だッて、 小川屋の娘に気が 中学校の学窓や親 校長が師 それ 宿直室に あっ がば 範学 同じ 来てか 校から 花が散 の家や れそう 人間だ。 「あん 毎

らさ には て村 れ 機 の若者が何かしゃべっていると、 7 口 りの 車 藍の匂いがどこからともなくプンとして来る。 が 一二台置いてあって、 女は知らん顔でせっせと梭を運んでいる。 物干しに並べてかけた紺糸が初夏 竹藪の陰からやさし の美 Ū 機 た 屋 1 V 日 に の前 照

にとぼ 中に、 はだらしないふうで、それを相手にむだ話をしている。嚊は汚ない鼻たらしの子供を叱っ か この家にも糸を繰る音と機を織る音とがひっきりなしに聞こえる。 す 加か 須街道方面とはまったく違った感じをかれに与えた。むこうはしんとしている。ぞ か 飲食店が一軒あって夕方など通ると、 に聞こえる。 娘などもあまり通らない。 が ζ, 若い者が二三人きっと酒を飲んで して活気にとぼしいが、 村から離れ こちらはどの家に V . る。 田 た 慮 ぼ 人 気 気 亭主 0 も

にか らば 竹も茂っていた。 ている。 発戸の右に下村君、堤、名村などという小字があった、ほっと しもむらぎみ っつみ なむら なりある。 っているが、ここでは利根川は少し北にかたよって流れているので、 土手にはやはり発戸河岸のようにところどころに赤松が生えてい 朝露 のしとどに置いた草原の中に薊やら 撫 子のしとどに置いた草原の中に薊やら 無でしこ 藁葺屋根が晨の星のように散わらぶきやね あした やらが咲 土手に行くまで しの

土手の上をのんきそうに散歩しているかれの姿をあたりの人々はつねに見た。

松原の中

には の、 とするところに、大 和 障 子 を半分あけて、 ていることもある。 大騒ぎをして、その通るのを待ち受けて出て見るものもある。 下 村 君 の村落 んだんべい」と土手下の元気な婆が言った。 いつもそこを通った。見かえる清三の顔を娘も見かえした。 眼のぱっちりした、 いって、 草をしいて、 喪 心 した人のように、 「学校の先生さん、 眉の切れのいい十八九の娘であった。 いやに蒼い顔しているだア。 せっせと終日機を織っている女が 機織り女の中にも、 前に白帆のしずかに動いて行くのを見 清三はわざわざ回り道して 清三の男ぶりの 女さア欲しくなった ·ある。 には V **,** , 1 ・ろう 丸顔 のに

げたげた笑っている。 なかった。 清三は不思議なことをしていると思ったばかりで、 から機織り女が三人ほどやって来た。清三はなんの気もなしに近寄って行くと、女どもはから機織 を見ている、 いて行った。 ある時こういうことがあった。土手の松原から発戸のほうに下りようとすると、 、る時、 侮 辱 されたとも気まりが悪いとも思わなかった。 女どもは路をよけて、笑いたいのをしいて押さえたというような顔をして、 からかう気だなということが始めてわかったが、しかしべつだん悪い 坂には両側からしげった楢の若葉が美しく夕日に光ってチラチラした。 一人の女が他の一人を突つくと、 同じ調子で、 一人はまた他の一人を突っついた。 むしろこっちからも相手に ステッキを振りながら歩 向こう 通 男 V)

なってからかってやろうかと思うくらいに心の調子が軽かった。 して笑っている。こっちでも笑って見せると、ずうずうしく 二 歩 三歩近寄って来て、 と思うと、女どもはげたげた笑った。清三がふり返ると一番年かさの女がお出 通り過ぎて一二間行った でお出でを

「学校の先生さん!」

一人が言うと、

「林さん!」

「いい男の林さん!」

と続いて言った。名まで知っているのを清三は驚いた。

女どもは坂の上の路にかたまって、こちらを見ていた。 い男の林さん」もかれには、 いちじるしく意外であった。 曲がり角でふり返って見る

がな 夏の夜など五人も六人も押しかけて行って、 とまらないという話を思い出した。 川向こうの上州の赤岩付近では、 いから、 夜は鍵をかけておく。こうそこにつとめていた人が話した。かれは心にほほがき なんでもそこでは、 女の風儀の悪いのは非常で、 無理やりにつれ出してしまうという。 先生が独身で下宿などをしてると、 学校の教員は独身ではつ か た

えみながら歩いた。

棚の下には縁台が置かれて、 な女になって、客を対手にキャッキャッと騒 して店に出ているが、 だるまやもそこに一二軒はあった。昼間はいやに蒼い顔をした女がだらしのないふうを 夜になると、それがみんなおつくりをして、見違ったようにきれい 夕顔の花が薄暮の中にはっきりときわだって見える。 いでいる。だんだん夏が来て、その店の前の

「貴郎、どうしたんですよ、このごろは」

「だッてしかたがない、忙しいからナア」

「ちゃんと種は上がってるよ、そんなこと言ったッて」

'憎らしい、ほんとうに浮気者!」'種があるなら上げるさ」

ピシャリと女が男の肩を打った。

「痛い! ばかめ」

あう。女は体を斜めにして、足を縁台の外に伸ばすと、赤い蹴出しと白い腿のあたりとがあう。女は体を斜めにして、足を縁台の外に伸ばすと、赤い蹴出しと白い腿のあたりとが と男が打ちかえそうとする。 女は打たれまいとする。 男の手と女の腕とが互いにからみ

見えた。

清三はそうしたそばを見ぬようにして通った。

は、 夜はことに驚かれた。 白地 の浴衣がそこにもここにも見える。 路のほとりに若い男女が 笑う声があっちこっちにした。 いく組みとなく立ち話をしてい

闇に

が来 落ち着い にしなかった。 すところなく話すが、 よっと郁治に会ったが、 からは東 今年 た 0) の夏休みがやがて来た。 は五 た平凡なふつうの祝い状を三人に出してお 京に行くことにきまった。 月ごろであったが、 別れていれば思い出すことがすくなく、 もう以前のような親しみはなかった。 小畑と郁治とは高等師範の入学試験に合格して、 かれは心の 桜井は浅草の工業学校に入学した。その合格 が 煩 問 問 いた。 をなるたけ表面に出さぬように 六月に、 会えば、 したがって、 行田 に行っ さすがに君 訪問 た時 . こ の あ もめっ 知らせ 僕で隠 九月 た 5

知り越し もしてみようかと思った。 三の心はもうそれがために動かされるほどその影がこくうつっておらなかった。 美穂子 るころもそう懇意にしてい 石川 もこのごろは病気で鎌倉に行っている。 の女のように挨拶 にも一度会った。 頬のあたりが肥えて、眼にはやさしい表情があった。 けれど母親の苦しい家計を見かねて五円渡してしまったので、 して通った。 なかった人々ばか やがて八月の中ごろになって郁治は ~りだ。 熊谷の友だちで残ってい 清三もつまらぬから、 るも どこか旅で のは、 東京に行 ただ、 けれど清 学校 つ

弥勒へと帰って来た。 財布にはもういくらも残っていない。近所の山にも行かれそうにもない。 どうせ狭い暑い家に寝てるよりは学校の風通しのよい宿直室のほうがいいと思って、 途中で、久しぶりで成願寺に寄ってみると、 和 尚 さんは昼寝をし で、 月の二十日

に 廂さしがみ 風通 しのよい十畳で話した。 に結って、 紫色の銘 仙の矢 絣を着て、白足袋をはいた十六ぐらいの美しい。 めいせん ゃがすり 和尚さんはビールなどを出してチヤホヤした。ふと、そこ

帰りに荻生さんに会って聞くと、

色の白い娘が出て来た。

ていた。

中に育った娘とは違うねえ。どこかハイカラのところがあるねえ」 あれは、君、 こう言って笑った。荻生さんはいぜんとしてもとの荻生さんで、町の菓子屋から餅菓子 和尚さんの姪だよ。 夏休みに東京から来てるんだよ。どうも、 田舎の土臭いなか

なんとなくあきたらないような気がする。楽しみもなく道楽もなくよくああして生きてい に、生活している。友だちのズンズン出て行くのをうらやもうともしない。 を買って来てご馳走した。 荻生さんのようなあきらめのよい運命に従順な人は及びがたいとは思うが、 郵便事務の暑い忙しい中で、暑中休暇もなしに、 清三の心持ち 不平も言わず

に帰って来た。

と言って賛成しなかった。 も相手にして酒でも飲もうじゃありませんか」と言うと、 られると思う。その日、 「どうです、あまりつまらない。 清三は暑い木陰のないほこり道を不満足な心持ちを抱いて学校 一つ料理屋へでも行って、女で 「酒を飲んだッてつまらな

<u>-</u>

る。 につれて手にとるように聞こえる。そのにぎやかな気勢をさびしい宿直室で一人じっとし て聞いてはいられなかった。清三は誘われてすぐ出かけた。 盆踊りがにぎやかであった。空は晴れて水のような月夜が幾夜か続いた。 盆踊りのあるところは村のまん中の広場であった。人が遠近からぞろぞろと集まって来 樽拍子の音がそろうと、白い手拭いをかむった男と女とが手をつないで輪をつくって 樽拍子が唄たるびょうし

調子よく踊り始める。 九時過ぎからは、人がますます多く集まった。 上手な音頭取りにつれて、 踊りつかれると、あとからもあとからも 誰も彼も熱心に踊った。

新しい踊り手が加わって来る。輪はだんだん大きくなる。樽拍子はますますさえて来る。

黒く地に印した間に、 もうよほど高くなった月は向こうのひろびろした田から一面に広場を照らして、 踊り子の踊って行くさまがちらちらと動いて行く。 木の影の

覊絆を忘れて、この一夜を自由に遊ぶという心持ちがあたりにみちわたった。きはん は燈光がさして笑い声がした。向こうから女づれが三四人来たと思うと、 村にはぞろぞろと人が通った。万葉集のかがいの庭のことがそれとなく清三の胸を通 男はみな一人ずつ相手をつれて歩いている。 猥 褻 なことを平気で話している。 突然清三は袖を 垣の中から 世 . 0)

「学校の先生!」

とらえられた。

「林さん!」

「林先生!」「いい男!」

嵐のように声を浴びせかけられたと思ったのも瞬間であった。 両手を取られたり後ろか

ら押されたり組 んだ白い手の中にかかえ込まれたりして、争おうとする間に二三間たじた

じとつれて行かれた。

「何をするんだ、ばか!」

と言ったがだめだった。

月は 互いに争うこの一群をあきらかに照らした。 女のキャッキャッと騒ぐ声があたりに

ひびいて聞こえた。

もあった。 「ヤア、学校の先生があまっちょにいじめられている!」と言って笑って通って行くもの 樽拍子の音が唄につれて、たるびょうし ますます景気づいて来た。

二 十

三はその日大越の老訓導の家に遊びに行って、ビールのご馳走になった。 秋季皇霊祭の翌日は日曜で、 休暇が二日続いた。 大祭の日は朝から天気がよかっ 帰途についたの た。 清

はもう四時を過ぎておった。

隣に 車が は馬具や鋤などを売る古い大きな家があった。 įν 夕日を帯びて今着いたばかりの客をおろしていた。 .汚ない廂の低い弥勒ともいくらも違わぬような町並みの前には、 野に出ると赤蜻蛉 ラムネを並べた汚な が群れをなして飛 羽生通 V 休 いの み 茶屋 乗合馬 0)

んでいた。

ば 訓導にも校長にも今日と明日は留守になるということを言っておいた。 懐には昨日お 行田 あることを思いついて、 か 利 桹 りの半月の月給がはいっている。 に行く用事が 川の土手はここからもうすぐである。二三町ぐらいしか離れていない。 ないでもな 細 い道を右に折れて、 いが、 行かなくってはならないというほどのこともな い機会だ!と思った心は、 土手のほうに向か つ た。 ある新し 明 育は 清三はふと い希望に向 日 曜 で ある。 りた 老

ってそぞろにふるえた。

いた。 秋 でなければ見られぬような白い大きな雲が浮かんで、川向こうの人家や白壁の土蔵やき どりがちな心としっくり相合っているように感じられた。 森や土手がこい空気の中に浮くように見える。 か いるためであろう。 土手にのぼると、 なんだかその波の閃めきも色の調子も空気のこい影もすべて自分の 利根川は美しく夕日にはえていた。その心がある希望のために動い 土手の草むらの中にはキリギリスが鳴いて なかばはらんだ帆が の上には初 夕日を受け 7

百姓家が見えたりした。渡し船にはここらによく見る 機 回 りの車が二台、 土手にはところどころ松原があったり渡船小屋があったり 楢 林 があったり 藁 葺 自転車が一個、ひとつ

-が 二

個、

の通 る 少 し下流に 一ところ浅瀬があって、 キラキラと美しくきらめきわ たった。

商人らしい四十ぐらいの男はまぶしそうに夕日に手をかざしていた。

船

青陽楼 り、 たび て堕落した心の状態を叱してもみた。 にっこりした。 と思うと、懐から汗によごれた財布を出して、 にひくのを見ながら時々 っそう強かった。 っていた。足をとどめさせる力も大きかったが、 路 あ 空気 は る大きな力に引きずられるように先へ先へと進んだ。 長 は身 というのが中田では一番大きな家だ。 |||か 0) つ にし た。 感じが 心と心とが戦い、情と意とが 円あればたくさんだということはか みわたるようにこい深い影を帯びてきた。 \prod つ の上にむらがる雲の姿の変わるたびに、 ねに みずからかえりみたり、 変わ っった。 行田 夕日は の家のこと、 しだいに低く、 そこにはきれいな女が 争 半月分の月給がは みずからののし い それよりも足を進めさせる力のほ ねてから小耳にはさんで聞 理想と欲望とがからみ合う間 東京の友のことを考えた。 清三は自己の影の 水の色はだん 水がみゃく () ったりした。 ってい いるということも のゆるや だん る 0) . 納戸 を確 長 かに 立ちどま くく草 1 こうがい そうか 色に 曲 7 か 8 が 1 知 な る

ぬほど大河のおもむきをなしていた。 渡良瀬川 0) 利 |根川に合するあたりは、 夕日はもうまったく沈んで、 ひろびろとしてまことに 阪 東ばんどう 対岸の土手にかすかに 太郎 の名にそ

その余光が残っているばかり、 の上 おぼ つか なく浮いて いた。 先ほどの雲の名残りと見えるちぎれ雲は縁を赤く染めてそ 白帆がものうそうに深い碧の上を滑って行く。

鳴い と、 やもろこしが豊かに繁った。ふとある一種の響きが川にとどろきわたって聞こえたと思う ぎすな姿は浮き出すように見える。 透綾の羽織に白地の絣を着て、

すきや 土 前 手を下りて旗井という村落にはいったころには、 たり鈴虫が の長 人通りのない夕暮れ近い空気に、 い長い栗橋の鉄橋を汽車が白い煙を立てて通って行くのが見えた。 ١, い声をたてたり阜斯が飛び立ったりする土手のばった 安い麦稈の 土手と川との間のいつも水をかぶる平地には 広いようようとした大河を前景に の帽子をかぶった清三の姿は、 もうとっぷりと日が暮れて、 草さみち を急いで して、 キリギ そのやせ 小豆や豆 歩 ーリスが ĺ١ て行

路で中田 の中に見せてボチャボチャやっていた。 鉄道の 踏 切っかん でまた夏になったような気がした」などと言いながら若いかみさんが肥えた白い乳を夕闇 念などはなくなってしまった。 いていた。 それ への渡し場のありかをたずねた。 ある百姓家では、 を通ってしまうと、 垣のところに行水 盥ぎょうずいだらい ふと路傍に汚ない飲食店があるのを発見して、 上り汽車がゴーと音を立てて過ぎて行った。 夜が来てからかれは大胆になった。 を通る時、 を持ち出して、 番人が白い旗を出 「今日は久しぶり か ビールを一 れ もう後悔 は二三度

く路を教えてくれ

本傾 分けて、 饂飩の盛りを三杯食った。ここではかみさんがわざわざ通りに出て渡船場に行ぅどん

いた。 十日ば、 肌に冷やかな風がおりおり吹^{はだ} かりの 月が向こう岸の森の上に出て、 いて通って、やわらかな櫓の音がギーギー聞こえる 渡船場の船縁 にキラキラと美しく砕けてわたしば ふなべり

岸に並べた二階家 の屋根がくっきりと黒く月の光の中に出てい

乗 水を越して響 り合いの人の顔はみな月に白く見えた。 小腰に櫓を押した。 11 て来る絃歌の音が清三の胸をそぞろに波だたせた。 船頭はくわえ煙管の火をぽっつり紅く見せな

がら、

細い なんと話しているものもある。 じみ客を見かけて、 あさましさを思って肩をそびやかした。 服で飾りたてた女の格子の前に立っていた。こちらの軒からあちらの軒に歩いて行った。 十分のちには、 格子の中にはいって、 不幸福・ な女に引きくらべて、こうして心の餓え、 清三の姿は張り見世にごてごてと 白 粉 をつけて、 「ちょいと貴郎!」なぞという声がする。 あやうく羽織の袖を破られようとした。こうして夜ごとに客を 威勢よくはいってトントン階段を上がって行くものもある。 | 廓の通りをぞろぞろとひやかしの人々| 肉の渇きをいやしに来た自分の 格子に寄り合うて何 赤いものずくめの衣 が 通 かな な

二階からは三絃や鼓の音がにぎやかに聞こえた。

女の かし れるような気がしない。初心なかれにはいくたび決心しても、 が眼に浮かんで、 格子のそばに置い てと不器用にぬ ののし て、 五. いる張り見世 に来た客ではないというようにわざと 大 跨 に歩いて通った。 やが 軒 ってみてもどうも思いきって上がられない。 か て暗い な りつけて二三人並んでいた。 , , 貸座 畠になる。 の前は注意した。 上がるならあの女かあの女だと思う。 てある家には 敷はやがてつきた。 清三はそこまで行って引き返した。 **,** \ かにも土百姓の娘らしい丸く肥っ 番最後の少し奥に引っ込んだ 石 菖 その家から五六軒 で、 今度は通りのまん中を自分は けれど一方ではどうしても上がら いくたび自分の臆病 藁 葺 の庇の低い人家が続わらぶき ひさし 見て通ったい そのくせ、 た女が白粉をごてご 気にいった ろい の 鉢^はち ろな な ひや のを 女

れにただ帰るのも惜しいような気がする。 つかくあ 河か 岸し どこのまま帰るのは いた船からぞろぞろと人が上がった。 の渡し場のところに来て、 の長 い暑 い二里の土手を歩いて来て、 ―目的をはたさずに帰るのは腑甲斐ないようにも思わ かれはしばらく立っていた。 いっそ渡_{ったた} 渡し船の行って帰って来る間、 無意味に帰って行くのもばかば しを渡って帰ろうかとも思ってみた。 月が美しく埠頭にくだけて、 かれはそこに立 か れ せ そ

ったりしゃがんだりしていた。

かれ 何 も 思いきって立ち上がった。その家には店に妓夫が二人出ていた。大きい洋燈がまぶしく か の姿を照らした。 も か れ には夢中であった。 張り見世の女郎 やがてがらんとした室に通されて、 の眼がみんなこっちに注がれた。 「お名ざし」を聞 内から迎える声 か

れ 々した、この家でも売れる女であった。 る。 右から二番目の女は静枝と呼ばれた。 右から二番目とかろうじてかれは言った。 どちらかといえば小づくりで、 眉と眉との遠いのが、どことなく美穂子をし 色の白い、 髪 の 房^ふ

ばせるようなところがある。

台の物とかいって大きな皿に少しばかり鮨を入れて持って来るのも異様に感じられた。 うことがすぐ知られた。 ところには通人だというふうを見せたりしたが、二階回しの中年の女には、初心な人とい れは自分の初心なことを女に見破られまいとして、 もおもしろいし、 |厠は階段を下りたところにあった。 やはり 石 菖かわや はしご 清三にはこうした社会のすべてがみな新らしくめずらしく見えた。 引き付けということ 女がずっとはいって来て客のすぐ隣にすわるということも不思議だし、 かれはただ酒を飲んだ。 心にもない洒落を言ったり、こうした の鉢が置いてあったり、 釣り荵が掛っしのぶ か

鼓と三絃の音がにぎやかに聞こえた。 けてあったりした。硝子の箱の中に五分心の洋燈が明るくついて、 感心だねえ」と言うと、 の裏は物干しになっていて、そこには月がやや傾きかげんとなってさしていた。 キで、近在でできたやすい鉄瓶がかかっている。そばに一冊女学世界が置いてある ているのではないがなんとなくしめっていた。 三が手に取って見ると、 戸焼きの便器が据えてある。 女の室は六畳で、裏二階の奥にある。 女はにッと笑ってみせた。その笑顔を美しいと清三は思った。 去年の六月に発行したものであった。 アルボースの臭に交って臭い 臭 気 が鼻と目とをうった。 古い箪笥が置いてあった。 便所には大きなりっぱな青い模様の出 「こんなものを読む 長火鉢の落としはブリ 鼻緒の赤い草履がぬはなお 隣では太 のかえ、 のを清 た瀬 室 れ

<u>=</u> + =

と私語くように言った。昨夜、 翌日は昼過ぎまでいた。 出る時、 床の中で聞いた 不一幸 な女の話が流るるように胸にみな 女が送って出て、 「ぜひ近いうちにね、きっとですよ」

先 栗橋 の 河か ては か れ 紺 か 初^しょかい 知 ことを 河かに る れ たようなふうをして歩い 0) つ 人 7 岸し は が は 木 に 脚きゃ 手に には をわ 影 出 に る 田 打ち明け に 人に ば が て行く も 怪 0) よりとうしゅう 取 を白 あ 似 た な 立 会わ って 場 ま つ 1 合 るように 低地な より い埃に たり ちどま では赤 ħ 7 わ 語 ず、 栗橋 る。 ん も 畠 É 0) 0) つ !見え 間 かえ た。 女は つ まみらせた 本 で、 0) に 11 が て、 雲が 出 あ 郷 で 0) È る。 葉 つ つ に そ 7 て行った。 か $\tilde{\lambda}$ 別 静 たり 7 渡 な 昨 0) 0) れ (る渡良瀬川のおたらせがわ れ 栗 か な 近 在 み は \exists 11 たびあきんど [のみち 7 橋 に か 1 郷 りとした調 昨 た。 ば赤 来 に 夜聞 川にう か 0) 行 そこ を帰 鉄 も 行くに 田 た女のことを思っ Ś 橋 \prod U に い ら うっ なっ か 原 れ 0) 7 行 る の向こうに らは Ū 0 な は お の は わ 子 つ てい 草 さ 数ぶ やは で、 たし たと 7 た桑畑 か 1 6利根渡良瀬のとねわたらせい男が大きな共 つ た な 場が こいうも た。 . 鳥り その た。 り鳥喰を通 6 だか 中 の中 に見え隠 喰み 清三 父 あ 田 向こう岸 -にはや: って、 0) 母 0) 0) 不安なような 荷物をし の の 古こ が 遊 の 二 ほ · 麦ぎわら 廓 れ つ う 方 それ て行くのだそうだ。 の屋 つの が土 は 河が \mathcal{O} 角 U 路 I) 7 違 0) 少 手では ¥ から を選 根 ょ 動 帽 大きな 11 ともそれ って、 ĺ 気 1) 子 0) 11 大高 ギ 手前 方 が 7 は N 糸とだて リス 河 行 毎 で 面 の 在い 歩き出 と見える が っ 年 島 を歩 が ま 合流する 出 で 二 を着 鳴 に 水 土 い 行く に 鳥 手 1 7 11 疲 た。 里 る で 7 つ 喰

本

鄉

0

村む

落を通って、

路はまた土手

の上にのぼった。

昨日向こう岸から見て下った川

を

に 今日はこの岸からさかのぼって行くのである。 て考えずには 旦 \prod は 同 いられなか 'n じ 色に る。 同じ姿に流れているが、 つ た。 おどりがちなさえた心と落ちつい 昨日の心地と今日の心地とを清三はくらべ その間には今まで経験 もあっ たつ た。 Ù か な れ た心 · 深い 溝が わ ずか

て花茣蓙 らチラチラ見える。 れたように思わ た疲労が にラムネがつけて 麦倉河岸には涼しそうな茶店があった。セメティムムルロ 出て、 の敷いてある木の陰の縁台を借りてあおむけに寝た。 頭がぐらぐらした。 あった。 それを見ながらかれは もう自分は堕落したというような悔 かれはラムネに梨子を二個ほど手ずから皮をむいて食って、 涼し い心地のいい 大きな栃の木が陰をつくって、 1 つか寝入った。 風が川から来て、 V 昨夜ほとんど眠られ 青い 冷めたそうな水っ 空が 葉の間 な か z か つ

飛び さかのぼって行くと、 ニャア鳴いた。渡し舟は着くたびにいろいろな人を下ろしてはまたいろい か ある。 れ つこうとするところを茶店の婆さんはあわてておうと、 が寝ている間、 自転車を走らせて来た町の旦那衆もあれば、 上流の赤岩に煉瓦を積んで行く船が二艘も三艘も竿を弓のように張って流れたが、 そのかたわらを帆を張った舟がギーと楫の音をさせて、 渡し場にはいろいろなことがあった。 反物を満載した車をひたんもの 猫が 鶏のひよっ子を猫がねらって ^桑畑 の中に入ってニャア ろな人を載せて いくつも通 いて来た人

た胸 行っ て高 らりと地に下げて、 た村の若者が から い鼾をかいて ^{いびき} 一時間ほどたって婆さんが裏に塵埃を捨てに行った時には、 は 財布が いた。 見えた。 びく 顔を仰向けに口を少しあいて、 を下げて帰る時には、 その横顔を夕日が暑そうに照らした。 足を二本とも縁台の上に曲げて、肱を枕に 心地よさそうに寝ていたが、 額には汗がにじみ、 縁台の上の客は足をだ 魚釣りに はだけ

てい てい 落ちかけてい ラムネ二本の代七銭と、 か れ が か 清三は銀側の時計を出して見て、 眼をさましたころは、 れ はちょっと考えるようなふうをしたが、その中から二十銭銀貨を一つ出 た財布をふと開けてみて銭の勘定をした。 梨子二個の代三銭との釣り銭を婆さんからもらって、 もう五時を過ぎていた。 思いのほか長く寝込んだのにびっくり 六円あった金が二円五 水の色もやや夕暮れ近い影を帯び 白銅を一つ 一一銭 になっ

て 弥 勒 田 の中 大高島 か ħ Ò の顔を見ると、 0) 学校に帰って来た。 細 の渡しを渡るころには、 1 道をあちらにたどりこちらにたどりして、 小使が、 もう日がよほど低かった。 なるたけ人目にかからぬようにし かれは大越の本道には出ずに、

「荻生さんなア来さしゃったが、会ったんべいか」

ードキー

「行田に行ったんなら、ぜひ羽生に寄るはずだがッて言って、 不思議がっていさっしゃっ

たが、帰りにも会わなかったかな」

....... 「待っていさッしゃったが、 「会わない――」

羽生で待ってるかもしんねえッて三時ごろ帰って行かしった

「そうか――羽生には寄らなかったもんだから」

こう言ってかれは羽織をぬいだ。

<u>=</u> + =:

は加須まで来たついでにわざわざ寄ってみた。べつだん変わったところもなかった。このかぞ。田の母親からも用事があるから来いとたびたび言って来る。けれど顔を見せぬので、父親 次の土曜日にも出かけた。その日も荻生さんはたずねて来たがやっぱり不在だった。行 母親からも用事があるから来いとたびたび言って来る。けれど顔を見せぬ ので、

十銭 父親 る出 られ ごろは ながら、 とをすっか とのんきに眺 いところがあるんじゃが……まアまアこのくらいならとにかく納まる品 には な し 入り先から売却を頼まれたという 文 晁 筆 か か 日課点の調べで忙しいと言った。 学校 なかった。 そんなふうも見えなかった。 ったという申 り持たせてやった。 の門を出て行った。 めていた。 月末まで湯銭くらいなくては困ると言うので、 しわけをして、机の上にある書籍を出して父親に見せた。 母親の手紙では、 父親は包みを背負って、 帰りに、 先月は少し書籍を買ったものだから送るものを送 家計が非常に困っているような様子であっ 五十銭貸せと言ったが、 の山水を長押にかけて、 なかばはげた頭を夕日に照らされ 二十銭だけ残して、 清三の 物だから」など 「どうも少し怪 財 布 父親はさ には たが、 あ

並 はその女の赤 みすぐれた男ぶりとやさしいおとなしい様子とになみなみならぬ情を見せたのであるが、 金 が一 のな い言葉やら表情やらが流るるようにみなぎりわたった。 い幾日 度行き二度行くうちにだんだんとつのって来た。 間 の生活は辛かったが、 画禰姿 と、 眉 の間 の遠い しか 色白の顔とを思い出 し心はさびしくなかった。 その女は した。 5 初 会い 会い そのたびごとにや 朝に晩に夜にかれ から清三の人

清三は月末の来るのを待ちかねた。 菓子を満足に食えぬのが中でも一番辛かった。 机の

抽ひきだ のちには菓子屋の婆を説きつけて、 このごろではただその名残りの赤 銭 二銭と買ってくったり、 しの中 ーには、 餅菓子とかビスケットとか 羊 羹 とかいつもきっと入れられ 近所 い青 0) 月末 同僚のところを訪問 い粉ば 払 いに かりが残っ して借りて来た。 ていた。 して菓子のご馳走にな やむなくか れ つ は てあったが、 た 南 りした。 京豆 を

た席 にそ すか、 せて、 がかれにとって一番おもしろい楽しい時間で、 か ンに合わ 一人で室にいる時も 口 癖ヘトザ さかな 弥勒野にふたたび秋が来た。 音 Ō で歌 を歌ったことが思い出された。 楽はやは 詩 それ 自分はさもひとかどの音楽家であるかのようにオルガンの前に立って拍 われ しか せて歌わ の意味を解いて聞かせて、ふたたび声を低くして誦した。 は」と言った。 たり、さびしい一人の散歩 し力ある愛情を起こす動機となったことを清三は思い起こした。 り熱心にやっていた。 れたり、 信なの に唱歌 そうした女のいる狭い一室で歌われたりした。 前の竹藪を通して淋しい日影がさした。 の詩 の譜が 人が若々 女は黙ってしみじみと聞 譜を集めたものがだいぶたまった。 7出た。 の野に歌われ U 新し ٧١ この間、 悲哀を歌った詩は、 ر ر たり、 歌に譜を合わせたも 女の室で酒に酔って、 無邪気な子供らの前 いていた。 二人の間にそ 青年 教員室の硝子窓を やがて 授業中唱歌の課目 清三はそ · の群 のを 「琵琶歌」 生 れ 子を取 響りん 徒 れ で 0) が 集ま 0) オ に歌 時 ル った。 女 ガ l) わ つ

刈か小 り稲を積れ 使が終日 か h だ車が か って掃除すると、 晴れた野 の道に音を立てて通った。 いっそう空気が新しくこまやかになったような気がした。

そう切であった。 を伴侶としているさびしき、 を慕った歌なども来た。 いとかれ 東京に行った友だちからは、 は返事をしてやった。 学窓から見た夕焼けの雲と町に連なるあきらかな夜の灯が 夕暮れには、 友の心を思うと書いてあった。 それでも月に五六たび 音信があった。 赤い夕焼けの雲を望んで、 弥勒 野 弥勒 から都を望 の野 学窓から故 に *(*) 静 む心 っそう恋し か /に幼な! Ū Щ 1 0) 秋 児ご つ

連山 勒野 上から見える日光を 盟 主めいしゅ 羽生 ある から Ĕ 0) 野や、 浅間 利 荻生さんが来た。 根 嶽 ΪĬ 行田へ 0) \mathcal{O} 河岸の路に秋のしずかさを味わっ 噴煙や赤城榛名の翠色 の街道や、 とした 明日が土曜日 両 毛うもう 熊谷の町の新蕎麦に昨年の秋を送ったか であった。 の連 色にはまったく遠ざかって、 山に夕日 た。 の当たるさまを見て暮らした。 羽生の寺の本堂 の裏 れ 利 いら見 は、 根 \prod 今年 0) た秩父 土手 は弥 0)

「君、少し金を持っていないだろうか」

荻生さんは三円ばかり持っていた。

気の毒だけども、 家のほうに少しいることがあって、 翌日行くのにぜひ持って行かなけ

りゃならないんだが……月給はまだ当分おりまいし、 つごうしてもらうわけには いかないだろうか。 月給がおりると、 困ってるんだが、どうだろう、 すぐ返すけれど」

荻生さんはちょっと困ったが

「三円ば かり」

いくらいるんです?」

一僕はちょうどここに三円しか持っていないんですが、 少しいることもあるんだが

「それじゃ二円でもいい」

荻生さんはやむを得ず一円五十銭だけ貸した。

翌朝、 僕もこの通り」と、 それと同じ調子で、清三は老訓導に一円五十銭貸してくれと言った。 笑って銅貨ばかりの財布を振って見せた。 · 躊・躇 したが、思い切って最後に校長に話した。 関さんもやっぱり持って 老訓 導は

れた。 昨日の朝、 行田から送って来る新聞の中に交って、 見なれぬ男の筆跡 中田

校長は貸してく

いなかった。

いく度か

消印 . О お してある一通の封書のはいっていたのを誰も知らなかった。

から田圃の中を歩いて行った。しばらくして利根川の土手にあがる松原の中にその古い中午後から行田の家に行くとて出かけたかれは、今泉にはいる前の路から右に折れて、森

かおれ の帽子が見えた。 大高島に渡る渡船の中にか れはいた。

二十四四

る。 の葉はバラバラと散った。 渡良瀬川の渡しをかれはすくなくとも月に二回は渡った。 洲す のあらわれた河原には白 虫の鳴いた蘆原 い鷺がおりて、 も枯れて、 納戸色. になった水には寒い 白の薄の穂が銀のように日すすすきしろがね 秋は しだいにたけて、 風が吹きわ 楢の 林 影に 光

めるば、 る風はもう寒かった。 か りに散り積もった。 の婆の茶店にももう縁台は出ておらなかった。栃の黄ばんだ葉は 農家の庭に忙しかった唐箕の音の絶えるころには、 小屋の屋根を埋 土手を渡

だん を待 女の心の解しがたいのに 懊 悩 その長 と多くなってきた、 ったこともある。 い路を歩く度数は、 夜遅く栗橋に出て大越の土手を終夜歩いて帰って来たこともある。 帰りを雨に降られて本郷の村落のとっつきの百姓家にその 女に対する愛情の複雑してくる度数であった。 したことも一度や二度ではなかった。 遊廓にあがるものの 追 ま し じ で がだん 晴 ñ

ら

わ

った。

屈で解釈 わかった。 憤 慨 して帰って来ることもあったが、しかしそれは複雑した心の状態を簡単に一時のふんがい 与えているのだ。 るようにできている。 も、 初めて感ずる嫉妬、 れらは男の機嫌をとるのを商売にしているんだ。 容易に示さない深 するすべての疑惑をだんだん意識してきた。 ると女は り 追 憶 が加 れ で 女はやって来ない。 称し したもので、 怒ったり泣 ながら、 忘れ い情を見せて、 女が回しを取る時の不愉快にもやがてでっくわした。 女の心にはもっとまじめなおもしろいところがあることがだんだん ても行かん。 自分に対すると同じような媚と笑いと情とをすぐ隣の室で他 それがはたしてそうであるか否か いたり笑ったりしている間に、 自己の愛する女を他人が自由に 男の心をたくみに奪った。 忘れても行かん。 女はまた女で、 あれらの心は 二人の間柄には、 今まで使った金が惜し のわ してい その男の疑惑につれ からな 「もうこれっきり行か る。 幾 様 にも働くことができ い疑惑 全身を自己に捧 いろいろな 待っても待って い」などと、 男が て、 ん。 女に げ 色彩や の男に 時 Ć 延り 対 あ 々

打ち帽などをかぶってよく来た。 女のもとにせっせと通って来るなかに、清三の知っている客がすくなくとも三人はあっ 一人は 栗橋 の船宿の息子で、 色の白い丈のすらりとした好男子であった。一人は古河との白いたけ 家には相応に財産があるらしく、 角帯に眼鏡をか け Ć

労しているのにという紋切り形の表情をしてみせた。 の裁 落ち合うとその様子がよくわかる。 百姓の息子が通って来た。 清三はきいた。 そういう時には、 ていた。 らしかたがないけれど、 きで三日とかかずにやって来る。 ってしまうよ。 |判所の書記で、年はもう三十四五、家には女房も子供もあるのだが、 可愛いおとなしい人よ。 貴ななた と、女はきまって、男の膝をぴしゃりと平手で打って、これほど思って苦 「栗橋のにそう言って出してもらってやろうか」などと柄にもな 早くこういうところから出してくださいな」などと言って甘えた、 ああいう人に勤めなけりゃならないと思うと、つくづくいやにな 田舎の女郎屋のこととて、 女はそのしつこいのに困りぬいて、 なんだか弟のような気がしてしかたがない」と女は その息子は丸顔の坊ちゃん坊ちゃんした可愛い。 それからいま一人塚 崎っかざき 室のつくりも完全してい 「お客で来る 根が道楽 な の金持ちの V 、顔をし 0 0) 0) 酒好 だ の

るめられているのだと思うこともある。あの時、女はしみじみと泣いてそのあわれむべき わからなかった。 ようであった。 そのほ かにもまだあるらしかったが、よくわからなかった。鬚の生えた中年の男も来るかにもまだあるらしかったが、よくわからなかった。鬢げ 清三は女の胸に誰が一番深く影を印しているかをさぐってみたが、 自分の影が一番深いようにも思われることもあれば、 要するにうまくま

の汚れ 活し もわ 係となっていく二人の状態を不思議にも意味深くも感じた。 ができるなりするのをむしろ女のために祝している。 りきったことである。 境遇を語った。 たボーイが二三人仕事をしているのが小さく見えた。清三は立ちどまってじっとそれを見 なかった。 母を捨てることができなかったように、やっぱりかれにはどうしてもそうした気にはなれ この女とい の生活のたつきをも捨てて、 ちょっとでも知れ と女に対する自己の関係とをまじめに考えた。 たる渡良瀬川 ていく貧し てて川をくだって行くのが手にとるように見えた。 通運丸が、 帰りは、時々時雨が来たり日影がさしたりするという日の午後であった。 っしょになる場合を想像してみた。 ر ر 黒目がちな眼からは、 の渡しを渡 生活である。 れば勤めていることはできぬ身の上である。 この女がある人に身請けされるなり、 煙 たと 筒っ 貧し からは煤煙 って土手の上に来ると、 この女といっ い父母 涙がほろほろとこぼれた。 ――ことに自分を唯一の力と頼む母をも捨てて、 をみなぎらし、 しょになることができないのは 功名のために、 自分は小学校教員である。 ちょうど眼の前を、 清三はゆくりなき縁で、 甲板の上には汚れた白かんぱん 推進器 清三はまた一 年季が満ちて故郷 青雲の志を得んがために、 それに、 清三はその時自己の境遇 からは水を切る白 家はかろうじて生 歩を進めて、 白いペンキ塗り そういうことが 初 こうした関 に帰ること 8 ゕ 服 5 今 波 か

いう感が清三の胸をおそってきた。

けたたましく響きわたった。 つめた。 白い煙が細くズッと立つと思うと、 利根川はようようとして流れて下る、逝く者かくのごとしと 汽笛のとがった響きが灰色に曇った水の上に

二十五

と胸をドキつかせたが、 口吻をももらさなかった。 いているとひょっくり同僚の関さんにでっくわした。 ことは二三度はある。 度は大高島の渡船の中で村の学務委員といっしょになった。 清三の中田通いは誰にも知られずに冬が来てその年も暮れた。 一度は村の見知り越しの若者の横顔を張り見世の前でちらと見た。暗にも知られずに冬が来てその年も暮れた。その間にも危険に思った 清三のいつもの散歩癖を知っている関さんは、 その時はこれはてっきり看破された いま一 度は大越の土手を歩 べつに疑うような

屋の婆は「今月は少しゃ入れてもらわねえじゃ―― ばばぁ たんだろう。このごろは払いがたまって困るがなア」と小川屋の主婦は娘に言った。菓子 けれど菓子屋、 酒屋、 小川屋、 米屋などに借金がだんだんたまった。 ―よく言ってくんなれ」と学校の小使に 「林さん、どうし

どが訪ね ずからないで、ぶつぶつと不平そうに独り言を言った。 ごろじゃねっからお菜も買いやしねえ。いつも漬け物で茶をかけて飯をすましてしまうし、 肉など何日にも煮て食ったためしがねえ」などとこのごろはあまり菜の残りのご馳走にあ 頼んだ。小使は小使で「どうしたんだんべい。林さんもとは金持っていたほうだが、この て来ても、 以前のようにビールも出さなかった。 同僚の関さんや羽生の荻生さんな

路をやって来ても、そわそわといつも落ち着いていないばかりではない。 とするような眼色をして、ジッと清三の顔を見つめることがある。 行かない。 ら帰って来ていても訪問しようでもなく、昔のように相談をしかけてもフムフムと聞い いるだけで相手にもなってくれない。それに、なんのかのと言って、 様子の変なのを一番先きに気づいたのは、やはり行田の母親であった。 あれほど好きであった雑誌をろくろく買わず、常得意の町の本屋にもカケをこ 母親は息子のこのごろどうかしているのをそれとなく感じて時々心を読もう。 毎月のものをおい 友だちが東京か わざわざ三里の 7

ある時こんなことを言った。

もきまったことだし、どうだ、もらう気はないかえ?」 「この間 いい嫁があるッて、 世話しようッて言う人があるんだがね……お前ももう身

清三は母の顔をじっと見て、

「だッて、 自分が食べることさえたいていじゃないんだから」

よ。 「それはそうだろうけれど、お前ぐらいの月給で、 いっしょになって、学校の近くに引っ越して、 倹約して暮らすようにすれば、 女房子を養っている人はいくらもある 人並み

にはやっていけないことはないよ」

「でもまだ早いから」

「でも、こうして離れていては、 お前がどんなことをしているかわからないし」と笑って

みせて、

「それに、 お前だッて不自由な思いをして、いつまで学校にいたッてしかたがないじゃな

いか」

て中学の教員 お母さん、そんなこと言うけれど、僕はまだこれで望みもあるんです。 の免状ぐらいは取りたいと思っているんだから……今から女房などを持った いま少し勉強

ッてしかたがありゃしない」

「そんな大きな望みを出したッてしかたがないじゃないかねえ」。

「だって、僕一人田舎に埋もれてしまうのはいやですもの。 一二年はまアしかたがないか

楽のほうをこのごろ少しやってるから、来年あたり試験を受けてみようと思っているんで らこうしているけれど、いつかどうかして東京に出て勉強したいと思っているんです。音

す。今から女房など持っちゃわざわざ田舎に埋れてしまうようなもんだ」 「だッて、はいれたところで学費はどうするんのさねえ?」

「音楽学校は官費があるから」

「その時は父さんと母さんで暮らしても「そうして家はどうするのだえ?」

っちゃ」

「その時は父さんと母さんで暮らしてもらうのさ。三年ぐらいどうにでもしてもらわなく」。 まとっ ょっか

「それはできないことはないだろうけれど、父さんはああいうふうだし、私ばかり苦労し

なくっちゃならないから」

清三は黙ってしまった。

またある時は次のような会話をした。

お前、加藤の雪さんをもらう気はない?」

「雪さん? なぜ?」

「くれてもいいような母さんの口ぶりだッたからさ」

-どうして?」

「それとはっきり言ったわけじゃないけれど、たって望めばくれるような様子だッたから」

「いやなこった。あんな 白 々 しい、おしゃらくは!」

「だッて、郁治さんとはお前は兄弟のようだし、くれさえすりゃ望んでも欲しいくらいな

娘じゃないかね」

「いやなこった」

「このごろはどうかしたのかえ? 加藤にもめったに行かんじゃないか?」

「利益交換なぞいやなこった!」

こう言って、清三はぷいと立ってしまった。

母親にはその意味がわからなかった。

美穂

子につ

いて

月には郁治も美穂子も帰っていた。郁治にも二三度会って話をした。

紙によると二人はもう恋愛以上の交際を続けているらしかった。 制 心になったか自分でもわからない。 の話はもうしなかつた。 と言って笑った。そのくせ郁治と美穂子とはよく をかぶり、 女は新式の 郁治はむしろ消極的に恋愛の無意味を語った。 庇 髪 に結って、はでな幅の広いリボンをかけた。 ちょうどさかりがついたもののようなものだっ ・相がたずさ えて散歩した。 清三はいやな気がした。 「なぜあん 男は 小 たん なに 畑 高 師 だ 熱 0)

の事 の家 伊勢崎 憶で 間 また る。 11 町 か 達することが 今からお で は くら歩 が ちょうどそのころ熊谷の あっ 舞 には 情 そ のように 薄くなっても、 ü 今年大学に V の豪商 の豪 たが、 知ら いても、 思 なじ もどっ 商 の美しい み 浮き沈みしていくその人々 ďa できぬ に根曳きされ 0) は が、 の方 年 ままにならぬ世 て二度 今はそれさえ他郷 入学した情人があっ にこにこといつも元気のいい顔を見せて、 は のこれも東京 姿と艶なる声とのする間は、 四十五 ので、 清三はそうした社会に生い立った女の身の上を思わぬぉ _ ヒ 々 熊谷の はその時を待っているそうだ」などとひやかし のお る話が 小小滝 一六で、 勤 泣きの涙で、 町はまだか め、 の跡 の中に、 の話が新聞に出ていた。 今晚 ひや の人となってしまった。 女房も子もある。 見女学校には ゕ ĺ れ の身の上が た。 今度いよい さらに思い U のためになつか 半 そ 分に書いてある。 と例のあでやかな声 の 男に 友人が V よ落籍されることになっ しみじみと思 って のままにならぬ境遇に 「どうせ一二年辛 小滝は並 `離散 V) U 「小滝(・る娘が 神^{じんと}う い町、 幼いころの同窓のよし し去っても、 の落籍 々 小 の影艶か , が 聞 なら あ 滝 いやられ 恋し って、 には深 い年貢を納め ぬ情を見せ てあった。 か 町、 れ る。 幼 わ 身をお るだろうから、 とうて 谷 という見 1 けには たと書 0) 忘れ 小滝 金 細 たが、 持 ほ 7 1 が ると、 ; ちの 息^む みを忘 望 出 () 小 たい のある λ 1 とう てあ か み É う な そ

母親 れ ない のとめるのをふりはなって、今までにかつてないさびしい心を抱いて、 「われらの小滝」を見ることはできなくなったのである。 清三は三が日をすますと、 西風 の吹き荒

れる三里の街道を弥勒へと帰って来た。

それでも懐には中田に行くための金が三円残してあった。

二十六

三月のある寒い日であった。

吹いた。 渡良瀬川の渡し場から中やたらせがわ 灰色の雲は空をおおって、 田に来る間の夕暮れの風はヒュウヒュウと肌を刺すように寒く おりおり通る帆の影も暗かった。

見せた女がやって来ない。 まじめな顔をして、二階の別の室に通した。 灯のつくころ、 中田に来て、 不思議にしていると、やがてなじみの新造が上って来て、 いつもの通り階段を上がったが、 いつも 客がいる時でも、 なじみでない新造が来て、 行くとすぐ顔を

清三は 金 槌 か何かでガンと頭を打たれたような気がした。 いらんもな、 おめでたいことで――この十五日に身ぬけができましたでな」

く別れ 郎はちょうどお見えにならんし、 は 紙と半紙に包んだ四角なものがはいっていた。 念がっていましたけれど、 にこれを渡してくれッておいて行きましたから」と風呂敷包みを渡した。 貴郎さんにもな、ぜひゆく前に一度お目にかかりたいッて言っていましたけれどーーールールール いった。 の紋切り形の言葉が書いてあった。 しかし身請けされて行ったところは書いてなかった。 しかたがなしに、 急なものだで、 残念々 貴郎が来たらよく言ってくれッてな 手紙には 々残念々々という字がいくつとなく眼に 手紙を上げてる暇もな 6 金 釘 のような字で、 中には お おぼ いらん 通 つか も 0) そ 手 れ 残 な

半紙に包んだのは写真であった。

おばさんは手に取って、

おいらんも罪なことをする人だよ」

と笑った。

顔 行った人 0) 身請けされ 丸 1 の話をいろいろとして聞かした。 肥った女だッた。 て行った先は話さなかった。 清三は黙って酒を飲んだ。 清三は黙って聞いた。 相 方はかねて知っている静枝の妹女郎が来た。 黙ってその妹女郎と寝た。 妹女郎は

翌日は早く帰途についた。存外心は平静であった。 「どうせこうなる運命だッたんだ」

とみずから口に出して言ってみた。 けれど平静であるだけそれだけかれは深い打撃を受けていた。 「なんでもない、あたり前のことだ」と言ってみた。

土手に上がる時

'憎い奴だ、 復讐をしてやらなけりやならん、復讐! 復讐!」

と叫んだ。しかし心はそんなに激してはおらなかった。

麦倉の茶店では、茶をのみながら、

「もうここに休むこともこれぎりだ」

大高島の渡しを渡って、いつものように 間 道 を行こうとしたが、これも思い返して、

「なアに、もうわかったッてかまうもんか」

で、大越に出て、わざと老訓導の家を訪うた。

てくれたビールをグングンとあおって飲んだ。 老訓導は清三のつねに似ずきわだってはしゃいでいるのを不思議に思った。 清三は出し

「何か一つ大きなことでもしたいもんですなアー -なんでもいいから、世の中をびっくり

させるようなことを」

こんなことを言った。そしてこれと同じことを昨年羽生の寺で 和 尚 さんに言ったこと

を思い出した。たまらなくさびしい気がした。

二 十 七

ある。 羹色になっていた。 音を立てていた。 わに寄って歩いて行く男があった。靴は埃にまみれて白く、 たなかったことをやがて知った。一 の袴をはいた女学生もある。 を受けた人々の群れがぞろぞろと出て来た。 した試験委員、 はいっただけでも心がふるえるような天井の高い室、鬚の生えた肥ったりっぱな体格をはいっただけでも心がふるえるような天井の高い室、鬚の生えた思ったと その年の九月、午後の残暑の日影を受けて、上野公園の音楽学校の校門から、 その群れ かれは初歩の試験にまず失敗した。顔を真赤にした自分の小さなあわれな姿がいた の中に 詰 襟の背広を着て、古い 麦 稈 帽子をかむって、 しゅうめえり 大きなピヤノには、中年の袴をはいた女が後ろ向きになってしきりに妙な 清三は田舎の小学校の小さなオルガンで学んだ研究が、なんの役にもた それは田舎からわざわざ試験を受けに来た清三であった。 校内からは、ピアノの音がゆるやかに聞こえた。 生懸命で集めた歌曲の譜もまったく徒労に属したのでとろう。そく 羽織袴もあれば洋服もある。 毛繻子の蝙蝠傘はさめて羊けじゅす こうもりがさ 一人てくてくと塀ぎ 廂髪に董色ひさしがみ すみれ

ずらに試験官の笑いをかったのがまだ眼の前にちらついて見えるようであった。 「だめ

だめ!」と独りで言ってかれは頭を振った。

える。 んで、 静めるためにそこに横になった。 公園 赤い 赤い襷であやどった若い女のメリンスの帯が見える。 0 口 地に氷という字を白く抜 ハ台は木の影で涼 しか 向こうには縁台に赤い毛布を敷いたのがいくつとなく並 つ た。 いた旗がチラチラする。 風が、 おりおり心地よく吹いて通った。 中年増っ の姿もくっきりと見 か れ は 心を

ういろいろ心の中に計 出 札 所 には田舎者らしい二人づれが大きな財布から銭を出して札を買っていた。しゅっさっしょ 東京に出たのは初めてである。 ひととお 物園の前には一輌の馬車が待ってい わり市中 りよう 画 の見物もしよう、 してやって来た。 試験をすましたら、 た。 お茶の水の寄宿舎に小畑や郁治をも訪 田舎の空気によごれた今までの生活をのが 白いハッピを着た 御 者 はブラブラしていぎょしゃ 動物園も見よう、 博物館 ねよう、 にもは れ V ろ

たの で 昨日 い都会の生活をこれから開くのだと思うと、 か れ の停車場をたつ時には、久しぶりで、 は 口 ハ台に横たわりながら、 その希望と今の失望との間にはさまった一 中学を出たころの若々 さまざまの希望の念が U \ \ 胸 気 分に に み しもなれ

場の光景をまた思い浮かべた。

供を三四人つれてそこから出て来て、嬉々として馬車に乗ると、 な あとに白い埃を立てて、ガラガラときしって行った。 か 口 つ ハ台から起き上がる気分になるまでには、少なくとも一時間はたった。 なにがし 子 爵 夫人ともいいそうなりっぱな貴婦人が、 その白い埃を見つめたのをか 御者は鞭を一当あてて、 可愛らし い洋服 馬車は れは覚 一姿の子 らもうい

えている。 らかな光線がさしとおって、金魚や鯛などが泳いでいるのがあざやかに見えた。 ではそれでも久しく立ちどまって見ていた。 の鹿だの羊だのがべつだん珍らしくもなく歩いて行くかれの眼にうつった。 丹頂の鶴、 「せめて動物園でも見て行こう」と思ってかれは身を起こした。 たえず鼻を巻く大きな象、 養魚室の暗い隧道 遠い国から来たカンガルウ、 の中では、 駱駝だの驢馬だららだ。 ライオンの前 水の中にあき

からか らう そこからもここからもあがった。

り立てているところを抜けて、北極熊や北海道の大きな熊のいるところを通った。 また歩き出した。 り鳴いたりするのをおもしろがって、柵につかまって見とれている。 りをさまざまな人がいろいろなことを言ってぞろぞろ通る。子供は鳥のにぎやかに飛 鴎や鴛鴦やそのほかさまざまの水鳥のいる前のロハ台にかれはまた腰をおろした。ゕもめ ぉし 鷹だの狐だの狸だのいるところを通って、たか きっね たぬき 猿が歯をむいたり赤い尻を振 しばらくしてか あた れ 6

のみごとな羽もさして興味をひかなかった。 かれははいった時と同じようにして出て行っ

た。

ぼけた日清戦争の の前では、 画 ごかなんかがかかっていて、 女学生がはでな 蝙蝠傘 札番が退屈そうに欠をしていた。 をさして歩いていた。パノラマには、

竹の台に来る Ċ, かれはまた三たびロハ台に腰をかけた。

ある。飢餓もあれば絶望もある。新すさまじい叫びのように思われる。 なども胸にのぼった。 っているのが見える。 眼 下に横たわっている大都会、甍が甍に続いて、 あちこちから起こる物音が一つになって、 新聞紙上に毎日のようにあらわれて来る三面事故のこと ここに罪悪もあれば事業もある。 煙 突からは黒いすさまじい煙が なんだかそれが大都会 功名もあれば富貴も あが あ

はしって行く。 らいく台となく続いて行く。 竹の台からおりると、 前に広小路の雑踏がひろげられた。 水撒夫がその中を平気で水をまいて行く。 馬車鉄道があとからあとか 人力車が懸け声で

しばらくして、 清三の姿は、 その通りの小さい蕎麦屋に見られた。

「いらっしゃい!」

と若い婢の黄いろい声がした。

「ざる一つ!」

という声がつづいてした。

取ったり閉てたりするのを見ていた。 清三は夕日のさし込んで来る座敷の 一 隅 で、誂えの来る間を、ホ^トニヤタム ホーワト 湯気が白くぱッとあがった。 大きな男が大釜の蓋を 長い

と婢はそれを膳に載せて運んで来た。足の裏が黒かった。ょんな 竹の箸でかき回して、ザブザブと水で洗って、それをざるに手で盛った。 釜の蓋を取ると、 「お待ち遠さま」

清三はざるを二杯、天ぷらを一杯食って、ビールを一本飲んだ。酔いが回って来ると、

少し元気がついた。

ないら、小畑や加藤を訪問したッてしかたがない」

懐から財布を出して 勘 定ふところ をした。やがて雑踏の中を停車場に急いで行くかれの姿が

見られた。

三十八

荻生さんが 和 尚 さんを訪ねて次のような話をした。

「どうも困りますんですがな」

と荻生さんが例の人のいい調子で、さも心配だという顔をすると、

「それは困りますな」

と和尚さんも言った。

「どうも思うようにいかんもんですから、ついそういうことになるんでしょうけれど……」

「校長からお聞きですか」

ですし、それに清三君が宿直室にいると、女がぞろぞろやって来るんだッて言いますから 「いいえ、 | 校長からじかに聞いたというわけでもないんですけれど……借金もできたよう

ねえ」

「いったい、あそこは風儀が悪いところですからなア」

「ずいぶんおもしろいんですッて……清三君一人でいると、学校の裏の垣根のところから、

声をかけたり、わざと 土 塊 をほうり込んだりするんですッて。そうして誰もいないと、

庭から回ってはいって来るんだそうです」

「そして、その中に誰か相手ができてるんですか」

「よくわかりませんけれど、できてるんだそうです」

「どうせ、 機 織 かなんかなんでしょう?」

「え」

「困るですな。そういう女に関係をつけては」

と和尚さんも嘆じた。

しばらくしてから、

「早くかみさんを持たせたら、どうでしょう」

「この間も行田に行きましたから、ついでに寄ったんですが、お袋さんもそう言っていま

した」

「加藤君のシスターはもらえないのですか」

「先生がいやだッて言うんです……」

「だッて、前にラブしていたんじゃないですか」

「どうですか、清三君、よく話さんですけれど、 加藤君と何か仲たがいかなんかしたらし

いですな」

「そんなことはないでしょう」

「いや、あるらしいです」

かたがない。 と荻生さんはちょっととぎれて、「この間も言ってましたよ、僕はこういう運命ならし 一生独身で子供を相手にして暮らしても遺憾がないッて言ってましたよ」

「独身もいいが――そんなことをしてはしかたがない」

「ほんとうですとも」

としてしまいますから……今度来たら、それとなく言っていただきたいものですが……」 と荻生さんは友だち思いの心配そうに、「校長が可愛がってくれてるからいいですけれ 郡視学の耳にでもはいるとたいへんですからな。それに狭い田舎ですから、すぐぱツ

「それは言いましょう」

と和尚さんは言った。

「それに、清三君は体が弱いですからな……」

と荻生さんはやがて言葉をついだ。

「やっぱり胃病ですか」

生 とこの三つが僕のさびしい生活の慰藉だなどと前から言っていましたが、このごろじ 相変わらず甘いものばかり食っているんですから。甘いものと、 音楽と、 · 絵の写

や――この夏の試験を失敗してからは、 集めた譜は押し入れの奥に入れてしまって、 唱歌

の時間きりオルガンも鳴らさなくなりましたから」

「よほど失望したんですね」

「え……それは熱心でしたから、 試験前の二月ばかりというものは、そのことばかり言っ

てましたから」

「つまり今度のことなどもそれから来てるんですな」と和尚さんは考えて、 「ほんとうに

気の毒ですな。ずいぶんさびしい生活ですものなア。 それにまじめな 性 分 だけ、いっ

そうつらいでしょうから」

「私みたいにのんきだといいんですけれど……」

「ほんとうに、君とは違いますね」

と和尚さんは笑った。

三十九

清三の借金はなかなか多かった。この二月ばかり、自炊をする元気もなく、三度々々小

川屋から弁当を運ばせたので、その 屋に三円、 二円と借りたものもすくなくなかった。荻生さんにも四円ほど借りたままになっていた。 中田に通うころに和尚さんに融通してもらった二円も返さなかっゆうずう 一の価値の貴い田舎では、 荒物屋に五円、 前からそのままにしてある米屋に三円、 勘 定 は七八円までにのぼった。 そのほ た。 酒屋に三円、 か同僚 から一円 菓子

四十

金

何よりも先にこれから信用がくずれて行った。

はなかった。 かれたこともあった。 ところがどうした動機か、 和尚さんからもそれとなく忠告された。 清三は急にまじめになった。もちろん校長からこんこんと説 けれどもそのためばかりで

気もなく、 感じられてきた。落ちて行く深い谷から一刻も早く浮かびあがらなければならぬと思った。 失望と 空 虚 とさびしい生活とから起こった身体の 不 摂 生 、このごろでは何をする元、 くうきょ 頭が急に新しくなったような気がした。自己のふまじめであったのがいまさらのように 散歩にも出ず、 雑誌も読まず、 同僚との話もせず、 毎日の授業もお勤めだから

切なる悔恨をともなって来た。 けだるく、 かんで通った。 つのって、 かたがなしにやるというふうに、 蒼 白 い不健康な顔ばかりしていた。どことなく体があおじる 時々熱があるのではないかと思われることなどもあった。 П の中はつねにかわいた。 弱かったがしかし清かった一二年前の生活が眼の前に浮 ――ふまじめな生活がこの不健康な肉体を通じて痛 持病の胃はますます

- 絶望と悲哀と寂※とに堪へ得らるるごとき勇者たれ」 | 絶望と悲哀と寂※とに堪へ得られるやうなまことなる生活を送れ」

「運命に従ふものを勇者といふ」

ぞわれ勇者たらん、今日よりぞわれ、 弱かりしかな、ふまじめなりしかな、幼稚なりしかな、 わが以前の生活に帰らん」 空想児なりしかな、 今日より

「第一、体を重んぜざるべからず」

「第二、責任を重んぜざるべからず」

「第三、われに母あり」

い頬に涙がほろほろと流れた。 かれは っわ れに母あり」と書いて、筆を持ったまま顔をあげた。胸が迫ってきて、蒼白

間は 件や てい 0) お に書け できぬような日記ならだんぜんよしてしまうほうがいい」こう思って筆をたっ ぬくらいならよすほうが - 点が打ってあった。 いてあっ 暮 秋 のさまや落葉や木枯のことも書いてある。 か やは 心 れ か 持 は Ď れ その と書いてあった、 中田 ようなことはせぬというところに、 ちを十分に にとっては暗黒な時代でもあり、 り他人に見せるという色気があるんだ。 そのころの日記を出して見た。 万一 間 に通 日記 他人に見らるる恐れがないではないと思ったからである。 の一年と二三か はたえだえながらも、 い始めるころから、 書けぬような日記ならよすほうが その次の土 ζ, い。 あとは白紙になっている。 月の月日のことを清三は考えずにはおられ 自分の心の大部分を占めてる女のことを一 曜日の条に、 日記をつけることを廃した。 その年の十月の末ころまでつづい 九月二十四 また複雑した世相にふれた時代でもあっせそう 日記を書くということのまことの意味がある 大高島から向こう岸の土手に渡 自分のやったことや心持ちが十分に書け 十月の二十三日の条に 日 その時、 , , いと言ったが、 秋季皇霊祭。 「日記なん めっ たなことを書 それと反対 その文字に朱で か れ 行も書くことの てい な てつまらん 「この日 か は 6柳行李: った。 る記 たのを覚え 利 事 その もの 日 が 雨 根 記 圏け 事 寒 書 \prod

のではないかとかれは考えた。

かれはふたたび日記を書くべく罫紙を五六十枚ほど手ずから綴じて、その第一頁に、パージ 前

の三か条をれいれいしく掲げた。

明治三十六年十一月十五日

かれはこう書き出した。

四十一

「過去は死したる過去として葬らしめよ」

「われをしてわが日々のライフの友たる少年と少女とを愛せしめよ」

「生活の資本は健康と金銭とを要す」

われをして清き生活をいとなましめよ」

こういう短い句は日記の中にたえず書かれた。

またある日はこういうことを書いた。

に住まんことを予想しつつあり」 野心を捨てて平和に両親の老後を養い得ればこれ余の成功にあらずや、母はわれととも

またある時は次のようなことを書いた。

小畑 びその暖 分の読み古したる れらをうらやみて捨て去りしわれ 親 より打ち解けたる手紙 か かき昔の りし昔 0) 友、 植物 友情を復活せしめよ。 われより捨て去りしは愚かなりき。情薄かりき。 の書籍近きに送らんといふ。うれし」 あり。 今 の小なりしことよ。喜ぶべきかな友情 日また加藤より情に満たされたる便り しょせん、 境遇は境遇なり、 運命 われをしてふたた 0) 復活 あ は ij 運命 小 な 畑 ば 昨 自 \exists か

た動 の旅でも実際について関さんはしきりに清三にその趣味を鼓吹した。 さんは文部の中学教員検定試験を受ける準備として、 校長も た 植 に関さんと遊びに行った時採集して来たものの中にはめずらしい のを一つ一 物 の標本の 同僚も清 つ誰にもわ 整理に取 三の態度 のに i) かるように分類してみた。今年の か か わ つ か た。 に変わ 野か ったのを見た。 ら採って来て紙に張ったままそのままにし しきりに動植物を研究し 清三は一昨年あたり熱心 夏休暇 に三日ほど秩父 も のが う い あっ に集め た。 そ 6 関 T

その方面 小 畑 からやがてその に移 って いった。 教科書類が到着した。 わからぬところは関さんに聞 この秋まで音楽に熱心であった心はだんだん 1 た。

村 の百姓たちはふたたび若い学校の先生の散歩姿を野道に見るようになった。 写生して

いるそのまわりに子供たちが圏をかいていることもある。 かれは弥勒野の初冬の林や野を

絵はがきにして、

小畑や加藤

に送った。

画、模様画、それに綴り方に作文、 昆 虫 標 本が、 もようが、 こんちゅうひょうほれそうおうに整頓しておかなければならなかった。 成績を博したいものだと校長は言った。 れを生徒の多くの作品の中から選ぶのはひととおりの労力ではなかった。どうか来年は好 の調べが忙しかった。 夕日がさして、あおじやつぐみの鳴き声が垣に近く聞こえる。 三たびこのさびしい田舎に寒い西風の吹き荒れる年の暮れが来た。 前の 竹 藪 には薄 旧の正月に羽生 昆虫標本、 で挙行せられる成績品展覧会に出品する準備もそ 図 画 植物標本などもあった。 臨本模写、 二十二日ごろから、 考案画、写生 日 課点 そ

には 見てもらうほうがいいですぜ」と関さんは二十四日の授業を終わって別れようとする時に えたことのない軽 それにどうしてか、このごろはよく風邪をひいた。 いったとては熱が出たりした。 種の眩惑を感じる。 煙草を飲むと、どうも頭の工合いが悪 「君、どうかしたんじゃありませんか、 散歩したとては、 咳嗽が出たり、 今までに覚 医師に 湯

荻生さんを羽生に訪問した時には、そう大して苦しくもなかった。けれど成願寺に行っ

て久しぶりで和尚さんに会って話そうと思った希望は警察署の前まで来て中 行 畄 に戻り車がうろうろしていたので、 熱も少なくとも三十八度五分ぐらいはある。 やすく 賃 銭 をねぎって乗 それに咳嗽が った。 出 ... る。 止 寒い路を日 ちよ すべく余儀

万朝報報 の 暮く のを感じた。 ろく話した。 まで町中や公園を話し歩いたりした三年前にくらべると、 もに違ってまじめなところがある。 して熱は除れた。 一人はこのごろ東京の新聞ではやる 年 れ暮ぐ 郁治 清三もこのごろでは新聞紙上で、 東京では近来よほど殺気立っている。 の暮れを一室に籠って寝て送った。 :は清三のやせた顔と蒼白い皮膚とを見た。 れにようやく家に着 の宝を小石川 なんぞと言うとすぐ衝突して議論をしたり、 続 いて、 大晦 日おおみそか 日露談判の交渉がむずかしいということが話題にのぼった。 の にはちょうど昨日帰ったという加藤の家を音信るることが

おとず 久世山に予科の学生が 「いた。 ζ, 宝がらさが探 よいよ この国家の大問題を熱心に見ていた。 母親は心配して、 新聞の調子を見てもわか 6 戦端 が開い せんたん しや玄米一升の米 粒こめつぶ 掘りに行ってさがし当てたことをおもし 話しぶりもどことなく消極的 ける こうも変わるも 大晦日の夜を感激して暁の三 いろいろ慰めてくれた。幸いに かも しれ る 調べの話などをした。 ない」 が、 どこかこういつ め と郁治は言 か 「そんな大き と思わ にな った でき れた。 時

な戦争を始めてどうするんだろう」といつも思っていた。二人はその問題についていろい 戦闘艦が多いなどと郁治は話 陸軍では勝算があるが、 じた。 海軍では 噸 数 がロシアのほうがまさっていて、

て通った。父親は今朝猫の額のような畠の角で、霜解けの土をザクザク踏みながら、カーター゙ レーセン んで雑煮を祝った。 を鉢に植えて床の間に飾った。 手を泥だらけにして、 の梅もどきッていう花大好きさ、この花を見るとお正月が来たような気がする」こう言っ した。べつに蔓うめもどきの赤い実の鈴生りになったのを挿していると、 を見せたばかりで、 元日の朝、床の間の花瓶にかれはめずらしく花を生けた。 早咲きの椿はわずかに赤く花 厚いこい緑の葉は、 しきりに何かしていたが、やがてようやく芽を出し始めた 福寿 草 朝日の影が薄く 障 子 にさした。親子は三人楽しそうに並 黄いろい寒菊の小さいのと趣に富んだ対照をながらい。 なんぎく 母親は 私、

清三の日記は次のごとく書かれた。

明治三十七年

くだすべく新年は来たれり。若き新年は向上の好機なり。願はくば清く楽しき生活を 一月一日 新しき生命と革新とを与ふべく、新しく苦心と成功と喜びと悲しみとを

いとなましめよ。

△「新年を床の青磁の花瓶に母が好みの蔓梅もどき」△小畑に手紙出す、にいとし せいじ

り勉強して二年三年ののち、 △風邪心地やうやくすぐれたれば、 検定試験を受けんとす、 明日あたりは野外写生せんとて画板など繕ふ。 科目は植物に志す由言ひやる。

二日 「たたずの門」のあたりに写生すべき所ありたれど、 風吹きて終日寒けれ

やむ。△きく子が数へし玄米一合の 粒 数 七二五六。

三日 昨夜入浴せしため感冒ふたたびもとにもどる。 △休暇中に野外写生の望み絶 のぞ た

ゆ。

- 万朝報 の米調べ発表。 玄米一升七三二五〇粒。 △今年は倹約せんと思ふ。

財が変う のつねに虚なるは心を温めしむる現象にあらず。 しょせん生活に必要なるだけ

の金は必要なり。

五日――年賀の礼今年は欠く。

六日 牧野雪子 (雪子は昨年の暮れ前橋の判事と結婚せり)より美しき絵葉書の年

賀状来たる。△腫物再発す。

病後療養と腫物のため帰校をのばす。 △紅葉秋濤 著「寒牡丹」読みかけてこうようしゅうとうちょ

罪 悪 が 、発はった。 発ん なり。 △中学世界買って来てよむ。 △加藤! 帰京す。

や

がる。 。

目 健康 を得たし、 健康を得たし、 健康を得たし。

公ル 九日 長くこの方法が惰性となればよけれどいかにや。 影響にて、 戦争は遂にさくべからざる 日露の危機 イザの熱誠なる執着、 「寒牡丹」読みて夜にはいって読了す。 にわ 外交より戦期にうつらんとすと新聞紙しきりに言ふ。 かにその量を減じ、 四百頁の大団円はラブの成功に終はる。 ページ だいだんえん が。 あらば吸ひ、 明日はまた利根河畔の人となるべ なくば吸はぬといふやうにな 罪悪に伴なふ悲劇中の苦悶、 吾人の最 △煙草は感冒がぜ 女主人 ŧ りたり。 好ま 0

ぬ

かれ すぐれぬ 晩んさん さび 借金 0) かれは土 Ū ののち、 ので、 の返却を心がけたので、 ر ر 寒い宿直室の生活はやがてまた始まった。 い髪の生えたすらりとやせた姿はいつも夕暮れの空気の中にあざやかに見え 曜日の日記の中に、 つとめて運動をしようと思って、 その日の新聞をよみ終はりて、 財がののう 「平日の課業を正直にすませ、 はつねにつねに冷やかであった。 さて一日の反省になんらもだゆることな 生徒を相手に校庭でよくテニスをやった。 昨年の十一月から節約に節約を加え 満足に事務を取 胃が 悪く気分が 温 か

ちの悪い

ことはたとえようがなか

つ

た。

くっ 思い れる く る て困 とか とまる。 る 安息 のほ 刀で った。 すべき明 か たえ 斬られるとかする夢で、 節約 眠 つ の結 て平和ならざるな 日 。 の たと思うとすぐ夢に 日曜を思へば、 果三銭の刻み煙草四日を保つ」 し」と書いた。 テニスの運動 眼 がさめると、 おそわれる。 また の影響とて、 と書 ぐっ たい $\overline{\mathrm{M}}$ しよ ていは恐ろ V た。 の都 り寝汗をか 合あ 右手の筋肉 U か れば U L V か 帰宅 人 れ 7 に は の筆とるにふ 1 追 夜 眠 た 11 け か ら 心 け れ 持 な

との の音 られ がガヤガヤし 宿舎生徒 の氷の上にはあおじが飛び、 朝ごとの 中学校々友会の会報が年二季に来 な が V 松本 いて て人々 ア 霜は 死 X て 校庭に立 なにがしが リカに行っ が驚 に 白かった。 **,** , る。 つ V 1 一つてい ピストルが続けざまに鳴った。 て考えた。 てはせ寄ったことがくわしく記してあった。 .みずから棄てて自殺した 顛 末 が たものもあれば、 夜半 るかれのやせぎすな姿を人々はつねに見た。 空しい枝の桑畠にはつぐみが鳴き、 の霙で竹の葉が真白になっていることもあった。 夜はその夢を見た。 た。 同窓 北 海道に行っ の友の消息がおぼろ気ながらこれによって 自殺した男が窓から飛 寄宿舎の窓に灯が たも 書 のも いてあっ 榛の根の枯草からは水鶏はん ある。 か れ た。 今季の会報 は 明 深夜、 解 るくつ 今まで思ったこ け ん で やらぬ ラッケ 来 ピス には 小川 トル 知 'n 寄

が羽音高く驚き立った。楢や栗の葉はまったく落ちつくして、草の枯れた利根川の土 ただ一帯に 代 赭 色 に塗られて見えた。 田には大根の葉がひたと捨てられてあっ 一手は

背に負った親子三人づれの零落した姿などを見ては涙をこぼした。 休んで、 てあった。このごろは母を思うの情がいっそう切になって、 よきこと悪しきことにつけお前一人便りに御座候間御身大切に御守り 被 下 度 候」 さ激しく御座候間あまり寒き時は湯をやすみ、 に気の弱くなったのは病気のためではないかと思った。 きわだってやさしくなったのを喜んだが、しかしまた心配にならぬでもなかった。 お前、 月 の中ごろに、 白玉 ほんとうにお医者にかかって見てもらわなくっていいのかね」と顔に心配 のしる粉などをこしらえてもてなした。 母親から来た小荷物には、 毛糸のシャツがはいっていた。 風ひかぬやう御用心くだされたく候 寝汗が出るということを聞 清三が行くと、 土曜日に帰る途でも、 母親もこのごろ清三の 賃仕事を午後から 手紙には 稚^ち児を と書い にわ の色を 朝夕 寒 か

ですって、いまに、 生さんはこのごろ話のある養子の口のことを語って、 時には荻生さんを羽生から誘って来て、 りっぱな旦那になったら、たんとご馳走をしますよ。 宿直室に一夜泊まらせることなどもあった。荻 「その家は君、 相応に財産が 君ぐらい一人置

ぐ鼾をたてて安らかにいびき いてあげてもいい」などと 熟 睡 した。こうして安らかに世を送り得る人を清三はうらやまじゅくすい 戯 談 を言って快活に笑った。 荻生さんは床にはいると、

昇るのを見ながら、いつも深呼吸を四五十度やるのを例にしていた。 見られた。 分がすぐれないんだろう。どうかしなくってはしかたがない」などと時にはみずから励ま 寒い冬の中にもきわだって暖かい春のような日があった。 しく思った。 関さんはすいかずらやじゃのひげや大黄などを枯れ草の中に見いだして教えてくれた。 しかしやっぱり胃腸の工合いはよくなかった。 かれは午前七時にはかならず起きて、燃ゆるような朝日の影の霜けぶりの上に しかも心地よく刈り取られて、榛のひょろ長い空しい幹が青い空におすように 寝汗も出た。 野は平らかに、 「どうして、こう気 静かに、広く

四十二

かけた。 ある暖 町の横町に、 が い日曜に、 黒い冠木の門があって、庭の松がこい緑を見せた。 関さんとつれだって、 羽生の原という医師いしゃ のもとに診てもらいに出 白い敷布をかけ

とお のが見えた。 た寝台が 診 察 室 にあって、それにとなった薬局には、 ホホヒぃ しんさっしっ った硝子の向こうに、 まず胸から腹のあたりを見た。 医師は三十七八の髪を長くしたていねいな腰の低い いろいろの薬剤を盛った小さい大きい瓶が棚の上に並べ 次に、 肌をぬがせて背中のあたりを見て、 午前十時ごろの暖かい冬の 人で、 聴診器を耳に当て コツコツと 7 日影の ある

こう言って型のごとき薬を医師はくれた。「やはり、胃腸が悪いんでしょうな」

軽くたたい

た。

がすでにもえて、なず菜など青々としている。関さんはところどころで、 腰をかけて、 ている清三の水薬の瓶には、野の暖かい日影がさしとおった。 ろそろ芽を出し始めた草をとった。そしてそれを清三に見せた。 ブンブン糸繰り車をくっている猫背の婆さんもあった。 後ろにして、 春のような日であった。連日の好晴に、 そばの大釜からは湯気が白く立っていた。 二人は話しながらゆるやかに歩いた。 霜解けの路もおおかた乾いて、 野の角に背を後ろに日和ぼっこをして、 名代の角の饂飩屋には二三人客がなだい。うどんや 野には、 日当たりのいい所には草ぃぁ 風呂敷にも包まずに持っ りょうもう 足をとめて、 街道にはとこ の 山 々を

四十三

先生」

業すると、すぐ浦和の師範学校に行った。 書いて来たこともあった。時には、 きで、清三の教えた新体詩をオルガンに合わせてよく歌った。 あった。あまり可愛がるので、 たりして清三に見せた。家はちょっとした農家で、散歩の折りに清三が寄ってみたことも ことにかれをなつかしがっている。 でがにこにこと笑って立っていた。 つねに自然の、 ら言われたこともあった。 障子をあけると、 とやさしい声がした。 運命の、 廂 髪 に結って、 熱情のと手紙をよこした。教え子の一人よりなつかしき先生へと 丸顔の色の白い田舎にはめずらしいハイカラな子で、音楽が好 「林先生は田原さんばかり贔屓にしている」などと生徒か 詩をくださいなどと言って来ることもあった。 昨年の卒業生で、できのいいので評判であったが、 高等四年のころに、 ちょっと見ぬ間に非常に大人びた女生徒の田 高等二年生の時から清三が手がけて教えたので、 新体詩などを作ったり和文を書い 師範学校の寄宿舎からも、 原 卒 $\widetilde{\mathbb{C}}$

「田原さん!」

清三は立ち上がった。

「どうしたんです?」

続いてたずねた。

「今日用事があって、家に参りましたから、ちょっとおうかがいしましたの」

言葉から様子からこうも変わるものかと思うほど大人びてハイカラになったのを清三は

見た。

「先生、ご病気だって聞きましたから」

「誰に?」

「関先生に――」

「関さんにどこで会ったんです?」

「村の角でちょっと――」

食い過ぎるものだから」 「なアにたいしたことはないんですよ」と笑って、 「例の胃腸です--あまり甘いものを

ひで子は笑った。

先生と生

一徒とは

日曜

日の午後

の明るい室に相対してしばし語

った。

寄宿舎の話などが

感じが が、 話し ルガンの妙音から出た花と 天 使 日に ひで子に見せた。 マ こで聞 女に 0) 明るく見えて 今年卒業するはずの行田 貴族に生まれて、 , , か つものへだてのない会話をさまたげた。 は娘になったへだてがどことなく出ているし、 、せた。 美 容 花 いた。 口絵には紀元二百年ごろの楽 聖セント、 熱心なるエホバ 清三は今朝友から送って来た のごとくであったということをも語っ の美穂子の話も出た。 の幻影とを楽聖はじっと見ている。 の信者で、 机 オルガンの創造者であるということを の上には半分ほど飲 いぜんとして昔の親し 「音楽の友」という雑誌をひ 男には生徒としてよりも娘とい セリシアの像が た。 h 清三はこの だ水薬 みは 出 残 7 个の瓶が って い 人は ろげ タ う 口 オ 7

きりに音を立ててい あきらかに残 校庭は オ ル ガンの音が 庭の 静かであった。 つていて、 一隅には教授かたすみ やがて聞こえ出した。 るかたわらに、 宿直室 午後 闸 の日影に雀がチャチャと鳴きしきった。テニスコ の長 の草木 海老茶の袴を着けたひで子は笑顔をふくんで立った。メメびちゃ はかま っ ネがお へがおをかけってみると、若い先生が指を動かして、 7 縁 が植えられてあった。 側 0 隅にラケットやボールや網が置いてある 1 0) してし のが

ひで子を送って清三はそこに出て来た。

薔薇の新芽が出ているのが目についた。 清三はこれをひで子に示して、

もう芽が出ましたね、 早いもんだ、 もうじき春ですな」

「ほんとうに早いこと!」

とひで子はその一葉をつまみ取った。

やがて校外の路を急いで帰って行く海老茶袴の姿が見えた。

四十四四

日には校門には日章旗が立てられ、 日露開戦、 八日の旅順と九日の仁川とは急雷のように人々の耳を驚かした。 講堂からはオルガンが聞こえた。 紀元節の

きのすみやかなのは、田舎で見ていても気がもめた。 東京 の騒ぎは日ごとの新聞紙上に見えるように思われた。 一 月 以前から政治界の雲行 召集令はすでにくだった。 村役場の

舎道に、 らなければならない 壮 丁 たちは、父母妻子に別れを告げる暇もなく、 兵事係りが夜に日をついで、その命令を各戸に伝達すると、二十四時間にその管下に集ま あるは停車場までの乗合馬車に、あるは 楢 林 の間の野の路に、一包みの荷物 あるは夕暮れ の田

鴻巣駅、 集され を か か えて急 も 桶川駅、 \tilde{O} が三百 1 .で国事におもむく姿がぞくぞくとして見られた。 余 奥羽 名、 そのころはまだ東武線ができぬころな の栗橋駅、 蓮田駅、 久喜駅などがその集 ので、 南埼玉 まる 信 越 お 線 の — も 0) 郡から 、吹上駅、 な る 車

場 0) ぞあ 柵 さくない 交通 っ の衝に当たった町々 には 町 長 だの 兵事! では、 係 線 りだの学校生徒だの親類 1 ち早く 国旗を立ててこの兵士たちを見送っ 友だち だの が 集ま

停

車

場

峡ぅ に した壮 艫作崎 は れ たびごとに万歳を た。 二号活 旅順 順 日は 襲しゅうらい 庁に 町 朝か 字が とい か 仁_{んせん} 川ん 5 うの ら曇 れ 町 V \wedge もで 歓か はどこに当たるか、 の海 れ った寒い日であ 呼に 1 村 商船 から 戦が っくわ してその行をさかんに 温奈 古浦丸・ Š 村 か あ か \wedge つ 7 げられて、 配達する新 から、 ったが、 を轟沈 それ 静 をたしか 予想のごとく、 聞 か 1 ろい な した。 屋 したという知らせが $\overline{\mathcal{O}}$ 田舎でもその話がいなか ろの 鈴 清三 めるため、 の音は忙 計 は行田 画 口やら、 敵 0 しげに聞こえた。 校長は教授用 浦塩艦隊が津軽海 か ら 風説やらが記されてある。 **,** , 来た。 があるく たるところでくり に帰 って、 その る の大きな大日 津 途 新 汽 |軽海 聞 車 紙 0) 峡 返さ そう 上 出 る

本地

図を教員室にかけた。

老訓導も関さんも女教師もみなそこに集まっ

「ははア、こんなところですかな」

と老訓導は言った。

清三は が 浦 塩 塩 お から一直線にやって来た敵の艦隊と轟沈されたわが商船とを想像

久しくその掛け図の前に立っていた。

街道 る老人もあった。 れという爺もあれば、そうした大国を敵としてはたして勝利を得らるるかどうかと心配す 湯屋でも、 夜は の家々からは、 いつものごとく 竹 藪 理髪舗でも、 子供らは旗をこしらえて戦争の真似をした。 酒に酔って笑う声や歌う声もした。 戦争の話の出ぬところはなかった。 の外に藁屋の灯の光がもれた。 憎いロシアだ、こらしてや ちょうど旧暦の正 けれどがい して田舎は 一月な ので、 平 袙

だん成功して負債もすくなくなり、 校長の 斡 旋 で始めた 頼 母 講 にも毎いん 成りに あっせん しょうじょう 朝報に東京日日に時事、 ることもできるようになった。午後の二時ごろにはいつも新聞が来た。 すのを恐れたが、 このごろか 互いにかわった新聞を一つずつ取って交換して見ようという約束ができた。 れは朝は六時半に起床し、 しかしたいしたこともなくてすぎた。 それに前の理髪舗から報知を持つて来た。 夜は九時に寝た。 節約に節約を加えた経済法はだん 正月の餅と饂飩とに胃腸をこわ 戦争の始まってか 月五 十銭 国民に万 をか け

し煙草と菓子とをやめるは容易ではなかった。気分がよかったり胃がよか この多くの新聞を読むことと、 それくらいがこのごろの仕事で、ほかにこれといって変わったこともな 風を引かぬようにつとむることと、煙草をやめることと、 日記をつけることと、 運動をすることと、 土曜 日の帰宅を待つこと ったりすると、 節倹をするこ か つた。

野に出かけた。 机 日学校の付近の のまわ 写生にはだいぶ熱中した。 りに餅菓子のからの竹皮や、 稲木、榛の林、 なずななどの緑をも写した。 紅梅をえがいてみたが、色彩がまずいので、 :、掘 切の枯 葦、 ^{ほっきり かれあし} 天気のよい暖かい日 日の出の袋などがころがった。 日には、 それに雪の野を描 画板と絵の具とをたずさえてよく 花が桃かなんぞのように見え \overline{V} たのもあった。 ある

とのことであった。 した。 三は荻生さんにも来遊をうながした。 月の末に、 久しぶりで一度会いたい。こちらから出かけて行くから、 清三は喜んで返事を出 小畑から手紙が届いた。少しく病をえて、この春休みを故郷に送るべく決心 旅順における第一回の閉塞へいそく した。 金曜 その前夜は月が明るかった。 日には行くという返事が の記事が新聞紙 日取 上に載せられてある日で 折 かれはそれに対して、 りを知らせてよこせ りかえし て来る。

久しぶりで友のことを思った。

四十五

小畑は昔にくらべていちじるしく肥えていた。薄い鬚などを生やして頭をきれいに分け 高等師範の制服がよく似合って見える。 以前の快活な調子で「こういう生活もおもし

ろいなア」などと言った。

る低い階段の上に腰かけて見ていた。小畑の球はよく飛んだ。 力がなかった。二三度 勝 負 があった。清三の額には汗が流れた。 苦しそうに呼吸をつくのを見て、 荻生さんは清三と小畑と教員たちとが、ボールを取って校庭に立ったのを縁側からおり 引きかえて、 心臓の鼓動も高かった。 清三の球には

「君はどうかしたのか」

「体が少し悪いもんだから」(からだからだ)の畑は清三の血色の悪い顔を見た。

「どうしたんだ?」

「持病の胃腸さ、たいしたことはないんだけれど……」

「大事にしないといかんよ」

小畑はふたたび友の顔を見た。

採集 さん もはしんとした宿直室に満ちわたっ い標本や昨年の秋に採集に出かけた時のことなどを話して聞かせる、 三人は快活に話 の軽 の話が出る。 い駄洒落もおりおりは交った。そこに関さんがやって来て、゛゛だじゃれ 三 峰 で採集したものなどを出して見せる。 した。 清三が出して見せる写生を一枚ごとに手に取って批評した。 た。 小畑は学校にあるめずら にぎやかな声が 昆虫採集 の話や 荻生 植 物

にした。 酒を飲まぬ荻生さんの顔も赤 夕飯は小田はからぬし かれ は談笑の間にもいちじるしく清三の活気がなくなったのを見た。 川屋に行って食った。 V. 小畑は美穂子や雪子のことはなるたけ口にのぼさぬよう 雨気を帯びた夕日がぱッと 障 子 を明るく照らして、ぁѣけ

荻生さんは清三のいない時に、

「あれでも去年はなかなか盛んだったんですからな」

こう言って、 女が学校にやって来たことなどを小畑に話して聞かせた。 小畑は少なから

ず驚かされた。

夜は小川屋から一組の蒲団を運んで来た。 まだ寒いので、 荻生さんは小使部屋に行って

「あのころが思い出されるねえ」

はよく火を火鉢に入れて持って来た。 うとしたのは 十 時過ぎであった。 便所に出て行った小畑は帰って来て、 菓子もつき、 湯茶もつき、 話もつきてようやく寝よ 「雨が降ってる

雨 <u>.</u>

ねえ」と声低く言った。

と明日朝早く帰るはずの荻生さんは困ったような声を立てた。

滴き *** はありゃしない」と清三はこう荻生さんに言ったが、戸外にようやく音を立て始めた 点でんて にはいって、 とがむらむらと思い出された。清三は帰りがおそくなるといつもこうして一枚の蒲団の中よがよん。 愉快だ。 まいやしない。 ってどっちか一方 | 興が大いに起こって来たというふうである。 明日は土曜、あした を聞いて、 今夜はしめやかに昔を語れッて、天が雨を降らしてくれたようなものだ!」 熊谷の小畑の書斎に泊まるのがつねであった。顔と顔とを合わせて、 「愉快だなア! 君も、 明後日は日曜だ。 「うんうん」と受け身になるまで話をするのが例であった。 明日一日遊んで行くサ。めったに三人こうしていっしょになること。 こうしたわれわれの会合の背景が雨になったのはじつに 行田には今週は帰らんつもりだから、 小畑の胸にもかれの胸にも中学校時代のこ 雨は降ったッてか 眠くな

と小畑は寝ながら言った。

れた。 その小畑もやがて疲れて 熟 「睡 してしまった。清三は眼がさめて、どうしても眠られ の姿がまるでほかの人であるかのようにあざやかに見えた。涙が寝衣の袖で拭いても拭いの姿がまるでほかの人であるかのようにあざやかに見えた。涙が寝衣の袖で拭いても拭い う思いがみなぎりわたったが、それとともに、涙がその 蒼 白 い頬をほろほろと伝って流 ついてきて、 荻生さんが一番先に鼾声をたてた。 戸外にはサッと降って通る雨の音が聞こえる。 中田 の女のことも続いて思い出された。長い土手を夕日を帯びてたどって行く自分 胸が いっぱいになる。こうしたやさしい友もある世の中に長く生きたいとい 「もう、寝ちゃった! いろいろな感があとからあとから胸 早いなア」と小畑が言った。

ても出た。

翌朝、小畑は言った。あくるあさ

「昨夜、君は 「どうも眠られなくってしかたがないから、 あれからまた起きたね 起きて新聞を読んだ」

顔が白くはっきりときわだっていたのが今でも見える」こう言って清三の顔を見て、 「何かごそごそ音がするから、 目をあいてみると、君はランプのそばで起きている。 君の

寝られないかえ?」

「どうも寝られんで困る」

「やはり神経衰弱だねえ」

雨にぬ た宿 卓の前に浮き出すように見せて、高等二年生に地理を教えていた。テーブル の中には葱と手紙とが添えてあった。 てて生徒を叱った。 れてぞろぞろと教場から出て来る生徒の群れを見たりしていた。 授業ぶりを参観したり、 んに頼んでやった豚肉 土 :直室で話した。三時には馬車が喇叭を鳴らして羽生から来たが、 曜 れて泣くように見えた。清三は袴をはいて、やせはてた体と 蒼 白れて泣くように見えた。清三は袴をはいて、やせはてた体と 蒼 おおじろ 日は半日授業があった。 竹^たけやぶ の新聞包みを小使部屋にほうり込むようにして置いて行った。 教員室で関さんの集めた標本を見たり、 の中には椿が紅く咲いて、その縁にある盛りをすぎた梅っぱき 荻生さんは朝早く雨をついて帰った。 手紙には明日午後から羽生に来い。 女教員は黄いろい 時間ごとに教員に 午後からは、 小畑は校長や清三の 御者は今朝荻生ぎょしゃ い顔とを教室の 待っている! 二人はま つれら の花は 声を立 包み

と書いてあった。

一人は高等師範のことやら、 雨は 終 日 りゅうじつ やまなかった。硬い田舎の豚肉も二人を淡く酔わせるには十分であった。 旧友のことやら、 戦争のことやらをあかず語った。

「今年はだめだが、 来年は一つぜひ 検 定 を受けてみたいんだが」

と清三は言った。

まだそんなに早く取れるはずがないという人々もあった。街道を鈴を鳴らして走って行く 日 曜 日には馬車に乗って羽生に出かけた。 旅順が陥落したという評判が盛んであった。

号外売りもあった。荻生さんは、ごうがいう と鶏肉の汁と豚鍋と鹿子餅。けいにくしるぶたなべかのこもち 銀行の二階を借りて二人を迎えた。ご馳走にはいり鳥

「今日はなんだか飯のほうが副食物のようだね」と清三は笑った。

清三のいないところで、小畑は荻生さんに、

「林君、どうかしてますね、体がどうもほんとうじゃないようですね?」

「JY丟ヽ肓しょっこゝごっっゝ」「僕もじつは心配してるんですがね」

「何か悪い病気じゃないだろうか」

「さアーー」

「今のうちにすすめて根本から療治させるほうがいいですぜ。手おくれになってはしかた

がないから」

「ほんとうですよ」

|持病の胃が悪いんだなんて言ってるけれど| -ほんとうにそうかしらん」

「町の医師は腸が悪いんだッて言うんですけれど」

「しっかりした医師に見せたほうがいいと思うね

「ほんとうですよ」

翌 日 ほんとうに身体をたいせつにしたまえ」 [の朝、 銀行の二階で三人はわかれた。 小畑は清三に言った。

四十六

咲き、 の戦争ごっこしているのが見えた。学校では学年末の日課採点に忙わしく、 停車場には万歳が唱えられ、 結果とを自覚し始めた。 の壮烈なる戦死、 わが艦隊 戦争はだんだん歩を進めて来た。 桃の花が咲き、 め 浦 覧 塩 場 攻撃、旅順口外の激戦、 第一軍の出発につれて第二軍の編制、 桜が咲いた。 野はだんだん暖かくなって、 畠の中の藁屋の付近からも、 号外の来るたびに、 定_{いしゅう} の騎兵の 臨時議会の開院、 菜の花が咲き、菫が咲き、 衝 突、軍事公債応募者の好況、しょうとつ の花が咲き、菫が咲き、蒲公英が国民は今はまじめに戦争の意味と 田舎町の軒には日章旗が立てられ、 手製の小さい国旗を振って子供 第二回閉塞運動、 続いて簡易な 広瀬. 节佐

試 卒業生 験 が 0) 始まり、 ために 祝しゅ それが、 : *** 辞じ すむと、 を述べたが、 卒業証書 その中には 授与式が行なわれた。 軍 国 [多事 のことが . 縷る 郡長は卓の前 々る とし 7 説と に立 か れ って、

郡長 ませ か 番まじめ の言葉にも、 皆さんは第二 は記念とすべきこの明治三十七年に卒業せられ な時 時せい 番大事 の の言わせる 白本 な時、 国 民として十分なる覚悟をしなければな 種の強味と こういう時に卒業せられたということは忘れ 憧ょうけい 関 たのでありま とがあらわれて、 いりませ 聴く人の心を動 日 ん 本 0) 平 7 歴 は 凡 史 な な 0) る l) 中

に菫の花がは 採集し 巧みにできたが、 つばにく 生 た。 帳 ゎ には瓶の梅花、 ?枝り 折ぉ 小 ¹畑が送ってくれた丘 博 士 訳が、葉の陰影にはいつも失敗 漬け物は京菜っもの りの代わりにはさまれてあった。 葉の陰影にはい梅花、水仙、党 の新漬け。 学校の門、 生徒は草餅や牡丹餅をよく持って来てく した。 0) 大_{おおごえ} 進化 それ 菓子は好物 の桜などがあった。 論講話が から ひおどしちょう 机の上 のうぐい 一に置 沈丁花っ 、す餅、 か 紋 白 蝶 れて、 菜は独っ の花 その中ごろ ħ 活ど はやや なども み

ふた、 を歩 利 根 ほとけのざ、 \prod 0) 清 土 手に 三は はさまざまの花が すずめのえんどう、 々 花 の名を手帳につけた。 あっ た。 からすのえんどう、 ある 日清三は関さんと大越から発戸ほっと みつまた、 のみのふすま、 たびらこ、 じごく すみれ Ò ゙゙ま か で たち の間 ま 0)

き、こごめざくら、もも、ひぼけ、ひなぎく、へびいちご、おにたびらこ、ははこ、きつ ねのぼたん、そらまめ。 あかじくはこべ、かきどうし、さぎごげ、ふき、なずな、ながばぐさ、しゃくなげ、つば つぼすみれ、さんしきすみれ、げんげ、たんぽぽ、いぬがらし、こけりんどう、はこべ、

四十七

切るように飛びちがった。蟻、 蛙の声はわくようにした。 重桜、畠には 豌 豆と 蚕 豆、 麦 笛 を鳴らす音が時々聞こえて、燕が街道を斜めに突っ重桜、畠には 豌 豆と 蚕 豆、 麦 笛 を鳴らす音が時々聞こえて、燕が街道を斜めに突っ 新たにつくった学校の花壇にもいろいろの草花が集められた。農家の垣には梨の花と八 蜂、油虫、夜は名の知れぬ虫がしきりにズイズイと鳴き、

んてんはぎなどを野からとって来て花壇に移した。やがて山吹が散ると、 芍 薬 、牡丹、 つつじなどが咲き始めた。 あけび、ぐみ、さぎごけ、きんぽうげ、じゅうにひとえ、たけにぐさ、きじむしろ、な

この春をかれはまったく花に熱中して暮らした。 新緑をとおした日の光が 洪 水 のよう

ちから書いてやると、 歌が書いてあったり、新体詩が書いてあったりした。わが愛するなつかしの教え子とこっ に一室にみなぎりわたった。 ろの花を封じ込めてやった。ひで子からも少なくとも一週に一度はかならず返事が あっちからは、恋しきなつかしき先生まいると書いてよこした。 かれはそこで田原秀子にやる手紙を書き、めずらしいいろい 来た。

四十八

このごろ移転問題が親子の間にくり返された。

谷 妻沼方面よりむしろ加須、 大 越 、古河に多くなった。離れていて、土曜日に来るのゃ めぬま か ぞ おおごえ こ が て ひの商売の得意先もこのごろでは 熊行田に住んでいなければならぬという理由もない。父の商売の得意先もこのごろでは 熊 らって、私にも安心させておくれよ」 を待つのもつらい。「それにお前も、 学校に自炊していては不自由でもあり不経済でもある。家のつごうからいってもべつに もう年ごろだから、 相応なのがあったら一人嫁をも

母はこう言って笑った。

清三は以前のように反対しようともしなかった。昨年からくらべると、心もよほど折れ

のしら滝は知らずしらずの間に終に母を護るの子たらんといたし居り候」 てきた。たえず動揺した「東京へ」もだいぶ薄らいだ。 ある時小畑へやる手紙に、 と書いたことも

「羽生がいいよ……あまり田舎でもしかたがないし、 羽生なら知ってる人も二三人はある

ある。

母がこう言うと、

からね」

「そうだ、引っ越すなら、 羽生がいい。得意先にもちょうどつごうがいい」

父も同意する。

うのにもそう難儀ではない。清三もこう思った。 そこには和尚さんもいれば、荻生さんもいる。学校にも一里半ぐらいしかないから、

通

連城戦捷 あった。その日は第二軍が 荻生さんにも頼んだ。ある日曜日を父親といっしょに羽生に出かけて行ってみたことも とともに人々の心はまったくそれに奪われてしまった。街道にも町にも国 なりようとう 半島に上陸した公報の来た日で、一 週間ほど前 の 九きゅう

「万歳、万歳!」

旗が軒ごとにたえず続いた。

りで持ち切って、 突然 町 の横 町 からこおどりして飛んで出て来るものもあった。 借家などを教えてくれるものもなかしゃくや った。 どこの家でもその話ばか

裸で茶を製している茶師の唄が通りに聞こえた、 なぎの花は咲いた。蚕はすでに 三 眠 を過ぎた。 いなどの花があった。やがて麦の根元は黄ばみ、 ぐらいの大きさになる。 ねぎ、 しゆろ、 ひるがお、 ところどころに茶摘みをする女の赤い襷と白い手拭 ままこのしりぬぐいなどが咲き、 志多見原にはいちやくそう、 菖蒲の蕾は出で、樫の花は散あやめっぽみ 桃 梅 の実は V ίjς, たか とが 小指 見え とうだ の頭

などの葉も茂って、 かなめ、 続いてしらん、ぎしぎし、たちあお せきちくなどが咲き、 大連湾の占領たいれんわん 剖 葦 はしきりに鳴く。 裏 0 畑 い、 0) 桐 の花は高く薫った。 か わ ほ ね、 のいばら、 かや、あし、 背に動る つきみそう、てっせん、 まこも、すげ

の戦い、

第三軍の編制、

旅順の

攻擊。

るだろうと言った。 などと校長が言った。 敵も旅順は 頑^{がんきょ}う ある やがて鶏 旅順の陥落 にやるつもりらしいですな。どうも海軍だけではだめ いは七月の初めといい、 一羽と鶏卵十五個の賭をしようということになる。 についての日が ある 同僚の間に予想される。 (,) は八月にはどんなにおくれ あ のようですな」 る そして陥 7 も取 は

六

月

落 の公報が達した日には、 休日であろうがなんであろうが、 職員一統学校に集まって大々

望み 格で、 は着 新し ら町 なる偉勲を奏した兵士の記事をもって満たされ、 ある日、 的祝宴会を開こうと決議 忠君愛国の状態が見るように記されてある。 金を守るにもっぱらなる資本家も喜んで軍事公債に応じ、 るを得なかった。 るところには螢が闇を縫 あり、 なわ から 々として実行されている。 月には 今では一年志願兵になって、麻布の留守師団にいた。 意味と新しい努力が 鋤 犁を捨て 算 盤を捨て筆を捨てて国事におもむく人々を見て、すきくわ 美穂子の兄からめずらしくはがきが届いた。 しろいちご、 幸い いると、 に祝せよ」と得意そうに書いてあった。 海 麦は の外には同胞が汗を流し血を流して国のために戦っている。 つゆぐさなどが咲いた。 した。 黄うじゅく って飛んだ。 ?ある。 新聞紙上には日ごとに壮烈なる最後をとげた士官や、 して刈り取られ、 平^ぃぜ 生ぃ ほそ 政見を異にした政治家も志を一にして公に奉じ、 い 「自分も体が丈夫ならば 雨は降 ゆきのした、 それにつづいて各地方の 胡^{きゅう}り か っては晴れ、 それ れは士官学校を志願し 挙国一致、 の茎短きに花をもち、 に限らず、 のびる、 「十中八九は戦 晴れてはまた降 どくだみ、 千載一遇 か 団隊 れ 三年前の検査に 心を動 は野 地 の熱 に たが か 水草 そこには おもむく か がさざ の壮 心なる ら畠か も つ 勇敢 た。 · の あ 不合 挙

行進、 従属 情景を叙した筆は、 横たわれる塹壕に、 戊種などという憐むべき資格でなかったならば、 ピストル がはっきりと眼にうつるような気がする。 少女を描き、空想を生命とした作者が、あるいは 杏 花 の従軍記のこのごろ「日露戦争実記」に出始めたのを喜んで読んだ。ょうか にイタリヤンストロウの意気な帽子をかぶって、羽生の寺の山門からは うことも一度や二度ではなかった。 り剣をふるって、 して、その混乱した戦争の 酔って詩を吟じて、 砲声を前景にした しく思った。 を腰に巻いて、 わずかながらも国家のためにつくすことができたであろうに」などと思 少なくともかれの想像をそこにつれて行くのに十分であった。 ある · 茶褐色 はては本堂の 手帳と鉛筆とを手にして飛んで歩いている一文学者の姿をかれは いは機関砲のすさまじく鳴る丘の上に、そのさまざまの感情 ン 巴 ず まき のはげた丘、 かれはまた第二軍の写真班の一員として従軍した原 木 もくぎょ の中にはいっているかと思うと、 急行軍の砲車、 や鐘をたたいたその人が、 、その 満洲の野に、 砲煙のみなぎる野に、 急 きゅうぼう 軍司令官の戦場におもむ の中を、 わが同胞とともに、 第二軍 水筒を肩か , \ , , ある っそうそ って来たそ 恋愛を書き、 の司 いは死屍の 令部に 三年前 銃を取 5 0) か 朝 記 0) لح

ある日和尚さんに、

「原さんからもお便りがありますか」

と聞くと、

「え、この間金州から絵葉書が来ました」

それには同じく従軍した知名な画家が死屍のそばに菖蒲が紫に咲いているところを描いて と和尚さんは机の上から軍事郵便と赤い判の押してある一枚の絵ハガキを取って示した。

いた。

「いい記念ですな」

「え、こういう花がたくさん戦場に咲いてるとみえますな」

戦記にも書いてありましたよ」

と清三は言った。

四十九

光線がみなぎるように青葉に照った。 行田からの帰り途、 長野の 常 行 寺 の前まで来ると、 梅雨の中に一日カッと晴れた日があった。 薄い灰色の中からあざやかな青い空が見えて、

何 かことがあるとみえて、 山 菛 の前には人が多く集まって、 がやがやと話してい

校の生徒の列も見えた。

青葉の中から白い旗がなびいた。

靉がが 長や、 白い 戦 の右岸で戦でがらがらがらがらがらがん 旗 死 羽織袴 に 者 は 0) 近衛歩 葬 式 死 が の村長などがみな会葬した。 ·兵第二連隊 あ したのだという。 る のだということがやがてわ 等卒白井倉之助之霊と書い フ 口 ツクコ 村の世話役があっちこっちに忙しそうにそこ ا ا ゕ った。 を着た知事代 てあ 清三は つ ,理や、 た。 山門の中には 五. 制 月 服 + を着 日 0) , , って ゖ 戦 た警部 い みた。

らを歩

, \

7

, ,

その声 響きわたった。 すん あったという教員が、 柩がひつぎ 遺骨をおさめた棺は白 で 墓 ĺは 知 に運ばれ 時 事代理が祭文 々 絶えてまた続いた。 やがてそれに続いて小学校の校長の祭文がすむと、 る時、 奉書に書いた祭文を高く捧げて、 を読むところであった。 広場に集まった生徒は V 布で巻かれて本堂にすえられてあった。 鳴る する声があっちこっちから起こった。 両 その太いさびた声が一 側に列を正 ふるえるような声で読 して、 今度は戦 整然としてこれを見送 ちょうど主僧 しきり広 死 み 者 始 あ 0) 1 親友で が めた。 お 本堂に 経が

それを見ると、

清三はたまらなく悲しくなった。

軍司令部といっしょに原杏花が出

の国民よ、 発する時、 たと書いてある。 の国民よ」と心中に絶叫したと書いてある。 国家の 小学校の生徒が両側に整列して、万歳を唱えた。 将来はかかって汝らの双肩にあるのである。 清三も今そうした思いに胸がいっぱいになった。 その時ほど熱い涙が胸に迫ったことはなかっ その時かれは 健在 幼い第二の国民に柩をひつぎ なれ、 「なんじ 汝ら幼き第二 幼き第二

なって清三の眼の前を通った。 した梅雨晴れのあざやかな故郷 砲煙 「のみなぎった野に最後の苦痛をあじわって冷たく横たわった一 兵 卒 の姿と、こう ペぃそっ の日光のもとに悲しく営まれる葬式のさまとがいっしょに

送られる一戦死者の霊

「どうせ人は一度は死ぬんだ」

こう思ったかれの頬には涙がこぼれた。

かれは いつか寺を出て、 例の街道を歩いていた。 光線はキラキラした。 青葉と青空の雲

の影とが野の上にあった。

捷う て最後の勝利を占めることができるだろうか」という不安の念も起こった。 とがくり返しくり返し思い出される。 三日前からしきりに報ぜられる壱岐沖のいきおき 初瀬吉野宮古の沈没などをも考えて、はつせょしのみゃこ) 常陸丸遭難 と得利寺における陸軍の 戦のたちまるそうなん とくりじ

た。 花壇に植えようと思って、 してからの新家庭に、 野にとうご草があるのを見て、それをとった。そばにある名を知らぬ赤い草花は学校の ふと一昨日浦和のひで子から来た手紙を思い出して、 そのあきらかな笑顔を得たならば、 根から掘って紙に包み、 汚れた手をみそはぎの茂る小川 いかに幸福であろうと思った。 考えはそれに移る。 羽生 元移転 で洗

のそばの かれはこのごろひで子を自分の家庭にひきつけて考えることが多くなった。 羽生町 藁葺家には、 の入り口 「では、 東武鉄道の線路人夫がしきりに開通工事に忙しがっていたが、 色のさめた国旗がヒラヒラと日に光った。

そ

五十

羽生に移転する前日の日記に、かれはこう書いた。

顧一番、 りに移りてより、 「二十六年故山を出でて、 利根河畔羽生に移らんとす。奇しきは運命のそれよ、とねかはん 笑って昔古びたる城下の緑を出でて去らんのみ。 また数年を出でずして 蝸 牛 のそれのごとく、 熊谷の桜に近く住むこと数年、三十三年にはここ 忍 沼 ぱしぬま 歴史の章はかくのごとく、 おもしろきは人生のそれよ、 またも重からぬ殻を負ひ のほと また 口

かくのごとくして改められん」

が繁っていた。 れはなくってもよいという。 生さんで、 あった。 い!」と賛成した。 羽生の大通りをちょっと裏にはいったところにその貸屋があった。 下が六畳に四畳半、二階が六畳、 持主は二三年前まで、 家賃が二円五十銭、 父親も得意回りのついでに寄ってみて、 通りで商売をしていた五十ばかりの気のよさそうな人で 敷金が三月分あるのだが、 前に小さな庭があって、そこに丈の低い 荻生さんのお友だちならそ 探してくれたのは荻 「まア、 あれならい 、柿の木

地がなくって、学校が勤まりますかどうですか」などと言った。移転のことを聞いてはぃ 奥の座敷へと請された。美穂子については、 た。入り口ですまそうとするのを、 なさるんですから、 ちは多くは離散して、 まアまアお名残り惜しい、……けれどまア貴君の身体がおきまりになって、お引っ越 週間 清三はその往来した友の家々を 暇 乞 いをして歩いた。 の農繁休暇を利用して、いよいよ移転することになった。 平 生 親しくした友だ 結構ですねえ、お母さんもさぞお喜びでしょう。薫がおれば、 その時町にいるものは、活版屋をしている沢田君ぐらいのも 「まアまアほんとうにお久しぶりでしたね」と無理に 「あれも今年は卒業するのですけれど、意気 北川 の家には母親が一人い お手伝 のであ

とした。 こうして、 沢田さんは 転任させてもらいたい 上 に白く見えた。 た体のやせた清三の姿がうつった。 らそれと、 と言った。 していた。そこへ番頭が向こうから自転車をきしらして帰って来て、 の話などを一時間ば いいたすんですけれど、 ところどころに墓を残して行く一家族の 人他郷に残される弟はさびしかろうなどとも思った。 清三は最後に弟の墓を訪うた。 真黒になって働きながら、 戦争 加藤 の話やら町 の家には母親も繁子も留守で、 ということをも頼んだ。 か りもした。 の話やらが続 あれもこの七月には戦地に参るそうですから……」 忍_し と に る ま 羽生からいますこし近いところにい 「こっちのほうに来た時にはぜひ寄ってください ĺ١ た。 祖父の墓は足利にある。 のさびた水にはみぞかくし 石川 母 親 で 漂 泊 的 き の店では、 めずらしく父親が の眼には、 蒼^あ 白ろ 小僧が忙しそうに客に応 生活をか あじさい 祖母 Ō ひらりと飛び 1 1 れ た。 花 0) 1 顔 をし の花は墓を明る は考えて 墓は熊谷 \Box がところどころ が 上が た あ 眼 って教育 たら、 下 そ にある 0) ·りた。 濁 対 か

などに入れた。 道具とてもない みの 最後に椿や 風 · 一家 呂敷で包 の移転 ・南^{なんてん} 」んだ。 の準備は簡単であった。 の草花などを掘って、 陶器はすべて壊れぬように、 **箪笥と戸棚とを薦でからげ、** 根を薦包みにして庭の 箪笥の衣類 の中 -や 蒲 団 一次かたすみ 夜具 に置 0) 中

いた。

ラと町 降るかと思った空は午前のうちに晴れた。 しているさまが浮き出すように見える。 の大通りをきしって行く。ところどころで、 車の一番上に積まれた 紙 屑 籠 につめたランころで、母親と清三とが知人にでっくわして挨 荷物を満 載 した三台の引っ越し車はガラガ

しそうな顔色で、 長野 の手前で、 額が落ちかかりそうになったのを清三は直した。母親はにこにことうれ いろいろな話をしながら歩いて行く。 熊谷から行田に移転した時の話も

プのホヤがキラキラ光る。

出る。

間では三人まであるですぜ」などと話し合った。 敵をにがしてしまって…… 常 陸 丸 ではこの 近 辺 で死んだ人がいくらもあるですぜ。佐かたき 景気よく鈴を鳴らして走って来た。清三は呼びとめて一枚買った。 のおかげだよ」などと言った。長野をはずれようとするところで、向こうから号外売りが 「こうして、たいした迷惑を人にもかけずに、昼間引っ越して行かれるのは、みんなお前 雨のために敵を逸して帰着したということが書いてある。 車 力は「残念ですなア。 竹 敷を出た上村艦隊たけじき

ある豪農の塀の前では、平生引っ越し車などに見なれないので犬がほえた。榛の並木に^^

沿 った小 川では、 子供が泥だらけになって、 さで網で雑魚をすくっている。 繭売りの古 車が

ぞろぞろ通った。

荻生さんは買って来た大福餅を竹の皮包みから出してほおばる。 家さんは火鉢と茶道具とを運んで来て、 車のは たなら遠慮なくおっしゃい」と言って、禿頭に って見ていた。 タ畳をたたい いる音がして、 家で は、 それも十二時ごろにはたいてい片づいて、蕎麦屋からは蕎麦を持って来る。 ・たり、 今朝早く来た父親と、 清三と母親 雑 巾がけをしたり、 0) 顔が にこにこ笑いながら、 見えた。 局を休んで手伝いに来てくれた荻生さんとが、 破れた 障 子 をつくろったりしていた。 頬細いたり をして尻をまくった父親の姿を立 「何かいるものが そこの小路にガタガタと あ りま

る。 箪笥や行李や戸棚や夜具を室内に運ぶ。 車 力は繩をといて、 母親は襷がけになって、たずき 荷物を庭口 勝手道具を片づけていたが、そこに清三が外から来て、 か ら縁側へと運び入れる。 長火鉢、 箪笥の置き場所を、 父親と荻生さんが先に立って あれ のこれ のと考え

母親は手をとどめて、じっと見て、

をきらして水を飲んだ。

「どうしたの?」

かった。

「少し手伝ったら、呼吸がきれてしかたがない」

お前は 無理をしては いけな いよ。父さんがするから、 あまり働かずにおおきよ」

と父親は長火鉢の前で茶を飲みながら言った。 やがてどうやらこうやらあたりが片づく。 このごろ、ことに弱くなった清三が、 母親にはこのうえない心配の種で たね 「こうしてみると、 車力は庭の縁側に並んで、 なかなか 振舞われ と住心地、 あった。 が た蕎 (1 麦

空に浮い それに裏 清 三と荻生さんは二階に上がって話した。 の大家はおおお た白い雲が の庭には、 日の光を帯びて、 栗だの、 柿だの、 緑とともに光る。二人は足を投げ出 南と西北とがあいているので風通 木犀だの、百日紅 だのが繁ってい して、 しが のんきに いいい る。 青

をズルズルすすった。

話をしていると、

そこに母親が茶をいれて持って来てくれる。

大福餅を二人して食った。

かに動 雨 戸を一 夜は清三は二階に寝た。 た。 枚あけたところから、 母親が階段を上って来て、 か れはまんなかに広く蒲団を敷いて、闇の空にチラチラする星の影を見ながいまんなかに広く清団を敷いて、闇の空にチラチラする星の影を見なが 久しぶりで家庭の 団 欒 の楽しさを味わったような気がする。 緑をこしたすずしい夜風がはいって、 あけ放した雨戸をそッとしめて行ったのはもう知らな 蚊帳の青い影がかっ か

けた。 それ 小 親 発達せざり てこの間 れるだろうと思って ににこにこしてい りを見回して言った。 にきめ 畑 切な友人と思っただけで、 <u>광</u> が 日 加 「こうしてみ どうして 定た 今ではまる は 藤 荻生さん 弥みろく をこ をおか 袋び 屋や 机 た に 0) は 破るべ が持 め あ 出 友 北 で変わ ると、 に比 る。 0) あ 向 か 野 きに、 み。 V って来る け す、 からず」 た。 心が 親 て、 寺 学校の宿直室よ 荻 つ Ū の本堂に寄宿 大おおや 生君 た。 てくれ 今に 時に 書_{んばこ} な 1 人夫を頼 友だちが 1 自分の志や学問 と書 L に比 か だろう。 は自分とは は壁に た 7 れ 初 は 菖_{ょうぶ} んで、 すれば、 V た。 同 め 日 U どうしてあ T 記 i) つ 7 じ けて並 平 ま に 人間 1 町 は の花 書籍寝具などを運んで来た。 た 凡 を語る相手としては るころは、 に わ 荻 n 移 に 0) ヮか 0) 1 種類が 1 千 鳥 草 偉 生 転 くらい べてお ははなはだ世 して来り 君は あ普通 大なるを知る つてこの友を平 わが情の・ 清三 1 (J 違うのだとさえ思 て、 を交ぜて相馬焼 0) た か 一は荻 ので、 平 L 三尺 蕳 凡 れ を 友な な 生さんをただ情に篤 6 つ と書 凡 世 の床 知 ね な ね らず、 に見 り、 0 6 に物足らなく思っ と荻 中 となくうれ は 階 U 利 つ に安心して き 古 は、 害 たことが 生 $\bar{\mathcal{O}}$ の六畳を い 情 z 幅^{かけも}の 花 h を 道 瓶 わ 解 義 は が そう さし せず、 あ 眼 も 1 11 あ を 7 た か 0)

前

0

か

ら天ぷら、

か

ら

ĬΪ

魚

の

塩

焼きを引

つ

越

0)

祝

と

して

重

箱

に入

れ

7

11 ず

ń

も

「あいそ」

とい

うが終っ

0)

あらい腹の側の紅

V

色をした魚で、

今が

利

根

ΪÏ

で

軒一 友人たちに転居の端書を書いた。 とれる節だという。 軒回 つ て歩 ĺ١ た。 米屋、 清三は午後から二階の六畳に腹ばいになって、 炭屋、 薪屋なども通いを持って来た。 寺にも出かけて行ったが、 ちょうど葬式で、 父親は隣近所の組合を一 東京 や行田や熊谷の

は忙しが

って

いたので、

転居のことを知らせておいて帰って来た。

楓に、欅に、檜に、蘇鉄ぐらいなものだが、かえで、けやき、ひのき、 そてつ 草花などを丹念にいじくっている。そうかといってべつにたいしたものが ごとな鮒を入れてもらうことなどもある。 懸命に耕していることなどもあった。 く白く見える垣の間の道を、てくてくと出かけて行く。 うに眺めてい の中に 金 色 をした鮒や鯉をゴチャゴチャ入れて帰って来る。 大きな麦 稈 帽 子 をかぶって、 ど持って、 大家の主人はおもしろい話好きの人であった。 コスモスもだいぶ大きくなった。 老妻と二人で暮らしているというのんきな身分、 . る。 花壇にはいろいろ西洋種もまいて、天竺牡丹や遊蝶草 びく を下げて、釣竿を持って、 釣に行かぬ時は、 また時には、 それを内に入れたり出したりして、 店は息子に譲って、 そして日の暮れるころには、 はだしになって垣の隅の畠を一 釣と植木が大好きで、 たいてい腰を曲げて 店子はおりおり擂り鉢にみたなこ す ばち 霧の深い間から木槿の赤もくげ 自分は家作を五軒ほかさく ある などが咲い のでもない。 朝早く みそ 生 や

桑畑 あま た。 に夢見るような赤 かけた。 も郊外もしば 休暇をつづけることにする。 まだす 農繁 の鶏り り長く寝込んで西日に照らされて、 Ć 休 警察のそば 一般は か 路傍の吹き井、 り終わ なお U の間はめずらしく、 らぬ しば の道に沿った汚な ので、 し続 の花が うどんひもかわと書いた大和障子 いた。 清三は 出 席 かすかにうつった。 生 週間 午後 徒 雨 い溝には白い小さい花がポチポ の降らぬ の数は三分の 汗をぐっ は二階の で授業を始めてみたが、 日には、 しよ 風 寺の門、 通し 一にも満たな i) たい か 0) 1 1 こい 町はずれ ていることなどもあっ いところでよく昼寝を などの写生がだんだんでき 画架をかついでがか か 麦刈 つ た。 チ咲 から見たる り養蚕 で、 いて、 田 植 11 さび \exists え 写生に ま 光群 た水 週 出 町

借り ね 「それに どうももう旅順が 夜は大家のおおや 清 から進ま た戦 三は新聞や雑誌で、 もう、 争 画 の中庭の縁側に行って話した。 .報を二三冊また借 んじゃ 陸軍 ありませんか。 取れそうなものですがなア」とさももどかしそうに主人は \mathcal{O} ほうもよほど行ったんでしょう。 得た知識で、 してやったが、 第二軍は 第一軍第二軍が近いうちに連絡して 戦争の話が た 蓋_い それについてのい 平か からもうよほど行ったんですか , , 第一軍は九 つも出る。 ろい 二三日前荻生さんから 連れんじょう 城う ろの質問 渡りょうよう を取ってから、 が 言って、 出 のクロ

片づくはずである。 パトキン将軍の本営に迫る話をして聞かした。 どと清三は言って聞かせた。 と押し寄せて、 私はいま少し遅くなるかもしれないと思いますけれど、なにしろもうじきですな」な 敵はもう袋の鼠になってしまったから、こっちのほうは遼陽よりも早く 「来月の十五日ぐらいまでにはきっと取れるッて校長なども言うんで 旅順の方面については、 海陸ともにひしひ

昔からお 武 士 でできた国ですからなア!」 でも、 って、さぞ御心丈夫でいらっしゃるでしょう」と感嘆したような調子で言って、 「なにしろ、 無知な人間でも、 日本は小さいけれども、挙 国 一 致 ですからかないませんやな。 どんな百姓 戦争ッていえば一生懸命ですからな……天子様も国民の後援があ 「日本は

着いてごくいいですがな」こんなことを言って誘った。その場所はここから一里ぐらい行 聞いて、 ところを大家さんはよく知っていた。 ったところで、田のところどころに 掘 切 がある。そこには葦荻が人をかくすぐらいに深いたところで、田のところどころに 掘っきり 大家はまた釣の話をして聞かせることがあった。清三が胃腸を悩んでいるとかいうのをぉぉゃ 「どうです、一ついっしょに出かけてみませんか。そういう病気には、気が落ち

鍛か 駄 冶じ屋 ここが た。 に の浴衣をくっきりと闇 月 雨 隠 が 時 二人で話 には れ 屋や 0) 母 は 少 たり 店 乾 藽 にはランプが な 11 には 物 は か 母 あら 買 藽 7 屋 つ か と荻 T V た。 。 ら、 ここが わ 物をする町 V 中 れたり 车 六 る縁 生さんと三人つれ .薄 月 0) に · 荒物屋 1暗くつ か わ 側 に見せて、 の中ごろにすでに寒暖 か 0) して、 みさんが に暑さが激 の店 上に、 , , て、 そのたびごとにもつれ に 団うちねわ 下 呉服 熟 中 だっ 駄 ΰ 老 奥では話 をバ 屋 0 7 0) し 鼻緒お ζ 7 品 ではこの家が 7 タバ な 町 0) 計が を歩 いく の並 V U 田 ので、 舎町 声 タさせてい 細さい 八十九 ゙ゕ゙ くこともあ 6 聞こえてい だ 0) 表。 君ん は、 中 た三つの影が そうし 夜 に 番 に 度まであが には、 . 白 る群 か 岐阜提灯: た夜 た つ 1 た。 た。 顔を見せてす V れ 縁 0) がそこにもここにも見え 台を店先 などと教えて 散 今年 街道にうつっ 水 つ たことが 歩 のような に を は は、 に出 う わ か る 荻生 くれ 月 つ あ ら た が 7 梅っ てく つ ij さん 白 雨ゆ 1 消え た。 れ 白 い 下 が 雲 地 七 で、

漉こ る氷屋の 用 水 このごろは わ 0) れ 橋 0) 提 り 大 ちょうちん Ŀ 水が バ は 涼 ケ , 0) ツ U 灯影がチラチラとうつる、 っぱ が 0) 捨 った。 1 てたのや、 に みなぎり 納うりょう 陶 流れ 器 に出 0) 欠片などが汚なくかけら た人々がぞろぞろ通る。 て、 流れ それ る水の影が淡く暗く見える。 に 月の 光や、 、殺風景 橋 冬や 0) に そばに店を 見え 春は 7 |||い 底 向こう に味み 出 る 0) だ 噌そ

たり

す

の料理店から、三絃の音が聞こえた。

どを買う。 三人は氷店に休んで行くこともある。 局の前で、 清三は母親を先に帰して、 母親は帰りに、八百屋に寄って、茄子や 白 瓜 ない しろうり 荻生さんの室で十時過ぎまで話して行く

五十一

ことなどもあった。

郷と 英雄クルーゲル元トランスヴァール共和国大統領ホウル・クルーゲル歿す。 「杜国亡びてクルーゲル今また歿す。 瑞 西とこく せり 日田にかれはこう書いた。 のかれが妻の側に葬らるべし。英雄の末路、ょうむしる英雄の末路、 の山中に肺に斃れたるかれの遺体は、故いたい、ふるさ 言は陳腐なれど、 事実はつねに新たなり。 歴史はつねに

五十二

かくのごとし」

が直 体が をの 11 気がなくなって、 医師はや h お 前ほ だるくってしかたがなか たと思うほどいつも気持ちが んとうにどうかしたのじゃな 汗がびっ っぱり胃腸だと言った。 1 か ね 肌^はが しょりと出 いやに黄ばんで見える。 つ た。 て、 その心持ちの悪いことひととおり ことに、 1 けれど薬はね V **(**) が、 か ね。 熱が 午後か か れ 時 つから効がなかった。 つ はいく度も か らはきっと熱が 々 出るの りし た医師にか にい 蒼 着 白 ちば 出 でな か る。 ん困 い手を返 咳がたえず って や つ むな た。 みるほうが 顔 し 7 に Ś 朝 見た。 発 は 出 は 血 汗 病 0) 剤 気

母 親は 心配そうに ゕ れ の顔を見た。

じ

ゃ

な

財 かれ で、 当とをか 養品をなるたけ多く取る必要が 布は 学校は 朝が は 移転 V つねにからであった。 ちじ かえ 忙し やが の借金をまだ返さぬ ă かっつ て始まっ U た。 ٧Ì 例 疲労を覚えるほどその体は弱くなっていた。 の道をてくてくと歩 母親 た。 暑中 は 馬車に乗りたくも、 四 のに、 あるので、 時には遅くも起きて竃の下を焼きつけた。 休暇まではまだ半月ほどある。 毎日こうして少なからざる金が ĺ, て通った。 毎日牛乳二合、 そんな余裕はなかった。 里半の通 鶏卵を五個 それに七時 それに、 1 なれた路 か その他 か このごろでは る 清三は の授業始 ので、 肉 類 それ 薬 でも食 めな 瓶 か れ に と弁 0) の

と心に念じながら……。

と、 で、 に長い間立ってあれのこれのといじくり回したりした。 大きな 朱 塗 の前で 庖「丁 で皮をむいてもらって立ち食いをしたり、よせ切れの集まった呉服屋の前の前にうちょう かつがれて、 メリンスの帯などがぞろぞろと町を通った。こういう人たちは、 八阪神社の祭礼はにぎやかであった。やさか 山車も屋台もできなかったが、 そばの小路に、わいしょわいしょという騒がしい懸け声がして、 草鞋をはいた若者は、なんの 会 釈 もなく、 家から家へと悪魔をはらって騒がしくねり歩いた。 それでも近在から人が出て、 当年は不景気でもあり、 そのままずかずかと畳の上にあがって、 清三が火鉢 氷店に寄ったり、 紅い半襟や浅黄の袖口や 国家多事の際でもあるの の獅 突然獅子がは 子は のそば 町の 若者に にい 1 つ 7 る

「やあ!」

と大きな獅子の口をあけて、 そのまま勝手もとに出て行った。

母親は紙に包んだおひねりを獅子の口に入れた。一人息子のために、 悪魔を払いたまえ

五十四四

黄いろいこがねおぐるまとを交ぜて生けた。 心地でじっと見守った。 雲の色を見ていることもあった。そのやせた後ろ姿を清三は悲しいようなさびしいような 母親は二階の床の間に、 燃ゆるような 撫 子と薄紫のあざみとまっ白なおかとらのおとも 時には窓のところにじっと立って、 、 夕 暮 れ . の

が伸びて、それに朝風夕風がたおやかに当たって通った。 窓の下には 足 長 蜂 が巣を醸してブンブン飛んでいた。大家の庭樹のかげには一本の若竹窓の下には 足 長 蜂 が巣を醸してブンブン飛んでいた。 大家の庭樹のかげには一本の若竹 父親は二階の格子を取りはずしてくれた。 光線は流るるように一室にみなぎりわたった。

五十五

五月六日には体量十二貫五百目、このごろ郵便局でかかってみると、 単衣のままで十貫

六百目、荻生さんは十三貫三百目。

師 ずから 0) ある日、 君よ 折 つ この花をうつくしと思ひたまはずや」と書いてあった。 た黄い 田原ひで子が学校に来て手紙を小使に頼んでおいて行った。 うい · 野菊 の花が封じ込んであった。 「野の菊は妾の愛する花、 手紙の中には、 師 0) 君よ、

ゅ 雨う 払えぬ 休息せねばならぬほど 困 憊 中 に会い、 ので、 休暇前 校長に無理に頼んで三円だけつごうしてもらった。 あとの一 一二日の 日は朝 出勤 は、 していた。 から雨が横さまに降った。 かれにとってことにつらかっ それに今月の月給だけでは、 かれは授業時間の間があるが、 た。 その初めの日は帰途に驟いるの初めの日は帰途に驟いる。 薬代、 牛乳代などが 々を宿 直室に

な 校長に頼 どと言ってい 11 のつもりであったらしい。 旅 から、 順 陥 落 んで、 その時 た。 の賭に負けたからとて、 馬車に乗ってかろうじて帰って来た。 には休暇中でも、 清三は八月の月給を月の二十一日にもらいたいということをあらかじめ 教員たちは、 ぜひ学校に集まって、 校長は鶏卵を十五個くれたが、 「もうなんのかのと言っても旅順はじきに相違 万歳を唱えることにしよう」な それは実は病気見舞

|中休暇中には、どうしても快復させたいという考えで、 十二指腸かもしれないから、 こんどの医師は親切で評判な人であった。 週間ばかりたって大便の試験をしてみようと言った。 診察の結果では、 清三は医師を変えてみる気に どうもよくわ からぬ

肺病ではないかときくと、そういう ところという言葉を清三は気にした。 兆。だいこう は今のところでは見えませんと言った。

五十六

嘴は 浅 緑 色、 鮒、鰻、牛肉、 た。それをあらくつぶして、骨をトントンと音させてたたいた。それにすらかれは疲労を 滋養物を取らなければならぬので、銭もないのに、いろいろなものを買って食った。じょう 鶏 けい にく 羽は 暗 褐 色 に 淡 褐 色 の 斑 点、長い足は美しい浅緑色をしてい あんかっしょく たんかっしょく はんてん ――ある時はごいさぎを売りに来たのを十五銭に負けさせて買った。

覚えた。

それを見ていることがある。時には向こうの野まで行って花をさがして来ることもある。 の十月から開通する東武鉄道の停車場ができて、大工がしきりに鉋や手斧の音を立ててい れておいた。 清三は気分のいい夕方などには、てくてく出かけて行って、ぽつねんとして立って も百匁ぐらいずつ買って、猫にかかられぬように桶に重石をしてゴチャゴチャ入 十尾ぐらいずつを自分でさいて、鶏卵を引いて煮て食った。ぴき 寺の後ろにはこ

こんなことを言って、

郁治はとだえがちなる話をつづけた。

南に回ったようだなどと清三は思った。そこに郁治がひょっくり高等師範 物を食うとすぐもどした。 そして 吃 逆 も激しく出た。 えのころ、おひしば、ひよどりそう、おとぎりそう、こまつなぎ、なでしこなどがあった。 て訪ねたという。 字が至るところに見えた。 いう端書をよこしたが、今日は加須まで用事があってやって来たから、゛゛゛ た姿を見せた。この間うちから帰省していて、いずれ近いうちに新居を訪問したいなどと のがどことなく木の葉のそよぎに見える。 新聞にはそのころ 大 石 橋 郁治は清三のやせ衰えた姿に少なからず驚かされた。 ある日、 の戦闘詳報が載っていた。 遼 陽 母親は急性の胃に侵されて、 座敷にさし入る日光から考えて、 土用のあけた日で、 裁縫を休んで寝ていた。 ! それに顔色の悪い ふと来る気になっ 遼陽! の制帽をかぶっ 秋風 太陽も少しは の立った という文

黙っていることなどもあった。 ず親しげな調子であるが、 親しかった二人は、 夕日の光線のさしこんだ二階の一間に相対してすわった。 言葉は容易に深く触れようとはしなかった。 時々話がとだえて 相変わら

のがことに目立った。

「小畑はこの間日光に植物採集に出かけて行ったよ」

だろうかッて……。

っては、一里半の通勤はずいぶんつらいから、この町か、近在かにどこか転任の口はな 清三は、 「君、帰ったら、ファザーに一つ頼んでみてくれたまえな。どうもこう体が弱 弥勒ももうずいぶん古参だから、居心地は悪くはないけれど、

いかに

しても遠いからね、 君

こう言って転任運動を頼んだ。

ているので、父親が水を汲んだり米をたいたり漬け物を出したりした。 夕 餐 には昨夜猫に取られた 泥 鰌 の残りを清三が自分でさいてご馳走した。ゆうめし 母親が寝

めてもらって行くことにした。 郁治は見かねてよほど帰ろうとしたが、あっちこっちを歩いて疲れているので、

一夜泊

「郁さんがせっかくおいでくだすったのに、 あいにく私がこんなふうで、 何もご馳走もで

きなくって、ほんとうに申しわけがない」

しげしげと母親は郁治の顔を見て

「郁さんのように、家のも丈夫だといいのだけれど……どうも弱くってしかたがないんで ……それに郁さんなぞは。学校を卒業さえすれば、どんなにもりっぱになれるんだ

から、

母さんももう安心なものだけれど……」

仲間だから、

しみじみとした調子で言った。

はお互いに結婚はしないが、 美穂子の話が出たのは、二人が蚊帳の中にはいって寝てからであった。学校を出るまで 親と親との口約束はもうすんだということを郁治は話した。

「それはおめでたい」

と清三がまじめに言うと、

「約束をきめておくなんて、君、 つまらぬことだよ」

「どうして?」

「だッて、お互いに弱点が見えたりなんかして、中途でいやになることがないとも限らな

いからね」

「そんなことはいかんよ、 君

「だッてしかたがないさ、そういう気にならんとも限らんから」

互いの理想も知っているのだから、 苦 情 の起こりっこはありゃしないよ。僕なども同じ 「そんなふまじめなことを言ってはいかんよ、君たちのように前から 気 心 も知れば、お

君らの幸福なのを心から祈るよ、美穂子さんにも久しく会わないけれど、僕

がそう言ったッて言ってくれたまえ」

いつもの軽い言葉とは聞かれぬほどまじめなので、

うむ、そう言うよ」と郁治も言った。

校時代、「行田文学」時代のことが思い出されたが、しかも二人とも何ごとをも語らなか った。 てきたと言って、枕もとに持って来ておいた水で 頓 服 剤 を飲んだ。 二人の胸には、 蚊帳の外のランプに照らされた清三の顔は 蒼 白 かった。咳がたえず出た。熱が少し出かゃ 郁治の胸にははなやかな将来が浮かんだ。「不幸な友!」という同情の心も起こっ 中学

あまり咳が出るので、背をたたいてやりながら、

た。

「どうもいかんね」

汗が寝衣をとおした。 「うむ、治らなくって困る」

「石川はどうした?」

と、しばらくしてから、清三がきいた。

家でも困って、今度足どめに、いよいよ嫁さんが来るそうだ」 「つい、この間、東京から帰って来た」と郁治は言って、 「あまり道楽をするものだから、

「どこから?」

「なんでも川越の財産家で跡見女学校にいた女だそうだ。 容色望みという条件でさがし

たんだから、きっと 別 嬪 さんに違いないよ」

「先生も変わったね?」

"ほんとうに変わった。 雑誌をやってる時分とはまるで違う」

翌朝、 それから同窓の友だちの話がいろいろ出た。 郁治が眼をさましたころには、清三は階下で父親を手伝って勝手もとをしていた。 窓からは涼しい風がはいる……。

った。朝の膳には味噌汁に鶏卵が落としてあった。 いまさらながら、 二人は二階にまたすわってみたが、 友の衰弱したのを郁治は見た。 もうこれといって話もなかった。 小畑に聞いたが、これほどとは思わなか 清三は牛乳一合にパンを少し食った。

郁治が帰る時に、

それじゃ学校の話、一つ運動してみてくれたまえ」

清三はくり返して頼んだ。

が商売に出たあとでは、清三がお粥をこしらえたり、 母親の病気ははかばかしくなかった。 三度々々食物も満足に咽喉に通らなかった。 好きなものを通りに出て買って来て

や 薬代さえたい 明日は起きるよ」 たことのな っと見て、 情合いは病じょうあ 二片三片入れて、 て二人してうまそうに食っていることもある。 ったりする。 V 母親が涙をこぼ へん 母 んでからいっそう厚くなったように思われた。 親 また父親と縁側に東京仕入れ と母親は言った。 なのに、 食う食わ の長 い病気を気に ぬに 私までか していることもあった。 か かわらず、 か して医師に っては、 この瓜を二つ三つ桶に浮かせて、 まず母親の寝てい かか そういう時には清 それこそしかたがない。 ることをうるさく勧めると、 清三はまた清三で、 どうかすると、 る枕もとに置 三は Ш. めっ 私 に 瓜 のはもう治るよ、 たに 清三 0) 皮を厚 V きい 床 0) 母おやこ お 顔 に 前 を の つ を 0)

る か は暮らした。 のを見るくらい って見えることもあった。 階 0) 間 朝の眺めとしては、 は が新聞が なものであった。 飛ぶほど風が吹き通すこともあれば、 けれど東がふさがっているので、 早起きをした時北窓の雲に朝日が燃えるようにてりはえ 裏の木の上に夕月が美 朝 日 には つ ね に縁遠く清 しくか

勒野 ごろは 弥勒野はこのごろは草花がい^{みろくの} 座 才塚野 虚敷の運 動 君の採集にはさぞめづらしき花を加へたまひしならん。 のみにて、 野に遠ざか つも盛りであった。 り居り候へば、 清三は関さんに手紙を書いた。 草花 の盛 りも見ず、 秋海棠今歳 「この

は花少なく、 朝顔もかはり種なく、 さびしく暮らし居り候

たば 健康 医師は一週間目に大便の試験をしたが、十二指腸虫は一疋もいず、いしゃ これ十一二日目になる。按摩を頼んでもませてみたり、ご祈祷を近所の人がやって来て上 虫だと医師は 毎日二三回ずつの下痢、 かりであった。 の人といくらも変わらぬほどに気分がよいが、 のんきなことを言った。 けれどこれは寄生虫でないから害はない。ふつう健康体にもよくい 胃はつねに激しき渇きを覚えた。 母親の病気はまだすっかり治らなかった。 労働すれば、 動かずにじっとしていれば、 すぐ疲れて力がな ベン虫 (D) 卵が もうかれ つあ くなる。 る

すべき十日の海戦 ってきたことを医師はようやく気がつき始めた。 清三はこのころから夜が眠られなくて困った。いよいよ不眠性の容易ならざる病状が迫 世界の新聞 雑誌に記載せらるるころであった。 の詳報のしきりに出るころであった。 旅順の海戦 アドミラル、 彼我の勝敗の決びが トオゴー の勇ま した記憶

げてくれたりした。ついでに清三もこのご祈祷を上げてもらった。

里半も学校に通ってはいけません。 ってすぐ言葉を続けて、 医師はある日やって来て、いしゃ 「あまり無理をしてはいけません。第一、少しよくなっても、一 あわてて言った。 一年ぐらい海岸にでも行っているといいですがな」 「どうも永久的衰弱ですからなア」こう言

それから 葡萄酒 を飲用することを勧めた。

五十七

や、 と書いてあった。 に直接に手紙をやれ、 医師 みずから運動すべきやと郁治のもとに書いてやると、 の言葉を書いて、ぜひ九月の学期までに近い所に転任したいが、 羽生の校長にも聞いてみろ、 自分もそのうち出かけて運動してやる 折りかえして返事が 君に一任してよき 来て、 視学

の花が い声を立てて鳴いた。 だんだん秋風が立ち始めた。 友禅染めのように美しかった。 床 とこばしら 柱ら の薔薇の一輪挿し、それよりも簀戸をすかして見えばらいられて大家で飼っておいたくさひばりが夕暮れになるといぉぉゃぃぃ それよりも簀戸をすかして見える朝顔 つも

がらんとして、 清三が乗っていた。 —ある 日、ひ 午後四時ごろの暑い日影を受けて、 小使もいなかった。 月の俸給を受け取るためにわざわざ出かけて来たのであった。 関さんも、 例の街道を弥勒に行く車があった。それ 昨日浦和に行ったとて不在 であった。 学校は には

宿直室にはなかば夕日がさしとおった。テニスをやるものもないとみえて、

網もラッケ

子は卓の上に載せて片づけられたままになっている。 ットも縁側の隅にいたずらに束ねられてある。 事務室の 影を長く校庭にひいた清三のやせは で現ずりばこ の蓋には塵埃が白く、 椅

てた姿は、

しずかに廊下をたどって行った。

された。 かのようにはっきりと見える。 色の白い、 肉づきのいい、 赤い 長 襦 袢 を着た女も思い出 に行く友だちをうらやみ、人しれぬ失恋の苦しみにもだえた自分が、 になっている。12+15=27と書いてある。 こで生徒を相手に笑ったり怒ったり不愉快に思ったりしたことを清三は思い出した。 教室にはいってみた。ボールドには、 授業の最後の時間に数学を教えた数字がそのまま チョークもその時置いたままになっている。 まるで他人でもある 東京

みようと思ったが、ただ思っただけで、手をくだす気になれなかった。 オルガンが講堂の 一 隅 に塵埃に白くなって置かれてあった。何か久しぶりで鳴らして

やがて小使が帰って来た。 かれもちょっと見ぬ間に、 清三のいたく衰弱したのにびっく

「どうも 病 気 がよくねえかね?」 じろじろと不気味そうに見て、 ぶきみ

られないかもしれ 「どうもいかんから、近いところに転任したいと思っているよ……今度の学期にはもう来 ない。 長い間、 おなじみになったが、どうもしかたがない……」

「それまでには治るべいかな」

「どうもむずかしい――」

清三は 嘆 息をした。

小川屋にはもう娘はいなかった。 この春、 加須の荒物屋に嫁いて行った。かぞ おばあさんが

茶を運んで来た。

すぐ目につけて、

「どうも病気が治らなくって困る」「林さんなア、どうかしたかね」

「それア困るだね」

の煮つけを取って食った。庭には鶏頭が夕日に赤かった。 しみじみと同情したような言葉で言った。 夕 飯は粥にしてもらって、久しぶりでさいゆうめし かゆ かれは柱によりかかりながら

野を過ぎて行く色ある夕べの雲を見た。

と言った。

五十八

きるような体ではなかった。 員がなかった。 ように取り計らうから安心したまえ」と言って来た。 転任については、郁治も来て運動してくれた。町の高等も 尋 常 も聞いてみたが、欠転任については、いくじ 弥勒の校長からは、 「不本意ではあるが、病気なればしかたがな けれど他から見ては、もう教員がで

ある日、荻生さんが、母親に、

ら、行田の原田につれて行って見せたらどうです? も足に腫気がきたのはよくないですな……医師の見立てが違っているのかもしれませんかすいき 候はないようだが、ただの胃腸とも違うようなところがあると言ってました。なんにして 「どうも今度の病気は用心しないといけないって医師が言いましたよ。どうも肺という徴いうものの病気は用心しないといけないって医師が言いましたよ。どうも肺という徴 先生は学士ですし、 評判がいいほう

そして、 そういうつもりがあるなら、自分が一日局を休んでつれて行ってやってもいい

ですから」

「どうも、ご親切に……お礼の申し上げようもない」

母親の声は涙に曇った。

の御符をいる けて、 が 杉の葉 牛や馬、 とでもし 並べられて、 弥勒に: やが 出 蘇鉄の実を煎じて飲ませたり、 た。 て盂蘭盆がきた。 起ち居にもだんだん不自由を感じて来る、 その尻尾 編ぁ 小僧 てみたが 足 俸 、ただか $\tilde{\lambda}$ も今までの足とは思え 給 在郷 で、 をつれて、 を取 仏壇 せたり、 には畠 から出て来た百姓 りに 効が を飾 行 から取 な 忙しそうに 町 っ って、 か 1,1 0) た翌日あ 大通 やしくも つ う た。 代 て来た りには ご祈祷を枕 め 秋風 々 町を歩いて行った。 の娘たちがぞろぞろ通 ほどに甲がふくれ たりか か 対 験 の位牌を掃除 とうもろこし 草 く さ い ち が立 。 ら、 一つに があると人の教えてくれた もとであげてもらっ が 脚^{きゃく} 部ぶ 立って、 0) つれて、 医師は 罨法剤 赤 して、 た。 大腿 部 V 茄な 子す 毛を使っ 苧 殻 や それ 萩 った。 容_うだい の餅やら団子やら新里芋やら や白瓜や に、 にか と睾丸帯・ 龍いなしる たり、 た。 寺の けておびただ どこの家でも績殻で 和_{じよう} 胡 胡^{きゅう}り 11 やみ 0 も 不 動 岡 るどうおか が のは、 も とを でこしらえた さんは そ萩や 目 そ に立っ 0) どん 与え 0) 草花 紫 不 響を受 た。 なこ 0) 動 腫 衣 様

女の 十三日の夜には迎え火が家々でたかれる。 児は 新 い衣を着て、 7 そいそとしてあっちこっちに遊 通 りは警察がやかましいので、 んでい 昔のように大ぉ

玉蜀黍

やら

梨やらを供えた。

る。 仕掛けな焚火をするものもないが、少し裏町にはいると、薪を高く積んで火を燃しているぉじか たきぎ り口にはいま少し前焚いた火の残りが赤く闇に見える。 さびしそうに入り口にうずくまって、 家などもあった。 清三の家では、その日父親が古河に行ってまだ帰って来なか。 まわりに集まった子供らはおもしろがってそれを飛んだりまたい 績がらを集めて形ばかりの迎え火をした。 ったので、 母親は一人で だりす

うのに不便なので、 軒には昨年の盆に清三が手ずから書いた菊の絵の 燈 籠 がさげてある。 四五日前から、床を下の六畳に移した。 清三は便所に通

える。 い仏壇の中はなんだか別の世界でもあるかのように清三には思われた。 馬だの、 風にゆらぐ盆燈籠をかれはじっと見ていた。 仏壇には灯がついていて、蓮の葉の上に供えた団子だの、

はす

をな 真しんちゅう の花立てにさしたみそ萩などが 額 縁 に入れた絵のように見える。 大家の軒の風鈴の鳴る音がかすかに聞こ 茄子や白瓜でつくった牛 明る

母親がそこへはいって来て、

年は花も上げてくれる人もないッてさびしがっているだろう」 病気でないと、 政 一 (弟の名)のところにもお参りに行ってもらうんだけれど……今まさいち

「ほんとうにさ……」

「父さんがつごうがよければ行ってもらいたいと思っていたんだけれど……」ぉとっ

「ほんとうに、遠くなって淋しがっているだろう」

清三は亡くなった弟をしみじみ思った。

「明日あたり私がお参りに行こうかと思っているけれど……」

しばらく黙った。

「ナアに、治ってから行くからいいさ」

母子の胸には今月の払いのことがつかえている。

はら

はら 今月は父親のかせぎがねっからだめだった上に、母親も病気で毎月ほど裁縫をしなか 薬代、 牛乳-――それだけでもかなり多

った。 先ほど、 医師から勘定書きを書生が持って来たのを母親は申しわけなさそうにこといしゃ

わっていた。

「なアに、父さんが帰って来れば、どうにかなるから、 心配せずにおいでよ」

と母親はその時言った。

病気さえしなけりゃなア!」 父親が帰って来てもだめなことを清三は知っている。

と清三は突然言った。

やがて言葉をついで、 「こんな病気にかかりさえしなけりゃ、 今年はちっとは母さんに

も楽をさせられたのになア!」

母親はオドオドして、

「そんなことを思わないほうがいいよ。それより 養善生 して!」

「ナアに、こんな病気に負けておりゃせんから、母さん。 心配しないほうがいいよ。

> 今 死

「ほんとうともねえ、お前」

んでは、生まれて来たかいがありゃ

しない」

世の中というものは思いのままにならないもんだ!」

言葉は強かったが、 一種の哀愁は仏壇の灯のみ明るい一室に充ちわたった。

*

*

*

隣近所では病人が日増しに悪くなるのを知った。 医師が毎日鞄を下げてやって来る。

やせはてた顔をして、 々はよく見かけたが、このごろでは、もうどっと床について、 生さんが心配そうな顔をしてちょいちょい裏からはいって来る。 頭 髪 をぼうぼうさせて、そこらをぶらぶらしている病人の姿を人がみのけ 枕を高く、やせこけて、 週間前までは、

斯のようになった手を蒲団の外になげだすようにして寝ているのが垣の間から見える。った

すけ 戸 端 などで ど……」と言って、 母親に容体を聞 さもさも心配にたえぬような顔をし 「どうも少しでもいいほうに向か た。 ってくれるとい

V

がて だん もあ の毒 付っ 何 やると、 息子をあれまで育てて、 ……」と老妻は ってました」 か 転 肺 だなな れば 任 だん多くなる。 月 うことが 病だろうということは誰も皆前から想像していた。 その以後二か月半俸としてあることを報じて来た。 0) 間 0 体檎を持る むず ア。 返 俸給 めずらしが 事 と隣 が が しだい かし 話好きなおもしろい人だのに……」と大家の主人も 老 妻 に言 来 お りの足袋屋の細君 て埼玉県令十号の十三条に六十日 V) って来るものもあ U いこと、 に病 大家 るかということを父の郡視学に聞 ツて、 みじみと同情 これからかかろうという矢先にそんな悪 人にもわか の主人がある日一 病 たとえ転任が 人はわざわざ起きて来て見た。 した。 る。 ってきた。 が言った。 あっちこっちから見舞いを持 できても、 中には五 日釣って来た鮒を摺り鉢に かれ 十銭銀貨を 「どうも肺病だッてな、 は郁治に この体では毎 の病気欠席は全棒 V てもらうように手紙を書いた。 「どうも咳嗽 に それ あてて、 一つ包ん \exists から 1 0) 病 病気 で来 梨を持 入れ 出 気 0) って行く 出 勤 に (願書診断書 るも で休 て持 取と は あ る お っ う 0) 0) 7 って も が h ぼ 0) つ 若 変だ Ō) か で も 来るも つ 11 か あ 行って なども れ 0) な لح れ 7 に は 人 思 気

五十九

標札には医学士原田龍太郎とあざやかに見えて、門にかけた原田医院という看板はもう古 行田の町の中ほどに 西 洋 造 りのペンキ塗りのきわだって目につく家があった。

せいようづく 陶器の

午前十時ごろの晴れた日影は硝子をとおした診察室の白いカアテンを明るく照らした。

診察が終わって、そこから父親と荻生さんとにたすけられて出て来たのは、二三日来ま

くなっていた。

は徒労に帰した。医師は父親と友とに絶望的宣告を与えたようなものであった。いしゃ すます衰弱した清三であった。荻生さんが万一を期して、ヤイヤイ言ってつれて来た親切

荻生さんが懇意なので、別室できくと、

「いま少し早くどうかすることができそうなものだった」

医師はこう言った。

「やっぱり、肺でしょうか」

「肺ですな……もう両方とも悪くなっている!」

言った医師の言葉を思い出して、 んどかかえるようにして車に乗せた。 荻生さんはどうすることもできなかった。 「医師をよんでは車代がたいへんだから……五 「車に乗せてつれて来るのはちとひどかった 眼眩がしてそこに立っていられぬ病人をほめまい 円ではあ ね と

える。 が野に立って、背景をつくった森や 藁 葺 屋根や遠い秩父の山々があざやかにはっきり見 走ったりしていた。 がらないから、 その二里の街道には、やはり旅商人が通ったり、 豊熟した稲は涼しい風になびきわたった。 私が車に乗せてつれて行ってあげる」と言ったことを悔いた。 尻をまくって赤い腰巻を出して歩いて行く田舎娘もあった。 機 は た ま わ りの車が通ったり、 もう秋風 自転

車

幌をかけた車はしずかに街道をきしって行った。

七色の風船玉を売って歩く老爺のまわりには、 村の子供がたかっていた。

寺の 和 尚 さんが鶏卵の折りを持って見舞いに来た。ぉしょぅ

和尚さんもしばらく会わぬ間に、こうも衰弱したかとびっくりした。

わざと戦争の話などをする。

「旅順がどうも取れないですな」

「どうしてこう長びくんでしょう」

向かって発つという噂ですな」

「ステッセルも一生懸命だとみえますな。まだ兵力が足りなくって第八師団も今度旅順に

「第九に第十二に、第一に……、それじゃこれで四個師団……」

「どうもあそこを早く取ってしまわないんではしかたがないんでしょう」

「なかなか 頑 強 だ!」

と言って、病人は咳嗽をした。

やがて、

「遼陽のほうは?」

て遼陽から十里のところに行ってますし、第二軍は 海「城 を占領して、それからもっと 「あっちのほうが早いかもしれないッていうことですよ。第一軍はもう楡樹林子を占領し

先に出ているようですし……」

「ほんとうに丈夫なら、戦争にでも行くんだがなア」

遇、国家存亡の時にでっくわして、

ちぐう 家もあるのに……こうしてろくろくとして病気で寝てるのはじつに情ない。 と清三は 慨 嘆 して、「国家のために勇ましい血を流している人もあるし、 がいたん 廟 堂 の上に立って天下とともに憂いている政治びょうどう

和尚さん、

間もさまざまですな」

「ほんとうですな」

和尚さんも笑ってみせた。

しばらくして、

「原さんから便りがありますか?」

「え、もう帰って来ます。 先生も海城で病気にかかって、 病院に一月もいたそうで……来

「それじゃ遼陽は見ずに……」

月の初めには帰って来るはずです」

「え」

衰弱した割合いには長く話した。 寺にいる時分の話なども出た。

その翌日は 弥みろく の校長さんが見舞いにやって来た。

「こんなになってしまいました」

と細い手を出して見せた。

「学校のほうはいいようにしておきますから、 心配せずにおいでなさい、 欠席届けさえ出

校長さんはこう言った。しておくと、二月は俸給がおりるんですから」

戦争の話が出ると、

ますな。このごろじゃ容易に取れないなんて、悲観説が多いじゃないですか。 おそくも、 休暇中には旅順が取れると思ったですけれどなア。よほどむずかしいとみえ 常陸丸 に なたちまる

こんなことを言った。

いろいろ必要な材料が積んであったそうですな」

とったのであると言った。 二三日して、今度は関さんが来た。 母親は 金 盥 に水を入れて、とりあえずそれを病人の枕もと ホーヘムだらい まくら 女郎花と薄とを持って来てくれた。 弥勒の野から

に置いた。清三はうれしそうな顔をしてそれを見た。

関さんはやがて風呂敷包みから、 生徒一同よりとしてあった。一つは金五円、下に教員連の名前がずらりと並べて書い 紙に包んだ二つの見舞いの金を出した。一つには金七

てあった。

六十

も 思ったように出ることができない。 黙の中に たと思うと、今度は 欝 積 と過ぎた。 よっとした号外売りの鈴の音にもすぐ驚かされるほどたかぶっていた。そうして 遼陽の戦争はやがて始まった。 日は一日とたつ。 鞍 山 站 から一押しと思った 首 山 堡 が容易に取れりは一日とたつ。 ちんざんてん ひとお しゅざんぽ かえって無限の期待と無限の不安とが認められる。 ――その不安の情が九月一日の首山堡占領の二号活字でたちまちにしてとかれ した歓呼 国民の心はすべて満州の野に向かって注がれた。 の声が遼陽占領の喜ばしい報につれて、すさまじい 雨になるか風になるかわ からぬうちに、 神経質になった人 ない。 また一 々 第 1 0) 日二 る間 深い 心 軍 Ū Ė 沈 日

の激しかった戦いのさまがいろいろに 色 彩 をつけて語り合わされる。 ずに全国に新しい ばら家にも、 遼陽占領! どんなあら海の中の一 遼陽占領! くわしい -報をもたらして行く。どこの家でもその話がくり返され その声はどんなに暗い汚ない巷路にも、どんな深い山 孤島にも聞こえた。号外売りの鈴の音は一時間 太子河の軍橋を焼たいしが |奥の とい わ あ

いで日本全国にみなぎりわたった。

いて退却した敵将クロパトキンは、 第一軍の追撃に会ってまったく包囲されてしまったと

いう虚報、 さえ一 時は信用された。

終夜聞こえたという。 桜田門付近馬場先門付近はほとんど人で埋めらるるくらいであったという。さくらだもん ばばさきもん の大通りには、 ということが書いてあった。 夜は 提 灯 行 列 が日比谷公園から上野公園まで続 全都国旗をもって埋まるという記事があった。人民の万歳の声が宮城の奥まで聞こえた 数万燭の電燈が昼のように輝きわたって、 花電車が通るたびに万歳の声が 京橋日本橋 いて、

東京朝日新聞とが置かれてあって、 は便所からはうようにしてかろうじて床にはいった。 清三はもう十分に起き上がることができなかった。 やせこけて骨立った手が時々それを取り上げて見る。 でも、 容体は日一日に悪くなった。 その枕もとには、 国民新聞と 昨日

母さん! の占領が始めて知れた時、 かれは限りない喜びを顔にたたえて、

遼陽が取れた!」

とさもさもうれしそうに言った。

それ 戦争の話をする時は、 からいろいろな話を母親にしてきかせた。二千何人という死傷者の話をもしてきか 病気などは忘れたようであった。 蒼 白 いやせた顔にもほ

あ

の上に落として、

しばらくじっとしていることなどもある。

かに血 細かい活字をたどるのはずいぶん難儀であった。 疲れてじきそばに置いてしまった。 並が上った。 医師が来て、新聞などは読まないほうがいいと言った。いしゃ 時には半分読みかけた頁を、鬚の生えたやせた顔ページ、ひげ、は 手に取 っても五分と持 病人自身 ってい られ

思って、 母は にあらわすことすらもできずに、こうした 不 運 な病いの床に横たわって、 ちも私よりは幸福だ―――こうして希望もなしに病の床に横たわっているよりは……。 の声をよそに聞いていると思った時、清三の眼には涙があふれた。 ともできず、その万分の一を国に報いることもできず、その喜びの情を人並み きな戦争 屍となって野に横たわる苦痛、かばね 日本が が恋しいだろう。 清三ははるかに満州のさびしい平野に横たわった同胞を思った。 初めて欧州 そのはなばな の強国を相手にした曠古の戦争、 袓 .国が恋しいだろう。 故 郷 が恋しいだろう。 しい国民の一員と生まれて来て、 その身になったら、名誉でもなんでもないだろう。 世界の歴史にも数えられるような大 その名誉ある戦争 しかしそれらの人た 国民 に に万歳 加 わ 0) るこ 歓 0) 呼

六十二

枕もとにすわった医師の姿がくっきりと見えた。

〜深の気が充ちわたって、あたりがしんとした。鬚を長く、^レレム 室のまんなかにつったランプは、心が出過ぎてホヤがなかば黒くなっていた。^や 父親はそれに向かって 黙 然としていた。 母親は顔をおおって、たえずすすりあげた。 頬 骨が立って、眼をなかば 室には陰

医師の注射はもう効がなかった。

開いた清三の死に顔は、薄暗いランプの光の中におぼろげに見えた。

母親のすすりあげる声がしきりに聞こえる。

はいって来たが、ずかずかと医師と父親との間に割り込んですわって、いしゃ そこに、戸口にけたたましい足音がして、白地の絣を着た荻生さんの姿があわただしく

林君! こう言った荻生さんの頬を涙はホロホロと伝った。 ……林君! もう、とうとうだめでしたか!」

母親はまたすすりあげた。

この家の軒にも 鎮 守 の提灯が並んでつけてあって、国旗が闇にもそれと見える。 遼陽占領の祭りで、町では先ほどから提灯行列がいくたびとなくにぎやかに通った。ど 二三日

傾けていた……。

前から今日占領の祭りをするという広告をあっちこっちに張り出したので、近在からも提 の万歳の声を聞いて、 の群れがいく組となくやって来た。荻生さんは危篤の報を得て、その国旗と提灯と 「今日は遼陽占領の祭りだね」と言って、そのにぎやかな声に耳を

師は、 り巻かれてわいわい通って行くのに会った。 またその行列が通る。 ちょうどそこに 酸 漿 提灯を 篠 竹 の先につけた一群れの行列が、 しのたけ 万歳を唱える声がにぎやかに聞こえる。やがて暇を告げた医とない。 子供や若者に取

「万歳! 日本帝国万歳

六十三

昼間では葬式の費用がかかるというので、その翌日、 夜の十一時にこっそり 成願寺に

葬ることにした。

荻生さんは父親をたすけてなにかれと奔走した。町役場にも行けば、 桶屋に行って棺を

にく不在なので、 経を読むこととなった。 あつらえてもやった。 清三が本堂に寄宿しているころ、 和 尚 さんは戦地から 原 杏 花 が帰るのを迎えに東京に行ってあぉしょぅ 近所の法類からしかるべき導師を頼むほどの御布施が出せなかどがの法類からしかるべき導師を頼むほどの御布施が出せなか よく数学を教えてやっ た小僧さん が お

がお 夜は星が聰しげにかがやいていた。 いて、 大家の高窓からもれたランプの光線がキラキラ光った。 垣には虫の声が雨のように聞こえる。 木の黒い影と家屋の黒 椿の葉には露

い影とが重なり合った。

たので

ある。

家のあるじ、 るく照らされたり消えたりした。 をさびしげに照らして、 溝のさびた水がどぶ 棺が小路を出るころには、町ではもう起きている家はなかった。 それに父親に荻生さんとがあとについた。 動いて行く提灯の光にかすかに見えた。 警察の角から、例の溝に沿った道を寺へと進んだ。 路傍の草にも、 畠にも、 提灯が一 おおいかぶさった木の葉裏が明 藪にも虫の音はたえず聞こえる。 つ造り花も生花もな 組合のものが三人、大 列

のが遠くから見えた。 行は歩むにつれてバタバタと足音を立てる。 寺の本堂は 明け放されて、あばな やがて棺はかつき上げられて、 如来様 の前に供えられた裸蝋燭 誰も口をきくものはなかった。 読経が始まった。 の夜風にチラチラする

られてあるに られたまま、 衣がかすかにその中にすかされて見える。 丈の低い小僧はそれでも僧衣を着て、払子を持った。一行の携えて来た提灯は灯をつけょの低い小僧はそれでも僧衣を着て、払子を持った。 一行の携えて来た提灯は灯をつけ 人々 かかわらずなんとなく薄暗かった。父親の の並んだ後ろの障子の桟に引っかけられてある。 読経の声には重々しいところがなかった。 たがあたま と荻生さんの白 広い本堂は蝋燭 地 の立て 0)

やにさえ走ったような調子であった。鉦がけたたましい音を立てて鳴る。

「ここでこうして林君のおとむらいをしようとは夢にも思いがけなかった」 荻生さんは菓子の竹皮包みを懐に入れてよく昼寝にここに来たころのことを思い出して、

んで……あいにく宿で留守なものですから」 「このたびはまア……とんでもないことで……それにお悔みにもまだ上がりもいたしませ 式がすんで、 階段から父親がおりると、そこに寺のかみさんが立っていて、

こう心の中に言った。

と、きれぎれの挨拶をした。

夜はもう薄ら寒かった。単衣一枚では肌がなんとなくヒヤヒヤする。 棺はやがて人足

にかつがれて、 墓地へと運ばれて行く。

選ばれたのは、

夜の闇の中にかすかにそれと指さされる。 垣の外にいたずらにのびた桑の広葉がガサガサ

と夜風になびく。

もかい出しても出て来るので、 かった。 穴は型のごとく掘ってあった。 穴掘り男は 頭 髪 まで赤土だらけにしながら、 組合の男はいち早く草履を踏み込んで、買いたての白足袋を散々にしたと言って 困ったちゃねえだ!」などと言った。 赤土と水が出て、 あたりは踏み立てられぬほど路がわる 「どうも水が多くって、 かい出して

父親は提灯を振りかざして、 穴をのぞいてみた。穴の底の赤く濁った水が提灯にチラチ

ラうつった。

荻生さんものぞいてみた。

そのほかの群れのまるく並んでいるのをかすかに照らした。 暗 かれて小僧の僧衣姿が黒くその前に立ったと思うと、例の調子はずれの 読 経がれて小僧の僧衣姿が黒くその前に立ったと思うと、例の調子はずれの 読きょう 1 やがて棺が穴に下ろされる。 闇 0 中の提灯は、 木 槿 垣 を背にして立った荻生さんの蒼白い顔と父親の 禿 頭 はげあたま 土 塊 のバタバタと棺に当たる音がする。 時の間に墓は築っちくれ が始まった。 لح

六十四

有 志 と刻んであった。荻生さんと郁治とが奔走して建てたので、ゅうし きぎ 年ほどして、そこに 自然石 の石碑が建てられた。 表には林清三君之墓、 その醵金者 下に辱知 の中に

はりその ならなかった。 う悔んで嘆いてば 美穂子も雪子もしげ子もあった。 一人息子を失った母ひとりむすこ 街道にお 母 りお 親は息子の死んだ六畳でせっせと裁縫の針を動か かりも り見られた。 親は いられなか ___ 時はほとんど生きがいもないようにまで思ったが、 った。 か れらは老いてもなお独り働 した。 V て食わ 父親 0 禿頭は な L け か れ L ば

茂っ 菊や 和尚 その前に供えた。 いていたということをかみさんから聞 墓 |にはたえず花が手向けられた。 た井戸で水を汲んで、 さんは、 山菊など一束にしたのを持って、 廂髪に結って、ひさしがみゆ 髪 に結って、 矢 絣 の紬に海老茶の袴をはいた女学生ふうのごがみ ゆ やがすり つむぎ えびちゃ はかま 荻生さんも羽生の局に勤めている間はよく墓参りをした。ある 林さんの墓 花好きの母親はその節ごとに花を携えて来てははなず。 いた。 寺の庫裡に手桶を借りに来て、 0) あり かを聞いて、 その前で人目も忘れて久しく泣 手ずから 前 娘 秋 0) いつねに が、 水 0) 草 日 0 野

どこの娘だか」

などとその時かみさんが言った。

ところがそれから二年ほどして、その墓参りをした娘が羽生の小学校の女教員をしてい

に話した。 るという話を聞いた。

「あの娘は林さんが弥勒で教えた生徒だとサ」とかみさんはどこかで聞いて来て和尚さん「あの娘は林さんが弥勒で教えた生徒だとサ」とかみさんはどこかで聞いて来て和尚さん

その森のそばを 足 利 まで連絡した東武鉄道の汽車が朝に夕べにすさまじい響きを立てて秋の末になると、いつも赤城おろしが吹きわたって、寺の裏の森は潮のように鳴った。

通った。

青空文庫情報

底本:「田舎教師 他一編」旺文社文庫、旺文社

1966(昭和41)年8月10日初版発行

1985(昭和60)年重版発行

初出:「田舎教師」佐久良書房

※底本は、 物を数える際や地名などに用いる「ケ」 (区点番号5-86) を、 大振りにつくっ

※「苧殻《おがら》」と「績殻 《おがら》」、 「蠶豆」と「蚕豆」の混在は底本どおりで

す。

ています。

※「毛布」に対するルビの「けっとう」と「けっと」の混在は、 ※誤植を疑った箇所を、 初出の表記にそって、あらためました。 底本通りです。

※本文中の編者による語注は省略しました。

※本文中の挿画は省略しました。

校正:松

幸雄

校正:松永正敏

2007年2月2日作成

青空文事乍成ファィ2020年3月7日修正

れました。入力、校正、制作にあたったのはこのファイルは、インターネットの図書館、青空文庫作成ファイル:

制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。 青空文庫(https://www.aozora.gr.jp/)で作ら

田舎教師

田山花袋

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL http://www.aozora.gr.jp/

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL http://aozora.xisang.top/

BiliBili https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/ ※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。 http://tokimi.sylphid.jp/